南山大学大学院人間文化研究科提出博士論文

テアル構文の統合的研究
−主語性、格配列、および文法化をめぐって −

人間文化研究科言語科学専攻

D2015HL001
近藤　かをり

指導教員　　青柳　宏　教授

2018 年 1 月 22 日提出

要　旨

テアル構文の統合的研究
－ 主語性、格配列および文法化をめぐって －

2018 年 1 月 22 日
D2015HL001
近藤　かをり

本研究では、テアル構文の全体像を明らかにするべく、記述的考察と理論的考察を行った。まず益岡(1987)によるテアル構文の４分類をもとに、本論ではテアル文を主語無し構文で場面描写文である A 型と、動作主主語を持ちパーフェクト相を表す B 型の２類型に再分類した。従来の研究は主に表現の意味に頼った考察か、格配列の型に依存した考察がなされてきたが、本論では主語の有無と文の機能、アスペクトの違いになどを総合的に分析した。この類型をもとに様々な言語現象について考察した。

テアル文の構造に関する主な主張は、A 型テアル文は動作主を欠く主語無し構文であり、B 型テアル文は常に統語上の主語がある vP を埋め込んだ構造であるということである。そのように考えることで、A 型テアル文のガ格名詞句が主語性を示さないことが説明できる。また、アスペクトの面でも A 型は結果状態、B 型はパーフェクトという違いがあることを主張した。

理論的研究では一般に A 型を受動型としているが、A 型テアル文は受動文とは明らかに性質が異なる。従来の研究であまり重要視されてこなかった「受身＋テアル」という形式にも着目し、主語性に関して通常のテアル文と比較することで、さらに主張を補強した。

また、各類型の意味や構造の違いが生じることになった原因を探るべくテアル構文の歴史的変遷を辿った。文献調査とコーパス調査の結果、A 型テアル文は中世末期から近世にかけて存在動詞に有生・無生の区別が生まれてから再文法化によって成立したもので、B 型テアル文はその区別のなかった時代からのアスペクト形式を受け継ぐものであると結論付けた。

謝　辞

まず、第一にお礼を述べたいのは、学部から博士後期課程の二年目まで指導教員としてご指導くださった阿部泰明教授です。本研究を続けることができ、学位論文としてまとめることができたのは、阿部泰明教授の厳しくも温かいご指導と励ましの賜物に他なりません。本研究に常に真摯に向き合ってくださり、鋭いご指摘と、建設的で論理的なご意見をいただきました。その姿勢から非常に多くのことを学びました。ここに心からの敬意と感謝の意を表します。

そして最後の一年の指導教員を引き継いでくださった青柳宏教授にも大変感謝しております。一年間のご指導だけでなく、それ以前からアドバイザリーコミッティーのメンバーとして非常に細かく論文を読んでくださり、多くの的を射たご指摘をくださいました。

また、アドバイザリーコミッティーに加わって下さった坂本正教授、鎌田修教授、町田奈々子教授、鈴木達也教授、並びに審査委員会の主査を務めてくださった鹿島央教授には、それぞれのご専門の観点から興味深いご意見を多くいただきました。お忙しい中発表の機会があれば必ず聞きに来てくださり、ご意見をいただけたことは私にとって大変有意義なことでした。特に坂本正教授には学部でも博士前期課程でもご指導いただき、名古屋外国語大学に移られてからも度々励ましの言葉をいただきました。長きにわたって支えてくださり、深く感謝しております。

また、神戸大学の岸本秀樹教授には、外部審査員として中間審査から多くの貴重なご指摘とご助言をいただきました。理論を構築するにあたり、岸本先生の論文から学ぶことが多くありました。

最後に、二人の子どもを育てながら大学院に進学することを許してくれた夫に心から感謝いたします。度々研究に集中しなければならない期間があり、不自由なこともあったかと思いますが、常に励まし、支えてくれました。夫と子供たちの理解と協力がなければ成せないことでした。

ここに記しきれない多くの学恩、ご支援によって本論文が完成したことを銘記し、深く感謝の意を表したいと思います。

目　次

要旨 i
謝辞 ii
目次 iii

第1章　はじめに 1
1.1　研究の目的 1
1.2　論文の構成 1
第2章　テアル構文の類型 3
2.0　はじめに 3
2.1　先行研究－意味機能的分類 3
2.1.1　テアル構文の研究 3
2.1.2　森田(1977) 4
2.1.3　益岡(1987) 4
2.2　先行研究－形式的分類 6
2.3　A型テアル文の特性 8
2.3.1　テアル文の様相 8
2.3.2　A型テアル構文の形式的特性 9
2.4　テアル文の意味的特性 12
2.4.1　場面描写性 12
2.4.2　A型テアル文の判定 17
2.4.3　テアル文のアスペクト 19
2.5　A型テアル文の成立条件 29
2.6　ニ格場所句の導入 34
2.7　テアル文の含意 43
2.8　B型テアル文の特性 48
2.8.1　B型テアル文の類型 48
2.8.2　B型テアル文と意図性 53
2.8.3　B型テアル文とニ格場所句 56
2.9　まとめ 57
第3章　コーパス調査 58
3.1　コーパス調査の方法 58
3.2　コーパス調査の結果 58
3.3　まとめ 67

第4章　テアル構文の主語 69
4.1　主語性の問題 69
4.1.1　日本語における主語 69
4.1.2　再帰代名詞「自分」とテアル構文 70
4.1.3　尊敬語とテアル構文 73
4.2　A型テアルに見る文法関係 78
4.3　B型テアルに見る文法関係 84
4.3.1　主語性を示す名詞句 84
4.3.2　人称制限 87
4.4　A_1型におけるニ格名詞句の特性 92
4.5　受身＋テアル 95
4.6　テアル文の類型～再考 100
第5章　テアル構文の構造と格標示 108
5.1　テアル構文の構造 108
5.1.1　A型テアル文とB型テアル文の構造 108
5.1.2　C型テアル文の構造 116
5.2　テアル構文における格付与 119
5.2.1　Marantz (2000) 120
5.2.2　日本語の格付与 122
5.2.3　テアル構文の格付与 123
第6章　存在文とテアル文 128
6.1　存在文とテアル文との関係 128
6.2　存在文の類型 128
6.3　テアル構文とアル存在文の比較 137
6.4　歴史的変遷と文法化 140
6.4.1　存在動詞の歴史的変遷 141
6.4.2　テアル文の歴史的変遷 143
6.4.3　コーパス調査から見られるテアルの文法化のプロセス 149
6.5　文法化から見たテの機能 166
6.6　まとめ 178
第7章　おわりに 180
7.1　結論 180
7.2　今後の課題 183

参考文献 185

第１章

はじめに

1.1　研究の目的

テアル構文には日本語において例外的とも考えられる興味深い点がいくつかある。まず、アル自体は意志性を伴わない状態動詞であるが、状態述語であるにもかかわらず、補助動詞として使われるときには語幹動詞は典型的に意志的な動作を表わす他動詞及び非能格自動詞となる。これは他のテ形に続く補助動詞が語幹動詞の自他を選ばない（テイル、テシマウなど）、あるいは語幹動詞と意志性を共有する（テオク、テミル、テミエルなど）のに対して、テアル構文では意志性に関して語幹動詞と補助動詞の意志性が逆になるのが特徴的である。また、テアル構文は対象を表わす項がガ格で現れるものが典型的である。一般的に対象がガ格で現れるテアル文は「受動型」と呼ばれるが、受動文においても、受動文と同じく対象がガ格で現れる非対格自動詞の文においても、ガ格名詞句が主語性を示すのに対して、テアル構文では対象のガ格名詞句が主語性を示さない。

本研究では文献研究とコーパス調査を合わせた記述的な研究と、構造分析をもとに主語性や格の問題を考察する理論的な研究を融合し、さらに歴史的変遷を探ることで、テアル構文の全容を解明することを目指す。テアル構文を様々な角度から考察し、一見例外的と思われる現象も日本語の他の言語現象と共通性を持ち、歴史的変遷の結果、必然的に生じたことであることを示唆する。また、テアル構文を精査することで、日本語のアスペクトの問題、補助動詞の問題、主語の問題、格標示の問題、存在表現の問題など、他の関連分野の研究にも寄与することを目指す。

1.2　論文の構成

2 章ではテアル構文の類型に関して本論の立場を示す。益岡(1987)の 4 分類を基に、本論では 2 つの類型に分けることを提案する。益岡はまず対象がガ格で現れるテアル文を A 型とし、動作主がガ格で現れ、対象がヲ格で現れ得るものを B 型として大別している。益岡は A 型の特徴を結果状態の描写としているが、その中で典型的に配置動詞や書記動詞とともに使われ、対象の位置変化の結果状態を表わすものを A_1型、状態変化動詞とともに使われ、対象の状態変化の結果状態を表わすものを A_2型として下位分類した。B 型は動作主の行為の結果もたらされる事態が何らかの意味で基準時に関与するというもので、その中で対象が存続しているものを B_1型、対象の存在はなく、効果のみが存続しているものを B_2型と下位分類した。本論では A 型の下位分類はニ格場所句が生起でき

るかどうかの違いで、B 型の下位分類は語幹動詞の制約が少ないことからもたらされるものと考え、下位分類の必要はないと考える。本論においても多くの先行研究がそうしているように、A 型と B 型のみで区別する。それぞれの類型の意味用法は益岡を踏襲するものであるが、本論では格標示だけではなく主語（動作主）の有無、文の機能、アスペクトによって A 型と B 型を特徴づける。この類型をもとに、後の章で様々な現象について議論を進める。

3 章では 2 章で分類した類型の特徴や意味・機能が実際の使用と合致しているかどうかを確かめるために、実際の使用をコーパス調査によって観察する。

4 章では主語の問題について考える。本論では A 型は主語無し構文であることを主張する。生成文法の分野で広く行われている再帰代名詞と尊敬語化のテストを使い、A 型テアル文のガ格名詞句に主語性が無いことを示したうえで、A 型と B 型の構文的特徴を考察する。さらに本論で C 型と称した受身＋テアル構文の特性を調べ、主語性の存在とニヨッテ句の生起の問題を検討する。

ここまでの考察を踏まえ、5 章ではテアル構文の 2 類型について、構造と格標示のメカニズムの提案を行う。各類型の構造の違いを想定することで、それらの主語の現れ方の違いや各類型に含まれる意味的な違いについて統語的な面から説明できるものと考える。格標示については、Marantz(2000)と青柳(2006)の理論を取り入れ、具体的な提案を行う。

6 章ではテアル構文と存在動詞との関係について論じる。本論では A 型テアル構文を主語無し構文であると主張しているが、A 型テアル文のガ格名詞句が主語ではないという考察から、逆に推論を働かせ、アルによる存在文（場所句を伴う存在文）のガ格名詞句も主語ではなく、アル存在文は主語無し構文であるという仮説を立て、テアル構文との類似性について議論する。また、存在文、およびテアル文の歴史的変遷も見る。先行研究の見解とコーパス調査の結果を踏まえ、テアル文を存在動詞アル（アリ）からテアルへの文法化と捉え、現在のテアル構文の用法に至るまでの歴史的変遷について考察する。

第２章

テアル構文の類型

2.0　はじめに

テアル構文についての研究の多くは例文(1)や(2)のような典型的なテアル構文の類型論や下線部の名詞句の統語的性質に関わるものである。

(1)　窓が開けてある
(2)　窓を開けてある
(3)　窓が開けられている
(4)　窓が開いている
(5)　窓が開けられてある

テアル構文が他の関連する構文，例えば受動文（3）や非対格自動詞テイル文（4）と比べてどのような特徴を示すのか、興味深い問題が多く存在する。

これまでのテアル構文の研究には大きく分けて二種類の研究が存在する。森田(1977)、益岡(1984、1987)を中心とした意味・機能的分類の研究と、Martin(1975)を出発点としてMiyagawa(1989)などに受け継がれて行く形式文法の枠組みでの理論的研究である。テアル構文の特性については、これら二つの潮流（「意味機能論的記述研究」と「形式論的理論研究」）が示した成果が部分的には相互補完的にテアル構文の性格を捉えている一方で、同時に両者が共に不十分な（あるいは誤った）特徴づけをしている側面がある。本論文の具体的な提案は、より単純化されたテアル構文の類型論を提示すると同時に、これまで見過ごされてきた主語性の問題に焦点を当て、テアル構文の中には「無主語文」の型が存在することを示す。更に、(5）に示すような受身＋テアル構文に着目し，過去の研究の対象からは外されてきた受身＋テアルの構文が主語性について、通常のテアル構文とは異なる性格を持つことを指摘する（4.5 で詳述）。

2.1　先行研究－意味機能的分類

2.1.1　テアル構文の研究

テアル構文については古くから研究がなされているが（三矢 1908、松下 1928 など ）、初期の研究からしばらくは、主にテイルとの比較によりテアル文の様々な現象を説

明したものが続く（高橋 1969、吉川 1973、井上 1976a,b、寺村 1984 など ）[1]。
テアル構文には「～ガ V テアル」という形で現れる受動型と、「～ガ～ヲ V テアル」の形で現れる能動型があるという基本的な二分類があり、これは多くの研究で支持されてきた見解である（森田 1977、益岡 1987、鈴木 2000、原沢 2002 など）。テアル構文の意味と機能を中心に分類法を確立したのは森田(1977)と益岡(1987)である。これらの研究を順次概観しよう。

2.1.2　森田(1977)

テアル構文に、眼前の状態を描写するものと、意図的な行為の結果による現在の状況を表すものがある（寺村 1984、Martin 1975 など ）ことは、多くの先行研究で指摘されているが、このようなテアル構文の多義性を形式によって分類し、説明したものが森田(1977)である。

森田(1977)の分類は以下の通りである。

(6)　～ガ他動詞てある…（1）行為の結果の現存
　　～ヲ他動詞てある…（2）前もって準備、結果の蓄積　　（森田 1977:51）

森田は、テアルに前接する動詞に関しては、原則として他動詞としているが、「前もっての準備」の意味であれば自動詞もまれに見られることを指摘している。そして「ガ他動詞テアル」について、「だれかによって行われた行為の結果が現在の状態として存在するという意味を表す。この形式は、主語に立つ物や人が被動作物として扱われる特徴がある。」（森田 1977:52）と述べている。また、ヲ他動詞テアルの特徴を、「対象物の状態性にまで影響せず、完了した動作の結果が行為主体に蓄積されていることを表すのみである。」（森田 1977:52-53）とまとめている。

2.1.3　益岡(1987)

益岡(1987)は森田(1977)に倣い、まずテアル構文を大きく二つに分類した 。

(7)　A 型：対象がガ格を占め、受動表現と共通する面を持つ。受動型。
　　B 型：特定の動作主が主語の位置を占める。能動型。

---

[1] 初期の先行研究は、テイルとの比較に重点を置くものが主流で、対象がガ格のテアル文のみを問題にしているものが多い。あるいは、高橋(1969)や吉川(1973)のように、より細かな分類をしているものの、それはテアル構文の意味に基づく分類ではなく、テアルに前接する動詞の語彙的アスペクトによる分類と考えられるものも存在する。

益岡はさらにそれぞれを A_1 型・A_2 型、B_1 型・B_2 型と下位分類した。

A_1 型は、行為の結果もたらされる、対象のある場所での存在を描写するタイプで、広義の存在表現の一種とされる。この場合行為自体は二義的な意味しか持たない。前接する動詞は典型的に配置動詞であるとしている。次の文が A_1 型の例である。

(8)　飲みかけのコーヒー茶碗が、受け皿から離れて置いてある。
(9)　盆栽が幾鉢かならべてあった。　（益岡 1987:221）

一方 A_2 型は、ある行為の結果もたらされる対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプで、語幹動詞は典型的に状態変化動詞とされる。

(10)　新聞紙の半分ぐらいをさらに四つに切ったくらいの切り抜きが折ってあった。
(11)　それが、いつの間にか磨いてあるのに気づいた。　（益岡 1987:221）

これに対して B 型は動作主が引き起こした行為の結果もたらされる事態が基準時[2]に関与するという意味特徴を持つが、B_1 型は行為の結果もたらされる対象の状態が基準時にも存続していることを表わし、B_2 型と比べて「対象指向性」を有することを特徴とする。

(12)　業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり…。
(13)　7,8 人といってもベストメンバーを選んであるんだぜ。　（益岡 1987:225）

そして、B_2 型は、行為の結果が基準時において何らかの有効性を示すとされ、実際の対象の状態はあまり問題とされない。

---

[2]「基準時」という用語は、益岡(1987)において使用されているものである。テアル文における出来事を便宜上、語幹動詞が表す出来事(E1)とアルが表す出来事(E2)に分けて考えると、益岡(1987)の「基準時」（便宜上 R と表わす）は E2 に等しいと思われる。

(ⅰ) ベストメンバーが　<u>選んで</u>　<u>ある</u>
　　E1　　E2=R

(ⅱ) ベストメンバーが　<u>選んで</u>　<u>あった</u>
　　E1　　E2=R

現在形のテアル文の場合は、基準時(E2=R)が発話時と同じであり、過去形のテアル文の場合は、基準時(E2=R)が発話時より前、ということになる。

(14)　　それで、京都府警に鑑定を頼んであるの。
(15)　　上京する時間は言ってあったのですが…。　　（益岡 1987:225）

益岡の分析にはいくつかの問題点があると思われる。第一に、A 型、B 型の下位分類の問題がある。本論文は、テアル構文は異なるアスペクト的性格を持つ A 型と B 型に大別されると主張するが、A_1 型と A_2 型の区別はニ格場所句の出現の有無による違いに還元され、下位分類は不要であると考える。また B 型の下位分類についても益岡が提示する根拠は決定的なものではなく、同様に下位分類は不要であると考える。

第二に、意味役割「対象 theme」となる名詞句がガ格で表出した場合、その名詞句を「主語」と呼んでいることである[3]。 後に示すように当該のガ格名詞句は主語性を示さないことから、このような特徴づけは不正確である。

その反面、益岡の基本的分類はテアル構文の意味・機能を正しく捉えており、とりわけ A 型が「存在の描写」と「対象の状態変化の描写」であるという指摘はテアル構文の意味の本質に関わる重要な点であると評価できる[4]。

2.2　先行研究－形式的分類

生成文法の枠組みの中で概ね合意形成されている分析では、テアル構文をその文法形式から二つの型に分類している。対象の項がガ格で現れる「自動詞型 intransitivizing」と、それ以外の型「非自動詞型 non-intransitivizing」である（Miyagawa(1989)、Miyagawa and Babyonishev (2004)など）[5]。

---

[3] 益岡(1984)では「この型においては、「受動者」(patient)が主語として機能し、(3)で示されるように,「動作主」(agent)は抑制され一般に表層にはあらわれない。」(益岡、1987:123)と述べられており、明確に当該のガ格名詞句が主語であると考えていることが分かるが、益岡(1987)では「主語」という用語を避け「ガ格」という形態に関する用語を採用していることも興味深い。恐らく益岡(1984)の参考文献にも挙げられている川崎(1983)の指摘を考慮し、控え目な表現に変更したのではないかと推察される。しかし何れにせよ、益岡の一連の研究において積極的に A 型のガ格名詞句が主語性を持たないという主張はなされていない。

[4] この益岡の 4 分類がこれ以降すべての研究者に受け入れられているわけではないが、これによりテアル構文の意味特徴が整理され、テアル構文の研究が発展したことは事実であろう。益岡はこのテアルの 4 つの型を、それぞれ独立したものではなく、最も具体性の高い A1 型から、抽象性の高い B2 型に至る、一つの連続体であるとしている（益岡、同書:232）。

本論では、テアル構文の下位類は、後に詳しく述べるように、補助動詞テアルの語彙意味論的特性、項の選択、及び異なる格標示の適用などが絡み合って生じた結果であると考え、連続体ではなく、はっきりとした機能的・アスペクト的特徴を持った A 型と、それとは異なる機能的・アスペクト的特徴を持った B 型に分かれると考える。

[5] Miyagawa(1989)が多くを引用している Martin（1975）は益岡の A 型に当たるものを Intransitivizing Resultative、B 型にほぼ匹敵するものを Possessive Resultative と呼んで区別している。

Intransitivizing Resultative

(16) 壁に絵がかけてある

(17) 窓が開けてある

Non-intransitivizing Resultative

(18) お母さんがカレーを作ってある

(19) 僕は昨日十分に寝てある

これらの二つの形式は、概ね益岡の言うA型とB型に対応するのだが、実際には異なる文型を指していることに留意する必要がある。

自動詞型とも呼ばれるテアル文は「（Yに）XがVテアル」という形式を持っているものを全て含んでおり、益岡がA型をB型から区別する特徴として挙げた「行為の結果もたらされる対象のある場所での存在、あるいは対象の何らかの状態が視覚可能な形で存続していることを描写する」という特性については考察がなされていない。従って、この意味・機能的な定義に合うものも合わないものも同列に扱われることになる。

(20) 壁に絵がかけてある

(21) 窓が開けてある

vs.

(22) ベストメンバーが選んである

(23) 予定が組んである

これが形式的分析の第一の問題点である。前者のグループのテアル文は明らかに「場面描写性」という特徴を有しており、後者のグループのテアル文とは区別されるべきである。

第二に、2.1で述べたように、ガ格名詞句の主語性の欠如について考察が深くなされていないことである[6]。多くの研究では、対象項がガ格で現れる形式を「受動型」と捉えており、このことは受動文と同様に、ガ格名詞句が主語になっているという暗黙の想定があることを意味している。例えば、Martin(1975)はA型テアル文が一種の受動文であり、その中で他動詞の目的語を主語に転換していると述べている。

---

[6] 散発的には川崎(1983)、Muraki(1986)、宇田(1996)、 Miyagawa and Babyonishev (2004)において、ある種のテアル構文でのガ格名詞句の主語性の欠如が指摘されているが、本論でいうA型テアル構文が対象になっていない。彼らの形式的な分析では、対象名詞句にガ格が現れていれば受動型（A型）となるが、次のような例は本論ではB型とするものである。

（ｉ）会長が呼んである　　（Muraki 1986: 230）

B型テアル文の特性と類型については2.8.1で詳述する。主語性の問題については4章で議論する。

(24) "The conversion V-te aru is best known as a kind of roundabout passive that permits one to take the object of a transitive verb and turn it into the subject, as when *Mado o simeru* is converted into Mado ga simete aru, which differs in meaning from *Mado ga simatte iru* in that the latter implies no agent while the former merely avoids mentioning the agent." [7] (Martin 1975:524).

この他にも多くの研究においてガ格で表出した対象項が「主語」であると考えられている（井上 1976、鈴木 2000、Matsumoto 1990a, b、Miyagawa 1989、Sugita 2009、Nakatani 2013 など）。

2.3. A 型テアル文の特性

2.3.1 テアル文の様相

すでに述べたように、益岡(1987)以降の研究では、益岡の 4 分類を紹介しつつも、対象がガ格で現れる「受動型」（益岡の A 型）と、動作主がガ格、対象がヲ格で現れる「能動型」（益岡の B 型）という二つの型に大別する考え方が主流になっている。

本論では、益岡の A_1 型に当たるものを存在動詞アルの用法との近似性から、便宜上「存在表現テアル文」と呼び、A_2 型に当たるものを状態変化の結果の存続を表すことから、「結果状態テアル文」と呼ぶこととする。実際には次の主張から、これらの二つの下位類は、あえて区分する必要がなく、併せて「A 型テアル文」という一つの型に括ることができる。

1. A 型テアル文に現れるニ格場所句は補助動詞「アル」によって導入されるものである。
2. ニ格場所句の導入は一定の語彙意味論的制約と語用論的制約に従う。
3. ニ格場所句が導入されない場合の A 型テアル文を便宜上 A_2 型と呼称し、区別することがある。

これらの主張の詳細については、以後の節で詳しく見ることになるが、この見方によれば「存在表現テアル文」（A_1 型）が A 型の基本的な形であり、「結果状態テアル文」（A_2 型）はいわば「場所の表現を欠く、存在表現の一種である」という位置付けになる[8]。このことは、存在表現の中には場所句を伴うものと、場所句を伴わないものがあることと

[7] 原文とは異なるが、読みやすさを優先するために日本語の例文はイタリックにした。
[8] 場所句を伴って状態変化動詞や作成動詞と共にテアルが使われる場合は、モノがどのような状態で存在しているかを表わしている。野村(2003)は、このような、モノが「どのようにあるか」を表わす文を「存在様態文」と呼び、「存在文」の一種として扱っている 。

並行的である。

(25)　場所句を伴う存在表現
　　台所に大きな冷蔵庫がある。
(26)　場所句を伴わない存在表現
　　二日続けて大きな地震が起こったことがある。

また益岡(1987)の B 型に相当するものは、さらなる下位分類をせずに、そのアスペクト的特徴から「パーフェクト・テアル文」 として、一括して B 型テアル文と称することにする[9]。

後の章で見るように、この A 型テアル文と B 型テアル文の区分は、その意味・機能の特性だけでなく、構造的な項の実現の仕方の違いとも深く関連している。本論の主張は、テアル構文の中で最も典型的な形は、益岡(1987)が A_1 型と呼んだタイプの構文であり、ニ格場所句が現れない A_2 型と併せて、A 型という特別な類を構成するというものである。

A 型テアル文の認定には大きく分けて二つの視点が存在する。形式的側面と意味・機能的な側面である。これらを順次考察することにする。

2.3.2　A 型テアル構文の形式的特性

A 型テアル文とは、形式的には、

(27)　（Y ニ）　X ガ　Vc テアル

という雛形に合致するテアル文のことを指す。ここで Y は場所を表す句であり、X は語幹動詞 V の内項（対象）である。V の性質にも条件があり、V は変化動詞（他動詞）でなければならない（変化動詞を Vc と表記する）。ここでいう変化動詞とは、配置動詞、書記動詞、状態変化動詞（作成、抹消の動詞を含む）を指す。A 型テアル文に課せられた語彙意味論的条件およびこれらの基準に従えば、下記のテアル文はどれも A 型ということになる。

(28)　壁に絵がかけてある。
(29)　窓が開けてある。
(30)　ベランダにハーブが乾かしてある。
(31)　庭の雑草が抜いてある。

---

[9] パーフェクトの定義については 2.4.3 で後述する。

これらの条件の一つでも欠けると、もはやA型とはいえない。

(32)　壁に絵をかけてある。（Xがガ格でない）
(33)　ベストメンバーが選んである。（Vが変化動詞ではない）
(34)　専門家が雇ってある。（同上）

形式的に上述の雛形に合わないテアル文は全てB型ということになる。

ここで二つの点で注意しなければならない。第一に、本章ではA型とB型の統語的・意味的な違いを最大限に浮き上がらせるため、便宜上、両者が相補分布的に全てのテアル文を二分するかのように単純化して議論を進めている。しかし4.6で述べるように、実際には、[1]（27）に示したような形式的特徴を備えたテアル文だけがA型テアル文と認定され、しかも文脈が異なればそれらは同時にB型としても使用可能である。そして[2]同様の形式的特徴を欠いたテアル文はB型テアル文としてしか認定されない、というのが正確である。つまりA型テアル文として認定される文は、文脈によってはB型としても使用可能であるということである。この点については、4.6で改めて述べることにする。

第二に、この雛形に合わないものでもこの雛形に合わないものでもA型テアル文と認定される構文が存在する。それは書記動詞の内項が命題であり、従属節（ト節）として具現する場合である。

(35)　看板に[ここは私有地である]と書いてある。
(36)　黒板に[宿題の期限が３日延長された]と書いてある。
(37)　CD-ROMの表面に[このソフトウエアは日本国内においてのみ使用できる]と印字してある。

これらのテアル文は、上記の雛形に合う普通のA型テアル文と同様の文法的特性を持っており、A型テアル文と考えて差し支えない。関連する特徴の「場面描写性」という意味的特徴については2.4.1で、「主語が存在しない」という統語的特徴については4章で再び触れることになる。

A型テアル文の形式的特性として忘れてはならない特徴がある。それはもともとの語幹動詞が取る項の中で動作主項だけがテアル文においては決して表出しないという点である。動作主項は、主語位置にガ格名詞句として出現することも、付加詞として「によって」を伴って出現することも許されない 。（影山1996、Sugita 2009にも同様の観察が見られる。）

(38)　*社長が壁にピカソの絵がかけてある。
(39)　*守衛さんが窓が開けてある。
(40)　*社長によって壁にピカソの絵がかけてある。
(41)　*守衛さんによって窓が開けてある。

つまり A 型テアル文においては、外項（動作主）が完全に抑制されていることになる。この点で、外項（動作主）を背景化すると考えられている直接受動文とは大きく異なる。受動文においては、降格された外項（動作主）が付加詞として随意的に表出するからである。

(42)　壁に絵がかけられている。
(43)　社長によって壁に絵がかけられている。
(44)　窓が開けられている。
(45)　守衛さんによって窓が開けられている。

A 型テアル文においては、もともと語幹動詞が持っていた動作主の存在はあくまで含意の形で残っているのみで、動作主項が統語上の働きを示すことはない。ただし、一見するとこの主張の反例となるような言語事実も指摘されている。この問題は、2.9 で取り上げる。

A 型テアル文において、動作主項が表出しないという事実と表裏一体の関係にあると思われるのは、補助動詞アルに前節する語幹動詞に動作主項がなければならないという事実である。つまり A 型テアル文の補助動詞アルの文法機能としては、「語幹動詞の動作主項を抑制する」というものであるため、もともと動作主項を持たないような動詞とは結合できないのである。第一のタイプとしては、非対格自動詞が考えられる。Miyagawa (1989)でも指摘されているように、A 型テアル文においては非対格自動詞の使用は許されない[10]。

(46)　*壁に絵が掛かってある。
(47)　*窓が開いてある。

もう一つのタイプは動作主以外の項を主語に持つ他動詞である。

[10] ただし B 型テアル文においても非対格自動詞は使用できない。2.5 を参照。

(48)　太郎が木を倒した。
(49)　台風が木を倒した。

「倒す」は外項に動作主または原因を取る動詞であるが、テアル文に使用した場合には必ず動作主の意味が含意される。

(50)　木が倒してある。

この文で、木を倒したのが台風であるという解釈は成立しない。外項が原因の場合にはテアル文が作れないことがわかる。

2.4　テアル文の意味的特性

前節で定義したような形式的特徴を持ったテアル文をA型テアル文と呼んだ。これは益岡(1987)で提案された分類とほぼ一致する。このA型テアル文には二つの重要な意味的特性が備わっている。それはA型テアル文をもっとも典型的に表現する「場面描写性」と「状態のアスペクト」である。これら二つの意味的特徴がA型テアル文をB型テアル文から区別する。この節ではこれらの特徴を順次検討していく。

2.4.1　場面描写性

益岡(1987:224)はA型テアル文を「場面描写表現」であると述べているが、本論文はこの主張を深く掘り下げた上で、「場面描写性」をA型テアル文の最も重要な意味的特徴として位置付ける。まず、場面描写性について定義をしておく。

(51)　場面描写とは、ある時間・空間における場面を五感でとらえたままに言語化することである。

これは「現象文」「現象描写文」などと呼ばれ、「判断文」に相対するものとして分類される文の機能に近く、三尾(1948)は次のように定義している。「現象文は現象をありのまま、そのままをうつしたものである。判断の加工をほどこさないで、感官を通じて心にうつしたままを、そのまま表現した文である。現象と表現の間に何のすきまもない。現象と表現との間に話者の主観がまったくはいりこまないのであるから、そこには主観の責任問題はない。」（三尾 1948:64）

(52)　むかしむかし、ある海岸に、おすのくじゃくとめすのくじゃくが住んでいました。

(53)　雨が降っている。
(54)　電車が来た。
(55)　犬が走ってる。　（三尾 1948:65-66）

また、仁田(1986)は三尾の「現象文」の概念を基本的に踏襲し、さらに三尾が含めていなかった動詞以外の述語文や未来の現象を表わす文も含め、拡張して「現象描写文」とした。

動詞以外の述語の現象描写文
(56)　ワァー、空ガトテモ青イ。
(57)　見テミナ。波ガ荒イヨ。
(58)　アッ、隣リガ火事ダ。[11]
(59)　アッ、松坂屋ガ休ミダ。　（仁田 1986:62）
近接未来の現象描写文
(60)　アッ、荷物ガ落チル。　（仁田 1986:65）

仁田(1986)は文を伝達のムードによって表出型（意志や希望）と訴え型（依頼や命令）と演述型に分類したうえで、さらに演述型を判断文と現象描写文に二分した。判断文は「題目ー解説」の構造をもつ文で、有題文である。それに対して現象描写文は無題文で文全体が新情報であり、「ある時空の下に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたものである」（仁田 1986:61）とした。次のような文が典型的な例である。

(61)　小岩井農場の北に黒い松の森が四つあります。
(62)　おかしなはがきが、ある土曜日の夕方、一郎のうちにきました。
（仁田 1986:57）
(63)　雨ガ降ッテイル
(64)　むかし、じいとばあがおった。　（仁田 1986:62）

これらはある時間・空間における現象を描写している。
　丹羽(1988a)は、三尾(1948)の「現象文」を拡張した仁田(1986)の議論を踏まえ、「現象

[11] ただし、名詞述語文は三尾(1948)も現象文の例として出している。
(ⅰ) 火事だ。
(ⅱ) 自動車だ。　（三尾 1948:66）

（描写）文」が無題文に限られないことを示している[12]。逆に無題文も現象描写文に限られないことから、「無題文／有題文」の区別と「現象描写文／判断文」の区別は分けて考える必要があると主張している。そしていわゆる現象描写文の定義には、次の三つの異なる規定が含まれており、混同してはならないと注意を促している。

(65)　A「無題文」という文の表現構造に関する規定
　　B「描写」という言表事態に対する話し手の態度に関する規定
　　C「現象」という言表事態の性格に関する規定　　（丹羽 1988a:47）

仁田らが分析している現象描写文は、談話の冒頭に現れ、文全体が新情報を表わすものである。そのような場合は必ず無題文となる。つまり、典型的な現象描写文が無題文なのは、談話の冒頭に現れる現象描写文の特徴のためだと指摘している。本論でも A 型テアル文の場面描写性は有題・無題を本質とするものではなく、丹羽の B と C だけが場面描写性の根幹を成す意味成分であり、有題・無題の区別は本質的ではないと考える。

A 型テアル文とこの現象描写文は密接な関係にある。A 型テアル文は典型的に現象描写文として現れる[13]。

(66)　床の間に花が飾ってある。
(67)　ペンに名前が書いてある。
(68)　エアコンがつけてある。

これらは談話の冒頭に現れても新情報を表わす現象描写文として成り立つ。このような現象描写文は、場面描写を表わす A 型テアル文の典型的な用法である。

仁田(1986)は現象描写文をさらに「現前状況の描写」「近接未来の徴候」「過去の出来事の報道」「現在有している予定」の 4 種類に分けている。特に「現前状況の描写」を現象描写文の典型としている。これは「話し手の視覚や聴覚等を通して捉えられた現在話

---

[12]三尾(1948)は「現象文」、仁田(1986)は「現象描写文」、丹羽(1988)は「現象（描写）文」という用語を使っている。定義は全く同じではないが、これらの用語は、それが指す文の範囲が少しずつ異なるだけでほぼ同様の意味・機能なので、本論ではこれ以降「現象描写文」で統一する。

[13] Toratani (2007: 69)でも同様の指摘がなされている。A 型テアル文は場面を描写する presentational な文として機能し、談話に新たな実体を導入する働きがあるという。
(ⅰ) 最後に小さな地下室を覗いた。
(ⅱ) 中はガランとしていて、机と椅子が置いてあるだけだった。
この談話では、最初の文が新しい場面を導入し、次の文で物語の登場人物がテアル文で眼前の様子を表現しているということである。

し手の身の回りに存在する世界をそのまま言語表現化して述べ伝えた文」(仁田 1986:63)である[14]。

(69)　子供ガ運動場デ遊ンデイル。
(70)　わずかに風が吹いている。
(71)　テーブルノ上ニ書類ガ有ル。
(72)　狼煙が、あがった。　(仁田 1986:63)

この種の現象描写文はテアル文とかかわりが深い。先に挙げた例(66)〜(68)は全てこの種の現象描写文である。

もう一つ関わりが深いのが、「過去の出来事の報道」とされるものである。

(73)　お知らせします。関東地方に大規模な地震が起こりました。
(74)　「今朝西田から電話がありました。」
(75)　むかし太郎と次郎と三郎という三人の兄弟がおかあと暮らしていた。ある時おかあが病気になった。

これらは過去に生じた出来事をそのまま主観の加工を加えないで述べ伝える文である。

テアル文では、時制が過去の場合は、その過去のある時間、ある空間の一時的な状態をとらえた現象描写文となる。コーパスで収集した文例を見ても、小説などでは過去形で出ている場合、ほとんどがある特定の場面を描写する文となっている[15]。

(76)　昨日床の間に花が飾ってあった。
(77)　ペンケースを開けると、ペンにきれいな字で名前が書いてあった。

(75)のように昔話の文もここに属することから、これらの例も仁田(1986)の定義によれば「過去の出来事の報道」に含められるだろう[16]。この仁田(1986)の言う「現前状況の

---

[14] この「現前状況の描写」に関しては三尾(1948)の「現象文」の定義とほぼ等しい。ただ、三尾(1948)は「現在の状況」ということを明記しておらず、仁田(1986)の「過去の出来事の報道」に当たる昔話の文は現象文に含めている。その他の例を念頭に置いているかどうかはわからないが、少なくとも分析されている文は昔話以外は現在の状況を表わすものだけで、未来の状況を述べる文に関しては言及されていない。

[15] コーパス調査の結果については3章で述べる。

[16]過去のテアル文は状態であるため、「過去の出来事の報道」という用語は相応しくないように

描写」と「過去の出来事の報道」がA型テアル文の典型的な機能である。

(78)　A型テアル文（現在形）　→ 現前状況の描写
　　A型テアル文（過去形）　→ 過去の出来事の報道

A 型テアル文すべてが仁田(1986)らの言う現象描写文の定義に合致するわけではない。仁田らによれば、現象描写文は無題文とされる。しかし、上述のように、丹羽(1988a)に従えば、有題・無題の違いは現象描写文にとって重要なことではない。実際、テアル文の場合、場所句が主題化された有題文であっても、テアル文が場面描写性を有することには変わりがない。

(79)　床の間には花が飾ってある。
(80)　このペンにはきれいな字で名前が書いてある。

これらは有題文ではあるが、ある時間・空間における場面を、テアル文を使って描写している。丹羽(1988a,b)の言うように、有題文であっても現前のことを描写することはできるのである。

(81)　庭の桜は花が散った。（庭の桜は）葉も出始めた。　(丹羽 1988b:47)

また、「のだ」文は一般的に有題文とされ、現象文の定義からははずれるが、これも場面描写性があることには変わりがない。

(82)　あれ？暖かいね。エアコンがつけてあるんだ。

三尾(1948)や仁田(1986)の定義によれば、この種の文は「この部屋はエアコンがつけてあるのだ」とパラフレイズできることから、有題文であり判断文となるが、「ある時空における場面を五感でとらえたままに言語化すること」という意味での場面描写性には変わりがない。つまりテアル文であらわされる命題部分としては場面描写性だけを問題とし、有題・無題の区別は本質的ではないと考える。仁田(1986)らが分析している「現象描写文」は、文の種類であり、主文の機能を問題としている。したがって本論では厳密な意

感じられるが、仁田(1986)の枠組では、「現前状況の描写」は現在形の文に限られるため、過去のテアル文はそこには含められない。本論ではテアル文が仁田(1986)の分類のどこに当てはまるかということは問題にせず、これらのタイプがA型テアル文の典型的な用法だということを指摘するのみとする。

味での現象描写文と区別してA型テアル文の機能として「場面描写文」と表現する。

また、A型テアル文が従属節に使用された場合は、機能的な定義からすれば文全体が場面描写文とは言えないが、A型テアル文の意味・機能が変化するわけではなく、場面描写性が発話時ではなく従属的なテンスに相対化されたと見ることができる。

(83) 動詞の補文
私は[床の間に花が飾ってある]と思います。
(84) 関係節
[床の間に飾ってある]花は百合の花です。
(85) 時の副詞節
[床の間に花が飾ってある]間は、活気が感じられる。
(86) 理由の副詞節
[床の間に花が飾ってある]から、見てきてください。
(87) 条件文
[床の間に花が飾ってあった]ら、その日には来客があるということです。

従って、これらの従属節に現れているテアル文に関しては、文全体としては場面描写文ではないものの、テアル文の機能としては「場面描写」であることから、「二次的な場面描写文」と捉られる。

このような考察の結果、本論文で扱うA型テアル文は、広義の「場面描写文」であると考えられる。

(88) 場面描写文（主節）
無題： 床の間に花が飾ってある。（現前状況の描写）
床の間に花が飾ってあった。（過去の出来事の報道）
有題： 床の間には花が飾ってある。（現前状況の描写）
床の間には花が飾ってあった。（過去の出来事の報道）
(89) 二次的な場面描写文（従属節）
私は[床の間に花が飾ってある]と思います。（など）

本論文では、この定義をもとにA型テアル文の場面描写性を検討する。

2.4.2 A型テアル文の判定

2.4.1で述べたような意味で、A型テアル文の中心的意味機能は「場面描写」である。ゆえに、任意のテアル文がA型かどうかを判定する方法として、「青天の霹靂（Out of the

Blue）」文脈において、聞き手のいる時空の場面描写を要求する方法がある。Lambrecht(1994)は次のような文について、それが子供達についての情報を提供している文ではなく、聞き手に子供が参加する出来事について知らせる機能を持つ文だと述べている。

(90)　(What happened?) The CHILDREN went to SCHOOL!　（大文字は原文通り）
（Lambrecht, 1994:124）

Lambrecht(1994)は、このような文の語用論的な機能を「出来事の報告(Event Reporting)」と呼び、文脈情報なしに「青天の霹靂（Out of the Blue）」として発話される種類の文であると述べている。ここでは、このような出し抜けに出来事を報告するような文脈、すなわち先行文脈の情報を極力ゼロに近づけた文脈のことを「青天の霹靂文脈」と呼ぶ。

この方法で、次のような質問に適切に回答できるものは A 型テアル文と認定される。逆に、使用できないものはB 型テアル文となる[17]。

(91)　A 型テアル文の判定テスト：
「あなたが今いる場所の様子を教えてください」

これは話者が突然ある状況に置かれたところで目覚め、過去の記憶が全くないまま、質問者に答える形で周囲の状況を説明するタスクを実行するという設定を意味する。A 型テアル文はこの質問の答えとして適切であるが、B 型テアル文は不適切である。

[A 型テアル文]
(92)　壁にピカソの絵がかけてある
(93)　机の上にプレゼントが置いてある
(94)　（この寒いのに）窓が開けてある
(95)　ドアノブが外してある
(96)　（外してあった）エアコンの電源が入れてある

[B 型テアル文]
(97)　#壁にピカソの絵をかけてある

---

[17] (88)で見たように、無題文でも有題文でも場面描写文としては適切であり、青天の霹靂文脈で使用可能である。ただし有題文の場合には複数の言明を羅列することで対比性が顕著になる。
(ｉ) 床にはソファーが置いてある。壁には絵が掛けてある。窓には…

(98)　#机の上にプレゼントを置いてある
(99)　#（この寒いのに）窓を開けてある
(100)　#ドアノブを外してある
(101)　#（外してあった）エアコンの電源を入れてある
(102)　#電気屋に修理が頼んである
(103)　#専門家が雇ってある
(104)　#論文が批評してある
(105)　#学生に休講が伝えてある
(106)　#報告書が読んである
(107)　#肩が揉んである

例えば(97)「壁にピカソの絵をかけてある」が場面を描写できないのは、そこに隠れた動作主の存在があり、その指示対象が確定できない青天の霹靂文脈では正しく使えないのである。（テアル文の主語については４章で詳しく論じる。）同様に(102)「電気屋に修理が頼んである」というようなB型テアル文では主語の特定という問題だけでなく、「電気屋に修理を頼む行為とその結果」が眼前で確認できる性質のものではないため、青天の霹靂文脈では正しく使えないのである。形式的条件に加えて、このテストが全てのテアル文をA型かB型かに分類することになる。

2.4.3　テアル文のアスペクト

アスペクトとは、動詞が表す動きの過程のどの部分を問題にするかという文法カテゴリーである（高橋 1969 など）[18]。言い換えれば、アスペクトとは動詞述語の表す時間的局面をどう切り取るかを示す表現形式であり、具体的には、動詞の表す動作・作用が始まったのか、終わったのか、続いているのかなどを示すものである。Comrie(1976) は、アスペクトを “aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation” （Comrie、1976:3）（アスペクトとは場面の内的な時間構成を見る様々な方法である）と定義した。テンスが場面の外的な時間（situation-external time）を表すのに対してアスペクトはその場面の中の時間構成を述べるということである。つまり、現在の時間に場面を関係づけることにより、その場面を時間の中に位置づけるのがテンスであり、その場面の内的な時間（situation-internal time）を扱うのがアスペクトである。したがって、アスペクトは、他の時点と関係づけることなく内的な時間構成に組み込まれる。例えば、“John was reading when I entered”（Comrie、1976:3）という文であれば、「私が入

[18] 高橋(1969)は主に動作動詞を基本としてテンスとアスペクトの関係を論じているため、「動き」という用語が使われている。実際には「動き」のない「状態」なども当然含まれる。

る」という場面を「ジョンが本を読んでいる」という場面の中に内的に位置づける。その内的な時間を表したものをアスペクトという。一方、その新しくできた場面は、われわれが身を置いている時間の一点に時間的に位置付けられることにもなる。それがテンスである。

では、テアル文を考えるときに、どのようなアスペクトの問題が関わってくるのだろうか。まずは高橋(1999)の主張を概観することにする。

高橋はテアルとテオクのアスペクトを比較し、次のようなアスペクト対立の図式を提示している。

(108)　完結相と非完結相

テオク—完結相（perfective）　⇔　テアル–非完結相　（imperfective）

スル—完結相（perfective）　⇔　テイル–非完結相（imperfective）

高橋によれば、完結相は動作を初めから終わりまでのひとかたまりとして捉えるもので、非完結相は動作の過程の途中だけを表しているものである[19]。高橋はテオクとテアルの対立は、スルとシテイルと同レベルの対立であると考えている。つまりテアルはテイルと同様に不完全相（非完結相）を表していることになる。

(109)　a. ○用紙は、あした 9 時に事務所の窓口においておきます。

b. ×用紙は、あした 9 時に事務所の窓口においてあります。

(110)　a. ×9 時から 5 時まで、いついらっしゃってもおいておきます。

b. ○9 時から 5 時まで、いついらっしゃってもおいてあります。

（高橋 1999:90-92）

（109）に見られるように、「9 時に」という特定の一時点を示している場合は、「状態作り過程」を表わし、動作の途中だけを切り取る非完結相とはなじまないため、完結相のテオクだけがこの状況を表わすことができる。逆に（110）は「9 時から 5 時まで」という時間幅を切り取っているので、「状態維持過程」を表わし、非完結相であるシテアルでしか表せない（高橋、同書:90）。同じことがスルとシテイルの対立についても言える。

テアル文のアスペクトを考える際に重要な概念は A 型テアル文がこの「状態の維持」を表しているということである。更に、この「状態」とはもっぱら形容詞類によって表

[19] 実際には高橋は完全相と不完全相という訳語を用いている。これは Comrie (1976)などで言われている完結相(perfective)と非完結相(imperfective)の対立と同義であると思われる。この対立は完了相・未完了相という用語で表現される場合もある。本論では便宜上、より一般的な完結相と非完結相という用語で置き換えて提示する。

される単純な状態ではなく、何らかの動作の結果生じた「結果状態」を指している。

(111)　　壁にピカソの絵がかけてある
　　＝　動作：（誰かが）壁にピカソの絵をかけた
　　＋　その結果として
　　状態：現在、壁にピカソの絵がある

すでに 2.4.1 で見た場面描写性と結果状態のアスペクトは明らかに関連性がある。ある一時点における世界の有様を記述する場面描写文は必然的に「非完結相」的に時間の流れのある一部分を恣意的に切り取ったものだからである。更にテアル文で表された事象は、動作の進行ではなく、動作の結果生じた状態を表している。

これに対して、B 型テアル文は異なるアスペクト的特徴を持っている。先に紹介した高橋(1999)の例文に少し手を加えて、A 型テアル文と B 型テアル文の違いを見てみよう。（110）に「用紙」という対象を付け加えると、（112）のようになる。対象の名詞句がヲ格で表されているテアル文は形式的定義から B 型である。

(112)　a.　9 時から 5 時まで、いついらっしゃっても用紙が置いてあります。
　　b.??9 時から 5 時まで、いついらっしゃっても用紙を置いてあります。
　　c.　9 時にはお客様がいらっしゃるので、もう用紙を置いてあります。

（112a）は、「9 時から 5 時まで」のその場面での「用紙」の存在を表す A 型テアル文である。一方、（112b）のように、対象がヲ格で表された B 型テアル文で置き換えると、不自然になる。（112c）のように「9 時に」という一時点を表す時間表現と「もう」という完了を表す副詞を補えば、B 型テアル文として適切に使用できる。つまり、B 型テアル文は一定の時間を区切って事態を取出すことはできず、不完全相の A 型テアル文とはアスペクトが異なることがわかる。このように、高橋はテアル文を非完結相としたが、B 型テアル文に関しては非完結相とは言えないことがわかる。

一方 Sugita(2009)は、テアル文は全てテイルの「経験」の用法と同じだとしている。つまり本論の言葉で言えば、テアル文は全てパーフェクト相ということになる。Sugita は田窪（2006、2008）の「ところだ」の考察を受けて、テイル・テアルに「ところだ」をつけてテストし、そのアスペクトの特性について考察している。田窪 （2006、2008）は、「ところだ」の文ではイベントが発話時、参照時に存在することが要請されるとし、テイルに「ところだ」をつけると「進行」の解釈しかできないことを示している[20]。

[20] Takubo (2011)では、明らかな reset time のある動詞の場合は結果状態の読みもあることが注釈

(113)　活動動詞（activity）

a.　私は今チョムスキーの本を読んでいるところだ。（進行）

b. *私は 10 年前にチョムスキーの本を読んでいるところだ。（経験）

(114)　到達動詞（achievement）

a. *私は今結婚しているところだ。（結果の状態）

b. *私は 10 年前にいちど結婚しているところだ。（経験）

(115)　達成動詞（accomplishment）

a.　私はさっきから赤い服を着ているところだ。（進行）

b. *私は昨日赤い服を着ているところだ。（経験）　（田窪 2008:9-10）

Sugita (2009) はテイルの用法を「進行（progressive）」「結果状態（perfective[21]）」「経験（experiential）」に分類し、「経験（experiential）」の用法は「ところだ」と共起しないことを示している。テアルの場合は対象がガ格で現れる「受動型（Intransitivising）」とヲ格で現れる「非受動型（Non-intransitivising）」に大別しているが、どちらも「ところだ」と共起しないことから、テイルの「経験」と同様、テアルはすべて「経験文」であると主張した。

(116)　テイル

a.　Progressive + tokoro-da

マリが今本を読んでいるところだ。

b.　Perfective + tokoro-da

マリが今イギリスに行っているところだ。

c.　Experiential + tokoro-da

*まりが今までに泳いでいるところだ。

(117)　テアル

a.　Non-intransitivising

*マリは本を書いてあるところだ。

*マリはシャワーを浴びてあるところだ。

b.　Intransitivising

*ろうそくがつけてあるところだ。　(Sugita 2009:76 -118) [22]

されている。

[21] Sugita(2009)は、一般的に「結果状態」または “resultative” と呼ばれている概念に対して、“perfective” という呼称を使用している。

[22] 本論文では、読みやすさを優先させるために、英文論文からの引用例文を漢字仮名まじり文で

田窪(2006, 2008)は、「ところだ」が結果状態のテイルとも共起しないことを示しているので、結果状態のテイルが本当に「ところだ」と共起するのであれば（116b）は田窪 (2006, 2008) への反証となるわけだが、ここで Sugita (2009)が結果状態のテイルとして挙げているのは「行く」「来る」で、これらは語彙的アスペクト素性の観点からは特殊な動詞と言える[23]。他に「店が閉まっているところだ」なども良い例として出されているが、本当に結果状態の意味でこの文が妥当かどうか疑わしい。（117b）はテアル文だけであれば受動型（A 型）として可能な文だが、これが「ところだ」と共起しないのは、やはり田窪 (2006, 2008) の言うように結果状態の意味と「ところだ」が不整合になるからであろう。(117b) をテイルで置き換えても結果状態ではなく進行の読みになる。

(118)　今ろうそくをつけているところだ。

したがって、田窪 （2006、2008）の主張通り、「ところだ」は結果状態の意味とは整合しないのであるから、テアルが「ところだ」と共起しないからといって、テアル文を A 型、B 型ともに「経験文」とする根拠はないと言える[24]。

益岡(1987)は B 型テアル文の意味を「行為の結果の対象の状態変化あるいは何らかの有効性が基準時において存続している」ことと述べたが、それは B 型テアル文のアスペクトが、工藤 (1995) の言う「パーフェクト」であるということと同義であると思われ

表記する。

[23] 通常到達動詞にテイルが付くと結果状態を表わし、活動動詞と達成動詞にテイルが付くと進行を表わす。（金田一 1950、Vendler 1967 など参照されたい）

(ｉ) 電気が消えている。（結果状態）

(ⅱ) 太郎が走っている。（進行）

(ⅲ) ケーキを作っている。（進行）

しかし、「行く」「来る」は典型的な到達動詞とは異なり、テイル文にすると、進行を表わすこともできる。

(ⅲ) 今学校に行っている最中だ。

このように言ったとき、必ずしも学校に着いているという解釈だけでなく、道中の可能性もあるだろう。金田一(1950)は瞬間動詞（Vemdler (1967)の到達動詞にほぼ等しい）の一つの特徴として、「～している最中だ」ということができないと述べている。事実「電気が消えている最中だ」とは言えない。この意味でも「行く」「来る」などは語彙意味的なアスペクト素性として、典型的な到達動詞とは異なる。

[24] Sugita (2009) はこの他にも意味論的考察や統語的なテストを基にテイルの「経験」の用法とテアルを同等としているが、受動型テアル文として挙げられている例文は、ほとんどが「借りてある」「予約してある」「送ってある」「車が運転してある」などで、眼前描写的なテアル文にはなりにくいもので、本論では変化動詞ではない「その他の動詞」を使った B 型と認定されるものばかりである。テアル文で使われる動詞については次節で詳しく述べる。

る。「パーフェクト」の定義は、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていること」（工藤、同書:99）である。これはテイルの「経験」などと呼ばれる用法に関して工藤が名付けたものだが、この概念はB型テアル文にも当てはまる。

B 型テアル文とテイルの「経験」用法との類似性については吉川(1973)にも指摘がある。吉川は「話す」「見る」「ねる」「休む」「行く」などの動詞にテアルがついたものを「単に動作が行われた後の状態を意味する」として、テイルの「経験」と類似していると述べている。

(119)

話してある	— 話している	— 話したことがある
見てある	— 見ている	— 見たことがある
ねてある	— ねている	— ねたことがある
休んである	— 休んでいる	— 休んだことがある
行ってある	— 行っている	— 行ったことがある

（吉川 1973:257）

（119）に挙がっている動詞は A 型テアル文には決して現れない動詞である。既に示したとおり、A 型テアル文となり得るのは変化動詞である。非対格自動詞が除外されることは既に見たとおりであるが、それ以外であればB型テアル文は基本的に動詞を選ばない。これは、テイル文において「進行」や「結果状態」の意味が前接動詞の語彙的アスペクトによって決まるのに対して、「経験」の意味では動詞を選ばないのとパラレルな状況である。テイル・テアルの意味と語彙的アスペクトとの関係は表 1 のようになる。

表 1

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">テイル</td><td colspan="2">テアル</td></tr>
<tr><td>活動動詞
走る／泳ぐ／読む／押す</td><td>動作進行</td><td rowspan="3">パーフェクト</td><td></td><td rowspan="2">パーフェクト（B 型）</td></tr>
<tr><td>変化動詞（他動詞）
掛ける／置く／書く／作る／
開ける／壊す／煮る／冷やす</td><td>動作進行
／
結果状態</td><td>存在表現・
結果状態
（A 型）</td></tr>
<tr><td>変化動詞（自動詞）
腐る／乾く／開く／冷える</td><td>結果状態</td><td></td><td></td></tr>
</table>

テイルもテアルもパーフェクトの用法では動詞を選ばない。ただ、テアルの場合は動作主による準備的な意味を含むという性質から、動作主項のない非対格自動詞は不適格となる。

(120)　　テイル

a.　窓を開けている。　〈動作進行・結果状態〉

b.　洗濯物が乾いている。　〈結果状態〉

c.　太郎がお菓子を食べている。　〈動作進行〉

d.　太郎は3回結婚している。　〈パーフェクト〉

e. 健康診断があるので昨日は9時までにご飯を食べている。〈パーフェクト〉

(121)　　テアル

a.　窓が開けてある。　〈結果状態〉

b.* 洗濯物が乾いてある。

c.　太郎は永住権を得るためにアメリカで結婚してある。
〈パーフェクト〉

d.??太郎がお菓子を食べてある。

e.　健康診断があるので9時までにご飯を食べてある。
〈パーフェクト〉

テイル文では「経験」という意味論的条件が整えば動詞を選ばない。テアルでも、例えば「食べる」という動詞では（121d）のように「準備」の意図が感じられない文では不自然に感じられるが、同じ動詞でも（121e）のように適切な文脈を補って目的をはっきりさせればより自然に感じられるようになる。

B 型テアル文がアスペクト的にはパーフェクトであることを示す証拠は多く存在する。例えば、結果状態の意味を表すテイル文においては、基準時を指す時の副詞のみが使用可能であり、パーフェクトの意味を表すテイル文においては、出来事時を指す時の副詞のみが出現可能であることは、これまでも多くの研究で指摘されてきた[25]。

結果状態と時の副詞

(122)　彼は<u>今</u>疲れている。

(123)　彼は<u>現在</u>すっかり太っている。

(124)　あの時計は<u>今</u>壊れている。

(125)　*あの時計は<u>昨日</u>壊れている。

[25] 例文(122),(123),(126),(127),(128)は藤井(1966)から、例文(129)は工藤(1995)から、例文(124),(125),(130)は三原(1997)からの引用である。

パーフェクトと時の副詞

(126) *現在たくさんの小説を書いている。

(127) 彼は昔三年間も英国で勉強している。

(128) 以前、知り合っている。

(129) 一年半前に探偵に源太のことを調べさせているんですよ。

(130) 彼は昨年、北欧を旅行している。

（125）は結果状態の意味では不適格である。解釈できるとすれば「昨日壊れた（けれど今は直っている）という事実が今ある」というパーフェクトの意味になる。現在の結果状態を表わす文では基準時（この場合は発話時）と異なる「昨日」という出来事時を表わす副詞とは共起できない。逆にパーフェクトの文では現在時制で基準時を指す「現在」という副詞とは共起できず、（126）もパーフェクトの意味では非文となる。

同じことがテアル文にも言える。B 型テアル文である（131a）は現在時制で出来事時を表す「昨日」と問題なく共起して、発話時の状況を表すことができる。これはテイルのパーフェクトの用法と同じである。しかし、（131b）が示すように現在の状態を表すために出来事時を指す「昨日」を使うことはできず、基準時を指す（この場合は発話時と同じ）「いま」は可能である。この状況はテイルの結果状態の場合と同じである。

(131) a. 昨日論文を送ってある。 （B 型）

b.*サイドボードの上に昨日人形が飾ってある。（A 型）

c. サイドボードの上にいま人形が飾ってある。（A 型）

このように、A 型テアル文は結果状態を表す継続相、B 型テアル文は効力が持続していることを表すパーフェクト相であり、アスペクトの面から見ても A 型と B 型は異なると考えられる。

次にテアルとテオクの関連性について見ていく。テアル文の研究は古くからされていたが、すでに触れたように、初期の研究からしばらくは主にテイル文とテアル文を比較する研究が中心であった（松下 1928、寺村 1984、井上 1976 など）。また、テオクとテアルを比較した先行研究も散見される（山崎 1996、山森 2010 など）。これら 3 形式は互いに意味の重なる部分があり、強い関連性があると考えられている。

(132) a. 窓が開いている。

b. 窓が開けてある。

c. 窓を開けておく。

山崎（1996）はテアルとテオクの関連性について、文学作品からの用例を使って分析している。その結果、A 型テアル文とテオク文は意味的・統語的対応関係がなく、むしろ B 型テアル文とテオク文に対応関係が見られると結論づけた[26]。山崎によれば、発話時における事態を行為の側から見ればテオクになり、結果の側から見ればテアルになる。この対応関係を表わしたのが（133）である。

(133)　行為と結果の対応関係

時間の流れ	行為	〈人〉が	〈モノ・コト〉を	〈Vt＋ておいた〉
↓	結果	〈人〉が	〈モノ・コト〉を	〈Vt＋てある／てあった〉

（山崎 1996: 23）

山崎は、テオク文と B 型テアル文は、統語構造は同じだが、準備としての行為と結果のどちらに焦点を当てるかという認知的捉え方の違いだと述べている。

「行為」と「結果」のある同じ事象の、「行為」に焦点を当てたのがテオクで、「結果」に焦点を当てたのがテアルであるという考え方は、吉川（1973）山崎（1996）などを始め、広く示されている。しかし、山崎（1996）の言うように、A 型テアル文を「しておいた」の結果と捉えるのは妥当ではなく、むしろ「した」の結果であると考えるべきである[27]。

(134)　窓が開いた　→　窓が開いている
　　→　窓が（すでに）開いている（パーフェクト）

(135)　窓を開けた　→　窓が開いている／窓が開けてある(A 型)
　　／窓が開けられている
　　→　窓を開けている（パーフェクト）

(136)　窓を開けておいた→窓を開けてある（B 型・パーフェクト）

「窓を開けた」という行為があり、その結果「開いている」「開けてある」「開けられている」という状態が残っている。「開いている」と「開けてある」は動詞の項構造の違い、「開けてある」と「開けられている」は視点の違いとなる。そして「窓が開いた」「窓を開けた」結果の効果が何らかの形で基準時にかかわる場合、パーフェクトあるいは「経験」の意味になると考えられる。

---

[26] 山崎 (1996) の用語では A 型・B 型はそれぞれ「～てある」１）と「～てある」２）に対応する。

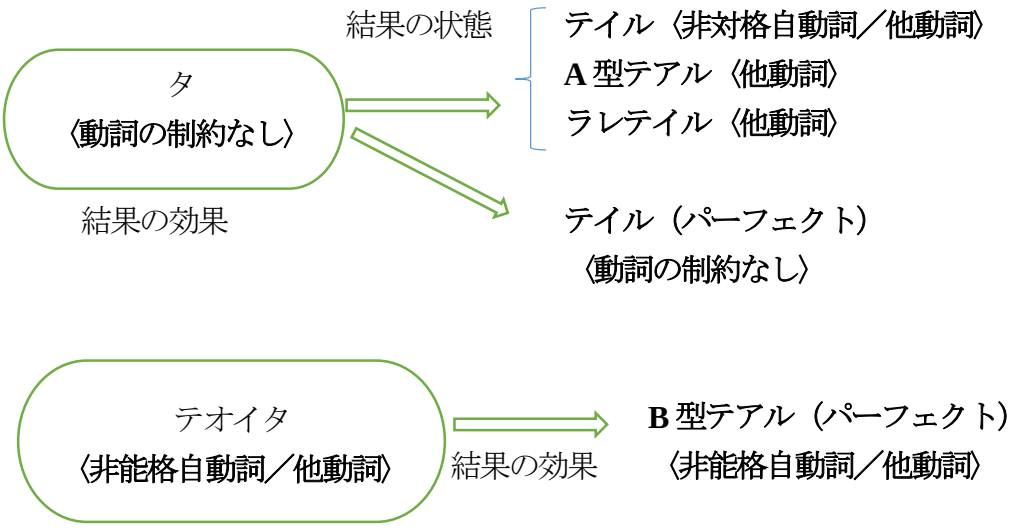
[27] ここでは、山崎(1996)の主張に沿った形で、矢印で事象と事象の時間的順序関係と、後続事象が結果となっていることを示している。

上述のように、B 型テアル文の場合は、テオクとの関連性が強い（山崎 1996）。つまり、B 型テアル文はテオク文で表わした事態の結果だと捉えることができる。「窓を開けてある」は「窓を開けた」という行為の結果状態ではなく「窓を開けておいた」という行為の結果、効果が基準時まで持続しているというパーフェクトの意味を持つ。テオク文も B 型テアル文も、何らかの意図がなければ使われない。自動詞を用いることでその違いがより鮮明になる。

(137)　　昼間にたっぷり寝た
(138)　　昼間にたっぷり寝ておいた　→　昼間にたっぷり寝てある（B 型）

「昼間にたっぷり寝てある」は「寝た」ことの結果状態ではない。その結果「夜遅くまで仕事ができる」などの意図した効果の存在を述べる表現である。以上のことを図式化すると図 1 のようになる[28]。

図 1



何かを「した」ことの結果状態を表わすためにはテイル文、サレテイル文、A 型テアル文で表わすことができる。そして「した」結果の効果は「経験」であり、パーフェクトのテイル文で表わされる。一方何かを「しておいた」ことの結果の効果を表わすのがパーフェクトの B 型テアル文である。このように考えれば、本動詞アルが本来無生物の存在を表わし非意図的な動詞であるにもかかわらず、なぜ補助動詞アルを使ったテアル文では「準備的意図」という意味が生じるのかが理解しやすい。すなわち、B 型テアル文

[28] 結果を含意しないテイル形の「進行・動作継続」の用法はこの図には入らない。

が「しておく」という準備的行為が完了した後の効果の存続を表わすために使われる表現だと考えれば、「準備」という意味が含意されているのは自然なことである。つまり、パーフェクトのアスペクトの機能として、「した」ことの結果生じる効果がテイルで表される「経験」であり、「(何かの準備のために）しておいた」結果の効果が「(何かの準備のために）してある」であると考えられる。すなわちこれらが「パーフェクト」がもたらすニュアンスであると考える。

(139)　日本を二度訪れた　→日本を二度訪れている
(140)　窓を開けておいた　→窓を開けてある

高橋(1999)はテアル文を「非完結相（imperfective）」とし、Sugita (2009)はテアル文を「experiential（本論でいうパーフェクト）」としており、テアル文のアスペクトについて高橋は非完結相 imperfective、Sugita はパーフェクト相 perfect と異なるアスペクトとして述べていることになる。全てのテアル文を同じアスペクトであると考えるゆえにこのような矛盾が生じるのであり、テアル文にはアスペクトの異なる二つのタイプの構文があり、A 型テアル文は非完結相、B 型テアル文はパーフェクト相と考えれば、矛盾はないのである。

この節ではテアル構文のアスペクトについて考察し、A 型テアル文は行為を「した」結果の状態を表わす継続相であり、B 型テアル文は意図的な行為を「しておいた」結果の効果の存続を表わすパーフェクト相であることを述べた。さらにテイルやテオクとの関係を分析し、B 型テアル文とテイルのパーフェクト用法との類似性を示した。これにより、B 型テアル文における「派生的な意味」（吉川 1973 など）とされる「準備的意図」がどのように生じるのかも説明ができるものと考える。さらに言えば、現在の典型的な用法である A 型（とくに存在表現）テアル文よりも古い時代からこのパーフェクト・テアルの用法が存在することから、B 型テアル文を A 型テアル文の「後継的亜種」と捉えるのも適切ではないと考える。テアルの古語の用法、および文法化については 6 章で詳しく考察する。

2.5　A 型テアル文の成立条件

これまで見たように、A 型テアル文は場面描写性と結果状態のアスペクトを持ったテアル文であり、形式的には 「(Y に）X が V てある」という型にはまるものであった。しかし、この形式に合うものでも、A 型テアル文としては成立しない場合がある。既に述べたように、A 型テアル文に用いられる動詞は変化動詞に限定されていた。変化動詞の中には幾つかの下位類がある。A 型テアル文に用いられる動詞を確認しておこう。

表２　A 型テアル文に用いられる変化動詞

配置動詞	掛ける、置く、並べる、貼る、吊る
状態変化動詞	開ける、切る、茹でる、乾かす、冷やす
書記動詞	書く、書きこむ、記入する
作成動詞[29]	作る、（ケーキを）焼く、炊く、建てる
消滅・末梢動詞	消す、取る、抜く、剃る、削る

これらが典型的に A 型テアル文に用いられる動詞である。

これ以外の動詞は基本的には A 型テアル文に用いられないのだが、その点について詳しく確認しておこう。

第一に、森田 (1977) 等で指摘されているように、「ガ～テアル」（A 型）の文では、他動詞のみがテアルに前接する。しかし、他動詞であれば必ずテアル構文が成立するということではない。Miyagawa(1988, 1989)は、Martin (1975)が指摘したテアル構文にならない例をもとに、Intransitivizing Resultative[30]（益岡(1987)の A 型）のテアル文では主語（ガ格）の NP は THEME でなければならないと主張した。ここで言う THEME は affected entity を指しており、affected entity とは、Martin(1975)が affectedness のある動詞として挙げたような動詞により影響を受ける要素ということである。そのような要素を含む動詞を、Miyagawa(1988, 1989)は theme transitives と呼び、それを持たない nontheme transitives と区別した。

(141)　Theme Transitives

a.　変化するもの：（とり）かえる

b.　作られるもの：作る、書く、建てる、こしらえる、話す、呼ぶ、叫ぶ

c.　変えられるもの：なおす

d.　消滅/消費/破壊/処分されるもの：食べる、飲む、消す、壊す、殺す、なくす、失う、忘れる

（Miyagawa 1989:57）（Martin 1975 より）

(142)　手紙が書いてある。

(143)　おもちゃが壊してある

(144)　*春が待ってある。

---

[29] 「焼く、炊く」などは「ゴミを焼く、お米を炊く」などの例では状態変化動詞として機能している。語彙的に二つ以上の範疇にまたがっている動詞は多く存在する。

[30] Martin（1975）はテアル文を Intransitivizing Resultative と Possesive Resultative に大きく分けた。英文の文献ではこの用語が広く使われている。これらは益岡（1987）の A 型と B 型に概ね対応する。

(145)　*そのことが怒ってある[31]。　（Miyagawa 1989:59）

（142）（143）が、theme transitives の文で、（144）（145）は nontheme transitives の文である。このようなデータから、他動詞の中でも theme transitives のみがテアル文の語幹動詞となることができると主張した。

これに対して、Matsumoto (1990a)は、テアル文の制約はガ格名詞句が affected entity かどうかという意味役割の問題ではないとして、二つの語用論的条件を提案した。一つの条件は「意図性の条件（Purposefulness Condition）」である。これは、動作主が意図的にテアルで表わされる状況を作っていることが明らかであればテアルで表現できるというものである。

(146)　木が倒してあった。　（Matsumoto 1990a:274）

例えば（146）の文は、「きこりが木を倒した」という状況であれば成立するが、「強風が木を倒した」という場合には成立しない。Matsumoto(1990a)は、ガ格名詞句が affected entity あっても、そこに動作主の意図がなければテアル文として成立しないと説明している。この意図性の条件により、上記（144）（145）のテアル文が非文であることが説明される。「待つ」「怒る」は意図的にその状況を作るような動詞ではないからである。

二つ目の条件は「描写可能性条件（Describability Condition）」である。これは、テアルで表わされる状態が、先行する動作主の動作によるものであるという証拠がなければならないというものである。

(147)　a. #ドアが叩いてある。
　　b. ドアが痛むほど叩いてある。　（Matsumoto 1990a:275-276）

ドアは通常は叩かれることによって影響を受けないので、（147a）は不適合となるが、（147b）のようにたたいた証拠が描写されていれば、テアル文として成立する。つまり、実際に影響を受けたかどうかではなく、影響を受けたことを話者が確信するかどうかが問題となり、影響を受けた結果が視覚可能な形で表わされていればよい。また、対象となる affected entity 自体がなくても、事態に先行する動作主の行為があったという証拠があれば適切な文となる。

---

[31]（145）は、例えば「怒ってある」という行為が次に同じことをさせないという効果を期待しての準備的な行為であれば、B 型の文として可能な文となる。それに対して（144）は「待つ」という行為が何かの効果を残すことは考えにくい。待っても待たなくても春は来るからである。したがって、B 型の文としても成立しない（あるいはしにくい）ということになる。

(148)　カルテを見て、熱が測ってあることに気がついた。　（Matsumoto 1990a:278）

これは、「熱を測る」行為によって影響を受ける対象はないが、「カルテを見て」と状況を足すことで、その「カルテ」が証拠となり、以前の行為があったと判断できる状況が生まれ、テアル文での表現が可能になるということである。このように、Matsumoto(1990a)の主張は、テアルに前接する動詞の制約が、動詞そのものではなく、意図性と描写可能性によってもたらされる語用論的条件によるというものである。このMatsumoto(1990a)の主張は、本論文で検討した場面描写性の特性を捉えた一つの定式化と見ることができる。

Toratani (2007)は、上記の先行研究をふまえて、意味論と語用論の両方を考慮に入れることが必要であると述べ、Van Valin and LaPolla (1997)の動詞の分類を基にテアル文の語幹動詞となるための語彙的アスペクトの条件（Lexical Aspectual Condition）を、（149）のように論理構造（Logical Structure (LS)）を使って表した[32]。つまり、テアル文の語幹動詞は、「誰かが（何かを）する」という活動の要素と「主体（誰かあるいは何か）が、変わるあるいは始まる（ただし主体は経験者ではない）」という状態変化の要素を両方 LS として備えている動詞ということになる。

(149)　Lexical Aspectual Condition (LAC)
テアルと結合するためには動詞は統語的に他動詞でなければならず、その LS は活動の要素 [**do'** (x, Ø)]と状態変化の要素 [BECOME/INGR **pred'** (y)] あるいは [BECOME/INGR **pred'** (z,y)] （ただし z≠EXPERIENCER）を含まなければならない[33]。　（Toratani 2007:62）[34]

これは、A 型テアル文の形式的要件において「語幹動詞が変化動詞でなければならないと本論文で述べてきたことと実質的に等しい提案である。

---

[32] Miyagawa (1988・1989)や Matsumoto (1990)同様、Toratani (2007)も Intransitivising Resultative、つまり益岡(1987)の A 型のみを分析対象としている。

[33] INGR は ingressive （始動相）を表わす。

[34] ここで用いられている定項のうちで述語の性質を持つ **do'** は「活動を行う」ことを意味し、動作主による行動には必ず存在する要素である。 Ø は活動の対象が特定されないことを意味する。BECOME/INGR は変化を表す述語であるが、BECOME が時間幅の中での変化を表しているのに対して、INGR は瞬間的な変化を表すとされている。**pred'**は任意の一項状態述語または二項状態述語が入る変項を表している。二項の場合に外項が経験者であってはいけないと指定されているのは、テアル文「*フランス語が（子供に）習わせてある」が認められないからだと Toratani (2007:61)は述べている。（ただしこの文は本論でで言うＢ型テアル文としては可能な文である。）

Toratani (2007) はさらに、Matsumoto (1990)の「描写可能性条件」も resultative coercion（結果状態の強制）ということで説明できるとしている。つまり、本来その意味の中に状態変化を含まない動詞であっても、結果を含む解釈を強要し、語彙的アスペクトの変換が起こることがあるということである。

(150)　a.#ドアが叩いてある。
　　b. ドアが痛むほど叩いてある。　（再掲）

(151)　[**do'** (x, [**beat**' (x, y)])] CAUSE [BECOME **damaged'** (y)]
　　(Toratani 2007:67, 下線は著者による)

（150b）は「いたむほど」と描写することにより、resultative coercion が起こり、（151）のように「たたく」に本来存在しなかった[BECOME **damaged'** (y)]が語彙概念として加えられ、活動の要素と状態変化の要素を含むことからテアル文が解釈可能になる。そして、テアル文の許容度はどのくらいその状況が想像しやすいか、あるいはどのくらい活動とそれによって引き起こされる状態が関連付けしやすいかによると述べている。

これまで見てきたことから、A 型テアル文の雛形「（Y に）X が V てある」において、V が変化動詞でなければならないという主張には若干の修正が必要である。すなわち、A 型テアル文に使用できる動詞は、[A] その意味に変化の特性（つまり語彙概念として「変化 BECOME **pred'** (y)」が必須であること＝LAC）を含んだ動詞と、[B] 語用論的拡張（つまり通常は動詞の概念構造に「変化 BECOME **pred'** (y)」を欠いている動詞も強制(coercion)により、変化を導入することが可能になること）によって変化の性質を獲得した動詞でなければならないということである。

さらに、Toratani(2007)は語用論的条件として、テアルの談話的機能が「描写文」であることを指摘した[35]。

(152)　おもちゃが壊してある　（Toratani 2007: 68）（Miyagawa 1986 より）

この文は Miyagawa (1986)では正しい文として扱われているのだが、Toratani は母語話者の中にはこの文を許容しない人もいることを示し、その理由として、唯一の項が「が」でマークされている場合、それは描写文であり、描写文には客観性が必要になると述べている。つまり、出来事の対象物にとりわけ大きな感情移入を注いではならないということになる。おもちゃが壊されている通常の状況では、否応無しにおもちゃに感情移入してしまうため、客観性が失われるとしている。客観的描写が不適切な文脈ではテアル

[35] Toratani(2007)の用語では "presentational"。

が不適合性を生じるということで、これを語用論的条件として提案した。

このように、Toratani (2007)は語彙的アスペクトの条件と語用論的条件によってテアル文の適合性が決まるとしているが、それは益岡(1987)でいう A 型の文に限られることには注意が必要である。テアル構文の成立条件に関しては、管見の限りでは A 型のテアル文に関してしか考察されていない。それは B 型のテアル文には動詞の制約が少ないためであろう。

A 型テアル文に比べ、B 型テアル文に課せられる成立条件は少ない。B 型テアル文では非能格自動詞も使用可能であり、適切な文脈さえ想定すれば、Matsumoto の言う「描写可能性条件に必要とされる目に見える証拠」（Matsumoto 1990a）が欠けていても構わない。パーフェクトというアスペクトを持つ B 型テアル文にとっては、A 型テアル文に要求される場面描写性は必須でなく、眼前に知覚できる状況があるかどうかは B 型テアル文の成立に関与しないからである。

(153)　いやっていうほど眠ってあるから、二、三日徹夜しても大丈夫だ。
（森田 1978:51）

ただし、既に述べたように B 型であっても非対格自動詞とは共起しない。

(154)　a. *ガラスが割れてある。
b. *ガラスを割れてある。

（154b）の非文法性は非対格自動詞がヲ格名詞句をとらないという理由からだけではない。次の例を見てみよう。

(155)　*風が木々を揺らしてある。

「揺らす」のように、ヲ格を伴う他動詞であっても、非意志的な動作を表す動詞は B 型テアル文に使用することができない。つまり、B 型の唯一の成立条件は Matsumoto (1990) の言う「意図性の条件（Purposefulness Condition）」なのである。テアル構文の意図性に関しては 2.8 で詳しく述べる。

2.6 ニ格場所句の導入

前節で述べたように、次の形式に合致したテアル文が A 型テアル文と見做される。

(156)　　（Y ニ）　X ガ　Vc テアル　　Vc＝変化動詞

(157)　　（Y ニ）　X ト　Vc テアル

(ガ格名詞句がなく、補文標識の「と」を伴う場合　cf. 2.3.2)

本論文の主張はニ格場所句を伴う A 型テアル文（すなわち益岡(1987)の A_1 型に相当するもの）が基本の形であり、ニ格場所句を伴わない A 型テアル文（すなわち益岡(1987)の A_2 型に相当するもの）は、いわば不完全な A 型テアル文である、というものである。この主張の背景には、A 型テアル文に現れるニ格場所句が語幹動詞によって導入されたものではなく、補助動詞アルによって導入されたものであると考えられる現象がある。一戸(2001)がこの点を指摘しており、ニ格場所句をアルの項であると分析している。

(158)　a. 冷蔵庫にビールが冷やしてある。

　　b. .*冷蔵庫にビールを冷やす。

(159)　a テーブルの上におにぎりが握ってある。

　　b.*テーブルの上におにぎりを握る。　　（一戸 2001:44）

「冷やす」「握る」は状態変化動詞、作成動詞であるが、もともとはニ格場所句を取らない。同様の状況は多くの状態変化動詞において観察される。

(160)　a.　ひきだしにタオルが畳んである。

　　b.*　ひきだしにタオルを畳む。

(161)　a.　ベランダにハーブが乾かしてある。

　　b.*　ベランダにハーブを乾かす。

(162)　a.　食洗器の中に茶碗が洗ってある。

　　b.*　食洗器の中に茶碗を洗う。

(163)　a.　テーブルの上にお弁当が作ってある。

　　b.*　テーブルの上にお弁当を作る。

「畳む」「洗う」「作る」も同様に、もともと項としてニ格場所句があるとは考えられない。このように、これらの A 型テアル文に現れているニ格場所句は全て補助動詞アルによって導入されたと考えざるを得ない 。したがって、本論文は A 型テアル文のニ格場所句は補助動詞アルが導入したものであると考える[36]。

[36] A型だけでなくある種のB型テアル文においてもニ格場所句が補助動詞アルによって導入されたと考えられる。この点については 2.8.3 で考察する。

ところが、テアル文におけるニ格場所句の導入は幾つかの問題を生じさせる。ニ格場所句の導入が不適切な表現を生む場合が多々あるのである。

(164)　*寝室に窓が開けてある
(165)　*車にヘッドライトが点けてある。
(166)　??九州に男が殺してある。
(167)　??アメリカにハーブが乾かしてある。

これらのテアル文に使用されている「開ける」「点ける」はもともとニ格場所句を取る動詞ではない。では、上記の「冷やす」「握る」「畳む」「洗う」「作る」との違いは何であろう。また「殺す」「乾かす」では、ニ格場所句が使用できる場合とできない場合があるが、その違いは何であろうか。

(168)　浴室に男が殺してある。
(169)　ベランダにハーブが乾かしてある。

ニ格場所句がテアル文において不整合となる理由としては、いくつかの含意に関わる意味論的な条件と、語用論的な条件が関与していると思われる。まず最初に、含意に関わる意味論的な条件を考察しよう。繰り返し述べているように、A 型テアル文は存在文の形を継承した存在表現的な構文である。テアル文の意味を分解して考えると次のような図式になる。

(170)　Y ニ X ガ　Vc テアル
　　① 変化事象に関する主張：　（誰かが）X を V した。
　　② 変化事象に関する含意：　X が変化した。

動作主は A 型テアル文においては抑制されているため、不特定の動作主の存在が含意される。語幹動詞が変化動詞であるため、何らかの変化が起こったことが推論される。どのような種類の変化が起こったかは、語幹動詞の持つ語彙意味論的な情報から読み取ることができる。具体的な例を取り上げてここに述べた意味関係を調べてみよう。まずは、もともとニ格場所句を取らない状態変化動詞のケースを検討することにする。

(171)　ベランダにハーブが乾かしてある。
　　① 変化事象に関する主張：　（誰かが）ハーブを乾かした。
　　② 変化事象に関する含意：　ハーブが状態変化および位置変化した。

ここで注意しなければいけないのは、当該テアル文にニ格場所句が現れていることである。このニ格場所句はある物体の存在の場所を表しているわけだが、同時にある変化が起こった結果としての存在場所であることを意味する。ここで導入されているニ格場所句は補助動詞アルによって導入されたものである。語幹動詞はそのような結果のニ格場所句を選択しないからである。この結果の存在場所を表すニ格場所句があるため、本来語幹動詞が備えている「乾く」という状態変化に加えて、位置変化が含意されることになるのである[37][38]。このため、当該の物体「ハーブ」は位置変化と状態変化を起こして、その場所に存在することになる。これがもう一つの含意である。

③ 変化事象後の含意： 現在、ハーブがベランダにある。

言い換えれば、「ベランダにハーブが乾かしてある」の場合、その意味は少なくとも「誰かがハーブを乾かし、ハーブが乾くという変化をし、ハーブはベランダに移動し、現在、そのバーブがベランダにある」という複合的な意味内容を含んでいると感じるのである。

もともとニ格場所句を取らない状態変化動詞を語幹としたテアル文の場合、

1. 状態変化（語幹動詞の意味から生じる）
2. 位置変化（テアルの意味から生じる）

という二種類の変化が関与していることになる[39]。

---

[37] この位置変化に関する含意がどの程度強いものであるかは十分に明らかではない。しかし後で見るようなニ格場所句を伴うことができないA型テアル文との違いを示すためには、少なくとも場所が存在し始めた後で、対象がその場所に移動したと考えなければならいようである。

(ⅰ) ベランダにハーブが乾かしてある　　(=171)

(ⅱ) *寝室に窓が開けてある　　(=183)

[38]既に見たように、A型テアル文は場面描写性の状態文であるため、同じ場所を表す表現でも、デ格場所句は許容されない。

(ⅰ)ベランダでハーブを乾かした

(ⅱ) ??ベランダでハーブが乾かしてある

[39] これは Goldberg (1995)の言う「一義的経路の制約 (The Unique Path Constraint)」 (Goldberg 1995:82)に違反しているように見える。 ("*Sam kicked Bill black and blue out of the room."など。）しかし、Goldberg が意図したのは単文内で異なる経路（例えば状態変化と位置変化）について叙述することができないということであり、テアル文のように語幹動詞と補助動詞アルが融合した状況にはこの制約は働かないのかもしれない。実際、影山(1996)では、英語において状態変化

「Y に X が V てある」の形をした A 型テアル文において、状態変化と位置変化のどちらが時間的に先行するかは語彙の意味や世界の様相に依存しているものと思われる。先に位置変化が起こり、その後で状態変化が起こると思われる例もあれば、逆に状態変化が先に起こり、その後で位置変化が起こると思われる例もある。

[位置変化が先行]

(172) ベランダにハーブが乾かしてある。（ベランダに移動した後、その場所で乾く）

(173) 鍋に魚が煮てある。（鍋に移動した後、その場所で煮られる）

(174) 冷蔵庫にビールが冷やしてある。（冷蔵庫に移動した後、その場所で冷える）

(175) 食洗機の中に茶碗が洗ってある。
（食洗機の中に移動した後、その場所で洗われる）

[状態変化が先行]

(176) テーブルの上におにぎりが握ってある。（握られた後、テーブルに移動する）

(177) ひきだしにタオルが畳んである。（畳まれた後、ひきだしに移動する）

(178) 玄関の下駄箱の上にお弁当が作ってある。
（作られた後、玄関の下駄箱の上に移動する）

とりわけ、「作る」のような作成動詞の場合、その意味からして、作られる前に移動はできないので、状態変化（「発生、出現、誕生」）が先行するか、あるいは状態変化がその場所で起こるか（従って移動はない）、のどちらかである。書記動詞も一種の作成動詞であるため、このタイプに属する。

(179) 机の上にメモが書いてある。
（出現の場所 ≠ 存在の場所：移動がある）
① 誰かが（どこかで）メモを書いた
② メモが作られ、それが机の上に移動した
③ 現在、机の上にメモが存在する

と位置変化が同時に起こっている例（“Pebbles rolled smooth.”, “The chocolate melted out of the box.”）を先行研究から引用した上で、「概念構造における場所と状態の融合」を可能な理論的仕組みとして提案している（影山 1996:234: (49)）。しかし、この一義的経路の制約には、一つの要素が同時に別々の位置に移動することを禁じている部分もあり、その部分についてはテアル文も制約に従うようである。もともとニ格場所句を取る配置動詞の場合、補助動詞アルが別のニ格場所句を導入することはできないからである。

(ｉ) 誰かが壁にシールを貼った

(ⅱ) *天井に壁にシールが貼ってある

(180)　黒板にヘノヘノモヘジが書いてある。（出現の場所＝存在の場所：移動はない）
①　誰かがヘノヘノモヘジを書いた
②ヘノヘノモヘジが黒板に作られた（同時）
③現在、黒板にヘノヘノモヘジがある

次に、語幹動詞がもともとニ格場所句を取る動詞のケースを見てみよう。語幹動詞がニ格場所句を取る場合、その場所は位置変化の後の場所を表す。つまり語幹動詞の意味にすでに位置変化が示されており、状態変化は含意されない。従って、テアル文として具現した場合に、その意味の表示において、状態変化はなく、位置変化のみが示されることになる。

[位置変化のみ]
(181)　壁に絵がかけてある。
①誰かが壁に絵をかけた。
②絵が位置変化した。
③現在、壁に絵がある。
(182)　来賓の胸にリボンがつけてある。
①誰かが来賓の胸にリボンをつけた。
②リボンが位置変化した。
③現在、来賓の胸にリボンがある。

このように、状態変化や位置変化が関わっているA型テアル文では、それに関連した含意と我々が通常の世界の有様だと思っていることとの間にズレが生じた場合、意味解釈が困難になることが予想される。具体的には、もしテアル文が、当該の出来事に関して、不自然な含意を生む場合にはテアル文の許容度が落ちることになる。

(183)　*寝室に窓が開けてある
①誰かが窓を開けた。
②窓が状態変化および位置変化した。[不自然]
(184)　*車にヘッドライトが点けてある。
①誰かがヘッドライトを点けた。
②ヘッドライトが状態変化および位置変化した。[不自然]

これらの例を見るとわかるように、状態変化する対象がもともとニ格場所句で表された場所（物理的存在）の（分離不可能な）一部分となっているため、位置変化があったと

は考えられないのである。分離不可能な場所とその一部の要素があったときに、その要素が移動するという含意は生まれにくいのであろう。この制約は次のように言い換えても良い。

(185)　変化動詞テアル文における分離可能性条件：
「Y ニ X ガ Vc テアル」において、Y は変化後の X の新しい存在場所であるがゆえに、X は Y の分離不可能な部分であってはならない

同じ語幹動詞を用いても、もし当該の物体が当該の場所と分離可能であるのならば、この条件に違反していないことになり、テアル文は許容されることになる。

(186)　寝室に手提げ金庫の蓋が開けてある。
① 誰かが手提げ金庫の蓋を開けた。
② 手提げ金庫が状態変化および位置変化した。
③ 現在、寝室に手提げ金庫がある。

(187)　テントの中にアルコールランプがつけてある。
① 誰かがアルコールランプをつけた。
② アルコールランプが状態変化および位置変化した。
③ 現在、テントの中にアルコールランプがある。

手提げ金庫は寝室の分離不可能な一部分ではない。ゆえに移動可能であり、金庫の蓋を開けた後に金庫の蓋（金庫ごと）を寝室に移動させることが可能である。同様に、アルコールランプとテントは分離不可能な関係になく、外でアルコールランプをつけた後でテントの中に移動させることは十分可能である[40]。

最後に、上で見た作成動詞と対極にある消滅・抹消の動詞について、簡単に考察しておこう。作成の場合と正反対に、消滅・抹消の場合、消滅した後での移動は不可能であるため、論理的には移動した後に消滅するか、その場所で消滅するかの、いずれかのはずであるが、言語的には消滅・抹消の動詞の場合は、ニ格場所句がそもそも不可能であるようだ。まず次の例文を見てみよう。

[40] A 型テアル文の含意については、2.7 で A_1 型と A_2 型の融合に関連して、もう少し詳しく議論する。

(188)　*彼のアゴにヒゲが剃ってある。
(189)　*黒板に字が消してある。
(190)　*研究室にPCの電源が切ってある。
(191)　*庭に写真が焼いてある。

これらのテアル文は全て違和感がある。ただし、最初の二つの文の不自然さについては、その原因は先に述べた「変化動詞テアル文における分離可能性条件」によるものかもしれない[41]。

(192)　ヒゲはもともとアゴにあり、アゴとは分離不可能である。
(193)　字はもともと黒板にあり、黒板とは分離不可能である。

このことから、ニ格場所句の生起に関わる「分離不可能」という概念は「消去不可能」という意味ではないことがわかる。ヒゲは分離不可能ではあるが、消去可能だからである。

他方、後の二つのテアル文の不自然さには別の説明が必要である。(190)については、PCが研究室の分離不可能な一部分であると考えれば、同様に分離可能性条件の違反という説明が成り立つ。しかしノートPCのように移動可能なものであると考えれば、なぜ(190)が違和感を生むのか、別の説明が必要となる。次の例文を見てみよう。

(194)　研究室に角材が半分に切ってある

この文は極めて自然なA型テアル文である。違いは「切る」行為が作用する対象の存在の性質にあるようである。角材は半分になっても目で見て直接確認できるが、電源を切る場合の「電源が切れている」ことは間接的に（モニターに何も映っていない、あるいはPC本体の電源ランプが消えている、などの情報から）判断するものである。「電源」自体は抽象的な物であり、少なくとも直接的な視覚による認知は不可能である。しかしこのことがなぜニ格場所句との不整合を生むのか。

(195)　研究室のPCの電源が切ってある

[41] もう一つの可能性として、次のようなことが考えられる。ニ格場所句は変化の結果の状態の存在場所でなければならないのだが、これらの例文ではニ格場所句が「変化前」の場所（アゴと黒板）を指示しているため、不整合が起こっていると考えることができる。消滅・抹消の動詞の場合、変化後には対象物の存在そのものがなくなるため、変化後の場所が表現できないという事情がある。存在の含意については次節で述べる。

「角材を切る」ことは状態変化であるが、「電源を切る」ことは（電源の）消滅である。従って、同じ「切る」でも前者は状態変化動詞、後者は消滅・抹消動詞である。A 型テアル文において、語幹動詞が消滅・抹消の動詞である場合、ニ格場所句は出現できない、という補足的な規定として位置付けるしかないようである。一方、(196)は一層難しい状況を生んでいる。「写真を焼く」行為は、それが跡形もなく消え去るという事態を生むと考えれば消滅・抹消の現象であり、やはりニ格場所句との相性が悪い。しかしこの場合は、ニ格場所句を取り除いても相変わらずテアル文として違和感が残る[42]。

(196)　??写真が焼いてある

これは既に見た「場面描写性」に帰着されるべき問題であろう。「跡形もない」という状況であれば、もはや「写真」を眼前で描写することはできないため、A 型テアル文の特徴である場面描写性が失われたと考えることができる。

ニ格場所句の導入に関しては、更に別の要因が関わっていると思われる。次の例文を見てみよう。

(197)　??九州に男が殺してある。
(198)　??アメリカにハーブが乾かしてある。　（再掲）

「殺す」や「乾かす」が作り出す状態変化はニ格場所句の導入に即障害となる訳ではないことは、次の例文の整合性から明らかである。

(199)　浴室に男が殺してある。
(200)　ベランダにハーブが乾かしてある。　（再掲）

では一体なぜ(197)や(198)は不自然な A 型テアル文なのであろうか。これらの例文を観察すると、関与している事象について、その規模に比例して場所の大きさが妥当でなければならないことがわかる。言い換えれば、不自然に大きすぎる（広すぎる）場所は、当該の事象に関して違和感を生むようである。仮にこれを次のような形で表現してみよう。

[42] もちろん残骸が残っている状況では許容される文となろうが、その場合は状態変化の現象である。

(201)　ニ格場所句に関する語用論的制約
ニ格で表される場所は、当該の事象にとって適切な大きさ（広さ）でなくてはならない

一体、なぜこのような制約が存在するのだろうか。それはすでに見たA型テアル文の特徴である「場面描写性」に関係していると思われる。場面描写とは、話者がある場面（時間と空間）において、対象物を観察してその様態を述べるのであるから、当然のことながら話者もその場面の一部でなければならない。その場合、話者が自分の居る場所をどの程度の限定的なスケールで表現するのか。これは当該の変化事象の性質や、文脈に存在する他の場所との関係が関わっているようである。「男を殺す」という事象については、「浴室」は妥当な広さであるが、「九州」は「広すぎる」ということになる。言い換えれば、通常の場面で死体を観察する場所は、最小限の大きさで表現されなければならない。同様に、「ハーブを乾かす」という事象については、「アメリカ」というような国の規模の広さは妥当ではなく、「ベランダ」は適当であるということになる。一方、宇宙空間を旅し、月の表面に近づいた宇宙船から月の表面を観察している宇宙飛行士の発言として、次のようなテアル文は適当であろう。

(202)　月に幾つもの居住モジュールが作ってある

このような文脈においては「月」は決して広すぎる場所とは言えないのである。
　どういう種類の変化事象についてどの程度のスケールが適当かという問題は大変興味深い問題ではあるが、残念ながら本論ではこれ以上この問題を追究することはしない。

2.7 テアル文の含意

　本論では益岡(1987)の A_1 型と A_2 型の区別を撤廃し、A_2 型はニ格場所句を伴わない場合に生じる形式であると位置付けた。しかしこれまでの研究において、A_1 型と A_2 型を区別すべきであるという議論がある。それは主にこれら二つのタイプのテアル文が異なる含意を示すという事実に基づいたものである。この節では、果してこれらの含意の違いがA型テアル文を二つの下位類に帰属させる根拠となるかどうかを検討し、含意の違いは語彙の意味と場所句の有無などから総合的に導かれることを示し、両者が本質的に異なるタイプに属すると考える必要がないことを明らかにしたい。
　A_1 型と A_2 型の違いについて、杉村(1996)は次のような否定文にした時の含意の違いを指摘している。

(203)　A_1型

a.　本が置いてない。　⟹ 本がない。

b.　字が書いてない。　⟹ 字がない。

A_2型

c.　髪の毛が切ってない。⇏ 髪の毛がない。

d.　ケーキが食べてない。⇏ ケーキがない。　（杉村 1996:89）

（203a）（203b）は典型的な A_1型（存在表現テアル）の否定文だが、これらの文はガ格名詞句の指示対象の存在自体がないことを含意している。一方、（203c）（203d）は A_2型（結果状態テアル）の否定文であるが、この場合はガ格名詞の指示対象の存在がないことを含意してはおらず、状態変化が起こっていないことを表現するのみである。

同様に、肯定文においても含意の違いが見られる。A_1型ではガ格名詞の指示対象の存在が含意されるが、A_2型では含意されないことがある[43]。

(204)　A_1型

a.　本が置いてある　⟹ 本がある

b.　字が書いてある　⟹ 字がある

A_2型

c.　ひげがそってある。　⇏ ひげがある。

d.　黒板の字が消してある。⇏ 黒板の字がある。

これらの A_2型テアル文では、「ひげ」や「字」の存在はむしろないと考えるのが普通である。従って、A_2型テアル文では含意の有無が一定ではない 。

このような考察から、A_1型と A_2型を異なるテアル構文と位置付ける立場が生まれるのは自然なことであろう。しかし、状況は思ったより複雑である。含意の有無、そして含意の中身は語幹動詞の意味やニ格場所句の有無が絡み合って生じるものであるようだ。次の例を見てみよう。

(205)　テーブルに花が飾ってある

このテアル文からは二種類の含意が得られる。まず、テアル文の意味の中には動作が完了したことが含まれている。この場合、「誰かがテーブルに花を飾った」ということにな

[43] ここでは便宜上、X⟹Y で「X が Y を含意する」、X⇏Y で「X が Y を含意しない」ということを表す。

る。ここから「飾る」という動詞の意味をもとに、第一の含意として、位置変化が起こったことが推論できる。「飾る」の意味の中には「美しくまたは立派に見えるように置く（並べる）」という意味が含まれており[44]、配置動詞の一種である。これら二つが合わされば、「現在、テーブルに花がある」という含意が導かれるのは明らかであろう。

(206)　テーブルに花が飾ってある
　　誰かがテーブルに花を飾った
　　⟹花がテーブルに位置変化した
　　⟹現在、テーブルに花がある

すでに2.6節で述べたように、「飾る」のような配置動詞はもともとニ格場所句を選択する動詞であるが、例えば「乾かす」のような状態変化動詞の場合はニ格場所句が補助動詞アルによって導入され、その結果、状態変化と位置変化が同時に起こることになる。

(207)　ベランダにハーブが乾かしてある
　　誰かがハーブを乾かした
　　⟹ハーブが状態変化および位置変化した
　　⟹現在、ベランダにハーブがある

一方、ニ格場所句がない場合（つまり益岡(1987)の A_2 型である場合）には状態変化のみが含意されるため、存在するという含意はこの図式の中では得られない。

(208)　窓が開けてある
　　誰かが窓を開けた
　　⟹窓が状態変化した

この場合には、状態変化の内容が物の存在に影響を与えるようなもの（つまり物が生まれる、あるいは消え去るといった変化）ではないため、もともと窓が存在していたのであれば、変化後にも引き続き存在しているだろうというのは妥当な推論である。

しかし消滅・抹消の動詞の場合は事情が異なる。次の場合、もともと存在していた髭が無くなったため、現在では髭は存在しないという推論が得られるのである。

[44] 『国語大辞典』学習研究社、第13刷、1984年、より。

(209)　髭が剃ってある
　　誰かが髭を剃った
　　⟹髭が状態変化した（無くなった）

位置変化を含む動詞を基盤に作られたテアル文がニ格場所句を表面上備えていない場合には、含意について曖昧性が生まれる。

(210)　雑草が抜いてある
　　誰かが雑草を抜いた
　　⟹雑草が（どこかに）位置変化した
　　（発話の場所が位置変化の到着点である場合）⟹現在、ここに雑草がある
　　（発話の場所が位置変化の出発点である場合）⟹現在、ここに雑草がない

否定文の場合、A_1型であっても曖昧性が生じることがある。

(211)　テーブルに花が飾ってない
　　誰かがテーブルに花を飾ったということはない[45]
　　⟹花がテーブルに位置変化しなかった
　　（発話の場所がテーブルを含む場合）⟹現在、テーブルに花がない
　　（発話の場所がテーブルを含まない場合）⟹現在、ここに花がある

発話の場所がテーブルを含む場合、A 型が場面描写文の性格を持っている以上、話者はテーブルを見ながら花がそこにないことを認識することになる。逆に発話の場所がテーブルを含まない場合、例えば隣室に居る場合、話者は花を見ながら、それがテーブルまで位置変化を起こさなかったことを認識するのである。状態変化動詞のケースも同じである。

ニ格場所句を伴わない状態変化の場合には、否定文において曖昧性は生じない。これは通常の状態変化動詞であっても、消滅・抹消の動詞であっても同じである。

(212)　窓が開けてない
　　誰かが窓を開けたということはない
　　⟹窓が状態変化しなかった

[45]否定辞と存在数量詞（「誰か」）の間のスコープの問題を避け、文全体を否定するために、文末に「ということはない」をつけて表している。

この文については、肯定文同様、窓の存在が前提になっているため、それが部分的な属性変化をしなかったということから、恐らく何も変化が起こらなかった、つまり存在そのものは影響を受けなかった、と推論することができる。「(??) 窓が開けてない。もともと開いていたのだ」が極めて不自然であることから、通常は、窓が閉まっているという含意が得られるだろう。

消滅・抹消の動詞の場合も同様に曖昧性は生じないが、肯定文と逆に非存在が含意される。

(213)　髭が剃ってない
　　誰かが髭を剃ったということはない
　　⟹髭が状態変化しなかった（無くならなかった）

この結果、もともと存在していた髭が無くならなかったため、現在でも髭は存在しているという推論が得られる。

ここまでの観察を整理すると次のようにまとめられる。

表 3

肯定文			否定文		
A_1	テーブルに花が飾ってある	存在の含意	A_1	テーブルに花が飾ってない	視点によって曖昧
A_1’	ベランダにハーブが乾かしてある	存在の含意	A_1’	ベランダにハーブが乾かしてない	視点によって曖昧
A_2	窓が開けてある	存在の含意	A_2	窓が開けてない	間接的に存在の含意
A_2	髭が剃ってある	非存在の含意	A_2	髭が剃ってない	存在の含意

このような状況が意味していることは、対象物の存在に関わる含意に関して A_1 型と A_2 型が綺麗に分かれる訳ではなく、複数の要因が絡みあって、時には「存在する」という含意が得られ、時には「存在しない」という含意が得られるということである。従って、この種の含意の様相が、A_1 型と A_2 型の間に根本的な違いがあるという主張の強い根拠にはならない。

しかし重要なことは、ニ格場所句が現れたテアル文は、必ずその場所に対象物の存在を含意するということである。

(214)　庭の草が抜いてある。
(215)　庭に草が抜いてある。

（214）は意味的に曖昧であり、抜いた草が庭に存在する場面と、草取りした後の庭の、草のない場面の、両方を表わすことができる。しかし（215）のようにニ格を伴うと、抜いた草が庭のどこかに置いてある場面しか表せなくなり、草が無い場面を表わすことができない。つまり（215）はニ格場所句が表出することにより、義務的に存在表現テアル文の解釈が得られることになる。それゆえ、消滅・抹消の動詞で、対象物が存在しない場合はニ格場所句を出すことができないのである。

(216)　*彼のアゴにヒゲが剃ってある。　（再掲）
(217)　*黒板に字が消してある。　（再掲）

したがって、このニ格場所句は対象物の存在場所としての働きをしており、テアルがもたらす項であると主張する。A 型テアル文と存在文との関係は６章で詳述する。

2.8　B 型テアル文の特性

2.8.1　B 型テアル文の類型

ここまではA型テアル文の特徴を考察する際に比較対照的にB型テアル文の特徴を述べてきたが、この節では再度 B 型テアル文の特徴を検討する。すでに述べたように形式的な特徴、意味的な特徴から A 型テアル文が規定された。A 型とは認定されないテアル文は全て B 型と考えた[46]。その考え方は、あくまで A 型テアル文と B 型テアル文の違いをより鮮明に示すための便宜的な見方であった。実際には A 型テアル文と B 型テアル文が相補分布をなす訳ではなく、いくつかの特徴を示すテアル文だけが A 型テアル文としても認定されることになる。この問題については、4.6 で詳しく見ることにする。段階的に整理していくために、ここでは前述のような相補分布的な見方に沿って、B 型テアル文の形式的な特徴を見ていくことにする。

B 型テアル文はその形式から三つのパターンを含んでいる。

(218)　B 型テアル文の場合分け
　　[1]　pro#　（Y ニ）　X ヲ　Vc テアル
　　（ただし Vc は 2.3 で規定した変化動詞および書記動詞を表す）

[46] ただし受身＋テアル文は除く。

[2]　Z / pro# ガ（ψ）　V テアル

（ただし動詞 V は上記の Vc 以外の動詞であり、ψ は動詞 V の任意の内項である。ψ はガ格名詞句を含まない。ψ が存在しない場合は V が非能格自動詞の場合である。）

[3]　pro#　X ガ　V テアル

（ただし動詞 V は上記の Vc 以外の動詞である。）

これらのパターンを順次説明していこう。

まず[1]のパターンであるが、これは A 型テアル文に対応する B 型テアル文で対象の名詞句がヲ格で標示されている。

(219)　壁にピカソの絵をかけてある

(220)　窓を開けてある

４章で詳しく論じるが、B 型テアル文には必ず統語的な主語が存在する。本論文では、B 型テアル文における音形のない主語を pro#で表す。後述するように、B 型テアル文の音形を持たない主語は、通常の文脈指示のゼロ代名詞 pro とはいささか違った性質を備えている。

(221)　pro# 壁にピカソの絵をかけてある

(222)　pro# 窓を開けてある

B 型テアル文の場合、話者にとって動作主の意図が明確でなければならないので、主語は話者自身になることが多い。寺村(1984)は、テアル構文を「眼前の状態を客観的に描く場合」と「処置が自分自身の行為、または自分の差配による誰かの行為である場合」との二つに大きく分けている。前者は本論で言う A 型を指している。後者は、本論で言う B 型の「パーフェクト・テアル」であるが、その意味を「あることに対する準備という意図でするもの」と述べ、「自身（ないしその配下）という感じが強いと、その処置の対象が「〜ガ」ではなくて「〜ヲ」になる」と述べた。つまり、この種のテアル構文に人称制限があることを示唆している（寺村、同書:151）。人称制限に関しては 4.3.2 で詳しく述べる。また５章で述べるように、格付与規則との関わりにおいても B 型テアル文の目に見えない主語は特殊な振る舞いを示す。このような違いが存在するため、本論では pro# という表記を使うことにする。

次に[2]のパターンの B 型テアル文であるが、これは、動作主主語が音形を持って現れる場合と音形を持たずに pro#を主語に取る場合があるが、どちらの場合でもこれらのテ

アル文は、能動型（益岡 1987）・Possessive Resultative (Martin 1975)・Valence-Maintaining TEAR- Construction (Hasegawa 1996)などと呼ばれているものである。多くの研究者がこのパターンのB型テアル文は単純に文の形にアルが接続したものと捉えている。基本的に語幹動詞は非対格自動詞以外の動作動詞であれば、どのような動詞でもよく、上記の雛形のψの部分には様々な要素が現れる[47]。

(223)　ψ= NP ヲ
子供達がキャンプの支度をしてある。
(224)　ψ= NP ニ
部下が社長に相談してある。
(225)　ψ= NP カラ　NP ヲ
息子が海外からたくさんの資料を取り寄せてある。
(226)　ψ= NP ト
山田が事前に先方と交渉してある。
(227)　ψ= S ト
あいつがこの絵は本物だと保証してある。
(228)　ψ= なし（非能格自動詞）
俺は若い頃たくさん苦労してあるから、へっちゃらだ。

ただし、主語が顕在化しているこの種のテアル文を好まない母語話者も多い。例えば、Muraki(1986)は次の文を非文として挙げているが、筆者自身は文脈さえ整えれば許容可能であると考える。

---

[47] Miyagawa(1988)がテアル文において非対格自動詞が許容されないことを指摘している。
(ⅰ) *ドアが閉まってある。
(ⅱ) *野菜が腐ってある。
(ⅲ) *列車が到着してある。
このことと関連して、項の数が二つの動詞でも第一項が動作主でない場合は、やはりテアル文には使用できないことに注意したい。
(ⅳ) *台風が木をなぎ倒してある。
(ⅴ) *雨水が岩盤を侵食してある。
Takano(2011)が扱っている二重補部非対格構文（double complement unaccusative -DCU）も同様である。
(ⅵ) *山田さんに荷物が届いてある。
(ⅶ) *太郎に財布が戻ってある。
こうした事実は、B型テアル文に課せられた唯一の意味的な制約である「意図性」から説明できる。意図性は必ず動作主を要求するからである。

(229)　(*)お母さんが夕飯を作ってある。　（Muraki 1986:222）

動作主主語が音形を持たないときは、主語位置が pro#によって占められている。主語は顕在化しないが、解釈上は特定の人物が意図されており、上述のように弱い人称制限がかかっているため、話者と解釈される場合が多い。

(230)　pro# 夕飯の支度をしてある。
(231)　pro# 社長に相談してある。
(232)　pro# 海外からたくさんの資料を取り寄せてある。
(233)　pro# 事前に先方と交渉してある。
(234)　pro# この絵は本物だと保証してある。
(235)　pro# 若い頃たくさん苦労してある

[3]のパターンについては、少し慎重に見ていく必要がある。表面的には「X が V である」という形式をしているため、A 型テアル文と区別がつかない。

A 型テアル文
(236)　テーブルに花が飾ってある。
(237)　ベランダにハーブが乾かしてある。
(238)　窓が開けてある。
B 型テアル文
(239)　新しいネタが準備してある。
(240)　子供達にお年玉が渡してある。
(241)　電気屋に修理が依頼してある。
(242)　夫に保険金がかけてある。

本論の主張は、A 型テアル文は主語を持たない構文であり、B 型テアル文はたとえ対象の名詞句がガ格で標示されていても、音形のない主語（pro#）が存在するという点で、両者が異なる構造を持っているというものである。この考え方に従えば、上記の例文は次のように表示される。Δ は主語位置が空であることを意味する。

A 型テアル文
(243)　Δ テーブルに花が飾ってある。
(244)　Δ ベランダにハーブが乾かしてある。
(245)　Δ 窓が開けてある。

B 型テアル文

(246)　pro# 新しいネタが準備してある。

(247)　pro# 子供達にお年玉が渡してある。

(248)　pro# 電気屋に修理が依頼してある。

(249)　pro# 夫に保険金がかけてある。

益岡(1984, 1987)は B 型テアル文を機能的に定義しているわけだが、ある種の B 型テアル文は対象がヲ格・ガ格の交替を示すと述べており、ガ格型の B 型テアル文の存在を示している。その他の研究では、対象の名詞句がガ格で現れていれば自動的に intransitivizing resultative として一括りにまとめられている。これらの二つの立場の違いは、益岡(1987)が B 型と呼んだタイプのテアル文の中で対象の名詞句がガ格で表示されたタイプのテアル文を B 型と見るか、A 型（Intransitivizing Resultative）と見るか、の違いである。

表 4

	益岡(1987)など	Martin(1975)など
壁に絵がかけてある 窓が開けてある	A 型	Intransitivizing
壁に絵をかけてある 窓を開けてある	B 型	Non-intransitivizing
新しいネタを準備してある	B 型	Non-intransitivizing
新しいネタが準備してある	B 型	Intransitivizing

前述したように、益岡はこのように対象の名詞句がガ格で表示される B 型の文を「中間型」と呼んでいる。

(250)　そのお金がそっくり残してあるのよ。　（益岡 1987:231）

益岡は、このようなテアル文があることから、A_1 型から B_2 型までのテアル文の類型は「連続体」であるとしている。しかし、この種の B 型テアル文が対象の句をヲ格でもガ格でも言えるということは、必ずしも各々の型の境界線があいまいだということではない。本論では A 型 B 型の区別はファジーなものではなく、構造の異なる二つの類型があるという立場をとる。このタイプの B 型テアル文の主語性につては、4.3 節で、構造については 5 章で述べる。

2.8.2　B 型テアル文と意図性

ここまでの議論で考察してきた B 型テアル文の特徴を整理すると次のようになる。

(251)　B 型（パーフェクト）テアル文の特徴

- ある意図を持ってした行動の結果、その効力が存続している。
- 動作主をガ格、対象をヲ格で表すことができる。また、対象がガ格で現れる場合もあると考える。
- 話者にとって動作主の意図が明確でなければならないので、主語は話者自身になることが多い。
- 常に統語上の主語が存在するが、音形を持つ場合と持たない場合がある。

動作主の意図を語るためには、用語の整理が必要である。原沢(2005)は、「意志性」と「意図性」という概念に明確な区別を与えた。

(252)　意志性：目的意識があろうとなかろうと、ある意志でもってなされる行為
　　意図性：行為の結果が何らかの目的のために維持されているということ
（原沢 2005:22-23）

B 型テアル文に要求されているのは、この意味での意図性である。次の文を例にとって、この条件の意味を考えてみる。

(253)　制服をクリーニングに出してある。
(254)　お昼にたっぷり寝てあるから、今日は徹夜しても大丈夫だ。
(255)　母がもう書類を送ってあるはずです。

（253）は、「制服をクリーニングに出す」という行為の結果、「きれいな制服になる（あるいはなった）」という効果が発話時にも存続していることを表している。制服自体はクリーニング屋にあろうが自宅にあろうが関係ない。このニ格は到着点を表わしており、A 型テアル文に現れるニ格場所句とは異なる。（254）は非能格自動詞の例で、「寝る」という行為の結果は目に見えるものではないものの、十分に寝たことの効果が存続していることを示している。（255）はガ格の動作主が話者ではないが、この場合は「自分が母に頼んだ」あるいは「そのような手筈についてあらかじめ話し合ってある」など、話者にとって動作主の意図が明確であることを含意する。それは「はず」という表現で表される確信ではなく、たとえ（255）の文を不確かなものにして、「送ってあるかもしれない」としても、実際の行為があったかどうかは定かではなくなるが、その場合も動作主

の意図が分かっているという前提が必要となる。

動作主が顕在化しているB型テアル文は、母語話者の中でも判断に大きな揺れが存在するようである。例えば、前述したMuraki(1986)においては非文として掲載されている下記の例文は、恐らく他の研究者は無条件に正用とするであろう。

(256)　*お母さんが夕飯を作ってある。（Muraki 1986:222）　（再掲）

しかしこの文でも、例えば話者が母に頼んで夕飯を作ってもらい、第三者を招いているような文脈ではかなり自然な文になる。

(257)　母が夕食を作ってあります。どうぞ召し上がって行ってください。

三人称の名詞句がB型テアル文の主語になり得るかどうかは、話者の関与（involvement）がどの程度かによる。（257）で言えば、「お母さんが夕飯を作る」という行為は、通常なら日常の行為で、ことさら意図（目的意識）をもってする行為とは考えにくいため、すわりが悪くなっているのだと考えられる。つまり、B型テアル文で基本的に一人称の動作主、すなわち話者が主語になることが多いということの背景には、話者であれば自分の行為の意図が明確に分かるからという理由づけがあるからであろう。従って、三人称主語の場合は、話者がその意図をよく理解している場合にしか使えないのである。

このように、B型（パーフェクト）テアル文は、意図的な行為による効果が発話時において存続しているということを表すために使われる表現だと言える。したがって、文脈の中でいくらその意図を明確にしたとしても、次の例に見るように、本来非意図的な事象を表わす非対格自動詞を使うことはできない。

(258)　*空気が悪いので、窓が開いてある。
(259)　*見られると困るので、履歴が消えてある。

また次のように、非意図的な行為で、動作主項を持たない他動詞はB型（パーフェクト）テアル文では使用不可能である。

(260)　*会議室に書類を忘れてある。[48]

---

[48] A型テアル文では意図性は要求されないが、A型であっても通常は意志性が要求される。この例外となる例が、杉村(1996)によって指摘されている。
(ⅰ) あっ、あそこに卵が産んである。
(ⅱ) おや、弁当が忘れてある。

このようにB型テアル文には意図性が必須で、その意図の内容も話者にとって明確でなければならない。従って意図性が感じられない文脈を設定すれば、B型テアル文は不自然となることが予想される。

(261) a. あれ、窓が開けてある。誰が開けたのかなあ。
b. ??あれ、窓を開けてある。誰が開けたのかなあ。[49]

この場合（261b）は、B型テアル文であり、ガ格で現れるべき動作主の項が省略されている。省略された項については必ず文脈（談話）の中から先行詞を探さなければならない。それにはもちろん話者も含まれる。A型テアル文である（261a）の第一項は統語上現れない動作主であり、someoneという不定の解釈を許すが、B型テアル文である（261b）のゼロ主語である動作主は通常は「定」（definite）でなければならない。つまり、誰が何のためにしたのかわからない動作が問題となっているような文脈では、B型テアル文を用いることはできないのである。

すでに述べたように、B型テアル文において対象がガ格で現れる可能性があることを主張した。益岡はこのような文を「中間型」としており、「中間型」が存在することからテアル構文そのものを「連続体」としているが、本論ではB型テアル文において対象の名詞句にガ格が現れるかヲ格が現れるかは格の実現の問題と考え、B型テアル文は一つの独立した構造型として分析する。B型テアル文の構造と格付与については5章で詳しく述べる。

(iii) またガスがつけっ放しにしてある。　（杉村1996:79-81）
「〜ぱなしにする」や「〜ままにする」は、コーパスでも「てある」とよく共起していることが確認できる。
同様に次の例でも意志性が必要とは言えない。
(iv) 机の上に本がたくさん積んである。
この文は、意図的に整然と積まれた本の状態を表現する場合でも、片付いていない混沌とした状態を表現する場合でも自然である。後者の場合、意図性も意志性も欠落していると言える。
次の文でも同じことが言える。
(v)（わ、本に）コーヒーがこぼしてある。
図書館の本にコーヒーの染みを見つけた時の発話であれば、コーヒーの染みの存在を言うだけのテアルの文となり、意志的な行為であるという前提は必要なくなる。

[49] 周りの日本語母語話者に聞き取りをしてみたところ、関西出身の人は（261b）を許す場合が多かった。しかし中部地方や関東出身の人は嫌がる傾向が見られた。このような場面描写文であっても対象名詞句がヲ格で現れる文は、古典のコーパス（6章で詳述）でも室町時代や江戸前期で見られた。江戸時代前期までの資料は主に上方語の資料である。しかし江戸時代中期から後期は上方語であっても、場面描写文において対象の名詞句はガ格で現れる。したがって、関西であってもスタンダードではないと思われるが、関西では古い言い方が残っている可能性がある。

2.8.3　B 型テアル文とニ格場所句

2.6 節で見たように、A 型テアル文において、ニ格場所句は補助動詞アルによって導入される。これはもともとニ格場所句を取らない動詞であっても、A 型テアル文で用いることでニ格場所句が許されるという現象からの帰結であった。

(262)　壁に絵をかける。
(263)　壁に絵がかけてある。
vs.
(264)　*ベランダにハーブを乾かす。
(265)　ベランダにハーブが乾かしてある。
(266)　*冷蔵庫にビールを冷やす。
(267)　冷蔵庫にビールが冷やしてある。

しかしこのようなニ格場所句の導入は A 型テアル文に限定された現象ではなく、一部の B 型テアル文においても可能である。

(268)　ベランダにハーブを乾かしてある。
(269)　冷蔵庫にビールを冷やしてある。
(270)　テーブルにおにぎりを握ってある。

これらは語幹動詞が変化動詞であり、A 型との表面上の違いは対象の名詞句の格の違いだけである。形式的な定義上、対象の名詞句がガ格で表されたテアル文だけが A 型と分類される。

ニ格場所句の導入は、A 型テアル文の、眼前の存在を描写する場面描写性によって誘発されたものだけではなく、むしろ変化動詞がもたらす結果状態という特徴によって誘発されたものと考えるべきであろう。従って、一部の B 型テアル文、すなわち語幹動詞が変化動詞であるテアル文、においては、すでに 2.6 節で議論した意味論的・語用論的条件を満たす限りにおいて、ニ格場所句が補助動詞アルによって導入されると考える[50]。しかし、このことは本論で論じている主語性やアスペクトの違いに根ざした A 型テアル文と B 型テアル文の区別に対しての反論を提供するわけではない。

---

[50] 語幹動詞が変化動詞で結果状態が含意されれば、ニ格場所句の導入は 4.5 節で議論する受身＋テアルの構文においても可能になるはずである。
(ｉ)　ベランダにハーブが乾かされてある

2.9　まとめ

テアル構文には多くの先行研究があるが、一般的に受動型あるいは Intransitivised Resultative といわれる対象がガ格で現れるもの（A 型）と、動作主がガ格、対象がヲ格で現れる能動型（B 型）に大別され、受動型では「受動型」という言葉が示す通り、ガ格名詞句が主語になっているかのように扱われてきた[51]。本論では格標示による区分ではなく、統語的な主語が存在するかどうかという統語構造の違いから、テアル構文の類型を考えた。益岡(1987)がそれぞれを下位分類して４分類としたが、本論では構造の違いから 2 分類とすることを提案した。

(271)　A 型：統語上の主語が存在しない。動作主が抑制されて表出しない。
（Y ニ）　X ガ ～Vc テアル　（X＝対象、Vc は変化動詞）

(272)　B 型：統語上の主語が存在する。動作主は音形のない名詞句として主語位置に現れる場合と、音形を持つ名詞句として主語位置に現れる場合がある。）
（X ガ）　..... ～V テアル　（X＝動作主）

繰り返しになるが、この章では A 型テアル文と B 型テアル文の違いを明確にするために相補分布であるかのように論じたが、実際は A 型テアル文と B 型テアル文は格標示に関して相補分布ではない。このことについては４章で詳しく述べる。

テアル文の成立条件に関しては、主に A 型テアル文に関して動詞の語彙的アスペクトと語用論的条件から説明されているが、A 型テアル文に関しては基本的に Toratani(2007) のアプローチがそれまでの Miyagawa(1988, 1989)、Martin(1975)、Matsumoto(1990a)らの考察を包括的に取り入れたものであると評価できる。しかし B 型テアル文に関しては正しく説明されている文献が管見の限りでは見つからなかった。B 型テアル文は、4 章で触れる人称制限の問題を除いては、意図性の基準のみが関与していると考える。

A 型テアル文と B 型テアル文は、主語を持つかどうかという点で際立った対照を示すわけだが、この点については、４章で詳しく考察する。

[51] 井上(1978)、益岡 (1984)、Miyagawa (1988)、Matsumoto (1990)など。

第3章

コーパス調査

3.1　コーパス調査の方法

ここまでの議論で、A 型テアル文が特定の動作主が存在しない場面描写文で、B 型テアル文が動作主（多くは一人称）の意図的な行為の効果を表すパーフェクト相の文であることを述べた。それはコーパス調査の結果からも裏付けられる。

使用したコーパスは国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ と表記）である[52]。BCCWJ では 1 万 8 千件以上テアルの用例が検索された。うち、小説などの雑誌・書籍類を「純粋書き言葉」とし、話し言葉に近い書き言葉である yahoo ブログ・知恵袋と固い話し言葉である国会会議録の用例を「話し言葉風」とし、以下の件数をランダムに抽出した。このデータをもとにコーパスの分析をしている。抽出した数の違いは、それぞれの資料から検索されたテアル文の件数によって、大雑把に割合を合わせ、合計で 300 ずつになるようにした。このデータをもとにテアル文の使用実態を調査する。

表１　使用データの内訳

純粋書き言葉		話し言葉風	
出版雑誌	50	yahoo ブログ	100
出版書籍	100	yahoo 知恵袋	120
図書館書籍	100	国会会議録	80
ベストセラー	50		
合計	300	合計	300

3.2 コーパス調査の結果

コーパス調査の結果を見てまず言えることは、テアルに前接する動詞は典型的に A 型テアル文に使用される変化動詞が圧倒的に多いということである。表２に見られるように、変化動詞（書記動詞、配置動詞、状態変化動詞）だけで全体の 82%である。さらに、「受身＋テアル」（「書かれてある」など）もこのデータでは全て変化動詞なので、それも含めれば 85%になる。この数字から、テアル文は典型的に変化動詞と共起すると言え

[52] あらゆるジャンルの書き言葉から無作為にサンプルを抽出したデータで、約 1 億 430 万語のコーパスである。国立国語研究所コーパス開発センター編『現代日本語書き言葉均衡コーパス』https://chunagon.ninjal.ac.jp/

る。また、変化動詞の中でも書記動詞と配置動詞に偏っている。実に74%が書記動詞と配置動詞なのである[53]。書記動詞と配置動詞の場合、ニ格場所句と共起し、基本的に対象項がガ格で現れている。この事実は、テアル構文が基本的に「Y ニ X ガ V テアル」という構造であることを示唆する。つまり、益岡(1987)の A_1 型が典型であることを意味し、そこには存在文の項構造「Y ニ X ガ アル」との相似性が根底にあると思われる。

表2　語幹動詞の分布

動詞種類	純粋書き言葉	話し言葉風	合計
書記動詞	95	168	263(44%)
配置動詞	120	60	180 (30%)
状態変化動詞	25	24	49 (8%)
その他	48	43	91 (15%)
動詞の受身形	11	5	16 (3%)

※書記動詞：書く、記す、書きこむ、描くなど
※配置動詞：置く、積む、飾る、並べるなど
※状態変化動詞：開ける、消す、冷凍するなど
※その他：自動詞、使役動詞も含む他動詞の変化動詞以外のもの（受身動詞は別[54]）
※割合は小数点以下四捨五入

この事実は、テアル構文が基本的に「Y ニ X ガ V テアル」という構造であることを示唆する。つまり、益岡(1987)の A_1 型が典型であることを意味し、そこには存在文の項構造「Y ニ X ガ アル」との相似性が根底にあると思われる。

しかし、変化動詞と共起するだけでA型とは判定できない。変化動詞であっても、対象の名詞句がヲ格で現れていればそれはB型テアル文である（2.8.1 を参照されたい）。対象の名詞句の格標示を数字で表わしたものが次の表である。

---

[53] 「話し言葉風」では書記動詞の割合が高く、全体の56%に当たる。これは、使用したデータにインターネットのものが多く、インターネット上のコミュニケーションであるがゆえに、「～に～が書いてある」という表現が多いことなどを原因として考えることもできるが、実は完全に会話文をコーパスにした国立国語研究所の『名大会話コーパス』（以下会話コーパス）でも無作為に抽出した300件のテアル文の中で書記動詞が162件あり、全体の54%であった。さらに配置動詞と状態変化動詞を合わせると271件であり、これは全体の90%に当たる。実際の文を見ても明らかに一人称主語ではなく、場面描写文である場合が多く、書き言葉コーパスよりもさらにA型が典型であるという傾向が強く現れている。しかし、会話コーパスの用例は言い間違いや不完全な文も多く、格標示もない場合（無助詞や名詞句の省略（pro）が多い（特に「ヲ」は抽出した300件の用例の中には7件しか現れなかった）。したがって、会話コーパスの調査結果はこの節での分析には含めない。

[54] 受身動詞が前接するものに関しては4.5で後述する。

表3　対象名詞句の格標示

動詞種類	助詞	書き言葉	話し言葉風	合計
書記	ガ	27	30	57
	ヲ	8	5	13
	ハ	5	7	12
	ノ	0	2	2
	ト/テ	37	75	112
	取立て	4	5	9
	無助詞	1	5	6
	連体修飾	2	8	10
	pro	8	28	36
配置	ガ	60	20	80
	ヲ	9	10	19
	ハ	13	7	20
	ノ	2	0	2
	ト/テ	0	0	0
	取立て	4	2	6
	無助詞	0	1	1
	連体修飾	28	13	41
	pro	5	7	12
状態変化	ガ	5	6	11
	ヲ	0	3	3
	ハ	3	6	9
	ノ	0	0	0
	ト/テ	0	0	0
	取立て	4	0	4
	無助詞	1	0	1
	連体修飾	6	4	10
	pro	6	5	11
その他	ガ	4	3	7
	ヲ	16	8	24
	ハ	9	11	20
	ノ	0	1	1
	ト/テ	4	2	6
	取立て	3	3	6
	無助詞	0	3	3
	連体修飾	4	4	8
	pro	7	7	14

※「取立て」は「ハ」以外の取立て助詞（モ、シカ、マデ、ナラなど）
※ 「ト/テ」はヨウニ・ニツイテを含む
※ 「連体修飾」は対象名詞句が被連体修飾語となっているもの
※ 「pro」は、対象名詞句が前の文などにすでに出現しており、テアル文の中には音形のある代名詞が含まれていないもの。

まず、ガとヲが明示的に現れている文を見てみよう[55]。書記動詞では「ガ」が 57 で「ヲ」が 13 である。「ヲ」に対する「ガ」の比率は 4.4 倍となっている[56]。配置動詞では 4.2 倍である。状態変化動詞も「ガ」が「ヲ」の 3.7 倍である。概して変化動詞は圧倒的に「ガ」のほうが多い。つまり A 型テアル文として使用されていると言える。その他の動詞では逆に「ヲ」のほうが多く、「ガ」が 7 なのに対して「ヲ」が 24 であり、「ガ」に対する「ヲ」の比率が 3.4 倍となっていることと対照的である。つまり変化動詞の場合は A 型テアル文として使用されており、その他の動詞の場合は B 型テアル文である可能性が高い。実際の用例を見てみよう[57]。

［A 型］

(1) そこには店内でしていいこと、いけないことが書いてあった。（書籍）
(2) ここ長くて、経済学用語がたくさんありますけど、けっこう面白いことが書いてあります。（ブログ）
(3) 庭先には、ひろげたむしろ一杯に干魚がきれいに並べてあった。（書籍）
(4) 具体的に教えてください。メーカーと型番です。蛇口の付近にシールが貼ってありませんか？（ブログ）
(5) 髭がきれいに剃ってある横顔を、何と言っていいのか分からないまま見た。（書籍）

変化動詞で対象名詞句がガ格で現れている文は、基本的に現在のことであれ過去のことであれ、見たままの情景を描写する、場面描写文である。(4) のように疑問文であれば、

[55] 検索システム「中納言」による検索では、テアルの前後 20 文字が示される。その 20 文字の中に対象名詞句が現れていない場合があり、その場合は格標示が不明になる。したがって、前接動詞の種類別合計と格標示の表の動詞の種類別合計は必ずしも一致しない。しかし不明としたのは 5 件だけで、たいていは 20 語の中に対象名詞句が現れているか、明らかに pro であるかで、判別できた。
[56] 小数点第二位を四捨五入。以下比率の計算に関しては同様。
[57] この節の例文は基本的に BCCWJ からのものである。出典に関しては、「出版雑誌」のものは「（雑紙）」、「出版書籍」「図書館書籍」「ベストセラー」は「（書籍）」、「yahoo ブログ」は「（ブログ）」、「yahoo 知恵袋」は「（知恵袋）」、「国会会議録」は「（国会）」と表記する。

聞き手（読者）の眼前に起こりうる場面の様子を聞いている文になる。(5) は連体修飾節の中がテアル文になっているが、この場合も視覚によって確かめた場面描写である。

書記動詞でもう一つ特筆すべきは、ト節など、対象が名詞句ではなく節で現れるものの多さである。2.3.2 で示したように、この種の文も基本的に場面描写文で、特定の動作主の無い A 型である。

(6) 「グリズリー」と袋に書いてあった。（書籍）
(7) 特典はエコバックって書いてあったけど、何故かカードみたいなのをくれたので、… （ブログ）
(8) 「きれいな政治資金を広く集め、政治の公明、公正を期す」と書いてあるわけです。これがきれいな政治献金と言えますか。（国会）

これらは話者による行為の結果ではなく、視覚によって確認した場面を描写しているという意味では対象がガ格で表わされる A 型テアル文と何ら変わりがない（2.3.2 を参照されたい）。

次に対象がヲ格で現れる B 型の用例を見る。

［B 型］
(9) 表では、わかりやすいように代表値を書き込んであります。（書籍）
(10) ということは、このシロは新羅ということを、わざわざ書いてあったのである。それを不注意にも白い色と考えて疑わなかった。（ブログ）
(11) いちおうラベルをつけてあるけど、中身がすぐに分かるので、子供も自分で出し入れしてくれます。（書籍）
(12) したがって、伐採した後は木を植えてあります。（国会）
(13) プロパンやイソブタン等をミックスしてあり、冬などの低温時にも気化効率が良く火力の低下が少ないです。（知恵袋）

B 型の傾向としては、やはり話者が動作主となっている文が多いことが挙げられる。すでに 2.8.1 で触れたように、B 型テアル文には弱い人称制限がかかり、主語は一人称であることが非常に多い。(9)（11）がその例である。(10) は動作主が話者ではないが、「わざわざ」という副詞と共に使われている。この文以外にも対象がヲ格で現れる変化動詞の文に特徴的なのが、「故意に」「わざと」など、意図性に強く関わる副詞と共起する例が目立つことである。これらの副詞と共起すれば必ず B 型というわけではないが、B 型テアル文の場合は動作に視点があり、準備的意図のある動作の効果を述べているので、このような副詞と共起しやすいと言えるだろう。(12) は話者が実際の動作主ではないが、

国会での発言なので、話者が動作主の代弁者として話していると考えられる。(13) のように商品を紹介する文では対象がガ格で現れるもののほうが多いが、消費者の立場で書くか、作り手側に寄った気持ちで書くかでA型かB型の違いが出る。つまり、(13) の場合、効果を想定して「ミックスした」ということに重きを置き、その効果を述べており、作り手側が宣伝するのと同じように伝えている。しかし、同様に商品を紹介する文脈でも、A型テアル文のものは、消費者が視覚あるいは体験によって得た知識や感想を述べるものである。

(14)　布ではありませんが、巻き付けた時にずれにくいエンボス加工がしてあり、手触りはキャンバスと同等ですしね。(知恵袋)

このように、実際の使用では変化動詞の場合、対象名詞句の格標示が「ガ」で現れる文と「ヲ」で現れる文とでニュアンスの違いが出ており、格標示によってA型とB型を使い分けている様子が窺える。

すでに見たように、変化動詞であってもA型とB型の文が存在するが、変化動詞の場合は対象名詞句の格標示の「ガ」と「ヲ」だけを比べると、「ガ」が圧倒的に多かった。変化動詞全体で「ヲ」に対する「ガ」の割合は4.1倍であった。これに対してその他の動詞では、逆に「ヲ」のほうが多く、「ガ」に対する「ヲ」の比率が3.4倍となっている。これはその他動詞[58]が使われた場合は基本的にB型テアル文であるとする本論の主張を裏付けるものとなる。まず対象名詞句がヲ格で現れる例から見てみよう。

(15)　緊急連絡にそなえてTATFの全員にポケットベルを持たせてある。(雑誌)
(16)　事前にＦＣ契約の破棄を通告する内容証明を送ってあるんだ。(書籍)
(17)　Ｎさんはその子供を同居人として役場にとどけてあるのだけれども、昔のことを決して語ろうとしない。(書籍)
(18)　一昨日に作成を頼んであったので作ってあるとは思っていたんですが…
(ブログ)
(19)　一度は認めるという方向で考えておりますということを先方に申し述べてあります。(国会)

(15) (16) (18) (19) は明らかに話者が主語になっている。また、「緊急時にそなえて」「事前に」など、準備的意図を明確に表す表現と共起しており、過去の動作の効果が今

[58] 本論では２章で述べた成立条件から、テアル文において他動詞の変化動詞が特別な振る舞いをするという意味で、それ以外の動詞、つまり典型的にB型テアル文として現れる動詞を「その他動詞」と呼ぶ。

も存続していることを示す B 型の特徴が強く現れている。(17) は主語が明示的に表れている例である。

これら B 型の文に共通しているのは、場面描写文ではないということである。視覚をはじめとする感覚によって得たある場面の状況を描写しているのではなく、ある動作が終わったこと、そしてその効果が存続していることを表している。そしてそれは対象の名詞句がガ格で表れていても同じなのである。用例は少ないが、その他動詞で対象名詞句がガ格のものもある。

(20)　見抜かれた場合の手が用意してあっただけです。(書籍)
(21)　水、木、金、土と彼女のもとにくる旦那が曜日できめてある。(書籍)
(22)　ちなみに、実際住んでいるところと住民登録がしてあるところとはまた別物です。(知恵袋)

これらはガ格で現れているが、何れも場面描写文とは言いにくい。(20) の「手が用意してあった」というのは、五感によってわかることではないし、(21) (22) もその効果のことを言っているのであり、場面を描写しているのではない。したがって、その他動詞の場合は対象名詞句がガ格で現れてもヲ格で現れても B 型テアル文であると言える。この点は 2.8.1 の[3]のパターンとしてすでに議論してある。

このように、コーパス調査の結果からも、変化動詞の場合は概ねガとヲで A 型・B 型が区別されており、その他動詞の場合はガで現れてもヲで現れても基本的に B 型であるという状況が見えてくる。しかし、もちろん実際の用例では、ガとヲが明示的に現れている例ばかりではない。テアル文の対象名詞句が前文あるいは同じ文の別の節（従属節など）に出ていれば、テアル文自体には対象の名詞句が音形を持って現れず、文脈指示の pro となっている場合がある。これは名詞句の省略とも言える文なので、「話し言葉風」の資料に多く見られる傾向がある。

(23)　窓口に金額がきちんと書き出してあります。また他の神社でも書き出してありました。(知恵袋)
(24)　十条の規定があって、長々と書いてある。(国会)
(25)　「日本工業新聞」という業界紙ですが、お手元にも差し上げてありますが、ここに「通産省は原子力発電所の使用済み燃料をシステム的…(国会)

(23) (24) は変化動詞で、対象名詞句が pro になっている。(23) の下線部の「書きだしてある」の対象は pro であり、前文の「金額」が先行詞になっている。(24) の対象の pro は前の節の「十条の規定」であろう。どちらも pro なので格標示はないが、隠れた動

作主は不特定の「誰か」であり、問題とされておらず、文の機能としても場面描写文である。したがって、A 型の文の特徴が現れていると言える。一方（25）はその他動詞である。この場合の pro はその「業界紙」を指しているが、謙譲語を使っていることからもわかるように、話者が動作主になっている。したがって、典型的に一人称主語が存在する B 型の文であるということがわかる。pro の場合格標示では判定できないが、やはり変化動詞の場合は多くが場面描写文で A 型の文になっており、その他動詞の文は B 型の文になっていることがわかる。変化動詞では場面描写文、その他動詞では話者による行為の結果を表わしているという傾向は、「書き言葉風」の資料でも同様である。

また、対象名詞句の格標示が「ハ」になっていて、当該名詞句が主題化されている場合がある。主題化される前の格標示が「ガ」であったか「ヲ」であったかは判定できない。コーパスで収集した文例の中で、対象名詞句が主題化されている文を見てみると、ほとんどの文について、場面描写文の特性は備えておらず、話者が動作主主語になっており、B 型の文と判定できる。

(26)　「あなたの」って・・・。こちらの名前は既に教えてあるのに！普通は〇〇様だろっ！（知恵袋）

(27)　エレキを上げて、枝を引っ張りながら近付いて観察。#サイト用に魚探は切ってあるので正確にはわからなかったものの水深は３ｍぐらい。（ブログ）

（26）では語幹動詞がその他動詞で、明らかに一人称の主語が動作主となっている。語幹動詞が変化動詞であっても、（27）のように、話者が主語になっているものが非常に多い。語幹動詞のタイプにかかわらず、対象名詞句が「ハ」で表わされているテアル文はほとんど B 型テアル文である。

例外的には場面描写的な A 型テアル文と思われるものもある。

(28)　荷物に貼られているシールには、送料は書いてありませんよね？（知恵袋）

これは明らかに話者の動作ではなく、場面描写的な文といえる。聞き手（読み手）の眼前の場面について質問しているのである。しかしこのような例は稀である。少なくとも「話し言葉風」の用例では、対象名詞句が「ハ」で現れて、明らかに場面描写的な A 型テアル文であると思われる例はこの一件だけであった[59]。

[59] 前述したように、B 型テアル文には弱い人称制限がある。この人称制限は、Nonreportive な文（非一人称小説など）ではかからない（Kuroda 1973、工藤 1995 など）。したがって、「純粋書き言葉」のデータでは三人称主語の文がいくつか見られるが、それも物語の登場人物が主語になっており、B 型の文である。

2.4.1 で述べたように、三尾(1948)の「現象文」や仁田(1986)の「現象描写文」の定義では、「無題文」であることが条件として含まれていた。「ハ」によって主題化されていれば有題文であり、それはもはや「現象描写文」ではないという考え方であった。しかし丹羽(1988a)が主張するように、有題文であっても「場面描写文」の文はありうるというのが本論の立場であった。

(29)　無題：　床の間に花が飾ってある。（現前状況の描写）
　　床の間に花が飾ってあった。（過去の出来事の報道）
　　有題：　床の間には花が飾ってある。（現前状況の描写）
　　床の間には花が飾ってあった。（過去の出来事の報道）　（再掲）

(29) の有題文はいずれも場所句が主題化されている例だが、場所句に比べ、対象名詞句が主題化されると場面描写文とは言いにくい場合が多い。

(30)　a.　花は床の間に飾ってある。
　　b.　床の間に花は飾ってある。

(29) の有題文が「その部屋に何がありますか？（ありましたか？）」という質問の答えとして自然な文であるのに対し、(30) は不自然であろう。(30) が自然に使える状況は、おそらく話者が自分自身でした行為について語っている場合である[60]。

このように、対象名詞句が「ハ」で表わされているテアル文はＢ型である場合が非常に多い。このような文に使われている語幹動詞を見ると、やはり変化動詞よりもその他動詞が割合として多いことは注目に値する。変化動詞で対象名詞句が「ハ」で表わされ

（ｉ）長男信康は既に切腹させてあり、次男秀康、三男秀忠は若くとても徳川家を切り回してはいけない。　（書籍）
（ii）N さんはその子供を同居人として役場に届けてあるのだけど、　（書籍）
（ｉ）の場合、切腹させた動作主主語は徳川家康であり、話者（筆者）ではないが、切腹させた（あるいは死体を見ている）場面を描写しているのではなく、典型的にその行為の効果のことを言っているＢ型の文である。（ii）は３人称主語が現れている文であるが、このコーパスで３人称主語が明示的に現れているのはこの１件しかない。このことからも、Ｂ型の文に人称制限が働くことが裏付けられる。

[60] 他のものとの比較を前提とする「対照」を表わす「ハ」であれば場面描写文としても可能である。
(ｉ)　（人形は玄関に飾ってあるけれど、）花は床の間に飾ってある。
主題のハはその名詞句が総称名詞か、旧情報であることを表す文脈指示の名詞句であるかでなければならないという制約があるが、対照のハにはそのような制約がない。久野(1973)などを参照のこと。

ているテアル文が全体の8%なのに対し、その他動詞では21%である。語幹動詞がその他動詞であるテアル文はB型であることから当然の帰結であろう。しかし対象名詞句が「ハ」で表わされているテアル文にB型が多いという事実は、主題文であっても場面描写性を持つ可能性があるとした 2.4.1 の結論（それは丹羽(1988a)の主張を受け入れたものであったが）が予測する事態とは少しばかり違っている。コーパス資料から得られた実際の使用を見る限りにおいては、場面描写文の最も基本的な形は無題文であるという可能性を示唆している。

3.3 まとめ

本論では、語幹動詞が変化動詞の場合、対象がガ格で現れているテアル文を場面描写文であるA型、ヲ格で現れているものを動作主の行為が完了し、かつその行為の効果が残存するパーフェクトのB型とした。語幹動詞がその他の動詞である場合は、格標示がガであってもヲであっても等しくパーフェクトを表すB型であると分析した。コーパス調査の結果からも、この考え方は裏付けられた。変化動詞ではA型となる対象がガ格で現れる文がヲ格で現れるB型テアル文より圧倒的に多く、文の機能に焦点を当てて比べた場合でも、対象がヲ格のもの以外は場面描写文であるケースが非常に多かった。対象がガ格で現われる文はもちろんのこと、内項が卜節である場合や pro として現れているものでも、ほとんどが場面描写文であった。このことは、語幹動詞の型とテアル文の型が次のような対応を示すことが基本であることを示唆している。

(31)　変化動詞　⇄　A型テアル文　（場面描写文）
　　その他動詞　⇄　B型テアル文　（行為の効果）

すでに繰り返し述べているように、実際にはこのような語幹動詞とテアル文の型の対応は厳密でなく、語幹動詞が変化動詞であっても、対象の名詞句がヲ格で現れていれば、B型テアル文となる[61]。

コーパスで得られた資料においては、こうした語幹動詞が変化動詞で対象がヲ格で表示されている B 型テアル文の多くが一人称主語で、「わざと」など故意であることを強調するような副詞と共起し、準備的意図を強く出すという特徴を持っていることが見て取れた。2章で述べたように、変化動詞の場合は対象名詞句の格標示によってA型テアル文とB型テアル文を使い分けている様子も窺えた。

一方で、基本的にB型テアル文として現れるその他動詞の場合、まず対象名詞句はガよりもヲでマークされる場合が多く、ガ格であっても文の機能としては場面描写文では

[61]変化動詞を用いたテアル文で対象の項がガ格で現れる可能性については4.6で詳しく述べる。

なくパーフェクトと解される文が非常に多かった[62]。

さらに、本来であれば様々な動詞が使用される可能性のあるテアル文であるが、実際の使用を見る限り、書記動詞と配置動詞にかなり偏っており、存在文との関わりの強い存在表現テアル文（益岡 1987 の A_1 型）が典型であることが示唆されている[63]。2 章で述べた A 型テアル文と B 型テアル文の特徴の違いは、コーパス調査の結果からも支持されたと考えられる。

---

[62]語幹動詞がその他動詞で対象がガ格で表されたテアル文の中には、次のような場面描写文的な性格を持っていると思われる例も僅かながら見られた。

(ｉ) 店内に貼られた短冊を見ると、渋い地酒が取り揃えてあって、日本酒愛好家は思わずニンマリとなる。（書籍）

これは２章で触れたように、強制（coercion）によって、本来変化動詞でない動詞が他の要素によって変化動詞として再認識された結果、場面描写の A 型テアル文として用いられた結果である。

[63]存在文とテアル文の関わりについては 6 章で詳しく考察する。

第４章

テアル構文の主語

4.1　主語性の問題

4.1.1　日本語における主語

日本語における主語とは何か。ゼロ代名詞が頻繁に現れ、語順も比較的自由な日本語において、主語というものをどのように捉えたら良いのか。「主語廃止論」が三上(1960、1963 など)によって唱えられてから半世紀が過ぎているが、日本語に主語という概念は必要なのか、不要なのかという根本的な疑問には多くの異なった考え方が存在する。三上はハとガの機能について、多くの興味深い例を挙げ、ハとガが示しているのが必ずしも主語とは言えないことを的確に指摘した。このような議論が起こったのは、それまでの国語学でしばしばハとガが等しく主語のマーカーとみなされ、区別がされない場合があったことや、用語も整理されていないことなど、混乱が見られることに由来している。しかし、松下(1928)はすでに主語と主格の違いを明確に示していた。「花が咲く」「月が出る」の「花が」「月が」は主格であり主語であることを示し、「花咲く」「月出る」の「花」「月」は主語ではあるが主格ではないと述べている（松下 1928:471）。さらに、主語と題目（主題）の違いも明示している。主語と主格の違い、主語と主題の違い、ハとガの機能の違いを正しく把握すれば、文法を研究する上で主語の概念を想定するのは有効なことであると考える。三上自身も日本語に主語の概念がないと言っているわけではなく、松下(1928)の考えを正しいとした上で、主語の概念を正しく捉え、浸透させるのは困難であるため、「主語」という用語を変えたほうがいいと提案しているのである。三上(1959)は、主題とは異なる概念の主体があり、主体は動作、性質、資格の担い手であるとし、それは「仕手（doer）」と「有手（be-er）」であると述べた。主格「X ガ」として現れる有情者や非情者が仕手であり、その主格が構文上ある特別な役割を果たすときにその役割を主語と呼ぶと述べている（三上 1959:13-14）。柴谷(1978)は主語を第一次的な文法範疇として、それには一義的な定義は与えられず、「範疇の性格を文法的機能や特徴を基にして明らかにする」（柴谷 1978:184）ものであると述べている。つまり、主語とは何か、という問いの答えを出すのではなく、何をもって主語とするかという接近法である。そして主語の文法的特徴付けを、「(a)尊敬語化現象を誘発する、(b)再帰代名詞化現象を誘発する、(c)特定の述語を持つ文以外で、題目化されない文では主格助詞「が」を伴う、そして(d)存在文ではない文では基本語順において文頭に来る」（柴谷 1978:186）と定め

た。(c) (d)はテアル構文には当てはまらないので[64]、本論では(a)(b)のみを、主語性を表わす特徴として認定し、テアル構文の主語について考察する[65]。

「～ガ V テアル」という形で現れるテアル文が一般的に受動型（あるいは intransitivizing resultative など）と呼ばれているように（益岡 1984、鈴木 2000、原沢 2002、Martin 1975、Matsumoto 1990a,b、Miyagawa 1989、Sugita 2009 など）、テアル文のガ格名詞句は受動文における主語と同等のものであるかのように見られがちである。

(1)　窓が開けてある。
(2)　窓が開けられた。

確かに意味的に目的語であり対象の意味役割を持つ名詞句がガ格で現れるという点ではテアル文と受動文は極めて似通っている。しかし、受動文のガ格名詞句と違い、受動型テアル構文のガ格名詞句は主語性を持たないという特徴が見られることが川崎(1983)、Muraki(1986) 、宇田(1996)の再帰代名詞や尊敬語の観察によって指摘されている[66]。また、Miyagawa and Babyonishev(2004)も、「さえ」や「だけ」などのスコープの観察から、対象として現れるガ格名詞句が EPP により TP の指定部まで上がっておらず中間的投射位置に付加していると主張している。4.1 では再帰代名詞と尊敬語の振る舞いを通して、テアル構文におけるガ格名詞句の主語性について論じる。4.2 では　（受動型）と言われる A 型テアル文の主語（実際には主語が無いと主張する）の性質について、4.3 では（能動型）と言われる B 型テアル文の主語についてさらに詳しく論じる。また、4.4 では従来の研究ではあまり深く考察されていない「受身＋テアル」型について、とりわけその主語性に焦点をあて、通常のテアル文との比較分析を行う。

4.1.2　再帰代名詞「自分」とテアル構文

日本語の再帰代名詞「自分」は一般的に主語指向性（Subject Orientation）があるとされ（Kuroda 1965、McCawley 1976、Oyakawa 1973、久野 1973 など）、統語論では主語性をテストするためにしばしば使用される。

---

[64] テアル構文では A 型が「(に) ～が」の格配列を示し、まさに柴谷が意図した「特定の述語」の型に合致するため、(c) を用いることはできない。同様に、A 型が存在文と類似した特徴を持つと思われるため、(d)の基準を用いることはできない。

[65] Takano (2011) 、Aoyagi (2015) などが指摘しているように、実際にはこれら二つの統語操作は異なる結果をもたらす場合がある。この点については後述する。

[66] 2.2 の注で述べたように、川崎(1983)、Muraki (1986) 宇田(1996)の議論は、実際には本論で言う B 型テアル文のガ格名詞句についてなされていることがほとんどである。

(3)　　太郎が花子を自分の部屋でなぐった　（自分＝太郎、自分≠花子）
(4)　　太郎が父親に自分の部屋で叱られた　（自分＝太郎、自分≠父親）
(5)　　太郎が自分の部屋で亡くなった　（自分＝太郎）

（3）の文において、「自分の部屋」は、動作主であり主語である太郎の部屋を指し、花子の部屋という解釈はない。同様に、受動文である（4）でも、「自分の部屋」は動作主である父親ではなく、表層の主語である太郎の部屋という解釈になる。また(5)においては非対格自動詞の主語（対象）が「自分」の先行詞になっている。つまり、意味役割に関係なく、「自分」の先行詞は常に（表層の）主語であると言える。

Muraki(1986)は、この再帰代名詞の性質を使用して、テアル文におけるガ格名詞句の主語性について考察している。

(6)　　ジョンが自分の家に呼んである。　(自分≠ジョン)　　(Muraki 1986:228)

Muraki が指摘しているように、この文では「自分」が「ジョン」を指すという解釈は不可能である。この文において「自分」の先行詞が正しく解釈される余地があるとすれば、それはこの文には現れていない「呼ぶ」という語幹動詞の隠れた動作主である。この事実は同時にこの文が B 型テアル文であることを示している。隠れた動作主が統語的な現象において何らかの効果を持つのは B 型テアル文の特徴である。

この初期の Muraki(1986)の観察を出発点として、テアル文の類型ごとに、そこに現れるガ格名詞句の性質について再帰代名詞を使ってテストしてみよう。

A 型〈存在表現テアル文〉
(7)　　a. *椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛り付けてある。
　　b. *押し入れに弟が自分$_i$の布団でくるんである。
　　c. *魔女$_i$が洞窟に自分$_i$の魔法で封印してある。
A 型〈結果状態テアル文〉
(8)　　a. *太郎$_i$が自分$_i$のナイフで殺してある。
　　b. *弟$_i$が自分$_i$の部屋で倒してある。
　　c. *アナ$_i$が自分$_i$のお城の前で石化してある。
B 型〈パーフェクト・テアル文〉
(9)　　a. 部長$_i$が自分$_i$の荷物を運んである。
　　b. 太郎$_i$がすでに自分$_i$の履歴書を会社に送ってある。
　　c. 花子$_i$がだいぶ前に自分$_i$のミスを報告してある。

意外にも、⑺ 及び ⑻ において「自分」の先行詞を文中の唯一のガ格名詞句であるとする解釈が得られない。形式だけを見れば、テアル文は非対格自動詞や直接受動文との類似性が目を引くところであり、同様の性質がテアル文にもあると推論することはごく自然なことである。しかし、非対格自動詞や直接受動文においてはガ格名詞句が「自分」の先行詞となれることに注意したい。

非対格自動詞

(10) セットの中のベッドに太郎が$_i$自分$_i$の出番直前に倒れ込んだ。

(11) 弟$_i$が自分$_i$の部屋で倒れた。

(12) アナ$_i$が自分$_i$のお城の前で石化した。

直接受動文

(13) 椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛り付けられた。

(14) 弟$_i$が自分$_i$の布団でくるまれた。

(15) 太郎$_i$が自分$_i$のナイフで殺された。

⑺ ⑻ の例文が示すように、テアル文におけるガ格名詞句は「自分」の先行詞とはなれず、この点で主語の特性を持っていないと判断できる。

一方、⑼ の「自分」が問題なくガ格名詞句を指せることからわかるように、動作主が表出している B 型パーフェクト・テアル文においては、その動作主のガ格名詞句は統語上の主語であると結論づけてよいだろう。また、B 型の場合、2.8 で触れたように、たとえ音形がなくても動作主が存在する。本稿ではその音形を持たない動作主（それは同時に統語的な主語として働く）を便宜上 pro# と表記する（pro#に課せられた特別な意味（人称制限）については 4.3.2 節で詳しく述べる）。したがって、⑼ の動作主を pro# で置き換えた場合、「自分」は pro#を先行詞として取ることになり、結果として話者を指す解釈が得られる。

(9’) a. pro#$_i$ 自分$_i$の荷物を運んである。

b. pro#$_i$ すでに自分$_i$の履歴書を会社に送ってある。

c. pro#$_i$ だいぶ前に自分$_i$のミスを報告してある。

ここまでの考察から、A 型テアル文におけるガ格名詞句が主語性を持たないこと、B 型テアル文における動作主のガ格名詞句が主語性を持っていることが明らかになったわけだが、もう一つ心配しなければならない要素がある。すでに述べたようにテアル文では補助動詞アルが場所句（ニ格）と対象（ガ格）を項として取る。このうちガ格名詞句については主語性がないことが示されたが、残るニ格名詞句は主語性に関してどのよう

な性質を持っているだろうか。この問題は4.4節で詳しく議論する。

4.1.3 尊敬語とテアル構文

主語性をテストするもう一つの方法として、尊敬語の適用可能性がよく知られている。一般的に尊敬語は主語指向性を持つとされ、主語への敬意を表す。

(16) 山田先生がロシア語をお話になる。
(17) 山田先生にロシア語がおできになることをご存じですか?
(18) * 太郎に山田先生がおわかりになる。

（16）は動作動詞「話す」の尊敬語表現で、ガ格主語への敬意を表している。（17）は状態動詞「できる」の尊敬語表現で、与格主語型あるいは能格型とも呼ばれる格配列である。この場合はニ格の主語への敬意が表現されている。（18）もニ格を意味上の主語とする状態動詞の例だが、ここでは「先生」がガ格名詞句であるため、「山田先生」への敬意を表す文としては非文である。「太郎」は語用論的に尊敬の対象とはならない。つまり、尊敬語の可否を基準とした場合、主格対格型の場合はガ格名詞句が主語であり、能格型の場合はニ格名詞句が主語である。尊敬語によって表される敬意は常に主語に向けられる[67]。

テアル文はこの尊敬語の適用においても、幾分予想外な現れ方をする。Muraki(1986)はテアル構文におけるガ格名詞句が敬意の対象にならないことを指摘し、この点でもガ格名詞句が主語性を欠いていると主張した。

(19) a. 会長が呼んである。
b. 会長が [v 呼んでおありになる]。 （Muraki 1986:230）

（19b）は尊敬語の文として解釈可能だが、その場合の敬意の対象はガ格名詞句ではなく、「パーティーのホスト」に向けられていることを指摘した。つまり、隠れた動作主が尊敬語の標的になっている場合は解釈可能ということである。Muraki はこの文を受動型の

---

[67] Kuroda(1992)は日本語の基本語順を以下のように提案した。
(ｉ) Canonical Sentence Patterns
Ⅰ Transitive sentence pattern: NP ga NP o
Ⅱ Ergative sentence pattern: NP ni NP ga
Ⅲ Intransitive sentence pattern: NP ga （Kuroda1992: 226）
これによると、「～ニ～ガ」のパターンを持つ状態述語は能格型となり、ニ格名詞句は能格の主語ということになる。格標示については５章で、状態述語については６章で詳しく述べる。

テアル文として扱っているが、隠れた動作主が統語的に働いているという事実から、対象がガ格で現れているものの、動作主主語のあるB型のパーフェクト・テアル文であると言える。また、本論文のA型テアル文の定義からも外れる（2.3を参照）。次のように言い換えても表現している事態は変わらない。

(20)　社長が会長を呼んでおありになります。

ここでは動作主が顕在化している。この場合、敬意の対象は「会長」ではなく最初のガ格名詞句、すなわち「社長」になる。次の文が非文であることからもそのことが窺える。

(21)　*山田が会長を呼んでおありになります。

再帰代名詞と同様、尊敬語の場合も、本動詞アルを使った所有文であればニ格名詞句への敬意を表現することができる。

(22)　山田先生にお子さんがおありになる。

しかし、テアル文の場合は、ニ格の名詞句が現れる存在表現テアル文において、ニ格名詞句もガ格名詞句もいずれも、ニ格名詞句のない結果状態テアル文においては、ガ格名詞句が、尊敬語の標的となり得ないことに注目すべきである。

A型〈存在表現テアル文〉[68]

(23)　a. *山田先生にリボンがつけておありになる。

---

[68]母語話者によっては、存在表現テアル文において、ニ格名詞句に対する尊敬語化を許容する傾向があるようである。しかしそれが本当に主語によって誘発された尊敬語化であるかどうか疑わしい。何故なら、次のような例においても、当該の母語話者は尊敬語化を許容するからである。

(ⅰ) 山田先生の胸にリボンがつけておありになる。
(ⅱ) 先生の首にネックレスがかけておありになる。
(ⅲ) 社長のお宅の玄関に立派な門松が飾っておありだ。

これらの文では、主語の名詞句の一部に尊敬語の標的となる名詞句が埋め込まれている。通常では、そのような状況で尊敬語化は許されない。

(ⅳ) *先生の荷物が先に到着された
(ⅴ) *先生の病気がお治りになった。

従って、どのようなメカニズムでこの種の尊敬語化が許されるのか不明であるが、主語でない要素によって誘発されている状況であるので、このような母語話者がいたとしても、それが直ちにニ格名詞句の主語性を示しているとは言えない。

b. *先生に首飾りがかけておありになる。
c. *椅子に先生が縛りつけておありになる。
d. *十字架に救世主様がはりつけておありになる。

A 型〈結果状態テアル文〉

(24) a. *先生が倒しておありになる。
b. *社長が閉じ込めておありになる。
c. *アナ王女が石化しておありになる。

他のテ形補助動詞については、尊敬語化が問題なく適用され、すべてガ格名詞句への敬意を表すことができる。このことから、単に補助動詞が後接したことが原因となっているわけではなく、テアル文に固有の現象であることが分かる。

(25) 山田先生が荷物を全部片付けておしまいになった。 （テシマウ）
(26) a. 山田先生が新聞を読んでいらっしゃる。 （テイル）
b. 山田先生が新聞をお読みになっている。
(27) 山田先生が新しい PC を試してごらんになった。 （テミル）

一方、B 型テアル文では、動作主がガ格名詞句として顕在化していれば、それが尊敬語の標的となり得るばかりか、たとえ動作主が顕在化していなくても、その隠れた動作主が尊敬語の標的となる。この不可視的な統語要素は、意味解釈の特性および格標示における性質から、他の音形を持たない名詞句 (pro、PRO、PRO_{arb})とは大きく異なる。格標示の仕組みについては５章で詳しく述べる。

B 型〈パーフェクト・テアル文〉

(28) a. 社長が会長を呼んでおありになる。（再掲）
b. pro# 会長を呼んでおありになる。
c. pro# 会長が呼んでおありになる。（再掲）

このように、パーフェクト・テアル文では、音形があろうがなかろうが、常に動作主が存在し、その要素が統語的に主語として機能する点で、A 型テアル文とは異なる[69]。

[69] また、尊敬語の解釈が音形を持たない動作主への敬意を示すものであっても多少の違和感を覚える文が存在するのは、前述したように、このパーフェクト・テアル文に人称制限があることに起因すると考えられる。人称制限に関しては 4.3.2 で詳しく述べる。しかし、ここで大事なのは、対象の名詞句はガ格で現れたとしても、尊敬の対象にはならないということである。

また、上で本動詞アルの尊敬語表現を示したが、そもそも本動詞アルで尊敬語表現にできるのは所有文のみである[70]。

(29)　山田先生にお子さんがおありになる。　（再掲）

所有文の主語としてのニ格名詞句は尊敬の対象となるが、存在文の場所句であるニ格名詞句は、尊敬の対象とはならない。

(30)　＊ 先生の机に名札がおありになる。
(31)　＊ 先生に名札がつけておありになる。

（30）に見るように、場所句の名詞句の中に尊敬語化の標的となりうる名詞句「先生」が埋め込まれている場合、本動詞アルを用いた場合でも尊敬語化は成立しない。（31）はA型テアルの文だと考えると、この場合「先生」は名札の存在する場所になり、敬意の対象にはならない。つまり、存在表現テアル文における必須項のニ格名詞句は、存在文を作る本動詞アルの場合と同じく、あくまでも主語ではない場所句であって、所有文のニ格主語とは異なる振る舞いをする。所有文のニ格名詞句は能格型の文の主語になっており、通常人になる。存在文のニ格名詞句は場所であるという性質から、人にはなりにくい。また必須の項ではあるが、主語の性質を備えていない。

(32)	所有文	太郎に　子供が　ある
		[主語]　[目的語]
(33)	場所・存在文	太郎の額に　ホクロが　ある
		[場所句]　[目的語]
(34)	存在表現テアル文	太郎に　リボンが　つけてある
		[場所句]　[目的語]

このことからも、テアル構文における補助動詞アルの性質は、所有文の用法ではなく、場所・存在文[71]の用法から派生したと考えることが妥当であると思われる。所有文と存在文の違い、存在文とテアル文の関わり、およびアルの文法化については、６章で詳しく論じる。

---

[70] 存在文には場所を伴うものと、場所を伴わないものに分けて考える見方が先行研究でなされている。所有文は後者に属し、通常の存在文とは項構造も違うものとして考えられている（西山1994、金水2006、岸本2005など）。存在文については6章で詳述する。
[71] 「所有文」「場所・存在文」は西山(1994)の用語。

Muraki(1986)はまた、テアル構文において謙譲語が使えることも指摘している。謙譲語はObject Honorificationと呼ばれることもあり、主に目的語への敬意を表すとされる。

(35)　会長がお呼びしてある。
(36)　会長をお呼びしてある。　（Muraki 1986:230）

謙譲語表現が可能であるという事実は、テアル文の、対象の名詞句はガ格で現れようがヲ格で現れようが、主語位置に移動しているのではなく、目的語のままであることを示唆している。宇田(1996)も同様の指摘をしている。

(37)　a. *先生がお招きになってある。
　　b. 先生がお招きしてある。　（宇田 1996:17-18）

謙譲語の敬意の対象は直接目的語だけに限られておらず、間接目的語（ニ格名詞句）や付加詞の一部を成す構成素にも敬意を示すことができる[72]。

(38)　山田先生に花子をお預けした。
(39)　山田先生のお部屋に花をお届けした。
(40)　山田先生のお宅でお電話をお借りした。

Muraki(1986)や宇田(1996)で扱われている例文は本論の定義によればB型テアル文であるが、A型テアル文においても、ニ格名詞句やガ格名詞句が謙譲語の標的となりうる。

　　A型テアル文
(41)　山田先生にリボンがおつけしてある。
(42)　中村先生がお縛りしてある。
　　B型テアル文
(43)　会長がお呼びしてある。　（再掲）
(44)　会長をお呼びしてある。　（再掲）

このように、謙譲語の敬意の対象は尊敬語のそれより広くなるが、当然のことながら、謙譲語の敬意が主語に向くことはない。謙譲語の敬意の対象になるということは、当該の名詞句がガ格で現れようがヲ格で現れようが、少なくとも主語にはなっていないとい

[72] 尊敬語・謙譲語の統語的・意味的特徴についてはHarada (1976)などを参照。

うことを明確に示している。

4.2　A 型テアル文に見る文法関係

これまで見てきた主語性の問題は、テアル文における対象のガ格名詞句が主語の特性を備えていないということであった。本節ではその考察を踏まえて、テアル文における項構造と文法関係に焦点を当てて考察を行う。

繰り返し述べているように、A 型テアル構文の特徴は、場面描写であるが、その意味的解釈として、2.6 で見たように概略（45）のような命題を含んでいる。

(45)　[1]誰かがある行為を対象物に加え、
　　[2]その結果として、その対象物が状態変化あるいは位置変化、
　　あるいはその両方を起こす。

既に見たように、A 型テアル文においては、動作主の存在は含意されているものの、統語上表出することはない[73]。つまり、A 型テアル文は、主語が統語上には存在しない「主語無し構文」であるという主張である。

これまでにも日本語で主語が欠落していると思われている構文は幾つか指摘されてきた。第一に、述語の項がゼロのいわゆるゼロ項述語を含む文である。

(46)　あたりが時雨れてきた。　（Kuroda 1988:117）
(47)　明日は吹雪くだろう。（Kuroda (1988) が挙げた動詞から著者作例）
(48)　雨だ／雪だ／地震だ／火事だ。　（寺村 1982: 178）

天候を表現する述語は明確な主語を特定することが難しく、通常、名詞句を伴わずに使用されるため、ゼロ項述語という可能性があることが寺村(1982)によって指摘されている。

第二に、英語のような言語と違って、日本語には意味のない名詞句、いわゆる虚辞(expletives)と呼ばれるような要素が存在しない。

(49)　It seems that John is rich.
(50)　There is a man in the room.

---

[73]テアル文は動作主が「抑圧」されているために「受動型」と呼ばれる。A 型に「意志的な」とあるのは前述のように意志性が要求されるためである。テアル構文の場合、動作主が抑圧されるとそれは統語的に具現されることはない。この点で、他の不特定表現（任意の PRO や、受動文における動作主）とは異なる。

しかしながら、文法関係に影響を与えるような統語操作の結果、もともとあった主語が取り払われてしまい、結果として「主語無し」になることがある。

次の例は直接受動文の例である。直接受動文ではもともとの目的語が主語に昇格すると同時に、もともとの主語が付加詞に降格するという二つの側面があると言われている。

(51)　太郎が車を壊した。
(52)　車が太郎によって壊された。

このうち、前者の操作が欠落している構文がある。それは目的語に名詞句ではなく従属節のト節を取る動詞文の受動態である。

(53)　（誰かが）夜に口笛を吹くと蛇が出ると言っている。
(54)　夜に口笛を吹くと蛇が出ると言われている。
(55)　ジョンが東京へ行ったと（みんなに）信じられている。（Hasegawa 1981:251）
(56)　ジョンがメアリーを殺したと（目撃者によって）証言された。
（Hasegawa 1981:251）

ト節は名詞句でないため格が必要ないと考えられている。従って、受動態形成のプロセスの中で、主語が降格した後に、格を得るためにその位置を埋める必要がない。従って、ト節は本来の位置に留まっており、主語位置は空であるというのがこの考え方である。

(57)　[____] [夜に口笛を吹くと蛇が出る]と　言われている[74]

文の構造の中で特定されうる統語的位置としての「主語」があると仮定すると、これら

[74] この構文とよく似てはいるが統語操作の結果ではなく、語彙的に空の主語を持つと考えられる動詞として「思える、見える、聞こえる」のようないわゆる「自発」の動詞が取り上げられることがある。
(ⅰ) [やっても意味がある]かどうか疑問に思える
(ⅱ) [世の中が今までとは全く違って]見える
(ⅲ) [政府には一切落ち度がない]ように聞こえる
しかしこれらの動詞では感覚の主体を表現することもできるので、即座に無主語文とは断定できない。
(ⅳ) 私には　[やっても意味がある]かどうか疑問に思える
(ⅴ) セラピーのおかげで意識が変わった彼には　[世の中が今までとは全く違って]見える
(ⅵ) 誰の耳にも[政府には一切落ち度がない]ように聞こえる

の主語無し構文は次のように表される。便宜上Δで、空の主語の統語位置を示した。

(58)　Δ [.....　]と信じられている
(59)　Δ 雨だ
(60)　Δ 時雨る

本論の主張は、テアル文はこれらの主語無し構文と同様の構造を持っているというものである。

(61)　Δ 壁に　絵が　かけてある。
(62)　Δ 窓が　開けてある。

もしテアル文が主語無し構文であるならば、そこに現れる唯一のガ格名詞句は、もともとの位置に留まったままガ格を付与されたことになる。テアル文の格表示については、次章で検討する。

この「主語が無い」という概念は、Abe (1993) の「非θ位置のNP*」という概念と似ている。Abe(1993)は、寺村(1984)などの観察をもとに、連体修飾のタが結果状態の意味を持つ場合があり、その時には主語位置が空である（非θ位置である）ことを示した。この結果状態の意味とは、関係節の主名詞に与えられる属性の解釈のことである。

(63)　a. [茹でた] 卵
　　b. [小さく切った] 大根
(64)　a. [NP* e_i 茹で-INFL] 卵$_i$
　　b. [NP* e_i 小さく切っ-INFL] 大根$_i$　　（Abe 1993:133）

（63）では埋め込み文の項が全く存在しないかのように表示されているが、これらの構造は（64）のように分析され、主語の位置がNP*として表わされている。日本語には音形を持たない名詞句として、文脈指示のゼロ代名詞（pro）と、目に見えない任意の代名詞（PRO_{arb}）があるが、これらは他のPROをコントロールすることができるという点で、このNP*とは異なる。

(65)　e_i [PRO_i テレビを見ながら] 本を読んだ
(66)　[PRO_{arbi} [PRO_i テレビを見ながら] 本を読む] ことは良くない
（Abe 1993:133）

（65）では主節主語が文脈指示のゼロ代名詞になっており、これが埋め込み節の PRO をコントロールしている。（66）では主節主語の PRO_{arb} が埋め込み節の PRO をコントロールしている。これらと並行的な構造を持つ関係節を作ってみるといずれも結果状態の読みではなく、過去の出来事を表わす文となっている[75]。

(67)　[NP* [PRO テレビを見ながら]] e_i 茹でた] 卵
(68)　[NP* [PRO テレビを見ながら]] e_i 小さく切った] 大根　（Abe 1993:133）

また他のゼロ代名詞は「自分」を束縛することができるが、非θ位置の NP*はできない。

(69)　[NP* [自分の部屋で] e_i 茹でた] 卵$_i$
(70)　[NP* [自分の部屋で] e_i 小さく切った] 大根$_i$　（Abe 1993:134）

したがって、これらの例文における NP*は非 θ 位置とはならず、出来事の読みとなり、結果状態の属性解釈にはならない。

Abe(1993)はまた、連体修飾構造においてこの属性の解釈が得られるためには、NP*が主語でなければならず、同時に述語は変化述語でなければならないと述べている。

(71)　[太郎が e_i 二つに折った] ハンカチ$_i$
(72)　[太郎が e_i 蒸した] 芋$_i$
(73)　[NP* e_i 買った] 本$_i$
(74)　[NP* e_i 食べた] りんご$_i$　（Abe 1993:135-136）

（71）と（72）では、主語位置が内容のある名詞句によって占められているため、問題となっている結果状態の属性解釈は得られず、出来事的解釈のみが得られる。(73) と (74) では述語が変化を意味する述語でないため、やはり結果状態の属性解釈は得られず、出来事的解釈のみが得られる。

さらに、Abe は結果状態の属性解釈が可能になるのは状態変化を表わす他動詞の時のみであり、またその時にテアル文と同義となることを指摘している。

(75)　[NP* e_i 小さく切った] 大根$_i$
(76)　[e_i 小さく切ってある] 大根$_i$　（Abe 1993:134）

---

[75] Abe(1993)は出来事を表わす文の NP*はθ位置にある文脈指示の pro だと述べている。

ここでテアル文との関係をもう少し詳しく見てみよう。A 型テアル文は結果状態の属性解釈が可能で、非θ位置の NP*と同質の主語を想定できる。

結果状態テアル

(77) a. 木がきれいに刈りこんである

b. [NP* e_i きれいに刈りこんだ]木$_i$

c. [NP* e_i きれいに刈りこんである]木$_i$

（77）では、どれも「木」の結果状態を表わすという意味では同じである。存在表現テアル文でも同じことが言える。

存在表現テアル

(78) a. 部屋に彫刻が飾ってある

b. [NP* 部屋に e_i 飾った] 彫刻$_i$

c. [NP* 部屋に e_i 飾ってある] 彫刻$_i$

d. [NP* e_i 彫刻を飾った] 部屋$_i$

e. [NP* e_i 彫刻を飾ってある] 部屋$_i$

存在表現テアル文の場合は、項が二つあるため関係節も二種類作ることができる。(78a) は彫刻の存在を表現しているが、（78b, c, d, e）の連体修飾構造においては、彫刻の属性または部屋の属性が表現されている。

しかし、B 型パーフェクト・テアルの場合は連体修飾節にした時に、結果状態の属性解釈は得られない。

B 型パーフェクトテアル

(79) a. チケットを予約してある／チケットが予約してある

b. [予約した]チケット

c. ??[予約してある]チケット

d. 今朝天気予報を見てある

e. [今朝見た]天気予報

f. ??[今朝見てある]天気予報

これらの文は解釈可能な文ではあるが、「チケット」や「天気予報」の属性という解釈は得られず、出来事による連体修飾の解釈しかなく、さらにテアル文では不自然な文となる。これは B 型テアル文に「空いた主語位置」が存在しないためであろう。関係節での

属性解釈の有無を見ることは、B 型テアル文には常に（たとえ音形がなくても）統語上の主語名詞句が存在するという主張を支持する証拠の一つである。

Abe(1993)はタ形の関係節が結果状態の属性解釈を表現している場合、それはテアル文で置き換えられるという、もともとは寺村(1973)の観察を踏襲している。しかし属性解釈のタ形関係節とテアル形関係節（に限る）の言い換えに言及した際に、テアル文についてはあたかも目的語が主語化したかのような構造を示している。

(80)　[NP* e_i 小さく切った] 大根$_i$

(81)　[e_i 小さく切ってある] 大根$_i$　　（再掲）

しかしテアル文が「主語無し構文」であるという本論の主張に沿ってこの構造を考え直せば、次のようになるであろう。

(82)　[NP* e_i 小さく切ってある] 大根$_i$

つまり Abe(1993)が NP*で示した非θ位置の空の名詞句こそが、「主語無し構文」に現れる空の位置そのものだからである[76]。

最後にテアル文と二次述語の関係を見ておこう。二次述語との共起関係がテアル文の主語性の欠如を示唆しているからである。

日本語の二次述語にはもっぱら主語を修飾するものと目的語を修飾するものがある（影山（編）2009 などを参照されたい）。

[主に主語指向]（目的語も可能）

(83)　太郎が<u>裸で</u>川に飛び込んだ。

(84)　子供が<u>裸足で</u>外に出た。

(85)　山田さんが珍しく<u>シラフで</u>帰宅した。

---

[76] 本論文では必ずしも属性解釈のタ形関係節がテアル形関係節から直接派生したものだとは主張していない。また両者の類似性が一部崩れるところがあるのも事実である。テアル文として成立する動詞の中には必ずしも属性解釈のタ形関係節を成立させないものもあるからである。

(ⅰ) a. 黒板に指示が書いてある

b. ??[e_i 黒板に書いた]指示$_i$（属性解釈として）

(ⅱ) a. ケーキが焼いてある

b. ??[e_i 焼いた]ケーキ$_i$（属性解釈として）

書記動詞や作成動詞の場合には、テアル文は成立するが、属性解釈のタ形関係節は成立しにくいように感じる。

[主に目的語指向]

(86)　私は初めて魚を生で食べた。

(87)　彼はその車を中古で購入した。

もしテアル文に（音形の有る無しに関わらず）主語があるとしたら、当然テアル文に主語指向の二次述語が現れても良いはずである。

(88)　*裸で窓が開けてある。

(89)　*目を閉じて壁に絵がかけてある。

(90)　*裸足で傘が並べてある。

(91)　*シラフでベランダにハーブが乾かしてある。

しかし、これらの例文はどれも「あなたが今いる場所の様子を教えてください」という指示に答える形で発話できる場面描写のテアル文として、適当だとは言えない。この事実はテアル文の動作主が統語的に抑圧され、統語構造には現れていないことを示唆する。

更に、主に目的語指向的に使われるとされる二次述語が A 型テアル文において使われることも重要である。

(92)　イカを生で並べる。

(93)　イカが生で並べてある。

(94)　テーブルに酒を熱燗で出す。

(95)　テーブルに酒が熱燗で出してある。

(96)　家を 2x4 で建てる。

(97)　家が 2x4 で建ててある。

これらの例から、A 型テアル文のガ格名詞句が主語でないということと同時に、目的語の性質を備えていることが窺える。

4.3　B 型テアル文にみる文法関係

4.3.1　主語性を示す名詞句

ここまで繰り返し見てきたように、B 型パーフェクト・テアル文には統語上の主語が存在するというのが本論文の主張である。A 型テアル文と違い、再帰代名詞や尊敬語の主語テストにもパスし、結果状態を表すタ形連体修飾節においても A 型テアル文とは異なる振る舞いをすることから、たとえ音形がなくても必ず主語が存在すると言える。

(98)　a.　pro#ᵢ 自分ᵢの部屋に花子を招いてある。
　　b.　太郎ᵢが自分ᵢの部屋に花子を招いてある。
(99)　a.　pro# 飛行機のチケットをすでにとっておありになる。
　　b.　部長が飛行機のチケットをすでにとっておありになります。

そして、(98)（99）のように、主語が音形を持っていようがいまいが、内項（対象）が存在する場合には、それは目的語として対格（ヲ格）で標示されるのが普通である。

しかし、これまでも見てきたように、B 型テアル文において、内項がガ格を伴って表出する場合もあることを改めて強調したい。次の例に見られるように、内項の格標示がガであってもヲであっても文の意味に変わりはない。

(100)　a.　父がレストランを予約してある。
　　b.　pro# レストランを予約してある。
　　c.　pro# レストランが予約してある。

前述したように、多くの理論言語学的な研究では、対象の項がガ格であれば自動的に受動型（A 型）、そうでなければ能動型（B 型）と分析されている。しかし、(100）の文はどれも（主語が明示された文ではその内容だけを除いて）同じ意味を表わす。つまりこれら三種類の形式はすべて、アスペクト的にはパーフェクトであり、意図的な行為が行われた後の効果だけが残っているという B 型の特徴を備えている。本論では B 型テアル文において対象の名詞句がガ格であるかヲ格であるかの違いは格の表出の問題として捉え、A 型・B 型の本質的違いは格標示ではなく統語的な外項の有無であると考えている。

既に見たように、ガ格を伴う B 型テアル文においては、ガ格名詞句が主語性を示さず、むしろ表出していない音形のない名詞句（pro#）が主語として機能している。対象の名詞句がガ格で表された B 型テアル文について、これまで観察してきたことをまとめると次のようになる。

(101)　対象がガ格で現れる B 型テアル文に見られる現象

1.　ガ格名詞句が「自分」の先行詞になれず、真の先行詞は目に見えない主語である。
　　ジョンが自分の家に呼んである。(6)を再掲
2.　ガ格名詞句に対する尊敬語は不可能で、敬意は見えない主語に向けられる。
　　会長が呼んでおありになる。（19b）を再掲
3.　ガ格名詞句に対する謙譲語が可能である。
　　会長がお呼びしてある。 (35)を再掲
　　先生がお招きしてある。(37b)を再掲

こうした観察から得られた結論は、B 型テアル文では、対象の意味役割を持つ名詞句がガ格で現れていても、それ自身は主語ではなく、それとは別に目に見えない主語（pro#）を持つということである。

(102)　a. pro#　ジョンが自分の家に呼んである。
　　b. pro#　会長が呼んでおありになる。
　　c. pro#　会長がお呼びしてある。
　　d. pro#　先生がお招きしてある。

ここまでの考察から、B型テアル文の特徴についてまとめる。

(103)　B 型テアル文のまとめ

1. B 型テアル文では語幹動詞の第一項（動作主）が常に外項として統語構造上に存在すると考える。
2. その項は音形を持った名詞句の場合もあれば、音形のない名詞句の場合(pro#)もある。
3. 外項が音形のない名詞句の場合、第二項がガ格を持つ場合がある。
4. この場合、表面的には A 型テアル文と区別できないが、目に見えない第一項（動作主項）の解釈が A 型テアル文の場合と大きく異なる。

B 型（パーフェクト）テアル文の意味的解釈を次のように考える。

(104)　[1]ある動作主が、ある特定の意図を持って行為を行い、
　　[2]その結果として、ある効果が存続している。

B 型の場合は話者にとって了解済みの（あるいは推測できる特定の）目的がなければならない（原沢 2007 など）。(98a）は次のように対象をガ格で標示しても解釈が変わることはない。

(105)　pro#$_i$　自分$_i$の部屋に花子が招いてある。

この文が統語的な主語（pro#）のある B 型テアル文であると考えれば、この事実は説明がつく。主語が話者であるというのが最も自然な解釈であるのは、先に触れたように、この文型に人称制限がかかることに起因する。同じ理由で、(100a）のように動作主が顕

在化しているB型テアル文を不自然に感じる話者もいるようである。文献によっては動作主が表出しているテアル文を非文としているものさえある（Muraki 1986 など）。次の小節でこの人称制限について詳しく考察する。

4.3.2 人称制限

2 章でも触れたように、寺村 (1984) は、テアル構文を「眼前の状態を客観的に描く場合」（本論で言う A 型）と「処置が自分自身の行為、または自分の差配による誰かの行為である場合」（本論で言う B 型）との二つに大きく分け、「自身（ないし配下）という感じが強いと、その処置の対象が「〜ガ」ではなくて「〜ヲ」になることが多い」として、B 型テアル文には人称制限があることを示している（寺村 1984:151）。確かに、主語がゼロのときにはそれが話者だと捉えるのが極めて自然である。

(106)　お正月の旅行のために宿を予約してある。

この場合、宿を予約したゼロ主語は話者か、あるいは話者の家族であろう。第三者であれば自分が頼んで予約してもらった場合である。もし第三者が第三者のために予約したのであれば、この表現は出てこない。文脈指示が可能な状況であっても、次のように言うといささか不自然である。

(107)　太郎はお正月ハワイに行くんだって。もう宿を予約してあるよ。

この場合は、「もう宿を予約してあるそうだよ」、「もう宿を予約してあるはずだよ」など、伝聞や推量などのモダリティー表現を付け加えればより自然な文になる。

日本語で人称制限のかかる表現はいくつかある。外崎(2006)は主観的判断を表わす動詞、感情・感覚を表わす形容詞は主文において一人称主語をとるとして、次の例を挙げている。

(108)　a. 私はあの男は無罪だと思う。
　　b.*彼はあの男は無罪だと思う。
　　a. 私は新車が欲しい。
　　b.*彼は新車が欲しい。　（外崎 2006:149）

一般的に感情・感覚を表す形容詞には人称制限があるとされているが、その人称制限が消える場合もある。その一つが話者の判断を表すモダリティー表現をつけた場合である。

(109)　a. 親友の死を知らされて、詩子はどんなにか悲しかったろう。
　　b. 人前で罵倒されて、あいつはきっと悔しかったに違いない。
（鎌田 2002:7）

(110)　a. [彼があの男を無罪だと思う] のは当然だ。
　　b. 彼があの男は無罪だと思う｛はずだ／だろう／にちがいない｝。
（外崎 2006:150）

また、人称制限を考える際にはテキストの違いにも注意しなければならない。Kuroda(1973) は文章のスタイルに nonreportive style と reportive style があるとし、nonreportive style の文では人称制限がなくなることを示している。Nonreportive Style の文とは、独白や物語の記述、語り等である。工藤(1995)ではこの違いを「かたり」と「はなしあい」で分けており、同じように「かたり」では人称制限がなくなることを指摘している。

(111)　メアリーは寂しい。
(112)　メアリーは暑かった。　（Kuroda 1973:381）
(113)　山寺の鐘を聞いて、メアリーは悲しかった。
(114)　山寺の鐘を聞いて、メアリーは悲しがった。
(115)　山寺の鐘を聞いて、メアリーは悲しかったのだ。　（Kuroda 1973:384）

（111）（112）（113）は通常人称制限がかかり非文となるが、非一人称小説なら許されると Kuroda は指摘している（Kuroda 1973:381）。逆に（114）（115）は通常の会話（Reportive な文）でも三人称の主語で言えるが、非一人称小説で言える場合はそのナレーターが omnipresent（偏在）であり、omniscient（全知）ではない場合であるとした。そして、(111)（112）(113) のような文が使えなければ Reportive な文であると述べている。また、「よ」が使われる文も Reportive な文であるとしている。

(116)　*メアリーは寂しいよ。
(117)　メアリーは寂しがったよ。　（Kuroda 1973:384）

また、「のだ」文でも人称制限が働かないことを指摘している。

(118)　メアリーは寂しいのだ。　(Kuroda 1973:381)

東(1997)は 節のタイプをもとに、節のタイプによって人称制限が無化されることを示

した[77]。

(119)　〈１類〉　義務的焦点のガも主題のハも入る。[＋realis]

a. スーパーマン（が／は）力が強い。

b. スーパーマン（が／は）力が強いと思った。

c. スーパーマン（が／は）力が強いので、僕らは何の心配もしなかった。

(120)　〈２類〉　ガに義務的焦点の解釈はなく、ハは入らない。[－realis]

a. スーパーマン（が／*は）力が強いのは当たり前だ。

b. スーパーマン（が／*は）力が強いということは当たり前だ。

c. スーパーマン（が／*は）力が強かったころは、この町も平和だった。

d. スーパーマン（が／*は）力が強ければ、この町も平和だった。

e. スーパーマン（が／*は）もっと力が強ければよかったのに。

f. いくらスーパーマン（が／*は）力が強くても、これは無理だ。

（東 1997:14-15）

(121)　〈１類〉

a. ｛僕／#君／#ケン｝｛が／は｝手が痛い。

b. ｛僕／#君／#ケン｝｛が／は｝手が痛いと思った。

c. ｛僕／#君／ケン｝｛が／は｝手が痛いので、作業は予定通り進まない。

(122)　〈２類〉

a. ｛僕／君／ケン｝が手が痛いのは当たり前だ。

b. ｛僕／君／ケン｝が手が痛ければ、こんな重い荷物は運べない。

c. ｛僕／君／ケン｝が手が痛くても、誰も気がつかないだろう。

（東 1997:20）

東は主題や義務的焦点であることが語用論的人称制限の条件で、主語位置で起きている現象であるとした。そして２類の文では人称制限が無化されることを示した。

このように人称制限のある述語であっても、様々な条件でその人称制限は無化される。ではテアル文の人称制限はどうなっているのか。まずA型のテアル文は先に見たように、主語のない文であるので、当然人称制限はかからない。

(123)　こんなところにきれいな絵が飾ってあるよ。

(124)　見て。木がきれいに刈り込んであるよ。

---

[77] 東(1997)は節のタイプをそれぞれ A タイプ、B タイプと呼んでいるが、本論ではテアル文の、B 型との混同を避けるために、便宜的に 1 類、2 類という名前で置き換えてある。

この場合、含意された動作主は話者でないことは明らかである。
　次にB型の例を見てみよう。

(125)　もう今度のコンサートのチケットをとってある。

このようにゼロ主語であれば動作主は話者という解釈が第一義である。テイルと比べるとやはり微妙なニュアンスの違いが出る。

(126)　もう今度のコンサートのチケットをとっている。

テイルを用いると、第三者の行為について述べているようにも聞こえる。さらに、動作主が現れると、テイルとテアルで様相が異なる。テイル文のほうは太郎自身に関する記述であるが、テアル文では話者のための準備というニュアンスが強く感じられる。

(127)　太郎がもう今度のコンサートのチケットをとっているよ。
(128)　太郎がもう今度のコンサートのチケットをとってあるよ。

B型テアル構文の人称制限は、2章で見たように、「ある目的のためにしておいたことの結果」という性質から生まれるものだと考えられる。つまり、話者がその目的をはっきり知っている場合に限られるという意図性の制約があるために、動作主は話者自身、あるいは家族または話者が依頼した人物などになるのが自然である。寺村(1984)の「自身（ないしその配下）」という記述はそのような制約から来ていると思われる。したがって、感情・感覚形容詞ほどには強くないが、それに近い人称制限が働く。東(1997)の節のタイプのテストにそのまま入れてみると以下のようになる。

(129)　〈1類〉
　a. ｛僕／#君／ケン｝｛が／は｝今度のコンサートのチケットをとってある。
　b. ｛僕／#君／ケン｝｛が／は｝今度のコンサートのチケットをとってあると思った。
　c. ｛僕／君／ケン｝｛が／は｝今度のコンサートのチケットをとってあるので、後は宿をとるだけだ。
(130)　〈2類〉
　a. ｛僕／君／ケン｝が今度のコンサートのチケットをとってあるのは当たり前だ。

b. ｛僕／君／ケン｝が今度のコンサートのチケットをとってあれば、東京で年越しできた。
c. ｛僕／君／ケン｝が今度のコンサートのチケットをとってあっても、誰も気がつかないだろう。

１類の文は感情・感覚形容詞では3人称主語を許さない文であるが、テアル文では3人称も不可能ではない。しかし、「が」で言うと、やはり話者のために、あるいは話者の指示でしたというニュアンスが加わる。「は」で主題化すると、ケンに関するコメントになるので、やはり不自然さが増す。母語話者によっては非文とするものである。（129c）は二人称も三人称も許すと思われるが、これは（121）で見たように、 感情・感覚述語でも同じである[78]。これは「のだ」のモダリティーからくるものであろう。しかしこの場合も「ケンが」といった場合、話者が一緒に行かない、ケンだけのための行動という解釈はできないだろう。つまり、パーフェクト・テアルの人称制限には「話者の関与（involvement）」が含まれていることが考えられる。それに比べて「２類」はやはり感情・感覚述語と同じく人称制限が無化されているので、ケンが自身のためだけにした行為であっても自然な文になる。話者の目的ないし関与を考慮に入れる必要はなく、ケンの意図的な行為を表す文であればいい。

B型テアル文にこのような人称制限が課されているのであれば、主語が敬意の対象になる尊敬語表現とはそぐわないはずである。実際テアル文の尊敬表現はコーパスでもほとんど見当たらないが[79]、動作主を明示的に主語として出すことで、尊敬語の文も可能となる。

(131) a. 山田先生が老後のためにたっぷり貯金をしておありになる。
b. 山田先生は周到だね。老後のためにたっぷり貯金をしておありになるそうだよ。

(132) a. 女王陛下が民衆のために城を解放しておありになる。
b. 女王陛下はなんてすばらしいんだ。民衆のために城を解放しておありになる。

---

[78] (121c)の「君」は感情感覚形容詞では#がついているが、母語話者によっては不自然に感じない場合もあるようである。

[79]『現代日本語書き言葉均衡コーパス』では尊敬語は二件だけ見つかった。
(ⅰ) …などとこまやかに書いておありになるのでした。（源氏物語　瀬戸内寂聴訳）
(ⅱ) 宮が日ごろあれほど大切にされていた小枝という御笛を忘れておありなのをみつけた。（平家物語　大原富枝訳）
どちらも古典文学の翻訳ということからも、テアル文の尊敬語表現が現代語として日常的な表現ではないことがわかる。

しかし、これらも「そうだ」などのモダリティーを付けないと少しすわりの悪さを感じるかもしれない[80]。また、(132b) のように、賛辞を付けるとより自然になる。このことから、逆に尊敬語表現にすることで一人称主語という人称制限が抑えられているとも考えられる。

B 型テアル文の主語についてまとめると、まず A 型テアル文と違い、統語上必ず定 (definite) の主語が存在する。そしてその主語には人称制限がかかり、通常は一人称 (話者) の意図的な行為を表わす。しかしその人称制限は感情・感覚述語程には強くなく、三人称主語も許されるが、その場合も暗に話者の意図や関与が感じられる。このような人称制限は、B 型テアル文だけが持つ特徴と言える。

4.4 A 型テアル文におけるニ格名詞句の特性

4.1 節に現れる名詞句の主語性を検討した際、再帰代名詞「自分」の照応可能性、尊敬語化規則の適用可能性を基に、ガ格名詞句については主語性の欠如をはっきりと示すことができた。しかし、ニ格名詞句の主語性に関しては、少し事情が違った。

テアル構文におけるニ格名詞句は場所句であるため、有生物をニ格名詞句として表現しにくい。「自分」の先行詞は通常人または高次の有生物であるため、再帰代名詞のテストを適用しにくい。しかし限定された文脈においては、人であってもそれを「場所」として捉えるテアル文で表現することができる。

(133) a. ?花子$_i$に自分$_i$が作った首飾りがかけてある。
b. ?ジョン$_i$に自分$_i$の国の国旗を模したバッジがつけてある。
c. ?眠っている子供$_i$に自分$_i$の名前を刺繍したおくるみがかけてある。

予想に反して、テアル文のニ格名詞句は自分の先行詞としてある程度機能しているように感じられる。少なくともテアル文のガ格名詞句の例と比較すると、こちらの例文のほうが許容度が高いのは事実である[81]。

これに対して、本動詞のアルを用いた所有文では、ニ格名詞句が問題なく「自分」の先行詞になれる。下記の例文では、明らかに上記のテアル文におけるニ格名詞句と自分の同一性の判断に比べて、許容度が高い。

---

[80] これらの文は母語話者によって判断が分かれる。「は」なら問題がないという意見もあれば、全く受け入れられないという意見もある。そもそも動作主が現われるテアル文自体を非文とする母語話者もいる。

[81] この種の例文の存在については青柳宏教授から指摘を受けた。
(i) 太郎$_i$に自分$_i$の民族名を書いた名札がつけてある。

(134)　太郎$_i$に自分$_i$の子供がある。
(135)　花子$_i$には北海道に自分$_i$の別荘がある。

これはどのようなことを意味するのだろうか。テアル文ではニ格名詞句もガ格名詞句も主語ではないと繰り返し述べてきた。一見すると（133）の例文はニ格についてはこの主張の反例となっているように思える。この問題の解決策を探る前に、主語性のもう一つのテスト、尊敬語化の現象を再度見てみよう。

(136)　a. *山田先生にリボンがつけておありになる。
　　b. *先生に首飾りがかけておありになる。
　　c. *椅子に先生が縛りつけておありになる。
　　d. *十字架にイエス様がはりつけておありになる。　（再掲）

これらの例文から分かるように、A_1型テアル文のニ格名詞句は尊敬語化の標的とはなり得ない。先ほどの再帰代名詞の時と事情が大きく異なっている。尊敬語化が不可能であるという判断はかなりはっきりとしたものである。このジレンマをどのように解決したら良いだろうか。

尊敬語化と再帰代名詞の照応が異なる結果を示す現象はA型テアル文のニ格名詞句に限ったことではない。Takano(2011)は、二重目的語構文（Ditransitive -DTR）と二重補部非対格構文（double complement unaccusative -DCU）の比較分析を通して、DCU ではニ格名詞句が「自分」の先行詞になり得ることを示した。

(137)　ケン$_i$に自分$_i$の財布が戻った。　（Takano 2011:234）
(138)　*ケンがユミ$_i$に自分$_i$の財布を戻した。

DCU である（137）ではケンが先行詞になれる。しかし DTR である（138）では、「自分」がユミを指すことができない。このように、DCU では goal のニ格名詞句が主語とは言いにくいにもかかわらず、自分の先行詞になるという現象が見られる。ところが、Takano(2011)が指摘しているように、この DCU のニ格名詞句は尊敬語化を許さないのである。

(139)　*山田先生に財布がお戻りになった。　（Takano 2011:236）

この状況はまさにA_1型テアル文における状況と並行的である。

表１

DCU	X-ni	Y-ga	modor-u
再帰代名詞化	OK		
尊敬語化	＊		
A 型テアル文	X-ni	Y-ga	V-te ar-u
再帰代名詞化	OK		
尊敬語化	＊		

本論では、これら二つの問題が基本的には同じ問題であることを主張する。具体的には、Takano(2011)はDCU 構文のニ格名詞句が主語であると想定しているが、その想定とは逆に DCU 構文のニ格名詞句（ただし対象の名詞句が[-animate]の型の場合）は主語ではないと主張したい。

日本語の再帰代名詞「自分」が主語指向性を持たない振る舞いを示す事例は以前から色々な研究によって指摘されてきた。例えば Oyakawa(1973)は次のような例文を提示している。

(140)　その経験は花子$_i$に自分$_i$がバカであることを教えた。
(141)　この事実は花子$_i$に誰も自分$_i$を愛していないことを示唆した。
(Oyakawa 1973: 124)

これらの例文では、無生物主語の後ろに現れる間接目的語のニ格名詞句が再帰代名詞の先行詞となっている。これらの例文が DCU や A 型テアル文における再帰代名詞の照応現象と同一だとは思わないが、先行詞が主語でない「自分」の振る舞いを考える時には極めて示唆的である。

本論では次のような想定をする。Saito (2009)、Takano (2011)、 Kishimoto (2012)などに倣い、主語は *v*P の指定部に現れる（そこに基底生成されたかあるいはその位置に上昇した）名詞句とする。主語は主格を受ける場合が基本であるが、場合によっては与格や奪格のような斜格を受けることもある[82]。

(142)　ジョンから　メアリーにそのことを話した。　（Kishimoto 2012:8）
(143)　ジョンに　フランス語が　話せる（こと）。

もちろん主語とならない斜格名詞句は *v*P の指定部に現れない。これが A 型テアル文や DCU に見られるニ格名詞句の性質である。Kishimoto(2012)は、尊敬語は *v*P の指定部に

[82] カラ主語の最初の指摘は井上(1976)に見られる。

現れる名詞句を標的にすると仮定している。したがって、*v*P の指定部に入らないニ格名詞句が尊敬語を誘発しないのは当然のことである。

DCU

(144) *山田先生に財布がお戻りになった　　（再掲）

A_1 型テアル文

(145) *山田先生にリボンがつけておありになる。　　（再掲）

一方、再帰代名詞の「自分」は限られた条件の下で主語でない名詞句を先行詞に取れると考える。

(146) 例外的な再帰代名詞の照応の規則：
*v*P 指定部が空いている場合（＝主語位置が空の場合）、そしてその場合に限り、最上位の内項は、「自分」の先行詞になれる。

DCU

(147) ケン$_i$に自分$_i$の財布が戻った。　　（再掲）

A 型テアル文

(148) ?花子$_i$に自分$_i$が作った首飾りがかけてある。　　（再掲）

ここでは Takano(2011)の例文は原典のままの判断をあげているが、実際のところ、(147) と（148）の判断は極めて似通っている。すなわち、本来の主語指向性を遵守した再帰代名詞の判断に比べると、若干許容度が落ちているということである。このことも両者を同等に扱う分析の妥当性を示唆している[83]。

4.5 受身＋テアル

この節では、A 型・B 型とは異なる新たなテアル構文の類型、すなわち「受身＋テアル」の文を観察する。この類型では、テアルが語幹動詞に直接接続するのではなく、語

---

[83] Takano(2011)は次のような例文についても同じ構造から導き出すことを提案している。
(ⅰ) ケン$_i$が自分$_i$の部屋に戻った 。
(ⅱ) 山田先生が研究室にお戻りになった。　　(Takano 2011:234)
本論では Takano と同じ仕組みを想定しているわけではないが、この例文に関しては主格で現れている名詞句が *v*P 指定部に移動して主語性を得ているという考え方に同意している。したがって、その名詞句が「自分」の先行詞となり、かつ尊敬語の標的になっていることは当然のことである。

幹動詞の受動形に接続する。これを便宜上C型と称することにする。

(149)　窓際に椅子が並べてある。　A型
(150)　窓際に椅子が並べられてある。　C型

この形の文は、単独で見ると現代語としては不自然に感じられるかもしれないが、現代日本語のコーパス[84]を調査すると、609件が検出された。この数は、言い間違いや個人的なスタイルの偏向というレベルでは捉えられない[85]。高橋(1969)も、「されてある」の例を挙げて、明治から大正の作品に多いが、現代にも存在すると述べている。Martin (1975)にも受動態＋テアルが可能であるとの記述がある。

(151)　家の壁のよこに戦利品がおかれてあった。
(152)　ウイスキーのびんのはり紙にマルにオの字が筆ぶとにかかれてあった。
(153)　机の上にはモウパッサンの「死よりも強し」がひらかれてあった。
（高橋 1969:130）
(154)　これらの文章は生活に結びついて書かれてあります。（Martin 1975:527）

「受身＋テアル」構文の先行研究は決して多くはないが、これらを文法的に整合した文として研究対象としている文献はいくつか存在する。野村(1983)は、「小説のような限定された分野においては、非情の主体がある状態にあることを可視的に捉える言い方として用いられ、今後もすぐに滅びないであろうと予測される」（野村 1983:160）と述べている。山崎(1992)は文学作品から用例を集め、作家によってこの「受身＋テアル」の使用に偏りがあることを指摘した上で、「存在動詞「ある」の影響で「～られている」よりも「～られてある」の方が具体物の存在を明示できるという意識が働いているのかもしれない」（山崎 1992:128）と述べている。また、益岡(1987)も「受身＋テアル」は益岡

[84] 3章で既出の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下 BCCWJ)。
[85] 同コーパスで、テアル文が約1万8千件検出されるので、割合としては多くはない（3章で使った、無作為に抽出した600件のデータ中にも「受身＋テアル」の文が約3%見られたが、BCCWJの全てのテアル文でも約3%である。）。しかし、3章で見たように、そもそもテアル文自体「書く」と「置く」に代表される書記動詞と配置動詞が使われることが非常に多く、多様な動詞が同等に使われているわけではない。また、書き言葉のコーパスなので、誤用の例はほとんど見られない。試みに「形容詞＋の＋名詞」で検索してみたところ、「懐かしのアニメ」などの正用が527件だったのに対し、「旨いのもの」という誤用と思われるものが1件、「面白の要素」という、誤用ではないが逸脱した表現と思われるものが1件見られただけであった。また、「遊ばせてある」などの「使役＋テアル」の文は不自然に感じる話者はいないだろうが、129件しか現れない。これらのことを考えても、この609件という数字は決して無視できる数字ではない。

の言う A_1 型では許容される傾向があると述べている。益岡(1987)のこの指摘に反論する形で、森(2001)は文学作品からの実例を調査し、益岡の分類の全ての型に「受身＋テアル」文が存在することを示した。高倉(2014)は、「受身＋テイル」と「受身＋テアル」を比較し、後者の方が動作主の存在を全面に押し出し、意志性が強く現れると述べ、「受身＋テアル」の表現に固有の意味があることを主張している。

既に述べたように、実際にコーパス（BCCWJ）を見ると、多くの用例が観察され、益岡(1987)の指摘通り、A_1 型を基盤としていると思われるものが多数を占める。以下に BCCWJ からの例をいくつか示す。

(155)　焚火の前に白布をかけた祭壇がしつらえられてある。〈配置動詞〉
(156)　先生の手紙にはこう書かれてあった。〈書記動詞〉
(157)　その壁にも例の覗き穴が巧妙に作られてありました。〈作成動詞〉
(158)　クヌギが、ねじきられてあります。〈状態変化動詞〉

書記動詞と存在動詞との共通性は寺村(1984)などでも述べられており、配置動詞（置く、並べる、飾るなど）と書記動詞（書く、記入するなど）は典型的に A_1 型に現れる動詞である。この書記動詞と配置動詞だけで、検出された 609 件中 478 件であり、割合として 78%になる。しかし、3 章で見たように、これはこの C 型だけの特徴ではなく、全体でも 74%が配置動詞と書記動詞である。ただし、全体のデータでは対象の名詞句がヲ格で現われる、B 型の文が含まれるが、C 型の場合は受身であるので必ず対象名詞句はガ格であり、文としても場面描写文である場合が非常に多い。また、先行研究では共通して「小説の中の表現」とされているが、BCCWJ のコーパス調査では比較的話し言葉に近いとされる Yahoo ブログ、Yahoo 知恵袋、また硬い話し言葉である国会会議録からも多く検出され、この三種の資料から合わせて 111 件の実例が検出された。さらに自然会話のコーパスからも 4 件の実例が見つかった[86]。

(159)　なんか、高速メソッドとやらのＣＤ３枚つきの本が並べられてあり、ＣＤもかけっぱなし。（Yahoo ブログ）
(160)　これは法に定められてあることでございます。（国会会議録）
(161)　何か金剛力士像の中に、（うん）その作った人の名前が彫り込まれてあったとか。（会話コーパス）

[86]国立国語研究所『名大会話コーパス』(以下 会話コーパス)。約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化した会話データ。

本論ではC型テアル文の意味的解釈を次のように考える。

(162)　[1]ある動作主によって、ある対象物に行為がなされ、
　　[2]その結果として、対象物の存在・状態、あるいは行為の効果が存続している。

C型テアル文は直接受動文を内包する型であるので、直接受動文を許す動詞であればどんな動詞でも使用できるはずであるが、実際には書記動詞や配置動詞が非常に多い[87]。動作主の動作よりも対象に焦点を当てた受身の表現は、動作主を降格させ、対象物の存在を場面描写的に表現するA型テアル文と意味的に整合しやすいためだと考える。

一般的にテアル構文は受動型と言われるが、すでに見たように、テアル文の対象のガ格名詞句は主語性を示さない。これは、受動文でも非対格自動詞でもそのガ格名詞句が主語性を示すのとは対照的である。

(163)　再帰代名詞
　　a. 太郎$_i$が自分$_i$の部屋で次郎に殴られた。（直接受動文）
　　b. 太郎$_i$が自分$_i$の部屋で転んだ。（非対格自動詞文）
(164)　尊敬語
　　a. 先生がマスコミにお叩かれになった。　（直接受動文）
　　b. 先生がお倒れになった。　（非対格自動詞文）

受動文の特性として、本来の外項（動作主）が随意的な付加詞に格下げされることが挙

---

[87] 目的語残留型の間接受身でもC型テアル文が可能であるというご指摘を青柳宏教授よりいただいた。
(ⅰ) 知らない間に車を壊されてある。
(ⅱ) 知らない間に壁に名前を書かれてあった。
これらの文も可能な文であると思われる。しかし、間接受身は「被害の受身」とも言われるが、被害のニュアンスが現れるような例はコーパスでは1例も出てこない。ほとんどが客観的な場面描写文なのである。ただし、609件中1件だけ対象にヲ格が現れるものが見られた。
(ⅲ) あんなにたくさんの人たちにゆりを配り宥されてあるわたくしの友達よ。（BCCWJ（詩））
これは詩の中の一節であり、特別なニュアンスを出すための逸脱した表現に見える。
このように、ほとんどが場面描写文として使われるC型テアル文は、A型テアル文の代用として使われるようになったのではないかと想像する。野村(1983)は明治になって非情の受身文が翻訳文学の影響で使われるようになり、明治末期から大正にかけて定着し、「られてある」は昭和前期に定着したと述べている（野村1983：157）。実際江戸時代の資料では、C型テアル文は本論で扱ったコーパス（使用コーパスについては6章で述べる）の中には見られなかった。多くの先行研究で「受動型」と呼ばれるA型テアル文は対象指向性で動作主が抑えられるという点で意味的に受動文と近いので、混同されて行ったと考えることもできる。

げられる。この結果として、主語位置が空き、そこに内項の対象の名詞句が移動して主語となる。C 型テアル文では、受動文と同様に内項の名詞句が主語位置に移動すると考えられるため、そこから次のような予測が得られる。

(165) 予測[1]：主語位置が内項の名詞句の移動先となるため、そこで主語性が得られる。したがって、尊敬語や再帰代名詞のテストにも合格する。
予測[2]：テアル構文の内側に受動文が存在するため、従来のテアル構文では許されない「～によって」句が出現する可能性がある。

予測[1]のとおり、C 型テアル文のガ格名詞句は主語性のテストを通過する。

(166) a. 十字架にイエス様がはりつけてある。
b.*十字架にイエス様がはりつけておありになる。
c.* 十字架にイエス様がはりつけておありだ。
(167) a. 十字架にイエス様がはりつけられてある。
b. 十字架にイエス様がはりつけられておありになる。
c. 十字架にイエス様がはりつけられておありだ。

（166a）は通常のテアル文であり、すでに述べたようにガ格名詞句に主語性がないため、尊敬語の標的とはならず、（166b,c）は非文となる。（167b,c）の C 型テアル文では尊敬語化の結果が明らかに向上している。再帰代名詞のテストでも同様の結果が得られる。

(168) a. 椅子に太郎が縛りつけてある。
b. *椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛りつけてある。
c. ?椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛りつけられてある。

（168a）は、話者がしたことであれば B 型の解釈になる。しかし、部屋のドアを開けて、その光景を見たときの発話であれば、A 型テアル文としての解釈となる。A 型の文だと捉えた場合、（168b）は「自分」が太郎を指せるかどうかということよりも、まず文自体の意味がとりにくい。なぜなら、A 型にはゼロ代名詞の主語が存在しないため、「自分」の先行詞になるものがないからである。話者が自分の紐で縛ったのなら、ドアを開けたときにこの文を発することはない。「自分」の先行詞が太郎だと捉えると、「太郎が何かを縛り付けてある」という解釈も出てきてしまう。それに比べ（168c）は、母語話者によっては「受身＋テアル」の形自体の不自然さは感じるだろうが、この形を許す話者は、その紐が太郎のものであるという確信（名前が書いてあったり、見覚えのあるものであ

ったりと言った証拠がある場合）さえあれば「自分」の先行詞が太郎であるという解釈で文として成り立つ。少なくとも「自分」の先行詞が「太郎」になるという解釈は通常のテアル文よりC型テアル文のほうが得やすいだろう。

予測[2]に関しても、C 型で明らかな差が見られる。通常のテアル文は「～によって」句を許さないが、C型テアル文では不可能ではない。

(169) a. 壁に絵が有名な画家によって描かれた。
b. *壁に絵が有名な画家によって描いてある。
c. ?壁に絵が有名な画家によって描かれてある。

(170) a. 門が守衛さんによって開けられた。
b. *門が守衛さんによって開けてある。
c. ?門が守衛さんによって開けられてある。

「～によって」句は受動文でもすべての受動文に許されるわけではない。「～によって」は文体を選ぶ形式で、「動作の主体という意味に注目した形式」（日本記述文法研究会2009:222）と言われる。したがって、動作主の存在を抑えた形式であるテアル文と合わないという不自然さはあるかもしれないが、（169b）（170b）が全くの非文であることに比べ、（169c）（170c）のC型テアル文では「によって」句の出現が不可能ではないということに注目されたい。このように、C 型テアル文では主語性が見られるという予測が裏付けられた。

4.6 テアル文の類型～再考

2.8.1 節で語幹動詞が変化動詞以外の動詞であり、対象の名詞句がガ格で表示されている文は B 型テアル文であると主張した。4.3 節でその主張の根拠となる主語の存在に関わる現象を考察した。更にもう一つの根拠として、この種のテアル文が青天の霹靂文脈において、場面描写文として使用することができないということが挙げられる。

(171) （あなたが今いる場所の様子を教えてください。）
(172) #会長が呼んである。
(173) #新しいネタが準備してある。
(174) #専門家が雇ってある。
(175) #報告書が読んである。
(176) #論文が批評してある。
(177) #調整が指示してある。
(178) #鑑定が頼んである。

(179)　#時間が言ってある。

これらの文は全てすでに終わった行為の効果が存続していることを示すパーフェクトのテアル文であるため、場面描写性を持たない、抽象的な言明である。このような文は当該文脈には使用できない。

ここで一つの疑問が生じる。主語が音形を持たないB型テアル文の格付与については5 章で論じるが、対象の名詞句がヲ格でなくガ格で表すことが可能であるとすると、B型テアル文を場合分けして考察した2.8.1 で取り上げた第一のパターンでも、同様の格交替が起こるのではないだろうか。

(180)　B 型第一のパターン

[1]　pro#　(Y ニ)　X ヲ　Vc テアル　　(2.8.1 の(214)を一部抜粋して再掲)

（ただし Vc は 2.3 で規定した変化動詞および書記動詞を表す）

この雛形に合うB型テアル文は、A 型テアル文と同じ構成を持ちながら、対象の名詞句がヲ格で表示されているものである。

(181)　pro# 庭に桜の木を植えてある。
(182)　pro# 壁にピカソの絵をかけてある。
(183)　pro# 窓を開けてある。
(184)　pro# 紙を破いてある。

これらのテアル文は、青天の霹靂文脈において、場面描写文として使用することができない、そして主語位置に特定の動作主が想定されるというB型テアル文の特徴を備えており、他のB型テアル文（語幹動詞が変化動詞以外のもの）と同様の性質を持っていると思われる。

では、一体なぜ上述の格の交替がこの種のテアル文においては起こらないと言えるのか。つまり、次のような構造（すなわち主語位置に音形のない動作主主語が存在する構造）は文法によって排除されるのだろうか。

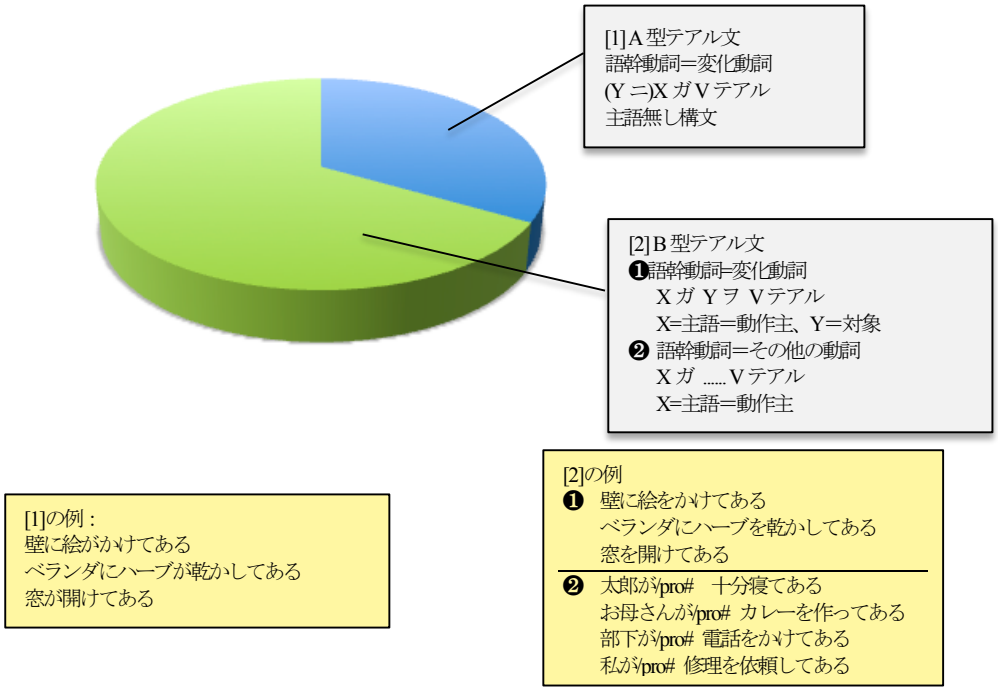
(185)　pro# 庭に桜の木が植えてある。
(186)　pro# 壁にピカソの絵がかけてある。
(187)　pro# 窓が開けてある。
(188)　pro# 紙が破いてある。

これらは表面的にはA型テアル文と区別できない。違いはA型テアル文が主語を欠いているのに対し、これらのB型テアル文には目に見えない主語が存在するということである。

そもそもB型テアル文に課せられた条件は「意図性」の条件のみであり、その条件から「動作主性」が導かれ、結果として動作主の項を持たない非対格自動詞が排除されることになる。その意味ではB型テアル文は動詞を選ばないと言える。その一方で、テアル文の対象項の格助詞がヲとガで交替するという仕組みがあったとすれば、必然的に変化動詞が用いられた場合でも、同様のB型テアル文が作られることが予測される。むしろこれを恣意的に排除することの方が難しい。

この見方は、2章でも予告しているように、本論の冒頭で示したA型テアル文とB型テアル文の関係を大きく変えることになる。当初の図式は以下のようなものであった[88]。

(189)　テアル文の図式1

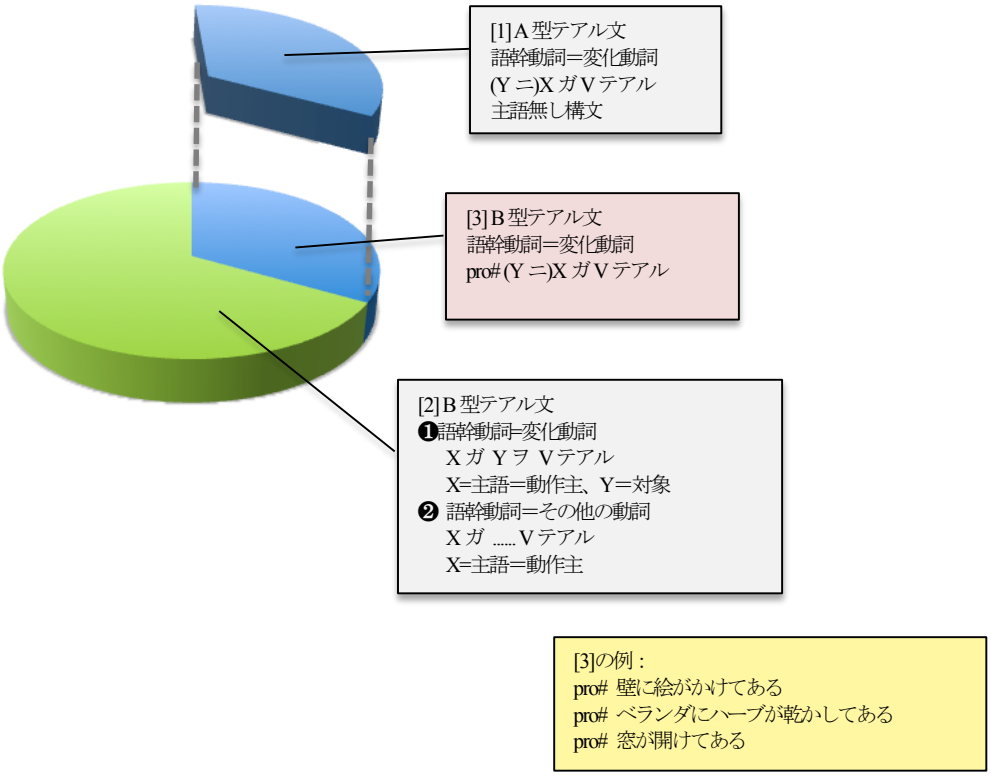


しかし、もし「B型テアル文において、語幹動詞が変化動詞である場合には対象の名詞句は必ずヲ格を伴う」という恣意的な条件を取り外してしまえば、表面上A型テアル文

[88] この図は動詞の種類を型別に見た場合の数の違いをイメージ化したものである。A型テアル文に用いられる動詞の種類がその他の動詞の種類より少ないからである。一方、言語コーパスなどで実例を調べ、延べ件数を見ると、むしろA型テアル文（で使われる動詞）の用例数が多くなるので、イメージが逆転することになる。

はB型テアル文でもありうるという、構造的な曖昧性が生じることになる。この見方を図示すると、次のようになる。

(190)　テアル文の図式2



この図式では、B型テアル文は動詞を選ばず（非対格自動詞を除く）、動作主項が音形を持たない場合（つまり主語がpro#である場合）には、対象項はヲ格とガ格で自由な格交替を示す、という状況を表している。A型テアル文はB型テアル文とは独立して、独自の意味統語特性を持ち、表面上は区別できないB型テアル文と対立していることになる。不自然で恣意的な条件が文法に存在するとは考えにくい以上、この状況の方が自然であろう。

この見方によれば、A型テアル文とは、変化動詞を語幹に取り、動作主を抑制し（結果として主語無し構文となる）対象の変化とその後の存在を主張する、場面描写的な意味を表す構文と規定することができよう。全てのテアル文の中で卓立した存在であるのがA型テアル文ということになる。実際、このように考えた方が良いと思わせるような言語事象が存在する。

影山(1996)は非対格自動詞とテアル構文を比較し、テアル構文における外項（動作主）は「表面上、姿を現さないだけで、統語構造にゼロの形式で存在するものと考えられる。」

（影山 1996:187）と述べている。次の例文では、テアル構文については、目的節（Rationale Clause）の主語（おそらく PRO）をコントロールできており、動作主指向の副詞も共起できるが、非対格自動詞ではそれが不可能であることが示されている。

(191)　廃屋に見せるために、わざと窓が壊してある。
(192)　プライバシーを守るために、意図的に名前が隠してある。
(193)　箱に品物がていねいに詰めてある。
vs.
(194)　*プライバシーを守るために、生垣が植わっている。
(195)　*わざと、壁にグロテスクな絵が掛かっている。
(196)　*箱にていねいに品物が詰まっている。

（影山 1996: 187）

影山が挙げている例文以外でも次のようなミニマルペアが存在する。

(197)　部屋にアクセントをつけるために、壁に絵がかけてある。
(198)　空気を入れ替えるために、窓が開けてある。
vs.
(199)　?*部屋にアクセントをつけるために、壁に絵がかかっている。
(200)　?*空気を入れ替えるために、窓が開いている。

比較の意味で、直接受動文を見てみると、目的節へのコントロールが可能であり、動作主指向の副詞とも共起できる。

(201)　わざと壁にグロテスクな絵が掛けられている。
(202)　箱にていねいに品物が詰められている。
(203)　部屋にアクセントをつけるため、壁に絵がかけられている。
(204)　空気を入れ替えるため、窓が開けられている。

影山は「わざと」や「ていねいに」といった動作主指向の副詞、および前述のような目的節へのコントロールの可能性から、テアル構文には外項（動作主）が統語上存在していると主張をしている。

この現象は、A 型テアル文と同じ形をした B 型テアル文が存在すると考えることで説明がつく。

(205)　[PRO 空気を入れ替える]ために、pro# 窓が 開けて ある。

control

(206)　pro# わざと 壁にグロテスクな絵がかけてある。

そもそもこれらのテアル文は青天の霹靂文脈での状況を尋ねる質問の答えとしては使用できないものである。

(207)　（あなたの居る場所の様子を教えて下さい。）
#部屋にアクセントをつけるため、壁に絵がかけてある。
#空気を入れ替えるため、窓が開けてある。
#わざと壁にグロテスクな絵が掛けてある。

目的節へのコントロールや動作主指向の副詞の修飾は、目に見えない動作主主語 pro#によって可能となるのである。つまり影山(1996)が扱っているテアル文は、一見すると A 型テアル文のように見えるが、場面描写性の欠如からわかるように、実は B 型テアル文であった。B 型テアル文であるがゆえに、主語位置には音形のある名詞句がなくとも目に見えない pro#が存在し、これがコントロールを可能にしているのである。このことから、「テアル文に目的節や動作主指向の副詞が存在すれば、それは必ず B 型テアル文である」という主張ができる。これを検証するために、再帰代名詞と尊敬語のテストを使って、例文を作ってみる。

(208)　部屋にアクセントをつけるために、壁に自分が描いた絵がかけてある。
(209)　空気を入れ替えるために、自分の部屋の窓が開けてある。
(210)　わざと壁に自分が描いた絵がかけてある。
(211)　部屋にアクセントをつけるために、壁に絵がかけておありにある。
(212)　空気を入れ替えるために、窓が開けておありにある。
(213)　わざと壁に絵がかけておありにある。

予測通り、これらのテアル文は B 型テアル文であり、音形のない主語 pro# が存在するために、それが再帰代名詞の先行詞となり、尊敬語の標的となることが可能なのである。

(214)　部屋にアクセントをつけるために、pro# 壁に自分が描いた絵がかけてある。
(215)　空気を入れ替えるために、pro# 自分の部屋の窓が開けてある。

(216)　pro# わざと壁に自分が描いた絵がかけてある。
(217)　部屋にアクセントをつけるために、pro# 壁に絵がかけておありにある。
(218)　空気を入れ替えるために、pro# 窓が開けておありにある。
(219)　pro# わざと壁に絵がかけておありにある。

このように、一見するとA型テアル文と同じ形をしたテアル文でも、場面描写性の欠如から、それが実はB型テアル文であることが分かり、pro#の存在が含意され、様々な統語現象を誘発する結果を産むのである。従って、影山(1996)の主張はあくまでB型テアル文について成り立つものである。

(220)　窓が開けてある
構造①　Δ　窓が開けてある
　　場面描写性あり　　A型テアル文　（主語なし）
構造②　pro#　窓が開けてある
　　場面描写性なし　　B型テアル文　（主語あり）

B型テアル文の成立条件は意図性の条件のみで、制約が少なく、A型テアル文は全てのテアル文の中の特殊なケースと言えることはこの章で見てきたが、3章で見たように、コーパスから抽出した実際の使用例では、明らかな眼前描写のA型テアル文が非常に多い。特に変化動詞で対象の名詞句ががガ格で現れている文は全部で148件見られたが、そのうちB型であろうと思われるものは次の2件だけだった。

(221)　軍艦の燃料にするために、松の木から採った松根油が積んであったんですね。
（書籍）
(222)　長距離フェリーでは、ペット可です。ちゃんとペット専用の部屋に、ゲージがおいてあります。（知恵袋）

（221）は目的節と共に現れているので、眼前描写というよりは、誰かの意図的な行為のことを言っているB型テアル文であると思われる。（222）は動作主指向の副詞「ちゃんと」と共起しており、目的のはっきりした行為であり、単に眼前描写をしているわけではないことがわかる。またこの文はこの後に「そんなに小さいものではないと思いますが、大型犬なら問い合わせをしたほうがいいでしょう。」と続き、施設を紹介する文であることがわかり、動作主は一人称ではないが、目的のはっきりした行為について言っていることがわかる。

しかし、この2件の文以外は、このグループの文はほとんどが次のようなはっきりと

眼前描写とわかる文であった。

(223)　その上に剣がおいてあったり、見慣れた姿の写真がかざってあったりした。
（書籍）

(224)　十五分待ちと張り紙がしてありました。　（ブログ）

これらの文は見たままを描写している文である。全てのテアル文をA型とB型に判定することは限られた文脈では難しいが、明らかに眼前描写である文が非常に多い。

本節で見たように、対象名詞句がガ格の変化動詞の場合は原理的にはA型にもB型にもなりうるのだが、実際にはその形でのB型テアル文は極めて稀である。全てのテアル文の中で、特殊なケースとも言えるA型テアル文こそが実はもっとも典型的に使われているテアル文の代表であるという状況が見られるのである。

第５章

テアル構文の構造と格標示

5.1　テアル構文の構造

すでに 4 章でも触れたように、一戸(2001)は、「A_1 型のアルは場所と出来事の項を、A_2 型のアルは出来事の項だけをとると分析し、両者はそれぞれが共起する下位動詞の意味的性質に関して制限を課している、ということになるだろう。さらに、B 型のアルは共起する下位動詞にほとんど意味的制限を課さないため、純然たる助動詞とみなされるかもしれない。」（一戸 2001:48）と述べ、テアル構文の項構造としては本論と近い見解を示している。本論でも A 型でかつニ格場所句が出現する存在表現テアル文は、補助動詞のアルが場所句と出来事の節を必須項として取ると考えている。A 型テアル文は出来事（状態変化または位置変化）の結果、対象が変化してある場所に存在することを述べるわけだが、出来事の意味は語幹動詞が、場所における存在の意味は補助動詞アルが表現している。従って、A 型テアル文に現れる補助動詞アルは、出来事を表す統語的な単位を一つの項として、場所を表す表現（ニ格場所句）をもう一つの項として選択する二項述語であると分析する。2.6 で検討したようにニ格場所句が導入できない場合は、出来事だけを取る一項述語として機能する。さらに語幹動詞が表す出来事の項は具体的には VP によって表されるものとする。一方、B 型（パーフェクト）テアル文は VP ではなく *v*P を唯一の項とする一項述語であると主張する[89]。

(1)　A 型　存在表現・結果状態テアル　アル$_1$：二項述語　<Location, Event>[90]
(2)　B 型　パーフェクト・テアル　アル$_2$：一項述語　<Event>

5.1.1　A 型テアル文と B 型テアル文の構造

具体的にテアル構文の構造を検討する前に、前提となる単文構造の構造を概観する。本論では EPP の素性が little-*v* にあり、little-*v* の指定部に外項が併合されると考える[91]。

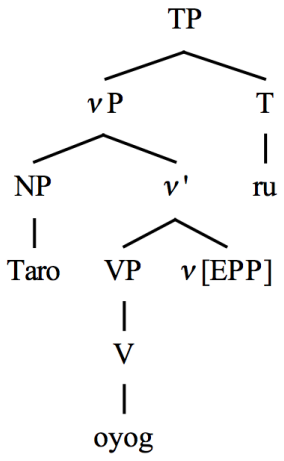
---

[89] これ以降、便宜上 A 型テアル文のアルを[ar$_1$]、B 型テアル文のアルを[ar$_2$]、と表記する。
[90] ただし、条件が整わないと Location は導入できないこともある。2.6 を参照されたい。
[91]一般的に I または T に EPP 素性があり、その制約は普遍的に強いとされるが（Chomsky 1995 など）、日本語の場合、EPP 素性がないという議論もある（Kuroda 1988 など）。Saito(2006) は、日本語の場合使役文の埋め込み主語が主語性を持つことから、little-*v* の指定部が主語であることを主張している。しかし Saito(2006) は非対格自動詞や受動文では *v* が EPP 素性を持つとしているが、それ以外の文については結論を保留している。本論では暫定的に全ての *v* に EPP 素性があると仮定する。また Kishimoto(2012)は尊敬語の現象を説明するために、VP, *v*P, HP（尊敬語の投射）

そして little-*v* の指定部にあるものが主語であり、主語性を得ると考える （Saito 2006, Takano 2011 など）。また、長谷川(1999)、Kishimoto(2012)、Nakatani(2013)などに倣い、拘束形態素は述語上昇により上位の機能範疇や補助動詞などに編入され、語幹動詞が *v* まで順次上がっていくものとする。そして本論では主格付与はTの指定部では行われず、T が EPP 素性を持っていないと仮定しているため、名詞句は T の指定部に上昇することはないものとする[92]。

まず、非能格自動詞文の構造を次のように考える。非能格自動詞文の場合、動作主である外項が存在し、内項は存在しない。そのため、VP 内では *θ* 役割の授受は行われない。外項は動詞が単独で付与することができず、必ず動詞が little-*v* 主要部に編入した後、動詞＋*v* の複合体が（動詞が元々持っていた）動作主の役割をその指定部に与える。動詞が *v* に上昇・編入した後、「太郎」が併合し、Agent の役割を受け取ると同時に、EPP を満たす。この段階で「太郎」は主語性を得る。[V-*v*]はさらに T に編入する。

(3)　非能格自動詞
　　太郎が泳ぐ



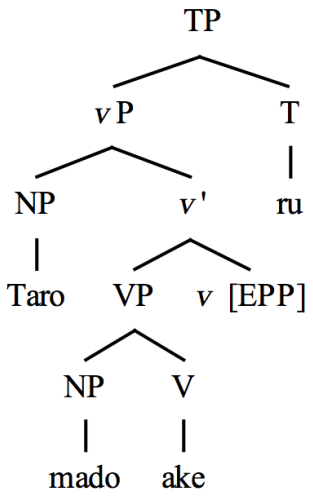
次に他動詞文を見る。典型的な他動詞の場合、外項が動作主で、内項は対象である。内項の *θ* 役割は VP 内で目的語に付与される。動詞が *v* に編入し、その結果「太郎」が併合し、Agent の役割を受け取ると同時に、EPP を満たす。この段階で「太郎」が主語と認定される。

がその順で上むきに階層構造を作ると考え、*v*P の指定部が主語の属性を与えるとしている。本稿はこれらの研究にならい、*v*P の指定部に入る要素が「主語」と認定されるという立場を取る。

[92] これに対して、Kishimoto(2012)や Nakatani(2013)などは主格主語は vP の指定部に併合され、その後、TP の指定部に上昇すると考えている。これは TP の指定部において主格が認定されるという想定があるからである。本稿の直接の研究対象であるテアル文に関しては、主語が TP の指定部まで上昇することを支持するような積極的な証拠が見当たらないため、TP 指定部までの移動は想定していない。しかし仮にその上昇が経験的に裏付けられたとしても、本論の主張には影響がない。

(4)　　他動詞

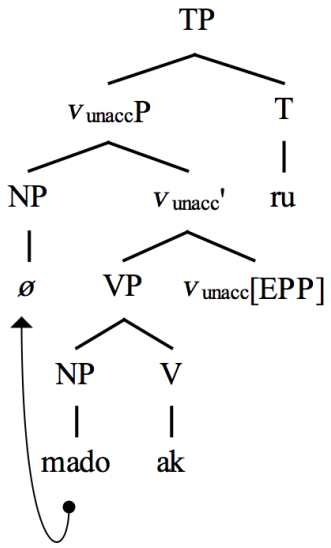
太郎が窓を開ける



これに対し、非対格自動詞は外項がなく、内項のみを持つ。Fukuda(2012)に倣い、非対格自動詞文の場合、VP を取る機能範疇を v_{unacc} と表記する。内項の θ 役割 Theme は VP 内で目的語に付与される。動詞が v_{unacc} に編入した後、複合体は付与されていない θ 役割をもう持っていないため、外から新たな項を併合することはできない。EPP を満たすためには、何かが v_{unacc}P の指定部に存在しなければならず、これは VP 内の目的語の繰上げによって達成される。これにより非対格自動詞の内項は主語性を得る。

(5)　非対格自動詞

窓が開く



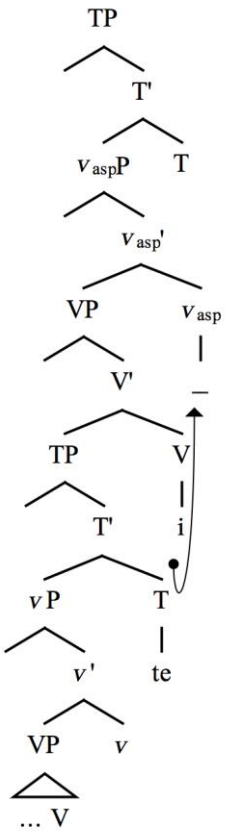
このような構造の考え方を前提とし、テアル構文の構造を考察する。テ形については

語幹動詞が補助動詞に編入されたとき[93]、形態音韻的操作によりテ形になるものとする[94]。

では、補助動詞アルの範疇は何であろうか。Kishimoto (2012)はテイル文の構造において、イルは独立した語彙項目として V に生成され、その上位にある機能範疇 v_{asp} の主要部に上昇すると主張している。

(6) 雨が降っている（動作の継続）

(7) 床が濡れている（結果状態）



[93] 後に見るパーフェクト・テアル文（B 型）や「受身＋テアル」の文（C 型）では間に *v* が介在することがあるが、*v* には音形がないため、語幹動詞と補助動詞の連結の場合に準じてアルの直前の音形のある動詞（受身形態素を含む）がテ形になる。

[94] 「はじめる」などのアスペクト助動詞や多くの複合動詞では連用形接続となるが、本論では連用形接続となるかテ形接続となるかは語彙的に決められていると考える。つまり、後接する要素（補助動詞やアスペクト助動詞など）が語幹動詞の活用形を選択していると想定する。しかし、テの意味をどこまで考えるかは研究者によって意見が分かれており、例えば Kishimoto(2012)や Nakatani (2013) はテをタの異形態として、テを T と位置付けている。また Oshima (2014) は、接続した時のアクセントの変化など、音韻的な根拠から、テ形を「連用形＋助詞」と捉えている。また内丸(2006)はテをアスペクト主要部と位置付けている。一方 Miyagawa and Babyonishev (2004) や Muraki (1986) はテに意味をもたせていない。補助動詞用法のテ形接続では、語幹動詞と補助動詞の間に「さえ」などのとりたて詞を入れることができることから、イ形接続との結合性の違いが指摘されるが、同時に否定極性などの観点から複文構造とは異なることも指摘される（Nakatani 2013 など）。本論では補助動詞用法において、テ形は単なる連用形の活用の一種と考える。このことについては 6.5 で詳しく述べる。

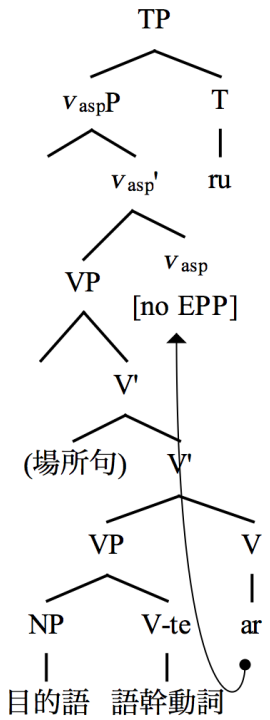
本論では、アスペクト的性格を持つ補助動詞イルとアルは同一範疇に属するものとする。Kishimoto (2012)にならって、アルはVとして生成され、後に上位の v_{asp} に上昇する要素と考える。また v_{asp} はEPP素性を持っておらず、その指定部に要素を牽引することはない。本論ではテ形のテを独立したTとは考えておらず、本動詞の形態的変異の一種とみなす。一つの単文においてテ形は繰り返し使用できるが、このような仮定をすることで、テが出る度に新たなTPを作ることを避けられるという利点もある。

(8)　（すでに箱を）開けてみてもらっていた。

やはり一つの複合動詞として形成されるのに、そこにテンスがいくつもあるというのは、現実の感覚とは合わないと思われる。Tが時制を表す以上、時制の解釈のプロセスにおいて、単文でありながら、複数の時制要素をほぼ空虚な形で処理しなければならないのは、システムとして不必要な余剰的操作であろう。

A型テアル文の構造は概略次のようなものとなる。

(9)

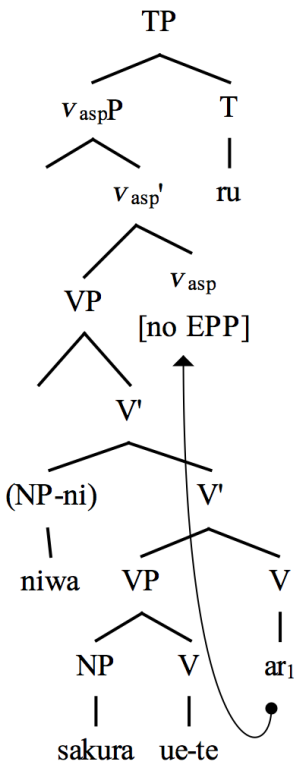


A_1型テアル文（ニ格場所句を伴う存在表現）の構造を次のように考える。A型テアル文のアルを便宜上[ar_1]とすると、語幹動詞が[ar_1]に、そしてTにと順次上昇し、複合体（complex）を作ると考える。アルは vP ではなくVPを補部にとる。アルの機能が動作主を削除して主語無し構文を作るものだと考えれば、このような構造も自然であるとい

えよう。

V として生成される[ar_1]は VP を補部にとり、それに加えて場所句を取る。ただし、ニ格場所句の位置は統語上あるものの、条件によっては導入できないこともある[95]。また、[ar_1]が取る場所句の項は語幹動詞「植える」が取る場所句の項と二重に表出することはなく、そのような場合には語幹動詞の場所句が抑制されると考える（ニ格場所句については 2.6 を参照されたい）[96]。

(10)　A_1 型：存在表現テアル
　　庭に桜が植えてある



[ar_1]が VP を取るということは、その直上に *v*P の層がないことを意味し、したがって、*v* の持つ EPP 素性によって *v*P の指定部に名詞句が併合されることもない。つまり *v*P の指定部が主語と認定される位置と考えるなら、A 型テアル文には主語が生成される場所がない、つまり主語無し構文であることになる。Miyagawa and Babyonishev (2004) は T

---

[95] 詳しくは 2.6 を参照されたい。

[96]語幹動詞がもともとニ格を取る動詞の場合に、テアル文に現れるニ格場所句の由来を特定することは難しい。[ar_1]が随意的にニ格場所句を導入するのであれば、そうした動詞の場合のみその機能が制限されるという状況はあり得ないものではない。しかし表面上現れているニ格場所句が作用の到着点ではなく存在の場所であるという母語話者の言語直観を重視するのであれば、A 型テアル文におけるニ格場所句は常にアルが導入するとした方が自然である。

(ｉ)　<u>机の上に</u>本が置いてある。

(ii)　<u>冷蔵庫に</u>りんごがむいてある。

にEPP素性があるとしているが、彼らも同様に、A型（intransitivising resultative）のテアル文ではEPP素性のないTを提案している。彼らの主張では、EPP素性について、「非対格自動詞を含む*v*PをとるT以外のTで普遍的に強い」として、テアル構文ではEPP素性のないTを想定している。しかし、アルが非対格自動詞だからということであれば、（テ）イルも同じ特性を持つはずだが、（テ）イル[97]にはEPP素性があると考えられる。この違いは、テアル文が場所句を伴う存在動詞アルの性質を継承していることを示している[98]。つまり、もともと主語のない存在動詞アルの構文にならってNPの位置にVPを埋め込んだと考えられる。すでに4章で見たように、再帰代名詞や尊敬語のテストで見る限り、このA型テアル構文のガ格名詞句にもニ格名詞句にも主語性が認められない。また、[ar_1]は他動詞およびト節を取る動詞のみと結合し、非能格、非対格とは共起しない。これは[ar_1]が 語幹動詞のAgentを背景化し、かわりにThemeを前景化するという特性を持っているため、これに矛盾しないθ枠、つまりAgentとThemeの両方を持つ動詞としか結合できないからである[99]。つまりAgentとThemeを持つ動詞と結合して、そのAgentを消し去り、Themeを卓立させるのがアル（[ar_1]）の機能であるといえる。

次に、ニ格場所句の現れないテアル文の構造を見る。先の構造と同様に、[ar_1]が語幹動詞を主要部に持つVPを選択し、[ar_1]のVがv_{asp}に上昇する。要素が入らないニ格場所句の位置をΔで示している。

---

[97] 本動詞イルには命令文にできるなど、非能格としての側面もあるが、通常の用法では非対格だと考えられる。歴史的に見ると中世までは「居る」は動作動詞であったが、テイルの用法に関してはイルが有生物の状態を表す状態動詞として定着してから確立した用法であり、非対格自動詞と考えることが自然であろう（福嶋 2000、金水 2006、神永 2009など参照のこと）。

ただし命令文に関しては、通常は音形の無い二人称の動作主が常に存在するため動作主の無い非対格自動詞は命令文にならないものの、祈願文などの場合はこの限りではない。この意味ではアルも命令文にできる。

(ⅰ) 志は高くあれ

(ⅱ) 君に幸あれ

しかしこの種の文は命令形を使っていても、聞き手への動作を促すものではなく、常に二人称の動作主（音形の無いPRO）を含む通常の命令文とは異なる。これは命令文の種類の問題として、ここでは分析に含めない。

[98] 存在表現には場所句を伴うものと、所有など場所句を伴わないものに大きく分けられるという考えがある（西山 1994、Muromatsu 1997, 金水 2006など）。テアル構文に関しては、この場所句を伴う存在文が文法化したものだと考える。

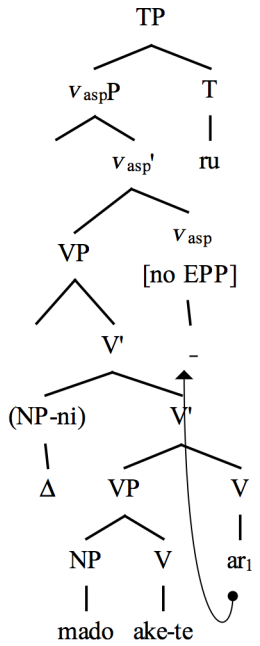
(ⅰ) 机の上にリンゴがある。

(ⅱ) 太郎に妹がある。

(ⅰ)のガ格名詞句は、Themeで、目的語であり、ニ格はあくまで場所句であり、主語の無い文であると言える（久野 1973も参照のこと）。それに対して所有文の(ⅱ)は、能格型（Kuroda 1992など参照）で、ニ格で現れる「太郎」が主語となっている。存在表現については6章で論じる。

[99] これについては前述のToratani (2007) のLACと本質的に同じ考え方を採っている。ここではト節もthemeと見做している。

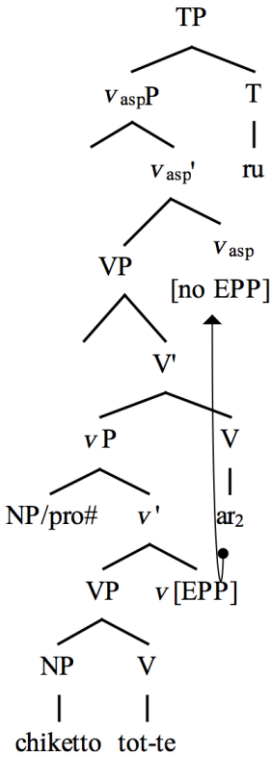
(11)　A_2 型：結果状態テアル
　　窓が開けてある



この後 [ar_1] と同様、[V-v_{asp}] が T に編入して派生が完了する。ニ格場所句を伴う存在表現テアルと同様に、状態変化のみを表す A 型テアル文では外項を導入する *v*P の階層がないため、Theme は上昇することがなく、したがって主語性を得ることはない。また他動詞としか共起しないのも、存在表現テアルと同じ理由からである。

これに対し、B 型のパーフェクト・テアル文は、[ar_2]が *v*P を補部にとる一項述語であると考える。

(12)　B 型：パーフェクト・テアル
　　（太郎が）チケットをとってある。



この構造には必ず動作主が主語として存在し、その主語は *v*P の指定部に併合される。*v*P を時制のない埋め込み文と考えれば、B 型テアル文は使役文や間接受動文と同様の性質を持つということになる[100]。 [ar_2]は θ 役割的に完結した複合体としての *v*P を補部にとるので、それはいわば「文」をまるごと取ることに等しい。したがって、語幹動詞の性質には無頓着であるが、すでに 2.8.2 で見たように、動作主による意図性が前提となっているため、結果としては他動詞か非能格自動詞に限定される。*v*P の指定部に生じる名詞句は音形があろうがなかろうが、統語的には可視的であり、この位置に主語性が見られることになる。

ここまでをまとめると、存在表現テアルは、本動詞アルの構造に似た、場所句を伴う型に現れる。場所句が条件に合わずに生成されなかった場合には結果状態テアルの構造になる。これらの A 型テアル文の構造における補助動詞アルは *v*P を取らずに直接 VP を取るため、主語のない文になる。B 型パーフェクト・テアルは *v*P を補部にとり、その指定部に主語となる名詞句が存在する。その主語位置には音形のない特殊な pro、pro# が現れることがある。このように、2 種類のテアル文の構造の違いから、4 章で見たような主語性の有無が導かれる。

5.1.2　C 型テアル文 : 受身＋テアルの構造

一般的に A 型テアル構文は受動型と言われるが、すでに見たように、対象のガ格名詞句は主語性を示さない。これは、受動文でも非対格自動詞でもそのガ格名詞句が主語性を示すのとは対照的である。

(13)　再帰代名詞

a. 太郎$_i$が自分$_i$の部屋で次郎に殴られた。（直接受動文）

b. 太郎$_i$が自分$_i$の部屋で転んだ。（非対格自動詞文）

c. *椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛りつけてある。（A 型テアル文）

(14)　尊敬語

a. 先生がマスコミにお叩かれになった。　（直接受動文）

b. 先生がお倒れになった。　（非対格自動詞文）

c. *山田先生にリボンがつけておありになる。（A 型テアル文）

A 型テアル文の構造では、動作主と対象の両方を項として持つ動詞としか共起できないことを先に述べた。つまり、アルは動作主を背景化し対象を前景化する機能を持つため、動作主項のない非対格自動詞とは共起しないが、受動文において動作主は完全には消失

[100] 使役文では Saito (2006) と同様 sase が *v*P を補部にとるという構造を考えている。

していない。一般には非対格自動詞と受動文は共通点を多く持つと考えられるが、動作主が全く存在しない非対格自動詞と動作主が付加詞に降格した受動文とはその性質が異なる。したがってテアル文と受身が共起することも理論的に可能である。本来、補助動詞アルが語幹動詞の動作主項を抑制するのだが、アルと結合する前に受動形になることで、語幹動詞がすでに動作主項を抑制した状態で、補助動詞アルと結びつくことになる。これは機能的には余剰性があるように思われるが、その点がこのタイプのテアル文の許容度を下げているとも考えられる。

すでに4章で見たように、C型テアル文「受身＋テアル」の型においては、ガ格名詞句が主語性を示す。

(15) a. *椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛りつけてある。
b. ?椅子に太郎$_i$が自分$_i$の紐で縛りつけられてある。

(16) a. *十字架にイエス様がはりつけておありになる。
b. 十字架にイエス様がはりつけられておありになる。

さらにC型テアル文「受身＋テアル」の型では、降格された動作主を「によって」で表すこともできる。

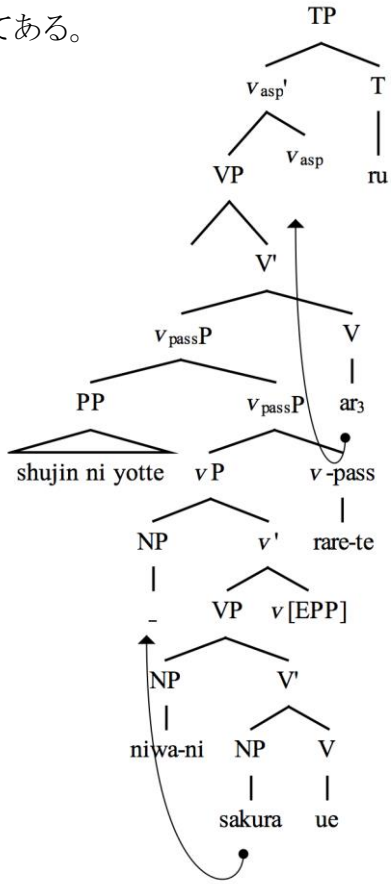
(17) a. *窓が守衛さんによって開けてある。
b. 窓が守衛さんによって開けられてある。

なぜこのような現象が起こるのかと言うと、やはりテアル文と受動文において主語に本質的な違いがあるためだと思われる。「受身＋テアル」の構造を次のように考える。

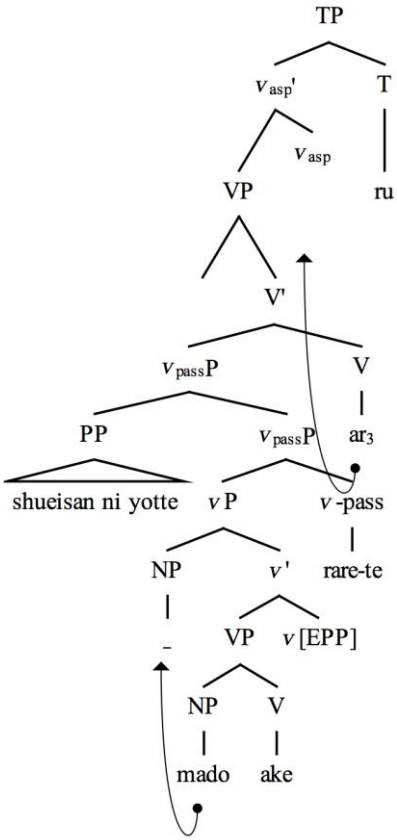
まず受動文の基本的な構造については、Kishimoto(2012)にならって、VP、その上にある*v*P、そして*v*-pass という機能範疇を主要部に持つ*v*PassP の三層構造を想定する[101]。C型テアル文のアルを[ar$_3$]とすると、[ar$_3$]は、通常のA型テアル文のようにVPを、あるいはB型テアル文のように*v*Pを、補部にとるのではなく、受動文の*v*-passPを補部にとると仮定する。語幹動詞の動作主項は随意的に*v*-passPの付加詞として現れると考える。

[101] 受動文の構造については、Fukuda(2006)、長谷川(2007)、Fukuda(2012)、Kishimoto(2012)など、異なる考え方が存在する。本論は受動文の構造そのものを検討するわけではないので、どの分析が一番有望なものであるかというような判断は下せない。本論では暫定的にKishimoto(2012)の基本的な枠組みを、一部を変更した上で、採用した。

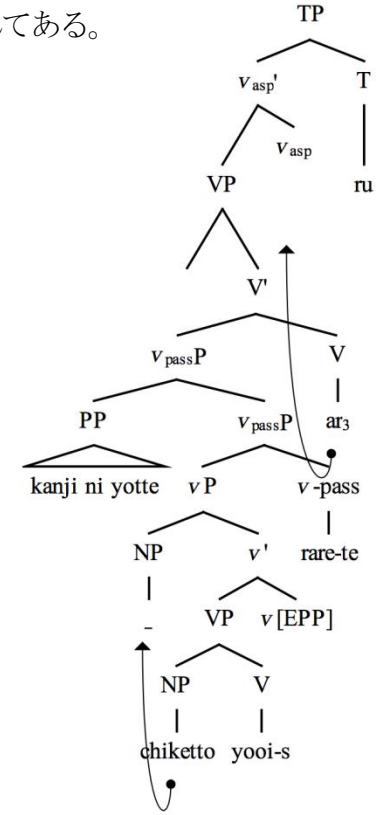
(18)　　（主人によって）桜が庭に植えられてある。



(19)　　（守衛さんによって）窓が開けられてある。



(20) （幹事によって）チケットが用意されてある。



これらの構造が示していることは、C 型テアル文（受身＋テアル）においては *v*-passP が完全な受動文であるため、このレベルにおいてすでに主語性が保障されているということである。具体的には、通常の受動文のように語幹動詞の内項（対象）が *v*P の指定部に入り、そこで主語性を得ており、その後で、*v*-passP の形成の後、アルと結合するため、主語性は影響を受けないのである。主語性を得ることで、語幹動詞の内項（対象の名詞句）は再帰代名詞「自分」の先行詞になることができ、尊敬語を誘発することもできる。また通常の受動文のように、*v*-passP 内部に降格された動作主を「～によって」句で表現できる。これらの特性は通常のテアル文、とりわけ A 型テアル文では見られなかった特性であるが、C 型テアル文は受動文を内側に含むがゆえに、こうした受動文の特性をそのまま継承している。

5.2　テアル構文における格付与

本論ではテアル構文を二分類し、対応する構造が異なることを示した。この節では二つのテアル構文のタイプの構造に基づく格付与のメカニズムについて考察する。特に B 型パーフェクト・テアル文は統語上の主語が存在するという点で A 型と異なる。繰り返し述べてきたように、従来の研究では主語性を問題にせず、対象項がガ格で現れれば「A 型（受動型）」、動作主がガ格で現れるか対象がヲ格で現れれば（非能格自動詞の場合は動作主のガ格のみ）「B 型（能動型）」とされてきた。特に生成文法の枠組みでの研究で

は格表示が文のタイプを見分ける絶対的な指標とされてきたが、本論ではB型パーフェクト・テアル文（能動型）においては対象がガ格で現れようがヲ格で現れようが同等にB型パーフェクト・テアル文であるという立場をとる。益岡(1987)もB_1型テアルのヲ格をガ格に変えた文をA型とは呼んでいない。後の研究者がヲ格とガ格のミニマルペアを用いてA型とB型の違いを示すために、格表示のみをよりどころにしたものと考えられる。本節ではテアル構文における格付与のシステムがどのようになっているかを論ずる。

5.2.1 Marantz (2000)

本論ではMarantz(2000)のモデルを取り入れる。Marantz(2000)はそれまでの抽象格と格フィルターによる格理論の余剰性を指摘し、theta理論と形態格を決定する理論があれば,抽象格の理論は不要だと主張した。例えば、(21）の基底構造が（22）であるとした場合、IPがEPPによって主語を要求すると考え、さらに移動のほうが虚辞の挿入よりもコストが低いという経済性の原理を想定すれば、抽象格の理論がなくても文が正しく認可されることを示した。

(21) a. *It arrived the man.
b. *It was sold the picture. （Marantz 2000:15）

(22) a. *e* arrived the man.
b. *e* was sold the picture. （Marantz 2000:17）

(23) a. The man arrived.
b. The picture was sold.

つまり、抽象格に依存した標準的な説明では、（21）において、主語が存在しないとき（non-thematicな主語のとき）に目的語に対格が付与されないため、構造が認可されていないと考えられているが、よりコストの低い目的語の移動によって主語の要求（EPP）が満足している(23)の方が、コストの高い虚辞の挿入による(21)を排除すると考えれば、抽象格に依存した説明は不要であるとMarantz(2000)は考えている。

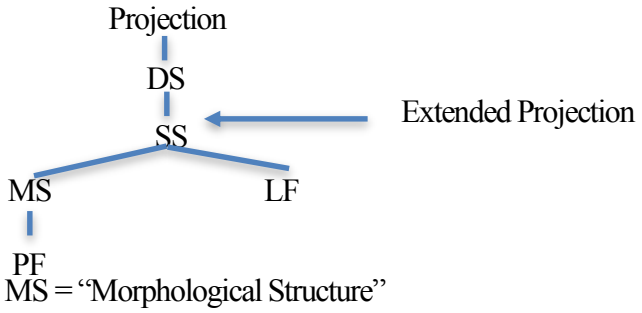
またアイスランド語の例を挙げ、抽象格と形態格を分けて考える必要性を示している。

(24) a. María óskað (Ólafi) alls goð.
Mary-$_{NOM}$ wished Olaf-$_{DAT}$ everything-$_{GEN}$ good-$_{GEN}$
b. *pess vas óskað.*
this -$_{GEN}$ was wished
c. *Henni var óskað pess.*
her -$_{DAT}$ was wished this -$_{GEN}$ （Marantz 2000:18）

（24a）は二重目的語だが、どちらの目的語も奇態格（quirky な格）で現れている。（24b）は受動文だが、受動化によって目的語が主語になっても、形態としては属格のままである。（24c）も受動文だが、受動文であってもいつも直接目的語が移動しなければならないというわけではない。動詞によって異なる格を支配する言語では直接目的語が属格で現れているが、直接目的語であることでその形態格を得ているのであって、その形態格によって直接目的語として認可されるというわけではないことを示している。Marantz は、形態格はそれ自体項の認可に関わるものではないと述べている。

そこで、Marantz は「抽象格の理論」なしの文法モデルを以下のように提示した。

(25)



（Marantz 2000:19）

まず、lexical な要素、つまり語彙的に決められている要素が D 構造（DS）に投射される。次に EPP が S 構造（SS）で主語を要求する。形態格と一致の要素は解釈の要素なので、SS の後で、形態構造（Morphological Structure-MS）で挿入されるとした。そして、形態格と一致の要素は構成素同士の S 構造の関係を説明するが、項の位置での NP の分布を決めるものではないと述べた。

さらに、格の実現は選言的 (disjunctive) 階層によるものとし、形態格には次の 4 種類があり、より上位のものが優先的に適用されると主張している。

(26)　格の実現の選言的階層
　　－語彙的に統率された格
　　－「依存」格（対格と能格）
　　－無標の格
　　－デフォルトの格　　(Marantz 2000:24)

Marantz(2000)によれば、語彙的に統率された格とは述語によって決定される固有格（inherent case）のことである。依存格は構造的に他の名詞句との関係によって決まるものである。無標の格は出現環境により影響を受けやすいもので、NP の中の属格や、IP

の中の主格がこれにあたる。デフォルトの格は、どの格も該当しない場合に与えられる。また、能格言語における能格と、対格言語における対格は依存格であるとしている。そして、依存格の定義を次のように示している。

(27) 依存格は、V+I によって統率されているもう一つ別の位置が次のようなときに V+I によって統率される位置に付与される。

a. 「有標」ではないとき
（語彙的な格決定詞によって統率される連鎖の一部ではない）

b. 依存格が付与される連鎖と異なるとき
上方の主語に付与される依存格：能格
下方の目的語に付与される依存格：対格 (Marantz 2000:25)

この理論に沿って考えれば、日本語のヲ格は依存格となり、その出現はもう一つの項に依存しているということになる。次の節で日本語の格について青柳(2006)をもとに考察する。

5.2.2 日本語の格付与

Marantz(2000)の考え方は、日本語の形態格を考える上でも非常に有効である。Marantz (2000)をふまえ、青柳(2006)は日本語の格付与の優先順位について以下のように分析している。

(28) a. 与格の ni （固有格）
b. 対格の o （依存格）
c. 主格の ga （デフォルト格） （青柳 2006:67）

格付与に当たって、まず固有格のニが付与される。これは語彙的に決まっている格なので、最も優先順位が高い[102]。次に依存格のヲが付与される。最後に、ニもヲも付与されないときにのみデフォルトのガが付与されるとした。依存格のヲは主語の存在に依存しているとして、対格付与規則を次のように提案している。

[102] 青柳(2006)は、「できる」などの状態述語は能格型としているが、ニ格名詞句は依存格ではなく固有格としている。Marantz (2000)によれば、能格言語における能格と、対格言語における対格が依存格なので、日本語は能格言語ではなく対格言語に属するため、依存格はヲのみとしていると考えられる。

(29)　対格付与規則

対格の o は、最小の時制文において、別の無標名詞句に c 統御される無標の名詞句に対して付与される。

（青柳 2006:66）

ここで言う「無標名詞句」とは、この規則が適用される時点で、形態格が付与されていない名詞句である。構造上より上位にある無標名詞句が下の無標名詞句を TP 内で c 統御していることによって、下の名詞句が上の名詞句を「見る」ことができ、(28) の規則が適用される。

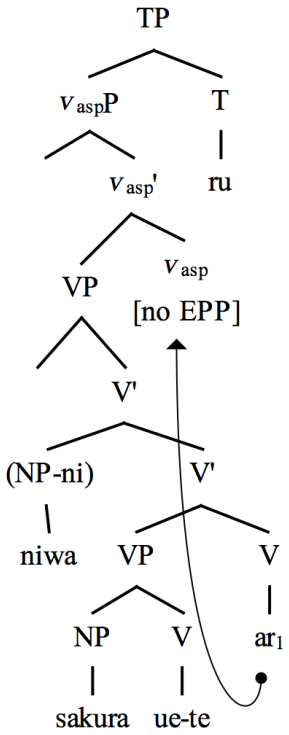
Marantz (2000) と青柳(2006)の形態格付与の考えに従って、次の節ではテアル構文の格付与について考察する。

5.2.3　テアル構文の格付与

テアル構文の格付与について二種類のテアル構文を順に見ていく。Marantz(2000)によれば、格と一致は解釈の要素なので、SS の後で、形態構造（Morphological Structure-MS）で挿入される。つまり、形態格の格付与は統語上の操作が終わってからなされる。

A_1 型の存在表現テアル文では ar_1 に備わっている固有格のニがあらかじめ第 1 項（場所句）に付与される。残りの無標の項は一つなので、対象である「桜」にデフォルトのガが付与される。参照すべきもう一つの名詞句が上にないので、対象に依存格のヲが与えられることはない。存在文のニ格名詞句が項であるように、本動詞のアルに近い存在表現テアル文の項として、ニ格名詞句が具現するものと考える。

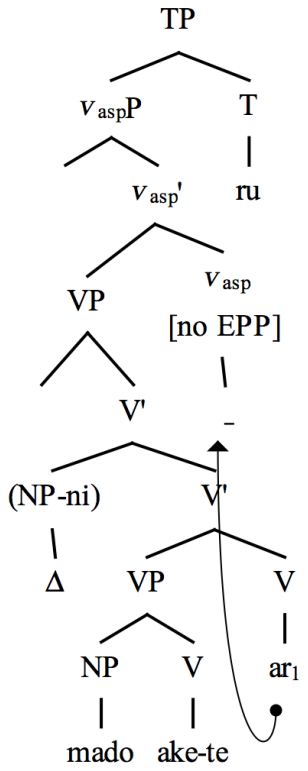
(30)　庭に　桜が　植えてある。
　　ni　　ga



A_2 型の結果状態テアル文にはニ格場所句がないので、唯一の項がガ格で表わされる。この場合も参照すべきもう一つの名詞句がないので、ヲが出てくることはない。

(31)　窓が 開けてある

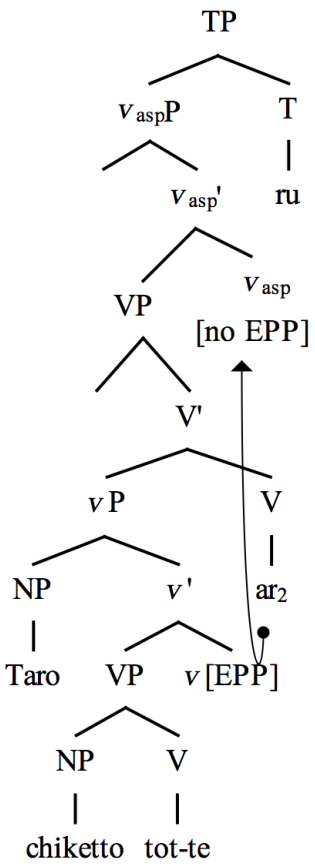
ga



多くの先行研究で受動型とされる対象がガ格で現れるテアル文に関して、ガ格を得るために対象の名詞句が主格を受ける位置まで上昇していると分析されているが、本論が採用している形態格付与のシステムでは、上昇を想定する必要がなく、もとの目的語の位置（語幹動詞の補部の位置）に残ったままガ格を得る。ガ格が必ずしも主語を意味しないことが、この格付与のメカニズムから予測される。

一方、B 型のパーフェクト・テアル文では *v*P を補部にとるため、θ 役割としてはその内部で完結しており、*v*P 内に動作主と対象が存在する。この場合名詞句が二つ存在するので、下の名詞句が上の名詞句を「見る」ことで依存格が付与される。残った名詞句に、デフォルトのガが付与される。

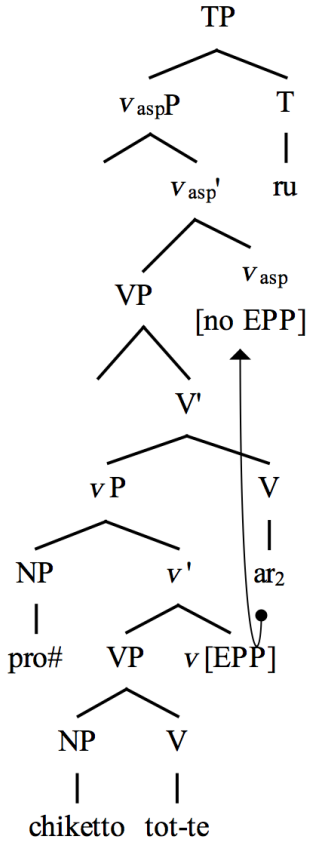
(32)　　太郎が　チケットを　取ってある。
　　ga　　o



ここまで述べてきたように、B 型パーフェクト・テアル文には必ず動作主の主語が存在するが、それは音形のない pro#として現れることも多い。この場合は、格付与に選択の余地がある。すなわち pro#を「見て」対象の名詞句にヲ格を付与するか、「見ないで」ガ格を付与するかの選択であり、それは自由な交替であると考える[103]。

[103] 青柳(2006)は、名詞句が参照可能となる可視条件を二つ挙げている。一つはその名詞句が独自の主題役割を与えられていなければならないことで、もう一つは名詞句の連鎖の〈+θ〉位置のみであるというものである（青柳 2006: 71-72）。B 型のパーフェクト・テアル構文の場合、どちらも満たしているので、参照可能であると考える。ただし、音形のない pro#には形態格はつかない。

(33)　チケットが／を　とってある。
　　ga / o



このB型に現れるpro#はこうした随意的な参照対象となる点で、通常の文脈指示のproとは異なる。通常の文脈指示のproは格付与規則にとって必ず参照しなければならないものだからである。

(34) *pro　魚が　食べた（「誰かが魚を食べた」の意で）

このような特徴はテアル文だけの特別な現象ではなく、可能動詞や願望のタイなど、対象がガ格でもヲ格でも現れ、意味にほとんど違いがないものは同じ規則で扱えるのではないかと考えられるが、主語の出現の点において違いがあるため、本論ではこれ以上追及することはしない。

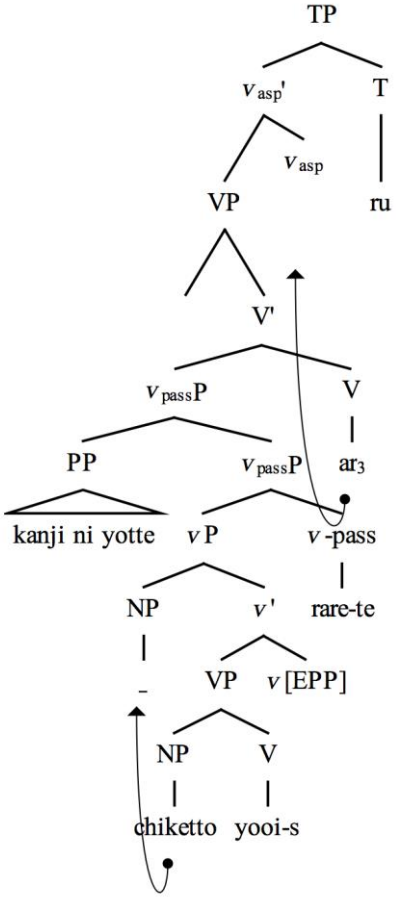
(35)　a. 私は　ビールを　飲みたい
　　b. 私は　ビールが　飲みたい
(36)　a. 太郎は　ロシア語を　話せる
　　b. 太郎は　ロシア語が　話せる

このことはMuraki (1984) が主語性の欠如に関して言及しているKawasaki (1984) において、既にその可能性が示唆されている[104]。

最後にC型テアル文（受身＋テアル）の構造における格付与を見ておく。

(37)　　（幹事によって）チケットが用意されてある。

ga



語幹動詞の内項（対象）「チケット」が受動文の領域で*v*P指定部に上昇し、主語性を得ている。格付与については、通常の自動詞文と変わらず、唯一の項である「チケット」にデフォルト格のガが付与される。

このようにして、合計三種類のテアル構文における格付与の仕組みを見たが、ある名詞句が主語の特性を持っているかどうかの問題と、その名詞句が構造上どのような位置にあるのか、他の名詞句とどのような位置関係にあるのかを見ながら、格付与の規則を適用する格配列的な問題が、ある意味で独立した問題であることが明らかになった。

---

[104] Kawasaki, Noriko (1984) -Te-aru Constructions in Japanese, Unpublished Paper, Matsuyama University. は入手できなかったが、益岡(1984)が言及している川崎(1983)に同じ趣旨の記載が見られる。

第 6 章

存在文とテアル文

6.1　存在文とテアル文との関係

テアル構文を考える上で、無視することができないのが、存在文との関わりである。補助動詞アルによるテアル文を本動詞アルからの文法化と捉えるならば、テアル文はアル存在文と意味的、歴史的つながりがあるはずである。実際テアルの文法化に関する先行研究では、そのように捉えられている（坪井 1976、柳田 1987、福嶋 2000、金水 2006a,b など）。本論においてもテアル文は存在動詞アルからの文法化の結果と考え、この章ではまず先行研究による存在文の類型から、テアル文との関わりを考察し、現代語の存在文とテアル文の類似点を指摘する。次にその歴史的変遷をコーパスから探る。最後に歴史的変遷を考察することによって見えてくる接続助詞としてのテの機能について私見を述べる。

この章で検証する仮説は以下の 3 つである。

(1)
1. 存在文とテアル文は類似した構造を持つ主語無し構文である。
2. 存在動詞アルとイルの歴史的変化を受けて、変化前と変化後の本動詞アルから二段階を経て補助動詞アルへと文法化が進んだ。
3. テの機能は接続であり、アスペクトマーカーではない。

6.2　存在文の類型

存在文についての先行研究を概観すると、古くから、ある場所における存在を表わし、有生・無生の区別でイルとアルが使い分けられるタイプの構文と、所有文に代表されるような有生物でもアルで表わせるタイプの構文に分けて分析されてきたことがわかる（三上 1953、久野 1973、柴谷 1978、寺村 1982 など）。久野(1973)は次の例を出して、存在文のアルと所有文のアルは同じ形式として扱えないことを示している。

(2)
a. 太郎ニ弟ガアル。　　所有文
b. *京都ニ（大勢ノ）外人ガアル。　　存在文　　（久野 1973:53）

（2b）のように存在文でニ格場所句が現れ、かつガ格名詞句が有生物[105]の場合は、アルが許されないことを指摘している。さらに所有文に現れるガを、「目的格を表わす「ガ」」（久野 1973:48）として、「お茶が飲みたい」「太郎が好きだ」などにおけるガ格名詞句と同一のものと扱っている。

本論でも存在文と所有文の区別は基本的で重要なものであるとして考察を行う。

(3)　存在文

a.　台所にお母さんが｛いる／*ある｝。

b.　台所にパンが｛*いる／ある｝。

(4)　所有文

a.　太郎に（は）妹が｛いる／ある｝。

b.　太郎に（は）車が｛*いる／ある｝。

広く存在表現全体を整理した先行研究のひとつに西山(1994)がある。西山の分類は以下の通りである。

(5)　Ⅰ　場所表現を伴うタイプ

(a) 場所・存在文（例：机の上にバナナがある。）

(b) 所在文（例：おかあさんは台所にいる。）

(c) 所在コピュラ文（例：おかあさんは台所です。）

(d) 指定所在文（例：その部屋に誰がいるの。…洋子がいるよ。）

(e) 存現文（例：おや、あんなところにリスがいるよ。）

Ⅱ　場所表現を伴わないタイプ

(a) 実在文（例：ペガサスは存在しない。）

(b) 絶対存在文（例：太郎の好きな食べ物がある。）

(c) 所有文（例：山田先生には借金がある。）

(d) 準所有文（例：フランスには国王がいる。）

(e) リスト所在文（例：甲：母の世話をする人はいないよ。
乙：洋子と佐知子がいるじゃないか。）

（西山 1994:116-117）

西山はイル・アルの使い分けには言及していないが、存在表現を網羅して、「場所表現を

[105] 久野(1973)の言葉では「高等動物」。

伴うタイプ」と「場所表現を伴わないタイプ」に大別し、意味論的観点からさらに下位分類している。

金水(2006a)は西山(1994)の分類をほぼ踏襲し、「場所表現を伴うタイプ」を「空間的存在文」、「場所表現を伴わないタイプ」を「限量的存在文」とし、意味論的考察を深めた。「空間的存在文」は存在の対象物が物理的な空間を占める表現、「限量的存在文」はある集合の要素の有無（多少）について述べる表現と定義した。また、存在動詞に主語と場所名詞句を項にとる二項述語と、主語のみをとる一項述語の２類型を認め、イルとアルの使い分けを示した。

(6) a. 二項存在動詞：「いる」は有生の主語のみを選択する。つまり主語の有生・無生の区別によって、「いる」と「ある」が厳密に区別される。

b. 一項存在動詞：「いる」は有生の主語のみを選択するが、「ある」は有生の主語も無生の主語も選択することができる。

（金水 2006a:17-18）

そして、空間的存在文には二項存在動詞が、典型的な限量存在文には一項存在動詞が使われるとした。金水の存在動詞の類型では、二項存在動詞の場合、場所句と「主語」（ガ格名詞句）が必須項である。一項存在動詞の場合は、ニ格名詞句は付加詞[106]の扱いとなる。金水によれば所有文も限量的存在文の一種なので、一項動詞が使われ、所有文のニ格名詞句は必須項ではないことになる。

しかし、4 章でも示したように、統語的な研究では伝統的に所有文のニ格名詞句は主語性を示すテストを通過し、主語として扱われてきた。本論でも所有文のアルはニ格主語とガ格目的語をとる二項述語と捉える。

(7) <u>太郎に</u>　<u>妹が</u>　ある
　　主語　目的語

(8) a. 山田先生に　親戚がたくさん　おありになる（こと）

b. 太郎$_i$に　自分$_i$の車が　ある（こと）

柴谷(1978)は、所有文は述語がアルの場合に限られ、イルが使われた場合は存在文であるとしている。

[106] 金水(2006a)の言葉では「随意的な修飾語句」

(9)　a.　太郎には子供がある。　[所有文]
　　b.　太郎には子供がいる。　[存在文]

柴谷(1978)によれば、この場合（9a）だけが所有文で、(9b）は存在文ということになる。しかし、岸本(2005)は述語がアルの場合でもイルの場合でも所有文になり得ることを様々な証拠を挙げて示している。岸本(2005)はニ格名詞句を複雑な場所表現に変換することで、存在文と所有文の違いを示している。

(10)　a.　ジョンには、子供がいる。
　　b.　ジョンのところには、子供がいる。　（岸本 2005:166）

（10b）のようにニ格を複雑な場所句とすると、もはや所有文としての解釈はなくなり、存在文となる。この場合、子供はジョンの子供である必然性はなくなり、所有関係ではなく空間的な存在を表わすことになる。しかし、（10a）は所有関係を表わす解釈しかないため、（10a）と（10b）は同義ではなくなる。これに対してアル所有文では同じ操作を行なって、存在文にすることができない。

(11)　a.　ジョンには、子供がある。
　　b. *ジョンのところには、子供がある。　（岸本 2005:166）

つまり、空間的な存在を表す（10b）（11b）の存在文においては、ガ格名詞句と動詞が有生・無生の対立に関して一致していないといけないが、（10a）（11a）の所有文においては、そのような一致が強制されないということなのである。一致の有無が存在文と所有文では大きく異なっていることを示している。

岸本(2005)は所有文と存在文の文法関係を次のように定めた。

(12)　a.　所有文 : [主語-に　目的語-が　{ある/いる}]
　　b.　存在文 : [（場所-に）　主語-が　{ある/いる}]　（岸本 2005:168）

岸本(2005)によれば、アルもイルも同じように所有文および存在文に現れるということになる。

本論では所有文に関しては岸本(2005)と同じ立場をとるが、存在文に関しては別の立場をとりたい。岸本(2005)に倣い、所有文は動詞がアルであってもイルであっても二項の能格型構文とする。存在文に関しては、西山(1994)、金水(2006)に倣い、場所句を必須項とする。そして、イル存在文はガ格名詞句を主語とする二項述語イルによる非対格自

動詞文と考える。

(13) a. 所有文 : [主語-ニ　目的語-ガ　{アル/イル}]
b. イル存在文 : [場所-ニ　主語-ガ　イル]
c. アル存在文 : [場所-ニ　目的語-ガ　アル]

アル存在文も二項述語のアルによって構築されたものだが、ガ格名詞句が目的語の性質を持った主語無し構文であると主張する。アル存在文ではガ格名詞句が常に無生物であるため、主語性を示すテストを適用することができず、その根拠を示すことが非常に難しい。しかし同時に、当該名詞句が主語であるということも示せないにもかかわらず、主語とされてきたことに、疑問を呈したい。

アル存在文のガ格名詞句が主語ではないという強い根拠は示せないが、弱い根拠は示すことができる。岸本(2005)は存在文におけるガ格名詞句の主語性、所有文におけるニ格名詞句の主語性を示すために、3 つの主語性のテストを利用している。これを順番に見ていこう。一つ目は再帰代名詞のテストである。

(14) a. ジョン$_i$に自分$_i$の子供が{ある/いる}（こと）
b. *自分$_i$の友達に子供$_i$が{ある/いる}（こと）　（岸本 2005:169）

これにより、所有文においては動詞がイルであってもアルであっても、等しくニ格名詞句が主語であり、ガ格名詞句が主語ではないことが示されている。

二番目はコントロール PRO によるテストである。コントロール PRO は主語位置にしか現れない。典型的なコントロール述語である「ほしいと思う」を使って、PRO が主語位置に限定されることが示されている。

(15) a. 私は、ジョン$_i$に[PRO$_i$花子をほめて]ほしいと思った。
b. *私は、メアリー$_i$に[ジョンが PRO$_i$ほめて]ほしいと思った。
（岸本 2005:169）

このテストをイル存在文に適用すると次のような結果が得られる。

(16) 私はジョン$_i$に[ここに PRO$_i$いて]ほしいと思った。　（岸本 2005:170）

このように、予測通りイル存在文のガ格名詞句が主語であることが示されている。一方、イルを使った所有文においては、ニ格名詞句が主語であり、ガ格名詞句が主語でないこ

とがわかる。

(17)　a. 私はジョン$_i$に[PRO$_i$子供がいて] ほしいと思った。
　　b.*私は子供$_i$に[ジョンにPRO$_i$いて] ほしいと思った。　（岸本 2005:170）

埋め込み節の所有文において、主語のニ格名詞句がPROになることは問題がないが、目的語のガ格名詞句がPROになることはできない。

しかし、岸本(2005)はアル存在文にはこのテストを適用していない。これはアル存在文においては場所句も対象の句も無生名詞句でなければならないからであり、コントロールPROを使ったテストが適用できないからである。「お湯が沸く」のような非対格自動詞の無生物主語の文がコントロール節で埋め込むことができないことと並行的であるように見える。

(18)　a.　私は、［お湯が沸いて］ほしいと思う。
　　b. *私はお湯$_i$に［PRO$_i$沸いて］ほしいと思う。　（岸本 2005:170）

しかし、(18b)の非文法性は「お湯」が無生物であるからだけなのだろうか。「沸く」と同じ非対格自動詞文でも、次の文なら可能だと思われる。

(19)　私は庭の桜$_i$に［毎年PRO$_i$咲いて］ほしいと思った。

つまり、この文の判断が正しければ、非対格自動詞文であっても動詞が自発的な変化を表すものであれば、その主語位置にコントロールPROを許すということになる。

では、アル存在文の場合はどうなっているのだろうか。アル存在文にPROを入れて試した結果が次の文である。

(20)　*?私はりんご$_i$に［机の上にPRO$_i$あって］ほしいと思った。

確かにこの文では、コントロールPROがガ格名詞句の位置に現れることができない。しかしその理由はガ格名詞句が無生物であるからではないと思われる。上記の例文で示したように、自発的な変化を表す非対格自動詞文のガ格名詞句にはPROが現れることができ、そのことからガ格名詞句が主語としての機能を果たしていると結論づけることができた。しかし無生物であることが即PROを禁じることに繋がらないことがわかった以上、アル存在文においてPROが許されない理由としては、むしろガ格名詞句が主語としての機能を果たしていないと考えた方が(20)の非文法性の説明としてはより妥当なものであ

ると思われる。これが弱い根拠の一つ目である。

岸本(2005)が使用した 3 つ目のテストは随意的解釈を持つ PRO によるテストである。岸本はコントロール PRO と随意的解釈を持つ PRO を表記上区別していないが、ここでは便宜上後者を PRO_{arb} と表記することにする。PRO_{arb} は特定の個物ではなく、一般的な人や物を指す音形の無い代名詞で、主語位置にしか現れないと言われている。

(21) a. [PRO_{arb} 人をほめる]ことはいいことだ。
b. *[みんなが PRO_{arb} ほめる]ことはいいことだ。
(22) [ここに PRO_{arb} いる]ことはいいことだ。
(23) [PRO_{arb} お金がある]ことはいいことだ。 （岸本 2005:171）

（21a）は PRO_{arb} が主語位置に現れているので問題がないが、（21b）は PRO_{arb} が目的語位置に現れており、許されない構造になっている。このため「みんなが不特定の誰かをほめることはいいことだ」という解釈は得られない。（22）はイル存在文の例だが、主語とされるガ格名詞句の位置に PRO_{arb} が現れているので問題がない。また、（23）はアル所有文であり、これも主語とされるニ格名詞句の位置が PRO_{arb} なので問題がない。しかし、アル存在文においては PRO_{arb} が生じることがない。

(24) *[ここに PRO_{arb} ある]ことはいいことだ。

やはりこれもアルのガ格名詞句が無生物でなければならないという条件が原因であろうか。しかし、同じように無生物の名詞句を要求する非対格自動詞文に PRO_{arb} を入れた場合には許容度が幾分か向上するように思われる。

(25) ??[ここで PRO_{arb} 咲く]ことはいいことだ。

アル存在文ではガ格名詞句、つまり対象の名詞句が、主語ではないという仮定のもとでは、(24)の非文法性はごく当然の帰結となる。（25）の判断が正しいとすれば、非対格自動詞のガ格名詞句とも異なると言える。これもアル存在文が主語無し構文であるという主張と整合性を持つという点で、間接的な補強材料とみなすことができるだろう。

他にもイルとアルで振る舞いが異なる場合がある。それは尊敬語化の現象である。柴谷(1978)が所有文のイルが存在しないことを示す証拠として挙げた次のような文を、岸本(2005)は例外的な尊敬語化として捉えている。

(26)　a.　君には（立派な）{両親/おじさん}がいらっしゃる。
　　b. *君には（立派な）{両親/おじさん}がおありになる。　（岸本 2005:199）

（26a）は所有文であるので、本来なら敬意の対象は主語であるニ格名詞句に向くはずである。しかしニ格名詞句は「君」であるので尊敬語の対象とはなりえず、尊敬の意はガ格名詞句である「両親／おじさん」に向いていると考えざるを得ない。岸本はこれを与格名詞句から主格名詞句への「所有傾斜（possessive cline）」と、イル・アルと当該名詞句との有生・無生の一致ということで説明している。つまり主語以外の名詞句であっても主語と所有関係を表すもの（上記例文(26a)では「両親／おじさん」）であれば、間接的に尊敬語化の対象となりうるというものである。他方、アル所有文では「ある」とガ格名詞句に一致の現象が認められない。もし尊敬語が一致現象のひとつであるならば、ガ格名詞句と動詞の間に一致が起こらなければ、尊敬語化も起こらないということである。しかし、そもそもアル所有文では有生・無生の区別がないのであるから、一致現象を考える必要はなく、むしろ、アル所有文においては常にガ格名詞句が主語になることはなく、これとは逆に有生・無生の区別があるイル所有文においては、ガ格名詞句が例外的に主語と見做されることがあると考えることも可能である。

実際、再帰代名詞「自分」の解釈においてもイル所有文とアル所有文では違いが認められる。

(27)　a. 太郎$_i$には奥さんが遠く離れた自分$_i$の生まれた町にいる。
　　b. 太郎$_i$には奥さんが遠く離れた自分$_i$の生まれた町にある。
(28)　a. 太郎には奥さん$_i$が遠く離れた自分$_i$の生まれた町にいる。
　　b. *太郎には奥さん$_i$が遠く離れた自分$_i$の生まれた町にある。

イル所有文においては、「自分」の先行詞として「奥さん」を考えることが可能であるが、アル所有文ではそれが極めて難しい。どちらの場合も本来であれば、ニ格名詞句が主語であるので、ガ格名詞句が先行詞となることはないはずであるが、イル所有文においては、例外的に主語として機能すると考えられる。これに対して、アル所有文においては、ガ格名詞句は常に主語ではないため、そのような「揺れ」は生じないと説明できるのではないだろうか。

リスト構文（岸本 2005）に目を転じても同じような状況が浮かびあがってくる。西山(1994)はリスト構文を「リスト所在文」と称して場所句を伴わない存在文に分類しているが、これも所有文の一種と考えられる。しかし岸本(2005)や Muromatsu(1997)が示しているように、所有文のガ格名詞句は定性の制約があり、不定名詞しか許さないのに対し

て、リスト構文では定性の制約がかからない[107]。したがって、次のような文が可能である。

(29)　ジョンには{メアリーが/あのおじさん}がいる。　（岸本 2005:219）

これが所有文であるならば、主語はニ格名詞句であるのだが、この場合もガ格名詞句を敬意の対象とした尊敬語化が可能である。

(30)　京子さんには鈴木先生がいらっしゃる。　（岸本 2005:223）

しかし、やはりアルを用いた文では同様の尊敬語化は不可能である。

(31)　*京子さんには鈴木先生がおありになる。

つまり、先ほどの場合と同様に、主語性に関してアルの文では揺れがなく、ガ格名詞句は決して主語性を示さないのだが、イルの文においては、所有文においてもガ格名詞句が例外的に主語性を得ることがあるということであろう。

最後に尊敬語化の現象をひとつ取りあげよう。柴谷(1978)は次の文で尊敬語化が許されないという事実を示して、ニ格名詞句が主語でないと主張している。ニ格名詞句が主語であるのならば、尊敬語の対象となりうるはずだからである。

(32)　山田先生にはシラミが沢山いる。
(33)　#山田先生にはシラミが沢山おいでになる。　（柴谷 1978:193）

（33）ではガ格名詞句が主語であるため、敬意はシラミにしか向けられない。従って適切な尊敬語化とは受け取れない。しかし、これも述語をアルに置き換えれば、アル所有文となり、その主語はニ格名詞句となるため、尊敬語化が可能となる。

(34)　山田先生にはシラミが沢山おありになる。

ここでもまた、イル所有文ではガ格名詞句が主語性を示す場合があるのに対し、アル所有文ではガ格名詞句が決して主語性を示さないという違いが見られる。

---

[107] 岸本(2005)は、これは定性の例外ではなく、英語の there 構文でも起こる一般的な現象であり、情報構造が異なるために起こるとしている。

これら三つの現象は、イルとは異なり、アルという語彙項目が取るガ格名詞句が「非主語性」を堅持しているという意味で、間接的にアル存在文でのガ格名詞句の非主語性を支持する証拠と捉えることができよう。

6.3 テアル構文とアル存在文の比較

テアル文を本動詞アルからの文法化であると考える根拠として、補助動詞アルと本動詞アルとの共通点が挙げられる。ニ格場所句を伴う A 型テアル文（益岡の A_1 型）とアル存在文との共通点は明白である。

(35) 家の前にはトラックが止めてあり、使用人達が、今夜使うカーペットと水を積み込んでいるところだった。
(36) ベランダに色とりどりの布団が干してあった。
(37) そこには身近な格言や制作のヒントなどが書いてあった。 （BCCWJ）

これらはそのままアル存在文に置き換えられる。

(38) 家の前にはトラックがあり、使用人達が、今夜使うカーペットと水を積み込んでいるところだった。
(39) ベランダに色とりどりの布団があった。
(40) そこには身近な格言や制作のヒントなどがあった。

A_1 型テアル文とアル存在文は同じ文法構造（格配列と名詞句の文法関係を含む）を持っていると考えられる。

(41) 存在文： [場所-ニ　目的語-ガ　アル]
A_1 型テアル文： [場所-ニ　目的語-ガ　V テアル]

場所句を伴わない A 型テアル文（益岡の A_2 型）は意味的に存在文とは異なるが、ある変化後の状態が存続していることを表す（結果状態）という点で A_1 型とアスペクト素性を共有している。A_2 型は場所句を除けば A_1 型と同じ文法構造となる。

(42) A_2 型テアル文： [目的語-ガ　V テアル]

このように、A 型テアル文が主語なし構文であると考えれば、アル存在文のガ格名詞句が主語ではないという考察も、不自然ではないだろう。逆に言えば、4 章・5 章で見たよ

うに、テアル文の対象の名詞句が目的語のままであるという事実から、アル存在文のガ格名詞句が目的語のままであるという推論が働くのである。したがって、この章の冒頭に挙げた一つ目の仮説「存在文とテアル文は類似した構造を持つ主語無し構文である」については、A 型テアル文に関してはそのように考えることが妥当であると考える。

一方、B 型テアル文に関しては、アル存在文とは意味的にも構造的にも異なる部分が多い。まず、意味の面では、ここまで見てきたように、B 型テアル文に特徴的なのは、明確な意図性（目的意識）である。しかし、存在文のアルには意志性も意図性も本来備わっていない。また、B 型テアル文には結果の状態も存続している必要がなく、効果が存続してさえいればよい。構造的にも動作主である主語が歴然と存在するという点で A 型テアル文とは大きく異なっている。

(43)　B 型テアル文：　[主語-ガ　（目的語-ヲ）　V テアル]

しかし A 型・B 型を通じて、本動詞アルとの関連性を見ることができる。本動詞アルの存在の意味から来る中核の意味は、「存続」であると考えられる。A 型はある行為によって状態（位置）変化した対象物自体、ないしその状態の存続、B 型はある行為の結果として生じる効果の存続を表わす。

本論では A 型テアル文とアル存在文は主語無し構文であると主張しているが、A 型テアル文の語幹動詞となるのは本来動作主を項に持つ動詞で、典型的に他動詞である。語幹動詞の制約の少ない B 型であっても非能格自動詞とは共起するが、非対格自動詞とは共起しない。2 章で詳しく見たように、Toratani(2007)はテアルの語幹動詞の語彙意味論的条件として、活動の要素と変化の要素の二つがなければならないことを示した。Miyagawa(1988)も Matsumoto(1990a)らも語幹動詞の語彙的アスペクトとして変化事象が必要なことは指摘している。しかし、管見の限りでは、なぜ変化事象に加えて活動の要素が必要なのか、その理由をはっきり述べた先行研究はない。

本論では、現代日本語で A 型テアル構文が非能格自動詞や非対格自動詞を排除する理由は、テイル形とテアル形の相補的分業の結果であると考えたい。つまり、前述のように Toratani(2007)が具体的な提案を行った、動作主の対象に対する活動事象と対象がその結果受ける変化事象の二つの要素が必要であるという語彙意味論的条件は、それ自体が独立した文法の制約ということではなく、結果としてこれらの二種類の要素が必要な動詞、すなわち変化他動詞だけが A 型テアル文において用いられる、ということになる。この相補的分業の誘因となったのは、本動詞アルのガ格名詞句は目的語であり、イルのガ格名詞句は主語だということであると考えられる。アルは必須項としてガ格名詞句をとるが、そのガ格名詞句は目的語であるがゆえに、本動詞アルと同じ構造を持つ A 型テアル文では語幹動詞として表層の目的語のない自動詞は排除される。

すでに指摘したように、本論ではアル存在文は主語無し構文でガ格名詞句が目的語のままであると考える。ガ格名詞句は有生であれ無生であれ、その意味役割は対象である。

(44)	アル存在文：	Y ニ	X ガ	アル
		項	目的語	
		場所	対象	

A 型テアル文の意味は本動詞（存在動詞）アルの文の意味に非常に近い。そのため A 型テアル文においても、同様の項構造が存在するものと思われる。

(45)	A 型テアル文：	Y ニ	X ガ	Vc-テアル
		項	目的語	
		場所	対象	

もし「対象の存在と対象の変化」という要素が A 型テアル文にとっての中核的な意味特徴であると考えるのなら、自ずと A 型テアル文において使用可能な動詞が限定されてくる。すなわち、対象を項に取り、その対象が変化を起こすような動詞である。つまり非対格自動詞と対象変化の他動詞ということになる。

(46)　非対格自動詞　（例）窓が開く
(47)　対象変化の他動詞　（例）太郎が窓を開ける

事実、次の節で見るように、古い日本語ではテアル文において非対格自動詞が用いられていた。しかし現代では非対格自動詞の結果状態はテイル文で表わされる。現代日本語のテアル文で非対格自動詞が使用できなくなったのは、結果状態のテイル形とテアル形の相補的な分業の結果と見ることができる。非対格自動詞のガ格名詞句は主語性を示すことを 4 章で見たが、必須項であるガ格名詞句の文法関係が、イルでは主語、アルでは目的語という棲み分けがはっきりしたことによって、主語のある非対格自動詞については常に主語を必要とするテイル形を、逆に目的語のある他動詞については常に目的語を必要とするテアル形を用いるように文法が再構成されたと考える[108]。現代日本語における結果状態のアスペクトは、次の二つの型で表される。

[108] 結果状態の意味で「太郎が窓を開けている」など、他動詞でもテイル形で言える場合もあるが、特別な文脈がない限り動作進行かパーフェクトの意味になる。しかし、結果状態の意味であっても、やはりガ格名詞句が主語であることに変わりがなく、本論の主張と矛盾しない。イルには主語が必要なため、目的語がガ格で現れることはないのである。

(48)　非対格自動詞　　テイル形　＜結果状態＞
(49)　対象変化の他動詞　　テアル形（A 型）　＜結果状態＞

したがって、A 型テアル形は「この分業の結果として」他動詞のみと共起するという現代日本語の姿が得られたと見るのである。このように考えれば、Toratani(2007)のようにA 型テアル文が本質的に活動事象と変化事象を要求する（つまり他動詞を要求する）と考えるのは妥当ではない。動作主は主語位置に現れるか、付加詞の「～によって」句として現れるしかない。A 型テアル構文の基盤となっている主語のないアル存在文の構造には主語も無ければ、「～によって」句も許されない。A 型テアル構文の本質が、アル存在文と並行的な＜場所句、対象＞という項構造を作り出すことで、対象の変化後の結果状態とその存在を述べることだとすれば、自ずと動作主項は剥奪されることになる。動作主項の剥奪はあくまで結果としての現象であり、A 型テアル文が動作主（あるいはそれを含む活動事象）を要求する訳ではないのである。

一方、B 型テアル文については有生・無生の区別がなかった古い日本語のテアリから引き継がれる用法だと考えられる。意味的にはテオクの結果状態として動作主による準備的意図を含むので、目的語よりもむしろ動作主主語があればいい。このような違いが生じたのは、A 型テアル文と B 型テアル文は別々の文法化のプロセスをたどったためであると考えられる。そう考える根拠が存在文とテアル文の歴史的変遷の中にある。次節で歴史的変遷と文法化について詳しく見ていく。

6.4 歴史的変遷と文法化

この節では存在文とテアル文の歴史的変遷を、先行研究とコーパス[109]から考察し、文法化のプロセスについて詳しく見て、「存在動詞アルとイルの歴史的変化を受けて、変化前と変化後の本動詞アルから二段階を経て補助動詞アルへと文法化が進んだ。」という (1) の二つ目の仮説を検証する。

文法化とは、「自立的、語彙的な形式が一定の文法的機能を担う形態素、すなわち「文法形式（grammatical form）」に変わるような言語変化のこと」（『言語学大辞典　第 6 巻述語編』）である。文法的機能を持つ代わりに自立語としての意味は薄れ、より抽象的な意味を表すようになる。Hopper and Traugott (1993)は、文法化の定義として “the change whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical

[109] 使用したコーパスは以下の通りである。コーパスの詳しい内容は必要な場所で記述する。
(ⅰ)　国立国語研究所コーパス開発センター編（2016）『日本語歴史コーパス』
(ⅱ)　国文学研究資料館, 『日本古典文学大系本文データベース』.
(ⅲ)　国文学研究資料館, 『噺本大系本文データベース』

functions, and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions" （Hopper and Traugott 1993:231）と述べ、 一旦文法化を起こすと、さらに新しい文法的機能を発達させ続けると主張している。また、通常は文法化とはこのような「歴史的な一方向性（unidirectional）のプロセス」（Traugott and König 1991:189）である。

A 型テアル文がアル存在文と近い関係にあることを前節で述べたが、上記のような一般的な文法化のプロセスに従えば、テアルの文法化は本動詞アルの意味に近い A 型テアル文から始まったと予測できる。しかし、事実はそうではないようである。B 型テアル文のほうがむしろ古い時代から使われているのである。これには日本語の存在文の歴史的変遷における、特殊な事情が関係していると思われる。特殊な事情とは、まず存在動詞に有生・無生の区別があることである。これは実は世界の言語でもかなり珍しい現象のようである[110]。そして古語ではその区別がなく単一の形式アリが使われていたこと、さらにもともと状態動詞ではなかったイルが状態動詞となって有生物の存在を表わすようになったことである。

6.4.1 存在動詞の歴史的変遷

存在表現の歴史に関しては金水(2006a)が詳しい。金水によれば、まず鎌倉時代までは有生物の存在も無生物の存在もアリという一つの形式で表していた。

(50) あをによし奈良にある妹が高々に待つらむ心しかにはあらじか（万葉・18・4107）

(51) きのかみのいもうともこなたにあるか、我にかいまみさせよとのたまへど
（源氏・空蝉）

(52) のこりなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はてのうければ（古今集・2・71）
（金水 2006a:46）

この頃のイル（ゐる）は存在動詞ではなく「座る」「静止する」「（鳥が）止まる」などの意味を表す変化動詞であった。金水(2006a)は「立つ」の対義語であるとしている。金水(2006a)による「立つ」と「ゐる」の意味の考察を表 1 のようにまとめることができる。人の場合は立つと座るの対立、鳥の場合は枝なり地面なり、その場から飛び立つ動作が「立つ」で、飛んでいるなどしてその場にいなかったものが来て止まるというのが「ゐる」である。無生物の場合、「立つ」については現代でも「霞が立つ」などと使うが、古語ではその反対に湧き出ていた雲や霞が山などにかかり動きが止まるという動作を「ゐる」で表わしていた。

---

110 シンハラ語には存在動詞に限らず有生・無生の区別があり、格標示も異なるようである。シンハラ語でも日本語の存在表現と同じようなことが起こっているのか、まだ詳しく考察できていないが、今後の課題としたい。

表1

	立つ（対象の始動）	ゐる（対象の固着）
人	立つ	ゐる（座る）
鳥	立つ（飛び立つ）	ゐる（枝や地面に来て止まる）
無生物（雲・霞など）	立つ（出てくる）	ゐる（平静化し、留まる）

そのままそこにとどまっている状態を表わすには状態化辞のタリをつけて、イタリの形にしなければならない。状態化形式は、上代ではもっぱらヲリだったが、その後平安時代にはイタリやイタマヘリで表されるようになり、ヲリとイタリで揺れていた。10 世紀以降はヲリの使用がへり、ヲリは卑語的な意味になったという。

室町時代になるとイタリがイタという形式を経て（金水 1997）、イルに変化した。当初は存在文にだけ有生物にイルが使われ、アルと競合したが、次第にイルが優勢になっていった。金水(2006a)によれば、この頃は所有文を含む限量的存在文には有生・無生の区別なくアルが使われた。

近世になると、所有文にもイルが伸長し、存在文では有生・無生の区別が明確になった。金水は 1778 年発刊の『あゆひ抄[111]』に次のような記述があることを指摘した。

(53)　口語では非情物については「あり」と言い、有情物については「ゐる」と言うが、歌ではおしなべて「あり」とだけ読むので、心得て「アル」または「キル」と訳し分ける必要がある。

（金水による『あゆひ抄』（1778）の訳より抜粋）　（金水 2006a:278）

鈴木(1998)は近代文学作品を調査し、明治・大正・昭和前期までは人を主語にする場合でもアルとイルが拮抗していたのに対し、第二次世界大戦を境に有生物のアルが著しく減っていることを示した[112]。

金水(2006a)による存在動詞の歴史的変遷をまとめると、概略以下のようになる。

---

111 『あゆひ抄』は富士谷成章によって江戸中期に書かれた文法書で、全ての単語を名（体言）、装（よそい）（用言）、挿頭（かざし）（副詞・接頭語など）、脚結（あゆひ）（助詞・助動詞など）に分類したものである。独特の用語を使っているが、近代的な品詞分類を初めて提示したものとして知られている。詳しくは中田・竹岡(1960)を参照のこと。

112 明治期に言文一致運動が起こり、口語文学が書かれるようになったものの、大正・昭和初期は移行期であり、当時の話し言葉については正確にはわからないだろう。鈴木(1998)が資料としているのは二葉亭四迷など、言文一致体を試みた文学作品なので、少なくとも当時の文語調ではない。しかし、所有文（金水(2006a)の言葉では限量的存在文）、存在文の区別なく分析しているので、そのような所有文に当たる文がどのくらい出てきたかは不明である。

(54)　鎌倉時代まで：　有生・無生の区別なく、存在動詞はアリ
　　室町時代：　　アル・イル交代期
　　江戸時代：　　イル優勢　（存在文においては有生・無生の区別が明確）

6.4.2　テアル文の歴史的変遷

次にテアル文を含む、存在動詞によるアスペクト形式の歴史的変遷をたどる。まず、上代から平安時代まではアスペクト形式としてリ、タリ、ツ、ヌがあったが、中心的なアスペクト形式はリとタリだった（野村 1994、柳田 1987、金水 2006a、野田 2010 など）。リは連用形にアリが付加されたもので、タリはテにアリが付加された形式である。金水(2006b)は存在動詞の変遷に合わせてアスペクト形式も推移しているとして、以下のようにまとめている。

(55)　鎌倉時代まで：　「～たり」
　　室町時代：　　「～てある」
　　江戸時代：　　「～ている」（有生）「～てある」（無生）
　　近代以降：　　「～てある」
　　（金水 2006b:37-38）

実際にここまで単純化することはできないであろうが、金水も述べているように概略としてはこのような状況であったと考えて差し支えないだろう。柳田(1987)によれば、テアリは上代からあった。実際に『日本古典文学体系』のコーパス[113]で見ると、万葉集から 51 件のテアリ文が検出された。また古事記と日本書紀にも 1 件ずつ見られる。うち、現代語訳が「～てある」になっているものは 2 件だけで、後は全て「～ている」と訳されている。

(56)　春日野（かすがの）に齋（いつ）く三諸（みもろ）の梅の花<u>榮えてあり</u>待て還り來るまで　（～ている）　〔万葉集 3〕
(57)　門立（かどた）てて戸も<u>閉（さ）してある</u>を何處（いづく）ゆか妹（いも）が入り來て夢（いめ）に見えつる　（～てある）　〔万葉集 3〕
　　（古典文学体系）

[113]国文学研究資料館,『日本古典文学大系本文データベース』。このコーパスは岩波書店刊行の旧版全 100 巻全作品の本文をデータベース化したものである。以下「古典文学体系」と記す。

また、野田(2010)は今昔物語にテアリとテイルの形式があることを示し、詳しく分析している。今昔物語は一般的に平安末期から鎌倉時代の作品とされている[114]。野田によれば、この今昔物語から、テイルとテアル（活用はまだラ変のテアリ）の用例が豊富に採取できるという。テアルのほうが多いが、テイルと混在しているという。同じ動詞でもテイルとテアルが使い分けられていることから、テイルが「＋主格維持性」「－限界性」などの条件が整ったときに使われていることを示した。この場合の「主格維持」とは、もともと森山(1988)の「維持」の概念を取り入れており、主体が特に動きに対して主体的に関わって、変化結果の大勢を保存・持続するというところまで意味として含んでいるということである。

(58)　明クル朝ニ、人有テ、堂ノ戸ヲ開ケテ見ルニ、仏ノ御前ニ、蔵縁、掌ヲ合ワセテ額ニ当テ、居乍ラ死テ有リ。

(59)　前ノ如ク木ノ胯ニ西ニ向テ、此ノ度ハ死テ居タリ。　（野田 2010:5-6）

野田(2010)によれば（58）は眼前の様子を静的な結果状態として表しており、（59）の文は、死者を発見した住職の視点で語られており、阿弥陀信仰に目覚めた盗賊が西に向かった結果、西の果ての木の上に自ら行って仏の声を聞き、そのまま死んだ場面で、意志的に木の上で死んだ状態を保っている様子を描いているという。しかし、これは自殺ではないので、意志的というよりは、金水(2006a)で「立つ」の対義語として示された本動詞「ゐる」の意味に近いと思われる。つまり、イルが表すのはもともとそこにいなかったが、どこかからやってきてそこに止まったという動作であり、タリによってその状態が保たれていることを表していると思われる。イルからの文法化の初期の段階だと考えられる文である。

柳田(1987)はテアルの変遷を次のように考えた。まず上代からテアリはあったが、テアリがタリになり、テアリのアスペクト形式を担うようになった。しかしタリが成立した後も上代では、テアリはツ・ヌ・タリと共存していた。平安時代になるとタリが勢力を伸ばし、テアリ・ツ・ヌは衰退していき、タリがそれらのアスペクトをすべて担うことになった。タリの台頭によって平安時代にテアリは消えたという説もあるが、柳田(1987)は細々とテアリが残存していたことを示している[115]。その後鎌倉時代になると、

---

[114] 作者も成立年も不詳で諸説ある。他の資料の今昔物語に関する記述などから、1120 年以降 1449 年までの間といわれているが、説話の内容から考えると 1120 年からそれほど離れていないものとされている（山田他(1959)、国東(1985)等参照）。国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』では鎌倉時代の作品として収録されている。

[115] 柳田(1987)の調査では、テアリとタリの比率が、万葉集では45：160 なのに対し、竹取物語では2：95、源氏物語では61：4293 である。確かに比率として多くはないが、しかし 0 ではないの

テアリが復活する。その原因として、アスペクト形式を一手に引き受けていたタリがタに転じ、過去と完了を表わすようになったことを挙げた。この結果、結果の存続を表わすアスペクト形式が足りなくなり、それを補ったのがテアリである。その背景には、テアリが細々と残っていたという事実がある。

平安時代に残っていたという用法については神永(2008)が詳しい。神永(2008)は平安中期のテアリ文を語幹動詞によって分類した。

(60) ① 動作を示す自動詞（おこなふ、出で走る、笑ふ、慰む、ながらふ、生く、など）
惟成入道は、聖よりもけにめでたくおこなひてあり。
② 動作主の変化を示す自動詞（うち群る、出す、など）
殿の御前どもは、側の方に忍びやかにうち群れてあるに、院の御供の人々忍びさせたまへど、いと多くさぶらふ。
③ 主語の状態の変化を表わす自動詞
（落ちあぶる、古る、気色ばむ、勝る、すぐる、など）
あさましうして失ひはべりぬと思ひたまへし人、世に落ちあぶれてあるやうに、
④ 限界性のない他動詞（思ふ、思ほす、言ふ、語らふ、など）
「いと心やすくなりはべりぬ。今は歌のこと思ひかけじ」など言ひてあるころ、いかなることにはと思し疑いひてなんありける。
⑤ 限界性を有する他動詞（封ず、隠す、造る、書く、など）
おとどの御もとにある御文、いとよく封じてあり。　（神永 2008:28-29）

神永は①から④までは動作主体のテアリで、⑤だけを動作客体のテアリとした。⑤が現代でもテアル文で表わすものであるが、圧倒的に数が少ないことも述べている。神永(2008)はこの現在のテアル文にあたるものをさらに分類している。

(61) ① 動作客体が動作主の行為により変化を被る動詞
（乗す、隠す、刺す、結ひあわす、鎖す、など）
さすがに、人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「答へきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。
② 生産・出現される動詞
（しつらふ、造る、用意す、よそふ、彫り透かす、書きしるす、など）
民部卿の御方になむ、新しき糸毛の車、造りてあめるを、

で、細々と残っていたと言える。

③　再帰的で結果が動作客体に残存しない動詞
（（耳を）ふたぐ、着る、（身を）捨つ、など）
「いみじう、かたはらいたき事はせさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その布一つ取らせて、とくやりてよ」

（神永 2008:30-31）

このうち③の文は再帰動詞なので主体が変化することから、動作主体のテアリと同じものとしている。実際現代語ではテイルで訳すものである。①と②が動作客体の変化を表す配置動詞や状態変化動詞、作成動詞で、現代のテアル文でもよく使われる動詞である。しかし、これらはB型テアル文に近い。①の文は神永によれば「格子を閉じた状態にせよ（＝格子を閉じておいてください）」の意味である。②の文は推量を表す助動詞「めり」とともに使われ、「作ってあるようだ」の意味に捉えられるが、文脈を見ると、その前に「大将」が造らせたと書いてあり、特定の動作主の存在が想定されていることがわかる。

また神永(2009)は中世末期（室町時代）以降のテアル構文についても語幹動詞の分類をしている。ここでは主に『大蔵流狂言台本虎明本[116]』（以下「虎明本」と表記する。）の用例が考察されている。この頃は終止形もアルになり、4 段活用に変化している。まず語幹動詞が自動詞の例を挙げる。自動詞の場合はテアリと同じく、現代語ではテイルと訳されるものが多い。

(62)　移動動詞―動作パーフェクト
扨はなんぢがと（疾）ふきてあるよな

(63)　状態変化動詞―状態変化結果
しやくやくの花が、人のうらにみ事に、さひてあるをみて、

(64)　動作動詞―動作の継続
はりまのいまみ野をとをつてあれは、おおきな牛がふせつておつて、

[116] 現在の狂言の台本がだいたい固まったのは「虎寛本」と言われている。これは江戸後期から明治期のものであるので、江戸後期にしか出てこない表現もある。それに比べ、「虎明本」は、室町期の口語表現を反映していると言われている（ただし江戸前期と思われる表現も含まれるとされる）。国文学資料館のコーパスになっている古典文学体系に収録されているのは虎寛本である。近藤(2012)ではテシマウの文法化について考察しているが、同コーパスで江戸中期以降にしか出てこないテシマウの用例が、江戸前期以前では室町時代の資料として分類されている狂言台本にのみ数多く表れたので、狂言台本を分析対象としなかった。2016 年に公開された国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』には虎明本のテキストが収録されているが、虎明本ではテシマウの用例が 1 件も検出されなかった。したがって、本論でも虎明本の用例は室町時代の口語表現として信憑性の高いものとして扱う。狂言資料の詳細は池田(1967)、池田・北原(1972)など参照。

(65)　状態動詞―単純な状態
きやつがき（着）たゑほしをみれば、ちんじゆのほこらの、いがきににて有程に、　（神永 2009:4-5）

神永（2009）の言う動作パーフェクトは「経験」「完成」を表わし、本論でのパーフェクト・テアル文のアスペクトに通じるものである。(62）の移動動詞の場合は動作パーフェクトとしている。(63）と（65）は結果状態のテイル文に相当する用法であり、古い時代のテアリ文の用法を引き継ぐものであると考えられる。神永（2009）は（64）を動作の継続としているが、この文を福嶋(2003)は「通ったところ」と解釈できることから、進行態ではないとしている。このように「た」と置き換えられるテアル文を福嶋(2000)では動作パーフェクトと呼んでいる。しかしその意味での動作パーフェクトはいわゆる「完了」の意味で、「通っていたところ」と訳してもいいだろう。これはテアル文でも置き換えられないことから、このような文は現代のテアル文とは異なる用法であり、やはりテイル文に相当するものであると考える。

次に神永(2009)の他動詞の例を見る。

＜対象無変化動詞＞

(66)　知覚動詞―動作パーフェクト
（夜半に相手の声を）しかときひてある、かくさずにいへ

(67)　発話動詞―動作パーフェクト
やい、両人の者ようきけ。両人ながら一字一点ちがはずよう申してある。

(68)　認識動詞―動作パーフェクト
てひどしそこなはふと思ふて、色々あんじて有に、

(69)　持続動詞―維持状態→テイル
おぬしは藤三郎におとらぬ力をもちてある間、

＜対象変化動詞＞

(70)　配置動詞―対象物の変化結果状態―動作パーフェクト
くんこうはこうによるべしと、高札をうちてある、　（神永 2009: 6-7）

（69）以外は現在のテアル文、しかも神永も「動作パーフェクト」という言葉を使っている通り、パーフェクトのアスペクトを持つB型テアル文と同様のものであると言える。（70）は配置動詞の例で、A 型テアル文としてよく使われる動詞であるが、対象がヲ格で現れている。神永(2009)は虎明本のテアル文を調べた結果、61 例、テアル文全体の 75%が動作パーフェクトであることを示している。また、柳田(1991)や金水(2006a)はこの頃のテアル文が、神仏や大名などが荘重さを持たせて語る会話によく使われることから、

テアルがモーダルや古風な表現になって来ているとしている。

さらに神永は近世前期の文献も調べ、近世前期にはテアル文が少なく（テイル146例に対しテアルは17例）、この動作パーフェクトの用法が見当たらないことから、この用法が衰退したと述べている。しかし本論では、この古くからあるパーフェクトの用法は今のB型テアル文に受け継がれているものであり、A型テアル文の発展とは別に、近世にも細々と続いていたと考える。

中世末期までのアスペクト表現に関する先行研究を概観してここまでをまとめると、次のようになる。

(71)　①アリ→テアリ→タリ（上代）
　　②リ・タリ・ツ・ヌ→タリ（中古）
　　③タリ→タ　／　テアリ復活（中世）ーパーフェクト
　　④イル（完結相）→イタリ（状態化辞）→イタ（金水2006b）
　　→イル（非完結相）→テイル

まず上代までにアリがテアリになってさらにタリに変化した。平安時代になるとタリが勢力を伸ばし、リ・タリ・ツ・ヌで表わしていたアスペクトをタリが一手に担うようになる。その後タリがタに変化し、過去や完了を表わす表現になったことでアスペクト形式が足りなくなり、継続などの非完結相やパーフェクト相を表わすためにテアリが復活した。一方イルは、完結相であった動作動詞のイルからイタリという状態化辞となり、非完結相の状態動詞イルとなった。そして中世末期にはテイルとして非完結相のアスペクトマーカーとなった。

すでに述べたように、近世になると、テアルのパーフェクトの用法が減ったことが先行研究でも指摘されているが、近世中期以降にまたテアル文の用例が増える。中世までのテアル文（テアリ文）と近世以降のテアル文では用法に隔たりがある。金水(2006a)は狂言古本に見られたようなパーフェクト相あるいは過去を表わすテアルが見られなくなり、その一方で結果相及び進行相を表すテイル・テアルが増えたと述べている。特に上方語の特徴として、対象が無生物のときにはテアル、有生物の時にはテイルが使われていることを示し、存在動詞イル・アルが有生、無生ではっきりと使い分けられ始めたため、そこから、「文法化を再出発させた」（金水2006a:274）と主張した。

(72)　あの障子のあちらに、今言うた男が<u>来てゐさんす</u>、
(73)　おふりどうぢや、かうぢやと愛想らしい声付が、耳に<u>残ってある</u>やうな。
(74)　上から帯が<u>下げてある</u>、長持も出してある。　（金水2006a:275）

（72）は有生物である「男」のことなのでテイルが使われており、結果状態を表している。（73）は「残る」が非対格自動詞なので、現代語なら「残っている」とテイル文で言うところであるが、対象が「声付」という無生物であるのでテアルが使われている。さらに、この頃には（74）のように、対象がガ格で現れるテアル文が出現したことを示し、主語が対象物である受動文のような格体制の文が使われるようになったと述べている。

一方で江戸語においては、無生物主語で自動詞のテイル文は18世紀後半から使われていることから、上方より早いと言う。

(75)　けだものの中で、爪の割れたものは道が早い。犀などといふやつ、爪が割れて居るによって、　波を走ること飛んだこつた。　（鹿の子餅、1772年刊）

(76)　妙国寺の仁王にてふちん（提灯）があがつていたつけ　（通言総籬、1787年刊）

（金水 2006a:282）

この金水の文法化の「再出発」を含め、次にテアル文の歴史的変遷をコーパスで詳しく検証する。

6.4.3　古典コーパス調査に基づくテアルの文法化のプロセス

この小節では実際にコーパスを調査し、古典文学作品における使用実態を見て、先行研究で主張されていることを確認しながらテアル構文の文法化のプロセスをたどる。平安時代、鎌倉時代、室町時代の用例は国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』[117]（以下「歴史コーパス」と記す）から検索システム「中納言」で検索した。同コーパスには江戸時代のものがまだないので、江戸時代の用例は『噺本体系本文データベース』[118]（以

[117]国立国語研究所コーパス開発センター編（2016）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2016.3, 中納言バージョン 2.2.0）https://chunagon.ninjal.ac.jp/

[118]国文学研究資料館, 『噺本大系本文データベース』。東京堂出版の『噺本大系』を全文データ化したもので、短編の笑い話を集めたものであり、当時の口語を反映していると言われている。また、江戸幕府開府直後の1609年から明治3年までの資料が、作品ごと、年代ごとの量の違いはあるものの、年代順に納められた短編集の形で19巻あり、年代毎に比較的安定した量の短編が含まれているため、江戸時代を網羅していると考えても差し支えないであろう。上述した「古典文学体系」にも江戸時代の作品が数多く収録されているが、江戸時代の文学作品には「擬古典」が含まれており、当時の話し言葉ではない平安時代の古典文学を模した文体の場合もある。また、歌舞伎や浄瑠璃は口語がふんだんに含まれるが、歌舞伎や浄瑠璃は成立年が正確にわかっていない場合もあり、たとえ成立年が古くても、実際には明治期の写本の場合もあり、何度も上演されるうちに脚本も少しずつ変わっている可能性があるので、そのことを考慮にいれる必要がある。従って、今回は『噺本大系』だけを分析対象とする。噺本はコーパス自体に作成年の記載があるので年代については一番正確だと思われる。噺本をはじめ、江戸時代の口語資料については名古屋大学の宮地朝子教授にご教示をいただいた。

下「嘶本」）からサクラエディタで検索した。文字数は表 2 に示す。

表 2

時代	平安	鎌倉	室町	江戸
文字数	856682	710684	234863	3762804

本論ではテアルを研究対象としているので、テアル（テアリ）文だけを検索した。そのうち現代語でもテアルで訳せるものを「テアル相当文」、テイルとしか訳せないものを「テイル相当文」とした。「テイル相当文」はテイル文として現れたものではないことに注意されたい[119]。検索数を出したものが表 3 である。実際に検索された件数である実数と、100,000 文字あたりの頻度を示した。

表 3

現代語訳	テアル相当文		テイル相当文	
	実数	頻度※	実数	頻度
平安	31	3.6	99	11.6
鎌倉	35	4.9	292	46
室町	9	3.8	92	39
江戸	237	6.3	210	5.6

※頻度は 100,000 文字あたりの出現頻度。小数点第 2 位以下を四捨五入。

まずこの数字だけを見て特徴的なのは、江戸時代にはテイル相当文の割合が減っていることである。これは、江戸時代になるとそれ以前にはテアリで表わされていたテイル相当文はテイル文として表わされ、テアル（またはテアリ）の形では減っていることを表している。しかも、詳しくは後述するが、江戸時代のテアル文は江戸中期の終盤から後期に偏っている。また、室町時代のテアル相当文は用例数としては非常に少ないが、出現頻度はさほど変わりがない。しかし、質的には変化が見られる。室町時代より前のテアル相当文は主にパーフェクトのテアル文だが、この頃結果状態とも取れるテアル文が現れ、パーフェクトの文は少なくなる。これは、金水(2006b)が指摘しているように、パーフェクトの用法が衰退したことを表している。しかし、まだ室町時代には動作進行などのテイル文に相当する文は相変わらず多い。江戸時代になるとテアル相当文の出現頻度が、増えるものの、それほど多くはない。しかし、質的に現代のテアル文に近いもの

[119] 実際には古い時代の用例の中には、現代語でテイル文としても訳せず、タと訳すべきかテイルと訳すべきか判別のつかないものも見られる。そのような、少なくともテアル文とは言えないような文もテイル相当文に含まれる。しかし、本論の主眼はテアル文としての用法なので、全体に影響はないと考える。また、江戸時代になるとそのような文は見られなくなる。

が多く、それまでの用法とは異なることが先行研究でも指摘されている（坪井(1976)、金水(2006a/b)、野田(2010)など）。また、テイル相当文、つまりテアルの形で現れているが現代語ではテイルとしか訳せないものは急激に数を減らしている。これは、テイル文が発達し、テイルとテアルが現代語に近い使い分けになっているからである。しかし、頻度が減ったものの、テイル相当文もテアル相当文と同等程度に出現している。これは主に坪井(1976)、金水(2006a),が上方語の特徴とする、非対格自動詞とともに使われるテアルである。しかし、コーパスを見ると、上方語に限らず、江戸語であってもこの表現は江戸後期まで使われていることが明らかになった。

数字だけでは質的な変化を捉えることができないので、用例に沿って、各時代の特徴を示すことにする[120]。まず平安時代の用例を挙げる。

(77)　かくさし篭めてありとも、かの國の人來ば、みな開（あ）きなむとす。
（竹取物語、900 年）[121]

(78)　おとこいといたうめでて、今まで巻きて、文箱に入れてありとなんいふなる。
（伊勢物語、920 年）

(79)　かの人いと近くて使ふ人に、語らひつきて、「なを、いとよき折に奉れ」とて、よろづの思ふことを書きてあるを、この女見て、　（ている）
（平中物語、960 年）

(80)　人にも、おほやけにも、失せかくれにたる由を知らせてあり。
（枕草子、1001 年）

この時代の用例は、テアル相当文に関しては基本的にＢ型のパーフェクト・テアル文である。動作主による意図的な行為が表わされている。対象の名詞句は無助詞が多いが、格標示が現れるとしたらヲ格である。また、(79) は書いたものを見ているのではなく書いている人を見ている場面なので、動作進行の「書いている」に当たるテイル相当文であると思われる。この頃のテイル相当文は「咲きてある（咲いている）」という結果状態も数例みられたが、圧倒的に多くが動作進行を表わすものとして使われている。

次に鎌倉時代の用例を見てみよう。

(81)　只、経許（バカリ）ヲ讀マム人ヲ、出立（イダシタテ）モセズ、篭メ居ヘテ有ラム事ハ、可有キ事モ非ズ。　（今昔物語、1100 年）

---

[120] テイル相当文と思われるものには（ている）と付記した。
[121] 成立年はコーパスに記載のもの。

(82)　国ヨリ上ル船ノ、多ノ物共ヲ積テ有ケルヲ、明石（アカシ）ノ前ノ沖ニシテ、海賊来テ船ノ物ヲ皆移シ取リ、数人ヲ（コロ）シテ去ニケリ。
（今昔物語、1100 年）

(83)　あたりに人もなし。火は几帳の外にともしてあれば、あかくあり。
（宇治拾遺物語、1220 年）

(84)　其レガ行疫流行神（ギヤウヤクルギヤウジン）ト成テ有ル也。　（ている）
（今昔物語、1100 年）

(85)　いと高くうち積まれたる前に、ふたあきて、絹なめりとみゆるもの、とり散らしてあり。これをみて、うれしきわざかな、　（宇治拾遺物語、1220 年）

(86)　あさましく、うれしければ、物に入れてかくし置きて、殘りの瓢どもをみれば、おなじやうに入れてあり。　（宇治拾遺物語、1220 年）

この時代の特徴としては、アリが場所句とともに現れ、場面描写文とも解釈できる文が出現することである。しかし対象名詞句にガ格はまだ現れず、ヲ格が使われているものは増えている。文の意味から考えれば、やはりパーフェクトのB型の文であることがわかる。(83) は火がともしてあるという場面描写をしているのではなく、その結果明るいという効果を述べている。ほとんどは1人称動作主の準備的意図がわかる文であるが、中には (85) (86) のように「見る」という表現とともに使われ、場面描写と捉えられる文もある。なるべくわかりやすい例を示したが、この時代はアリの用法が現代のテイルに相当するものなのかテアルに相当するものなのか判断がつかないものも多い。また次の例のように本動詞としての意味と思われるものも多い。

(87)　腰を射られにければ否逃で、溝の有けるになむ倒れ入て有ける。

次に室町時代の用例を見る。室町時代の用例は全て虎明本のものである。これは歴史コーパスのに収められた底本が虎明本に限られているためである。

(88)　かひた物はていほうじゃな。何々あわた口のもんじで書いてあるによってよめぬが、

(89)　是に何やらかひてあるが、なんぢはよみやうをならふたか。

(90)　くんこうはこうによるべしと、高札をうちてある、

(91)　是へよきものがきたつてある、是をせめおとさう。　（ている）
（虎明本狂言台本、1642 年）

この時代には現代語で非常によく使われる「書いてある」など、現代語に近い使われ方

が出ている。(90）は神永(2009)でも示された文であるが、これは前文を読むと、話者がどこかからきて高札を見て話している文であるので、場面描写文であると言える。しかしまだ場面描写文であっても対象名詞句はヲ格で示される。このことからも、当該名詞句が目的語であることが想像できる。そして場面描写文であってもA型テアル文のような主語無し構文は確立されていなかったと考えられる。一方で（91）のようにテアル文として訳せないものに関しては、テイル相当文に振り分けたが、野田(2010)は「た」にあたる過去を表わすマーカーとして扱っている。(91）の語幹動詞は「来る（きたる)」だが、「来た」の意味なのか、「来ている」なのか判断しかねる。

次に江戸時代の用例を見る。江戸時代は前述したように、上方語と江戸語があり、注意して見る必要がある[122]。用例数は表4のとおりである。注目すべきは、後期の江戸語においてもテイル相当文がかなり多い事である。しかし江戸中期から後期のテイル相当文の多くは金水(2006a)らもその存在を指摘している「自動詞からなる表現」、つまり語幹動詞が非対格自動詞のものである。これは室町以前のテイル相当文とは異なる。坪井(1976)や金水(2006a)はこれを上方語の特徴としているが、コーパスを見ると後期の江戸語にもテアル相当文以上に多く現れている。

表4

時代区分※	地方	全体	テアル相当文	テイル相当文
前期	上方	61	35	31
	江戸	3	3	0
中期	上方	57	32	28
	江戸	60	19	42
後期	上方	96	54	51
	江戸	148	73	84

※前期：1600年～1715年、中期：1716年～1789年、後期：1789年～1853年

以下に各時代の特徴を示す。

〈前期上方語〉

(92)　此家うり家也、但たゝミやにうらふト書てあり。　（寒川入道筆記、1611年）

(93)　ひたいにべにで、犬といふ名が書てあるハといふた。　（当世手打笑、1681年）

(94)　外より帰りて母にいふやう、下の町の辻に銭か落してあつた。

（嘲物語、1680年）

[122] 上方語か江戸語かは、文体だけではわからない場合が多いので、必ず作者の出身地を調べ、そこから判断した。

(95)　山の芋がうなぎになると人のいふてあれど、さためて虚説ならんと疑ひしが、
（ている）（醒睡笑、1623 年）

(96)　門の見廻りを見ありきけるに、太鼓一つ落ちてあり。
（露五郎兵衛新はなし、1701 年）

この時代すでにそれまでの用法とは異なり、テアル相当文ではほとんどが文脈からはっきりそれとわかる A 型テアル文である[123]。また、対象の名詞句がガ格で表されているものが見られるようになった。(94) のように、非意志的な A 型テアル文もある。(92) は 1611 年と早い例だが、それ以外は前期といっても 1670 年以降に固まっている。1660 年代までにはテイル相当文が 28 件なのに対し、テアル相当文が 3 件しか見られない。この辺りに転機があったと考えられる。また、テイル相当文ではそれまで多かった (95) のような、人が主語となり動作進行とも取れる意味のテアル文が減り、(96) のような非対格自動詞が使われる結果状態の文が増えた。これもやはり 1670 年以降に集中している。

次に前期江戸語の例を見る。この時代の江戸語のテアル相当文の用例は 3 件しかないが、文献自体が江戸語のものは少ない。ただ、その全てが場面描写文で A 型テアル文である。やはり 1670 年以降のものしかない。

〈前期江戸語〉

(97)　障子そろそろとひきあけ内にいりて、屏風のうしろにまハり、かけてありしけさころも、きるものなどとりてひくとき、（正直咄大鑑、1687 年）

(98)　こよみを見せて、これごらんなされいと、五墓日（こむにち）がかなでかいてあつたれハ、（正直咄大鑑、1687 年）

中期になると、1670 年以降の特徴がさらにはっきりする。

〈中期上方語〉

(99)　食堂に、木でつくりたる鯉のつりてあるを見て、一人のいふやう、
（軽口福蔵主、1716 年）

(100)　亭主そのまゝ二かいへかけ上りミれハ、銭が百おちてあり。（ている）
（軽口独機嫌、1733 年）

この頃の上方語ではテアル相当文にヲ格が現れるものが見られない。また、場面描写的

[123] 噺本はサクラエディタによる検索なので、中納言による検索と違い、必要なら前後の文脈をどこまでも見ることができ、比較的意味を正確にとりやすい。

なものに限られ、動詞も配置動詞と書記動詞に限られるが、1 件だけ状態変化動詞のものもあった（書記動詞は 10 件、配置動詞は 14 件）。つまり、中期上方語のテアル相当文のすべてが A 型テアル文であると考えられる。テイル相当文は前期と違い、非対格自動詞（咲く、落ちる、生える、並ぶ、あく、残るなど）と共起する、結果状態の用法にほぼ統一される（テイル相当文 28 件中「呼ぶ」が 1 件、不明なものが 1 件、残りの 26 件は全て非対格自動詞）。

江戸語においても同様の特徴が見られる。

〈中期江戸語〉

(101) 夜明ケて石塔の側へ寄て見たれば、朱がけしてあつた （笑の種蒔、1789 年）

(102) 麁相（そさう）で柱（はしら）へ前歯を打つけやして、つい欠やしたと袖を取れバ、成程向歯一枚かけてあり。 （ている）
（飛談語、1773 年）

上方と同様、テアル相当文は A 型で、書記動詞や配置動詞に使われる典型的な存在表現のテアル文だが、状態変化動詞とその他動詞の文も 1 件ずつ見られた。テイル相当文は上方語と同じく非対格自動詞とのみ共起し、人が主語の動作進行の文はない。また、テアル相当文もテイル相当文も対象に「が」が出ることがあるが、ほとんどは無助詞である。

中期の終わり頃、1770 年のあたりがもう一つの転機になっている。中期でも 1760 年代まではテアル相当文は書記動詞と配置動詞に限られていた。しかし 1770 年以降、状態変化動詞やその他動詞も使われ始め、テアル相当文の用例も増えるのである。後期になると、さらに上方語も江戸語も語幹動詞が多様になる。

〈後期上方語〉

(103) びんをたかくときあげ、うしろをそり下げ、本田わげにいふてある。
（曲雑話、1800 年）

(104) そうしてしころ台も床机も、あんばいようしてあるか、いつもの通り大ふとん下へ敷かしてくれ （落噺千里薮、1841）

(105) あつさがゑらひさかい、何もかもくさつてあるので、とんとくへる物ハない。
（ている）（新選／臍の宿かえ、1812 年）

テアル相当文において語幹動詞が多様になり、状態変化動詞のテアル文が増えた（結ふ、しめる、ぼうずにする、まぜる、なる、そうじする、など）。（103）の「本田わげ」は髪形の一種で、この形に「結ってある」と眼前の人を描写している文である。また、（104）

のような、明らかなB型のパーフェクト・テアル文も見られるようになってきた。この文は場面描写的な文ではなく、聞き手に向けた疑問文であり、配下と思われる二人称の動作主主語が存在する。一方、テイル相当文はやはり（105）のような非対格自動詞の文が中心である。

後期江戸語も全体的に用例が多く、多様なテアル文が使われている。

〈後期江戸語〉

(106)　夘の花だの山吹だのと、いろいろ看板が出してあるが、

（振鷺亭噺日記、1791年）

(107)　いやいや、またれねへ。そつちから、まてなしときめてあらア。

（落咄臍くり金、1791年）

(108)　女ぼうハ、夫に別れし悲しさに、日々墓へまいり、水を手向てありけるが、

（ている）（仕形落語工風智恵輪、1821年）

後期の上方語、江戸語を通して特徴的なのは、テアル相当文において中期まではなかったB型のパーフェクト・テアル文が出現していることである。（107）は将棋の場面で、あらかじめ聞き手が「まてなし（待ったなし）」と決めたのにもかかわらず、「待ってくれ」というので、「そっちからまてなしと決めてあるだろう」と言っているのである。この文のアスペクトは結果状態ではなくパーフェクトで、特定の動作主主語が存在するB型テアル文である。また、対象の名詞句にガ格が標示されている文が優勢になっている。テイル相当文ではやはり非対格自動詞が中心である。非対格自動詞のテイル相当文は上方語でテイル相当文45件中40件、江戸語で64件中35件であった。江戸語では非対格自動詞の割合が上方語に比べて少ないように見えるが、非対格自動詞以外の動詞が出ているのは主に疑古典と思われる作品である[124]。

最後に対象がガ格で現れるB型テアル文の用例を見る。ここまで見てきたように、本論では変化動詞以外のその他動詞は基本的にB型であり、その他動詞の場合、B型でも対象名詞句がガ格で現れることがあることを主張した。コーパスでも江戸後期になるとその他動詞で対象がガ格の用例が見られるが、非常に少なく、明らかにB型と思われる

[124] 噺本は基本的に話し言葉を反映しているといわれるが、中には疑古典のものもある。テイル相当文の非対格自動詞以外が使われる文は、疑古典ということがはっきりしている作品から8件、記録にはないが文体から疑古典と思われる作品から12件と、これらの作品に偏って検出された。これらの作品からは逆にA型テアル文が2件しか出ておらず、非対格自動詞のテアル文（テイル相当文）は1件もなかった。この事実は、この時代の人にとってA型テアル文や非対格自動詞のテアル文が現代語であり、動作進行のテイル相当文が古典のテアル文の用法であったということを示唆している。

ものは1件だけである。初出は次の文であるが、これはB型テアル文であるかどうかが疑わしい。

(109)　親父の留守に、息子友達を二三人呼集め、狂哥の咄や誹諧の序（ついで）に、アノ荘子に大きな事がいつてあると、学者がいつた。　（喜美談語、1795年）

この文は現代語訳が難しいが、この後に息子の（荘子が言ったという）大げさな話が続き、最後に父親に見つかって叱られるという話なので、現代語に訳すとすれば、「親父の留守に息子が友達を2・3人集め、狂歌の話や俳諧のついでに、あの荘子（の書物）に大きな事が言ってあると学者が言っている（と息子が話していた）。」であろう。この場合、大きなことを言ったのは荘子であり、意味的には「荘子の書物に大きな事が書いてある」と同じで、これはA型の文といえるかもしれない。次の文は明らかにB型だと思われる文である。

(110)　大工さん仕事場へ、すしがやつてある。　（一口ばなし、1839年）

その他動詞自体が20件しかないので、資料が少なく、確かなことは言えないが、3章の現代語のコーパスで見られたような明らかなガ格対象名詞句のB型の文というのはこの文以外は見られない。B型でもガ格名詞句で現れるというのは、A型テアル文が変化動詞で一般的な表現になったことで、その他動詞でも徐々に許されるようになったということかもしれない。

以上コーパス調査の結果をまとめると、次のようになる。

(111)　①古い時代はテアル相当文ではパーフェクトの用法が中心的である。テイル相当文は動作進行やパーフェクトである。
②鎌倉時代までは対象がガ格で現れる文がほとんど見られない。
③江戸時代になると対象がガ格の、A型存在表現テアルの文が徐々に増えていく。
④上方、江戸ともにテアルが非対格自動詞と共起する。対象の名詞句が有生物ならテイル、無生物ならテアルという区別は上方だけの特徴ではない。
⑤江戸中期まではテアル相当文はほぼA型のみで、語幹動詞は配置動詞と書記動詞に限られるが、江戸後期になると語幹動詞が多様になり、A型テアル文に状態変化動詞が使われるようになるのと同時にB型テアル文用例が増える。

このコーパス調査の結果と、先行研究を踏まえ、テアル文の文法化のプロセスについ

て、存在動詞とテアル文の関係も含めて表5のように考える。

表5

	存在動詞	テアル文
上代	有生・無生の区別なくアリ。	テアリで現代のテイルの用法を表す。(主語有)
平安〜鎌倉	有生・無生の区別なくアリ。	テアリがタリに取って代わられるが、一部動作進行のテイルとパーフェクト・テアルの意味で存続。
室町	アリからアル・イルへの交代期。 所有文はアル、存在文はアル・イル。	タリがタになり、アスペクト形式を補うためにテアリが復活。
江戸前期〜中期	存在文において有生・無生の区別がはっきりする。	有生・無生の区別がはっきりした存在動詞のアルとイルからの再文法化。 無生名詞句：テアル 有生名詞句：テイル 1670年あたりを境にA型テアル文が出現するが、その後しばらく動詞は書記動詞と配置動詞に限られる。テイル相当文では無生物主語で非対格自動詞が使われる結果状態のテアル文と室町以前の古いパーフェクトや動作進行の文が存続。
江戸中期〜後期		中期の終盤にテアル相当文が多様になり、A型で状態変化動詞のものやB型テアル文も出揃い、用例も増える。テイル相当文はほぼ語幹動詞が非対格自動詞に限られて存続。
現代	所有文はガ格名詞句が目的語で、他に主語が存在する能格型構文。 アル存在文はガ格名詞句が目的語の主語無し構文。	無生物主語のテアル文（語幹動詞が非対格自動詞のもの）は消滅。 ガ格名詞句が目的語で主語無し構文の結果状態を表わすA型テアル文と有生物主語が存在するパーフェクトのB型テアル文のみが存続。

もともと日本語の存在動詞は有生・無生の区別のないアリが担っていた。江戸時代になって有生物の存在を表すのにイル、無生物の存在を表すのにアルを使うようになった。アリはテアリとなり、アスペクト形式として動作進行、結果状態、パーフェクトを表していたが、もともと動作動詞であったイルが状態動詞化して存在を表すようになると、

テイルが動作進行と結果状態を表すようになり、テアルはパーフェクト中心になった。江戸時代になると有生物の存在にはイル、無生物の存在にはアルを使うという区別が厳格になったことで、その江戸時代のアル・イルの用法から再文法化（金水(2006a)のいう「文法化の再出発」）が起こった。事実江戸時代の用例は古いものは A 型と思われるもののみであり、存在動詞の意味に近い存在表現の A 型テアル文から再び文法化が始まったと考えれば、内容語本来の意味から離れていく文法化の一方向性という一般的な文法化の流れと一致する。江戸時代に再文法化が起こったと考えれば、アスペクト的な B 型テアル文が存在動詞に有生・無生の区別なく使われていた頃の古い時代からあったことと矛盾しない。

ただ、存在動詞の有生・無生の区別から、テアル文に関しては無生物にガ格名詞句が使われるようになったが、江戸時代には非対格自動詞を語幹動詞とするテアル文も使われていた。このことは何を意味するかというと、江戸時代のテアル文には無生物主語のテアル文、つまり非対格自動詞文との共起が許されていたということである。現代では「えんぴつが落ちてある」は少なくとも標準語では許されない[125]。非対格自動詞文のガ格名詞句が主語性を持つことは４章で述べた。つまり、江戸時代にはテアル文において対象のガ格名詞句が主語になることが許されたが、現代では許されていないということである。すなわち、テアル文における対象のガ格名詞句は現代では常に目的語のままであると言える。現代では非対格自動詞の結果状態を表すにはテイルを使う。つまり、言い換えれば、6.2 で述べたように、現代のイルは常に主語を要求し、アルは主語を必ずしも要求しないと考えることもできる[126]。それはアル存在文においてアルの対象名詞句が主語ではないと考える根拠となる。

そして、「ガ～テアル」という A 型テアル文の用法が一般的になったために、動作主主語のある B 型テアル文に関してもゼロ主語で現れた場合にはそれを参照せず、目的語にガ格が付与されることも可能になったと考えられる。

(112)　A 型：　X ガ　～テアル
　　B 型：　X ガ　Y ヲ～テアル　　または　　pro#　Y ヲ／ガ　　～テアル

古くからテアル文はラレテイル文と比較され、それぞれの形式からもたらされる意味の違いについて論じられてきた。（三矢 1908、松下 1928、井上 1976a、寺村 1984 など）。事実として、テアル文が表している状態をテイル文で表そうとすると、自他交替のある

[125] ただし関西弁では「たある」の形で非対格自動詞と共起する文が残っていることが金水(2006a)でも指摘されている。
[126] 「必ずしも」というのは、所有文の場合は主語を要求するからである。しかし所有文でも主語はニ格で表わされ、対象のガ格名詞句が目的語であることは同様である。

動詞であれば自動詞を使うか、他動詞の受動形と接続してラレテイルの形式になる。自他交替のない動詞であればラレテイルにするしかない。

(113) a. 窓が開けてある。
b. 窓が開いている。
c. 窓が開けられている。
(114) a. 机の上にリンゴが置いてある。
b. 机の上にリンゴが置かれている。

（113）の各文、及び（114）の各文は、それぞれニュアンスの違いは出るが、場面描写文と捉えれば、表している状況は同じである。同じ状況を表すのに、テアル文であれば他動詞が主語無しで使えるのに対して、テイル文では非対格自動詞か他動詞の受動形にしなければならない。この事実は、イルが常に主語を必要としていることを表している。4 章で見たように、非対格自動詞のガ格名詞句と、受動文のガ格名詞句は主語性を持つからである。

また、（113b）（114b）のテイル文を（115a）（116a）のように他動詞で表すと、結果状態の意味にはならず、動作進行かパーフェクトの意味にしかならない。A 型テアル文と同じ意味は表わせないのである。さらに、（115b）（116b）が非文となるように、対象の名詞句をガ格で表すことができない。

(115) a. 窓を開けている。
b. * 窓が開けている。
(116) a. 机の上にリンゴを置いている。
b. * 机の上にリンゴが置いている。

これは、B 型テアルとは違って、テイルには格付与の観点から不可視になるようなゼロ主語（5 章では pro#と表記した要素）を持つ可能性がないからである。これは、テアルの場合は A 型テアルと B 型テアルの間で主語に関する特徴に揺れがあるが、テイルでは常に主語が必要とされているためであると考えられる。

しかし、テイル文でも主語無し構文と似通ったものがあるようだ。又平(2001)や田川(2002)で検討されている「イチゴが売っている」という表現である。「売る」は他動詞で、本来ならテイル文として使われる時には対象がヲ格で表されるか、あるいは受身にならなければならない。通常の他動詞では許されないことである。

(117)　*穴が掘っている。
(118)　*ドアが開けている。　（田川 2002:15）

しかし、先行研究で「単なる言い誤りによる格の誤用として処理してしまうには出現の頻度が高く、一つの定型構文として成立してしまっているものである」（又平 2001:93）と指摘されているように、世代間で差があるようではあるが、許容度が非常に高い。実際「現代書きことば均衡コーパス」[127]では、223 件検出された[128]。しかも、この文ではニ格場所句が許される。次の例をコンビニでイチゴを見かけた時の場面描写文としてとらえると、ニ格場所句の出現可能性に差が見られる。

(119)　a. コンビニ（で／に）イチゴが売っている。
　　b. コンビニ（で／*に）イチゴを売っている。
　　c. コンビニ（で／??に）イチゴが売られている。

つまり、「売っている」に限り、テアル構文と同じように場面描写文として主語無しでテイルが使えるようになっていると考えても差し支えない。他に「やる」でも「～ガ～テイル」の形で使うことができる。

(120)　京都で国宝展がやっている。

しかしこの場合はニ格で場所句が示せない。テアル文でもニ格場所句には一定の生起条件があったことと類似している[129]。また、誰が国宝展を催したかということはこの文では一切問題にされておらず、したがって統語上の位置も無いと推測されることはA 型テアル文の場合と同様である。

このように、テイル文の一部においても主語無し構文で言えるようになってきたと見ることもできそうである。そうだとすれば、その事実は、文法化の流れと言えるかもし

---

[127] コーパスの情報については 3.1 に詳述した。
[128] 文字列検索で「が売って」として検索したところ、251 件見られたが、そのうち売り手がガ格で表れているものなどを削除して、対象がガ格のテイル文だけを抽出したものが 223 件である。「売ってある」も 7 件見られたが、この表現を長崎方言として分析している文献もあるので、方言の可能性がある（桑野、上野 2011 など）。なお、文字列検索なので、ガ格名詞句と動詞の間に副詞などが入っている場合は検出されず、実際にはより多くの例があると思われる。
また、223 件中実に 216 件が「yahoo ブログ」と「yahoo 知恵袋」と「国会会議録」からの例である。この 3 種は 3 章のコーパス調査でも「話し言葉風」としたものである。したがって、口語的な表現であり、書き言葉としては未だ逸脱した表現であると言えるかもしれない。
[129] ニ格場所句の生起条件については 2.6 を参照のこと。

れない。アルとイルの違いが希薄化しているのである。とはいえ、テアル構文に比べると、動詞が非常に限られている。田川(2002)では「置いている」や「貼っている」でも使えるとしているが、筆者が自然に使うのは「売っている」「やっている」くらいである[130]。世代間の差、地域差、個人差があるかもしれないが、A 型テアル文ほど確立した文型ではなく、現在のところは十分に文法化が進んでいるとは言えない。しかし同時に今後はさらに多様な動詞で使える表現として広がって行く可能性も否定できない。とは言え、この種のテイル文が主語無し構文だとすれば、今のところテイル文で主語無し構文が広く浸透していない要因として、イルは本来主語を必要とし、イルのガ格名詞句が基本的には主語であるためであると推測するのは合理的なことであろう。

主語無し構文ということに関して 4 章でも触れたが、「ことがある」という表現との関係も考えなければなるまい。2.4.3 でも示したように、吉川(1973)はテアル文（本論でいう B 型テアル文）がテイル文の「経験」と類似していることを指摘している。

(121)

話してある	― 話している	― 話したことがある
見てある	― 見ている	― 見たことがある
ねてある	― ねている	― ねたことがある
休んである	― 休んでいる	― 休んだことがある
行ってある	― 行っている	― 行ったことがある

（再掲）（吉川、同書:257）

「～したことがある」はコト節の外に主語の存在があると考えれば、ガ格名詞句（コト節）は目的語である。

(122) a. 私は [PRO 首相と話したこと] がある。
b. ジョンは[PRO 京都へ行ったこと]がある。

これらの文は主語が有生物であるにもかかわらず、イルで置き換えることができない。

(123) a.*私は首相と話したことがいる。
b.*ジョンは京都へ行ったことがいる。

---

130 コーパスで「～（対象）が置いている」を調べてみると、肯定文では見つからなかったが、否定文の形で 3 件検出された。
(ⅰ) できれば何も家具が置いていない部屋を用意したいですね。（雑誌）
(ⅱ) 店に入るとボードが置いていない。（ブログ）

これは所有文と同じ現象である。

(124)　私には弟が{ある/いる}。
(125)　彼にはお金が{ある/*いる}。

しかし、所有文であればニ格の主語が現れるはずであるが、「〜したことがある」文にはニ格の主語は現れない。

(126)　a.*私には首相と話したことがある。
　　b.*ジョンには京都へ行ったことがある。

「こと」を「経験」に変えればニ格の主語が問題無く現れるが、その場合は所有文である。

(127)　a. 私には首相と話した経験がある。
　　b. ジョンには京都へ行った経験がある。

一方、「〜したことがある」文には無生物主語やイディオムの一部も現れる。

(128)　a. 昔、この地方で山火事が起こったことがある。
　　b. うちの家系でもトンビがタカを産んだことがある。

こうした文の存在は、「〜したことがある」文の構造分析として、主節に主語を設定するよりも、コト節の中に従属節の主語があり、それが主題化によって主文の主題の位置に移動したと考えたほうが良いかもしれない。そうだとすると、「〜したことがある」文もA 型テアル文と同様の主語無し構文だと考えられる。

(129)　a. 私$_i$は [t_i首相と話した] ことがある。
　　b. ジョン$_i$は [t_i京都へ行った] ことがある。

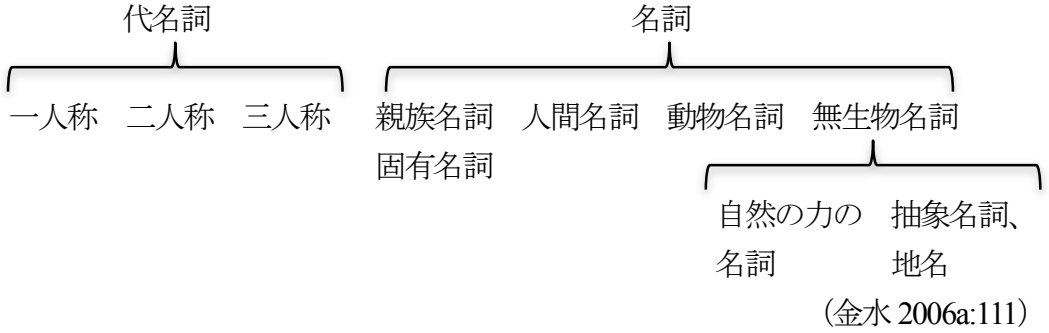
　これらの一連の考察から、イルが常に主語を必要とする非対格自動詞で、アルはむしろ主語無しでも使える他動詞であるとする見方が得られる。6.2 で示したように、存在動詞の文法関係を本論では次のように考える。

(130)　a.　所有文 : [主語-に　目的語-が　{ある/いる}]
　　b.　イル存在文 : [場所-に　主語-が　いる]
　　c.　アル存在文 : [場所-に　目的語-が　ある]　　（再掲）

イル存在文ではガ格名詞句が常に主語であるが、目的語がガ格名詞句で現れる所有文では、もともとアルでしか言えなかったものに、イルが伸長してきたと考えられる。その結果、イルであっても所有文ではガ格名詞句が主語ではない状況が生じた。現代語の存在文において有生物主語の場合はイル、無生物主語の場合はアルと通常捉えられているが、アル存在文のガ格名詞句は主語ではないとする考えも、こうした存在動詞の歴史的変遷を見れば、決して無理のない考察となる。

このような、アル存在文の対象名詞句が目的語で、イル存在文の対象名詞句が主語と考えられる現象は、日本語の存在文に特有の二つの事情が関係していると思われる。一つはもともと有生・無生の区別がなかった存在動詞が有生・無生の区別を得たということである。この章の初めに触れたように、世界の言語の中で、存在動詞に有生・無生の区別がある言語は非常に稀であると言える。江戸時代にアルの対象が無生物に限定されたことで、アルのガ格名詞句は主語性を失っていったと考えられる。金水(2006a)は有生・無生の区別をするようになった推進力として、シルバースティーンの名詞句の階層を挙げた。

(131)



（金水 2006a:111）

この階層が何を表すかは様々な捉え方がされているが（角田 1991 など）、金水(2006a)はこの階層のように人間を特別扱いする傾向があることから、有生・無生の使い分けが行われてもおかしくないと述べている。角田(1991)によれば、シルバースティーン自身は動作主になりやすさの度合いと動作の対象になりやすさの度合いを表すものとして挙げていると言う。それはそのまま主語になりやすさの度合いと捉えることもできるだろう。つまり、アルが無生物の存在を表すことに限定されたことによって、主語としての概念を表さなくなったと考える。江戸時代に盛んに使われた非対格自動詞を語幹動詞とするテアル文が、現代では使われなくなったと言う事実は、当初主語として捉えられていた

ものが次第に主語として捉えられなくなったことを示していると言えるのではないだろうか。

このような現象が起こったもう一つの事情として、イルがもともと動作動詞であったことが考えられる。すでに述べたように、古語では無生物であっても自然現象などの自発的な動きをするものにはイルを使うことができた。つまり動作動詞イルの主語はもともと自発的に動くものであった。それが、状態動詞となり、本来的に動く有生物の状態を表すようになった。動くものがある場所に存在するということは、一時的な状態（stage level）である。それに対して動かないものがある場所に存在するということは恒常的な状態（individual level）である。つまり動くものの存在と動かないものの存在は本来的に意味が大きく異なると考えてもよいだろう。実際に、中世まではイルは一時的な存在を表す空間的存在文にしか使われず、所有文を含む「限量的存在文」（金水 2006a）に使われることはなかった。江戸時代に単純化されたとは言え、イルは主語の状態を表わし、アルは目的語の状態を表わすとも考えられる。そもそも動作動詞であったイルに備わる特性として主語を要求すると考えることは不自然ではないだろう。一方で無生物の存在を表すことに限定されたアルには、主語の概念が必要なくなったと考えられる。

ではなぜ目的語である名詞句にガ格が付与されるようになったのか。古い時代には同じような眼前描写の文で対象名詞句がヲ格で表されていいたのに対して、江戸時代に入るとガ格で表されるようになる。古典コーパスからの例を再掲する。

(132)　くんこうはこうによるべしと、高札を<u>うちてある</u>、（虎明本狂言台本、1642 年）
(133)　夘の花だの山吹だのと、いろいろ看板が<u>出してあるが</u>、
（振鷺亭噺日記、1791 年）

すでに述べたように、（132）は話者がどこかからやってきて、高札を見ながら話している場面であるので、この文は A 型テアル文に近い場面描写文である。しかし古い時代にはこのように対象の名詞句はヲ格で現れる。(133)は江戸後期の例だが、これも看板を見ながら話している場面なので同様に現代の A 型テアル文と同じである。この頃には対象の名詞句はガ格でしか現れない。これらの対象の名詞句はガ格で現れてもヲ格で現れても目的語であることに変わりはない。対象の名詞句がガ格で現れたということは、「主語になった」と考えることもでき、実際にこのガ格名詞句は多くの先行研究で主語として扱われている。しかし本論では、テアル構文においては対象のガ格名詞句が主語性を示さないということをすでに示した。そのことから考えれば、ガ格でマークされたからと言って、必ずしもそれを主語と捉えなくてもよいという推論に繋がる。つまり本論の主張は、この存在動詞の歴史的変化を無生物主語のアルが生じたと捉えるのではなく、アルが主語無し構文で言えるように変化したものだということになる。そしてテアル文に

おいては当該名詞句が主語位置に移動したためにガ格が与えられたと考えるのではなく、このように変化した江戸時代の存在動詞アルと同様に、A 型テアル文においては主語位置の動作主項が完全に消滅し、当該名詞句が場所句を除けば第一項になったためであると考える。場所句にはニ格が固有格として与えられるので、唯一の無標の項にガ格が現れるのは、５章で示した格付与のメカニズムによれば当然のことである[131]。

このように考えれば、アル存在文のガ格名詞句を主語ではなく目的語であると主張するのも無理なことではないと考える。そもそも当該名詞句が主語だと考えるのは、日本語においても文には主語が必ず存在するという前提に基づいていると思われる。しかし、４章でも述べたように、日本語には必ずしも主語を必要としない主語無し構文があると考えれば、テアル構文だけの例外的特徴ではないと言える。

6.5 文法化から見たテの機能

補助動詞アルやイルは動詞の接続形の一種、いわゆる「テ形」に接続する。ここまでは動詞のテ形を単なる語幹動詞の環境異形態として取り扱ってきた。この小節では、(1)の 3 つ目の仮説、「テの機能は接続であり、アスペクトマーカーではない。」を検証する。

テそのものにアスペクト的な意味があるかどうかは、研究者によって意見が分かれている。そもそも完了の助動詞「つ」の連用形であるテに完了の意味が含まれると考えるのは自然なことである。しかしテ形に続く補助動詞の歴史的変遷を見ると、少なくとも補助動詞への接続に使われる現代語のテに関しては、それ自体には意味素性がないのではないかと思わされる。なぜなら、第一にテ形に続く補助動詞は古代から中世までは完了の意味が強い用法で使われていたが、近世中期になって必ずしも完了とは言えない用法が現れ、その時期から用例も増えていくからである。この用法はテアル・テイルであれば単純な結果状態の意味で、非完結相を表す。第二に、後述のように、完了とは直接結びつかないこの用法は連用形接続で少なくとも平安時代から使われていたからである。つまり、テを用いずともほとんど同じ意味内容を表現していたわけであり、テ形に続く補助動詞の文に見られるアスペクト的特性はテに帰するものと考えるよりは、補助動詞自体がもたらすものであると考えた方が良さそうである。

(134)　あそこにリンゴが置いてある。（非完結相）
(135)　リンゴが落ちている。（非完結相）
(136)　リンゴを食べている。（非完結相）

---

[131] A 型テアル文においてニ格場所句は項であると考えるが、これにはアルの固有格として先にニ格が与えられる。詳しくは５章を参照のこと。

（134）（135）はアスペクトとしては結果状態なので、語幹動詞「置く」「落ちる」の動作が完了してその結果が存続していると考えることができる。その場合はテが完了を表わしていると言うこともできる。しかし、（136）は動作進行なので、語幹動詞の動作は完了しているとは言えない。また、竹沢(2015)は、「て見える」構文を考察し、テは継続相のアスペクトマーカーであると分析している。

(137)　a.　太郎には花子がやせて見えた。
　　b.　太郎には線が曲がって見えた。　　（竹沢 2015:243）

このように、補助動詞によってテのアスペクトが変わると分析せざるを得ないのであるならば、テ自体はアスペクト的意味を導入していないのではないのだろうか。一般的に完了のアスペクトと言われるテシマウ形についても、「～しおえる」で言い換えた連用形接続と同様に完結相であり、完了の意味が含まれていると見ることができる。

(138)　（今日中に）リンゴを食べてしまう。（完結相）
(139)　（今日中に）リンゴを食べおえる。（完結相）

しかしテシマウ文シオエル文もアスペクト的にはほぼ同等であり、テがなければ完了が表せないというわけではない。事実古い時代にはテオクにもテシマウにも連用形接続が使われていた[132]。

一色(2012)は中古・中世の日本語資料からテオクの例を抽出し、詳しく分析しているが、実際の例文は連用形接続の例である。オクに関しては、「言いおく」「書きおく」など、複合語として現代にも一部残っているが、中古・中世では様々な動詞と共に使われていた。

(140)　いにしへより人の<u>染おきける</u>藤衣にも何かやつれたまふ。　（源氏・若紫上）
　　（昔から人が喪服として染おいた藤衣に、何も身をおやつしになることはありますまい。）

---

[132] もちろん連用形接続とテ形接続とでは、接続の度合いに違いがある。例えば、「さえ」などの取り立て助詞を挿入できるかどうかによって違いが生じる。連用形接続では語幹動詞と補助動詞の間にそのまま「さえ」を入れることが出来ず、スル動詞の挿入（シ挿入）が必要である。
(ⅰ)　（今日中に）リンゴを食べてさえしまう。
(ⅱ)　＊（今日中に）リンゴを食べさえおえる。
(ⅲ)　（今日中に）リンゴを食べさえしおえる。

(141)　日ごろつくりおかれし罪業ばかりや獄卒となッて、むかへに来りけん。あはれなりし事共なり。
（日頃作っておかれた罪業ばかりが、獄卒となって迎えに来たであろう。まことに感慨無量なことである。）
（平家・入道相国）（一色 2012:17）

近藤(2012)はテシマウのコーパス調査を行い、テシマウが江戸時代に入ってからの用例であることを示した。それまでは連用形接続の「いいしまう」などが使われていた。さらに、シマウからテシマウへと文法化が起こった当初はもっぱらアスペクト的な用法、すなわち「今夜中に売ってしまう」など意志的な行為を完遂させるという意味で使われる「完了」「完遂」等と名付けられている用法であったのが、1770 年ごろを境に「桜が散ってしまった」のような「非意図的な出来事であること」や「遺憾の気持ち」を表わす表現が多くなり、用例もこの頃から増えている。近藤(2012)では前者を他動詞型のコントロール構文である「する型」、後者を自動詞型の主語上昇構文である「なる型」と呼んでいる。古典コーパスでのテシマウの初出は 1680 年代だが、そこから 1770 年までの間に「なる型」はわずかしか現れない。しかもその全てが非意志的な動詞と共に使われている。「なる型」テシマウの語幹動詞として使われた動詞の一覧が表 6 である。これを見ると、1770 年を境に、語幹動詞が多様になっているのがわかる。しかも「なる型で意志的な動詞が使われるということは、その意志的な行為が非意図的な出来事として表わされているということであり、より文法化の進んだ表現であると言える。

表 6　「なる型」の「テシマウ」と共起した動詞

	非意志的	意志的
1770 年以前	焼ける、消え失せる、（酔いが）さめる、（船が）出る、死ぬ、腐る	
1771 年以降	なる、腐る、負ける、切れる、散る、落ちる、こぼれる、尽きる、（おなかを）くだす、抜ける、売られる、忘れる、紅葉する、（弔いが）出る、寝る、（汗がどこかへ）行く、なくす、なくなる、身にしみる、喰われる、とられる、済む、流れる、くずれる、消える、行き過ぎる、笑う、死ぬ	する（剃るの意）、喰う、上がる、去ぬ（去るの意）、読む、する、帰る、なす、逃がす、言う、抜く、逃げる、ふれる、呼ぶ、割る、さらけ出す、さらけ込む、引く、発つ、かみ砕く、つぐ、つぶす、飲む、あやまる、やる、売る、捨てる、やめる、押しつける、ばらす

（近藤 2012:74）

これを見ると、1770 年を境に、語幹動詞が多様になっているのがわかる。しかも「なる型で意志的な動詞が使われるということは、その意志的な行為が非意図的な出来事として表わされているということであり、より文法化の進んだ表現であると言える。

意志的な行為が非意図的な出来事として表わされている例というのは次のような文である。

(142) どれ、銭の五十もやろうか。〔ト腰提（さ）げを見て、〕南無三（なむさん）、今門前の物貰ひに皆（みな）やってしまった

（『お染久松色讀販』1813）（近藤 2012:69）

これは、お金を出そうとして「腰提げ」を見たらお金がなくて焦っているという場面である。「物もらいにお金をやる」という動作は意志的であるが、この場合は積極的に「やった」と言っているのではなく、気付かないうちにすべて「やった」ということを失敗だったと後悔しているのである。

このように 1770 年のあたりを境にテ形に続く補助動詞の語幹動詞が多様になるという現象は、6.4.3 で述べたとおり、テアル文にもちょうど同時期に起こっている。さらに、Kondo(2014)ではテシマウとテオクの文法化をコーパスから考察しているが、テシマウと違ってテオクは中古から見られるにもかかわらず、やはり 1770 年あたりを境に用例が急に増えていることを指摘している[133]。

表 7　Frequency of *-te shimau* Sentences in *Hanashibon*[134]

	-1770	1771-90	1791-1810	1811-30	1831-
transitive	8	18	14	12	8
intransitive	1	4	10	9	13
Ratio intr	11%	18%	42%	43%	62%
Kbyte	4253	4010	1789	1118	890
Freq trans	1.9	4.5	7.8	10.7	9.0
Freq intr	0.2	1.0	5.6	8.1	14.6
Freq total	2.1	5.5	13.4	18.8	23.6

（Kondo 2014:111）

[133] 1770 年以前は用例数が少ないため、ひとまとまりにしているが、1600 年から 1770 年までの 170 年間を表わす。1771 年以降は 20 年ごとに区切ってある。

[134] Kbyte=コーパスの大きさをキロバイトで表わしている
Ratio intr = テシマウの用例数に占める「なる型」テシマウの割合
Freq trans = 1000Kbyte あたりの「する型」テシマウの用例数
Freq intr =1000Kbyte あたりの「なる型」テシマウの用例数
Freq total =1000Kbyte あたりのすべてのテシマウの用例数

ここでは transitive が「する型」テシマウ文で、intransitive が「なる型」テシマウ文である[135]。これは噺本に限った用例数であるが、1770 年までに 1 件しか現れなかった「なる型」テシマウが、1771 年以降徐々に用例数を伸ばし、テシマウ文全体に占める「なる型」の割合も急激に増えていることがわかる。表 9 は同じ噺本におけるテオクの用例数である。

表 8　Use of *-te oku*

	-1770	1771-90	1791-1810	1811-30	1831-50
	66	134	87	68	28
Kbyte	4253	4010	1789	1118	890
Freq	15.5	33.4	48.6	60.8	31.5

テオクは古くからあるにもかかわらず、1600 年代初頭の文献から入っているこのコーパス内で 1770 年までの間に 66 件しか現れていない。それにもかかわらず、1770 年以降は急激に用例が増えていることがわかる。

つまり、6.4.3 でも触れたように、この 1770 年のあたりに転機があり、テがアスペクトマーカーというよりは動詞と動詞、あるいは文と文をつなぐ役割を持つものとして使いやすい形式となり、活用形の一種として発達し、テ形に続く補助動詞全般が非常に生産性の高いものになっていったと考えられる。

テアル文の変遷からもテのアスペクト的意味が薄れていった様子がうかがえる。まず古い時代のテアリ文は多分にアスペクト的であると言える。テに備わっている完了の意味と、存在動詞アリでアスペクト形式として働いていた。しかし中世までは他にもアスペクト形式があったのでそれほど高い頻度で使われるものではなかった。江戸時代に入って新しい形式、すなわち有生物の存在はイル、無生物の存在はアルで表わすという体系が定着し、そこからテアル文としての文法化を再出発させた。その結果アルの存在動詞としての意味から近い存在表現テアル文が出現し、さらに多様な動詞がテアル文に使われるようになり、結果状態テアル文の用法が出てきた。その転機となったのがこの 1770 年のあたりなのである。そしてこれ以降多様なテアル文が使われ、用例も増える。つまり、テから完了の意味が薄れ、補助動詞に接続する用法としては、単に語幹動詞と補助動詞をつなぐだけの機能的役割を担う形式的要素になったと考えられる。このようにもともとあった意味が薄れる（「semantic bleaching（意味の漂白化）」(Sweester 1988、Hopper and Traugot 1993 など）という現象は普遍的な文法化の概念と一致する。そして単

[135] 松下(1928)も「する型」テシマウ文を「他動詞型」、「なる型」テシマウ文を「自動詞型」と呼んでいる。しかしこの名称は、後の研究者によってテシマウの語幹動詞の自・他の区別と混同され、定着していない。

に便利な接着剤のようにテが使えるようになったことによって、テ形に続く補助動詞が発達し、多様な補助動詞がテ形動詞と接続できるようになったと考えられる。

このように、アスペクト的な意味を持たない（あるいはアスペクト的な意味が弱い）、活用形の一形態としてのテ形が発達したと考える[136]。坪井(2005)は、活用体系の歴史的変化の中で「活用語連用形＋テ」が「活用語テ形」に変化し、活用形としてのテ形が成立したという考えを示している。これはタ形の成立と連動しているという。「完了・存続」を表わすタリが「動作の実現（過去）」を表わすタに変化し、終止連体形のル形とテンス・アスペクトにおいて対をなすものとなった。そして、「タ形を取り得るあらゆる場合に、テ形を取って文を接続・展叙させることもできることが文法体系にとって「望ましい」わけである。」（坪井 2005:22）と述べている。坪井はタ形の接続形としてテ形を捉えており、この考え方は Kishimoto(2012)や Nakatani(2013)がテをタの異形態としていることと通じる。しかし、Nakatani(2013)はテとタを定形の過去（finite past tense）とし、Tense として扱っているところが坪井(2005)とは異なる。Nakatani(2003)は次のように定義している。

(143)　T[+past]はCに統率されるとタになり、それ以外はテになる。

（Nakatani 2013:63）

そして、テによる文接続の構造を次のように表している。[137]

---

[136] 関西以西の方言には「とる」と「よる」が使い分けられているものがあることが知られている。工藤(1995)は愛媛県宇和島方言の研究でその違いを示した。

(ｉ)　a. 2 時ごろ来たって、試合終わりよるぜ。
　　b. 2 時ごろ来たって、試合終わっとるぜ。　（工藤 1995:263）

（ｉa）は２時の段階ではまだ終わっていない。「終わりつつある」の意味で、標準語では「ている」で表わせない文である。それに対して（ｉb）は標準語の「終わっている」と同じく、２時の段階ですでに終了している。

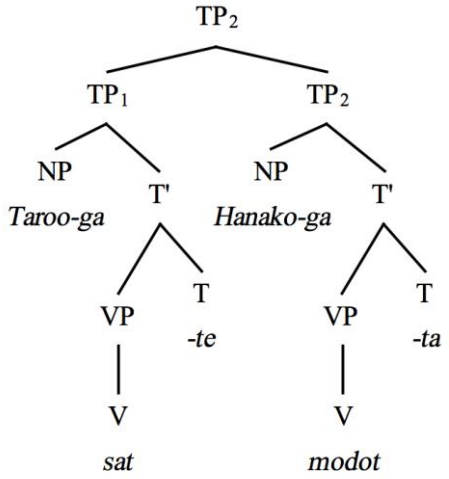
また、この方言では動作進行と結果状態も「とる」と「よる」で使い分ける。

(ⅱ)　a. 猫が障子破りよる。おっぱらいさい。
　　b. 猫が障子破っとる。張り替えないけん。　（工藤 1995:262）

同じ「破る」という動作動詞でも、「よる」を使う（ⅱa）は動作進行の意味で、（ｉb）は猫が破った形跡を見て結果状態を述べる文であるという。つまり、この方言では動作進行と変化過程の進行は「よる」で表わし、結果状態は「とる」で表わす。「とる」は「て」＋「をり（上代の「ゐる」の状態化形式（金水 2006a など））」だと考えれば、「よる」は語幹動詞の動作の完了前の継続性を示し、「とる」はその動作の完了後継続性を示しているので、「て」が完了のアスペクトとして機能していることになる。しかし現代標準語のみならず、「とる」を使う方言（例えば尾張方言）でも多くは動作進行と結果状態での使い分けがないことを考えれば、「て」がもたらす「完了」の意味は極めて希薄になっていると結論付けることができる。

[137] Nakatani(2003)は全ての主文（root clause）は CP だと仮定しており（P.70）、C が T を統率する

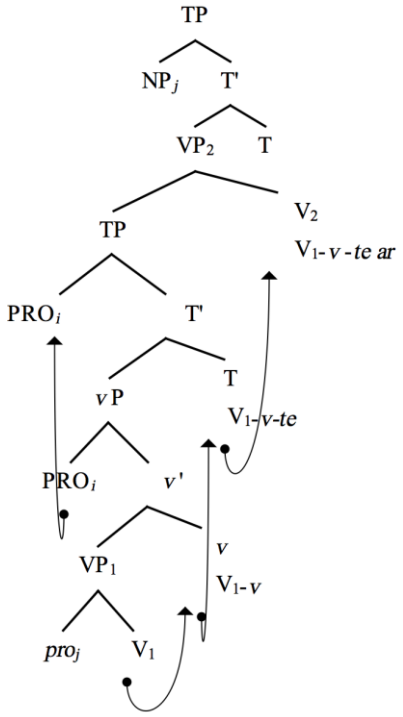
(144)　[Taroo-ga sat-te] Hanako-ga modot-ta.



（Nakatani 2013:71）

Nakatani は補助動詞の場合も同様にテを T として取り扱い、テアルの構造を次のように考えている。

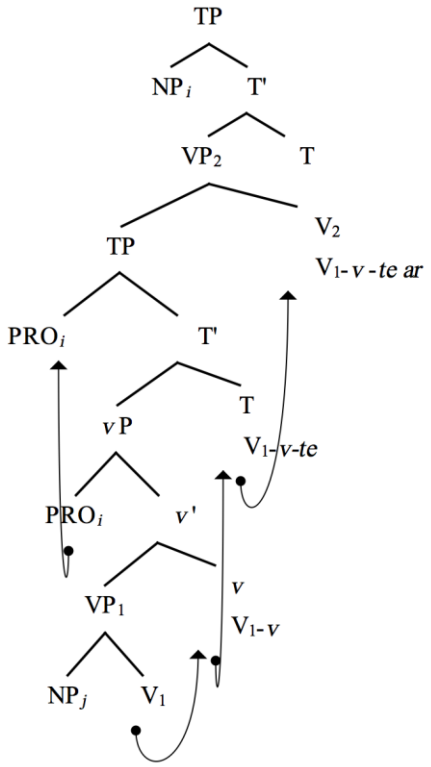
(145)　A 型テアル文[138]



構造を示唆しているが、実際には TP より上位の構造図を一切示していない。

[138] Nakatani(2013)の用語では A 型テアル文は Intransitivized、B 型テアル文は目的語が動かないという意味で In situ と呼ばれている。

(146)　B 型テアル文



（Nakatani 2013:158）

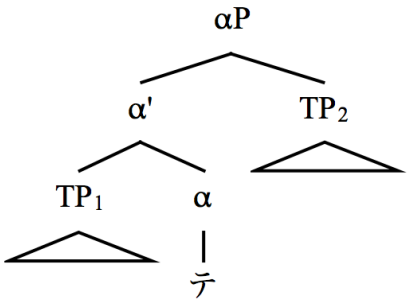
しかし、文接続の場合はテを T の主要部とする分析が可能だと思われるが、補助動詞との接続の場合、テの働きから考えると文接続と同等に考える根拠はないと思われる。Nakatani(2013)の分析では T に EPP 素性があり、それによって PRO が TP 指定部に上がっているが、もしテが T であると考えると、次のようにテ形補助動詞が連続して現れた場合、一つの文に EPP 素性を持った Tense が複数回現れることになる。

(147)　同じ本をたくさん買ってもらってしまっていた。
(148)　この服を彼女のために着てみてあげてください。

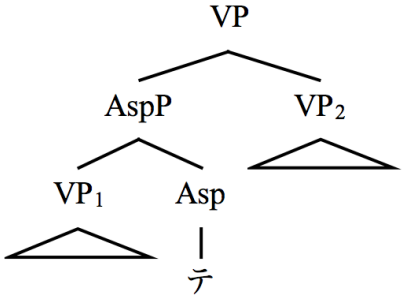
この状況は、5.1 でも触れたように、実際の感覚と合わず、システムとしても余剰性があり、好ましくない。

内丸(2006)は、文接続のテの場合は等位構造を形成し、「着物を着て走る」などの付帯状況を表わす場合と、補助動詞の場合は付加構造を形成すると考えている。そして後者の場合のみテをアスペクトマーカーであると分析している。

(149)　等位構造



(150)　付加構造



（内丸 2006:34）

テがアスペクトであるならば、（147）（148）のようにテ形が重なった場合、Tense は一つで AspP が複数現れることになる。アスペクトに階層があり、AspP が重なって現れる場合には階層に従って重なるという考え方が、Fukuda(2012)で示されている。Fukuda は「～しはじめる」「～しおわる」などのアスペクト動詞について、イベント全体を補部にとる High-Aspect（H-Asp）と、アスペクト主要部がそのイベント内の構造に入る Low-Aspect（L-Asp）があり、アスペクト動詞に階層があることを示している。個々のアスペクト動詞の特性については、オエルは L-Asp のみ、オワルは H-Asp のみ、ハジメル・ツヅケルは両方のタイプがあると提案している。その根拠の一つとして受動文の現れ方の違いを挙げている。

(151)　a. 店のガラスは暴徒に割られ始め／続けた。
　　b. その町が攻撃され終わった。
　　c. *ナツコとツヨシの靴が磨かれ終えた。

（Fukuda 2012:968）

このように、ハジメル・ツヅケル・オワルは補部を受動化することができるが、オエルはそれができない。補部が *v*P の場合は、*v*P が受動化することで[139]、短距離受動が可能となる。短距離受動のないオエルは、義務的に VP を補部にとる L-Asp であると言える。逆に、オワルは長距離受動を許さないことから[140]、H-Asp の位置にのみ起こると考えられる。

(152)　その論文が（ジョンによって）読み終えられた。　（Fukuda 2012:968）

(153)　a. この本は読み始め／続けられた。

　　b. *その本はようやく書き終わられた。　（Fukuda 2012:969）

つまり Fukuda は、H-AspP は受身の (r) are などを主要部とする VoiceP の上にあり、L-AspP は VoiceP の下にあると分析している。ハジメルとツヅケルは短距離受動も長距離受動もどちらも許すので、H-Asp の場合と L-Asp の場合と両方あると主張した[141]。

Cinque(2006)も長距離受身を許すかどうかでアスペクト句が Voice より上にあるか下にあるかを分析し、全てのアスペクト句に階層があるという提案をしている。

(154)　$Asp_{habitual}$＞$Asp_{repetitive\ (1)}$ ＞$Asp_{frequentative\ (1)}$ ＞$Asp_{celerative\ (1)}$ ＞$Asp_{terminative}$＞ $Asp_{continuative}$＞$Asp_{perfect\ (?)}$ ＞$Asp_{retrospective}$＞$Asp_{proximative}$＞$Asp_{durative}$＞$Asp_{progressive}$＞ $Asp_{prospective}$＞$Asp_{completive\ (1)}$ （＞Voice） ＞$Asp_{celerative\ (2)}$ ＞$Asp_{completive\ (2)}$ ＞ $Asp_{repetitive\ (2)}$ ＞$Asp_{frequentative\ (1)}$・・・

(Cinque、同書: 82)

テ形に続く補助動詞にもこのような階層性が考えられる。（テ）アルの場合は H-Asp であると考えられる。C 型（テ）アルについても Fukuda(2012)が示した短距離受動と長距離受動と同じ現象が起こる。

(155)　a. 庭に木が植えられてある。

　　b.*庭に木が植えてあられる。

---

139 受動態の場合は *v*passP を想定している。

140 間接受身はこの限りではない。

(ｉ) 太郎に先に本を読み終わられた。

141 Fukuda(2012)は、H-Asp は「継続」のイベントタイプを選択し、L-Asp は「完結的継続」を選択するので、ハジメル・ツヅケルのように H-Asp と L-Asp の用法を両方持つ場合でも、意味や用法は違うことを、例を挙げて示している。その詳しい議論はここでは割愛する。

(156)　a. カーテンが破られてある。
　　b.*カーテンが破ってあられる。

（155a）（156a）のように、短距離受動であってもテアルの場合は多少不自然に感じることもあるが、4.5 で見たように、実際にはコーパスで多くの用例が出てくる[142]。しかし、（155b）（156b）のように、長距離受動は完全に非文であることを考えると、もし（テ）アルがアスペクトとして機能範疇に属すると考えるのなら、H-Asp だと考えることが妥当である。（テ）アルを H-Asp だと考える一方、他の補助動詞の場合は L-Asp になるものもあると思われる。

(157)　a. 机の上にあったお菓子が食べられている。
　　b.*机の上にあったお菓子が食べていられる。
(158)　a. コップが割られてしまった。　［遺憾］
　　b.*コップが割ってしまわれた。
(159)　a.#豆まきによって今年の厄が全て取り除かれてしまった。　［完遂］
　　b. 豆まきによって今年の厄が全て取り除いてしまわれた。
(160)　a. 試しに今度新しく来た上司に叱られてみた。[143]
　　b.* 試しに今度新しく来た上司に叱ってみられた。

（157）のテイル文の例は長距離受動が非文となることから、（テ）イルは（テ）アルと同じ H-Asp であると思われる。しかし、テシマウ文の場合は、「遺憾」の意味を表わす「なる型」（テ）シマウは（158）に見るように、長距離受動が許されないが、「ある行為を完全に遂行する」という、「完遂」の意味での「する型」（テ）シマウはむしろ長距離受動のほうがよい。（159a）のように、短距離受動で表わすと、非文ではないが、どうしても遺憾の意味をおび、「厄が取り除かれる」というような、一般的に良い出来事である場合には純粋に「完遂」の意味では不適合な文となる。つまり、「する型」（テ）シマウは L-Asp で「なる型」（テ）シマウは H-Asp であると考えられる。（160）のテミル文に関しては、やはり長距離受動が許されないことから、H-Asp であると言える。

このことは受動文の現象に限らず、アスペクトの階層にもつながる。

---

[142] B 型テアル文の場合は、意図的であることを言う表現なので、そもそも受動態では表わしにくいと考えられ、またラレテアル文自体、ほとんどが場面描写文であるという事実があり、実際コーパスでも B 型テアル文と思われる受身の用法は非常に少ない。
[143] この文は青柳宏教授が示してくださった文である。

表 9

	L-Asp	H-Asp
(ⅰ)	oe-	hajime-
(ⅱ)	oe-	tsuzuke-
(ⅲ)	hajime-	tsuzuke-
(ⅳ)	hajime-	owar-
(ⅴ)	tsuzuke-	hajime-
(ⅵ)	tsuzuke-	owar-

（Fukuda 2012:1010）

Fukuda（2012）は H-Asp と L-Asp を仮定することで、アスペクト動詞の結合の順序がうまく説明できると主張した。この表の予測だと、オエルはいつも構造上下位に、語順としては先に来なければならない。予測通り次のようになる。

(161) a.*太郎はそのりんごを食べ始め終えた。
b. 太郎はそのりんごを食べ終え始めた。 （Fukuda 2012:1011）

(ⅲ)(ⅳ)のケースは適切な文脈を探すのが難しいが可能だとしている。

(162) a. 太郎は第一章を何度も書き始め続けた。
b. 太郎は第一章を書き始め終わった。
c. 恵子は日記を書き続け終わった。.
d. 太郎は膝を 20 分冷やし続け終わった。 （Fukuda 2012:1011）

オワルは H-Asp のみなので、常に最後に現れることが予測されるが、予想に反してオワルが先に現れる場合もある。

(163) 太郎が弁当を食べ終わり始めた。 （Fukuda 同書:1011）

Fukuda(2012)はこれを H-Asp の中にもさらに階層があるためだとしている[144]。

Fukuda(2012)はテ形に続く補助動詞についても同様の階層性があると考えている。（157）から（160）の例で、（テ）イル、（テ）アルは H-Asp のみ、（テ）シマウは両方、

[144] （162）（163）の各文は単一のイベントでは不自然に感じるが、複数のイベントであれば許容度が上がる。この点は青柳教授にご指摘いただいた。
(ⅰ) 子供たちが給食を食べ終わり始めた。

（テ）ミルは H -Asp のみとしたが、Fukuda(2012)に倣い、H-Asp の中にもさらに High と Low があると考えると、（テ）ミルは H-Asp の中でも（テ）イル、（テ）アルよりも低いと考えられる。補助動詞の階層がこの通りだとすると、次のようになる。

(164) a. 宿題をやってしまってある。
b. *宿題をやってあってしまう。
(165) a. 窓ガラスをつい割ってみてしまった。
b. *窓ガラスをついわってしまってみた。
c. 窓ガラスをわざと割ってしまってみた。
(166) a. 読解にかかる時間を測ってみている。
b.*読解にかかる時間を計っていてみる。

（164）は L-Asp である「完遂」の（テ）シマウと H-Asp の（テ）アルが同時に出現する文なので、テシマウがテアルの後に続く（構造的に上になる）ことはない。（165）は H-Asp と L- Asp のある（テ）シマウと、H-Asp である（テ）ミルの組み合わせだが、H-Asp の中でも下のほうの（テ）ミルは H-Asp の「なる型」（テ）シマウよりは下に現れるが、L- Asp である「する型」（テ）シマウよりは上に現れる。（166）のように常に一番高い H-Asp である（テ）イル、（テ）アルと下のほうの H-Asp である（テ）ミルが組み合わされば、（テ）ミルが下になる。全ての補助動詞を見ればより複雑になるし、判断があいまいになる場合もあるだろうが、これらの例でははっきりと違いが現れることから、補助動詞の階層性に主要部の構造的な高さの違いが関係していると考えることができる。

テ形に続く補助動詞をすべてアスペクトと捉える必要があるかどうかは疑問であるが、このような階層性がもしあるのであれば、テをアスペクトマーカーだと捉えると説明がつかない。やはり補助動詞自体がアスペクト主要部になっていると考えざるを得ない。

したがって、本論では補助動詞の用法においては、テは大きな機能を持たず、単に語幹動詞を補助動詞に接続させるための形式的語尾であると捉える。そして少なくとも現代日本語では、補助動詞が連用形接続を選ぶか、テ形接続を選ぶかは語彙的に決まっているものであり、歴史的変遷を見ても、テ自体の文法化によってテが使い勝手の良いものになったことで、テ形に続く補助動詞が発展したと考えるのが自然であろう。

6.6 まとめ

この章では存在動詞とテアル構文との関わりを、歴史的変遷を含めて考察し、冒頭で示した仮説を先行研究とコーパスから検証した。仮説を再掲する。

(167)　1. 存在文とテアル文は類似した構造を持つ主語無し構文である。
　　2. 存在動詞アルとイルの歴史的変化を受けて、変化前と変化後の本動詞アルから二段階で補助動詞アルへと文法化が進んだ。
　　3. テの機能は接続であり、アスペクトマーカーではない。　（再掲）

仮説 1 については、存在動詞についての先行研究でされているテストなどを再検証し、イルとアルの振る舞いの違いを示し、アル存在文においてガ格名詞句が主語ではないことを主張した。現代語においては、当該名詞句は無生物に限られるため、主語性のテストにかけることは難しく、主語性を示さないという直接的な証拠を示すことはできないが、同時に主語であるという証拠も示すことができない。しかし、歴史的に見ればテアル文と存在動詞との関わりは明らかであり、その歴史的変遷と、4 章 5 章で検討したテアル構文の対象のガ格名詞句の主語性と合わせれば、双方のガ格名詞句が同様の性質を持ち、A 型テアル文とアル存在文はともに主語無し構文であるという推論が成り立つものと考える。

仮説 2 に関しては、先行研究とコーパスを詳細に見た結果、金水(2006a)が「文法化の再出発」と述べたように、近世において有生・無生の区別がはっきりした存在動詞から、改めてテアルの文法化がおこり、テアル文が発達した経過が見て取れた。しかしそれは A 型テアル文に限ったことであり、一方で B 型テアル文は早い時代から現れており、多分にアスペクト的であったテ＋アリの形が引き継がれたものであると考える。この種のテアリ文は中世には衰退していたが、テ形に続く補助動詞全般の発達と共に再び B 型テアル文として多く使われるようになった。したがって、テアル文の二段階の文法化はコーパス調査の結果の下に明らかになったと考える。

仮説 3 に関しても、コーパス調査の結果と、アスペクト的な機能を考察し、もともとは完了の助動詞「つ」の連用形として備わっていた完了の意味が薄れていると考えた結果、テはアスペクトマーカーではないと結論付けた。テアル文に限らず、1770 年のあたりを境にテ形に続く補助動詞の用例が増えていることから、そのころテ自体の文法化によってそれまでのアスペクト的機能が弱まり、便利な接続表現へと変わっていき、多様な補助動詞と接続できるようになったと考える。

このように存在動詞とテアル構文の関係と歴史的変遷を見ると、A 型テアル文と B 型テアル文が並び立つ現在の状況も必然的なものであると見ることができる。また、A 型テアル文において主語無し構文としての用法が確立していった様子も確認することができたと思われる。

第 7 章

おわりに

7.1 結論

本論ではまずテアル構文を、存在動詞に近い構造で結果状態の存続を表わす A 型テアル文と、動作主主語を持ち、意図的な動作の結果の効果の存続を表わす B 型テアル文の二つに分類し、さまざまな角度から考察した。テアル構文に意味・機能の異なる二類型を想定することは、どの先行研究でもなされているが、本論ではそのような意味・機能的な違いは構造の違いと密接に関連するもので、これら二つのテアル文のタイプが構造もアスペクトも異なる二類型である事を主張した。A 型は場面描写的であるが、B 型は発話時、あるいは基準時まで続く効果について述べるものであり、準備的な意図という語用論的制約から、弱い人称制限も含む。またアスペクトの面でも A 型と B 型は異なることを示した。A 型は単純な結果状態で、非完結相を表わし、B 型はある行為の結果の効果が基準時においても存続しているという、パーフェクト相を表わす。従来あまり注目されていなかったアスペクトの違いに注目したことと、構造上存在する動作主の特性に着目することで、格標示の違いだけでは説明できなかった特徴を説明することができたものと考える。

従来の記述的研究では構造的な違いや主語の有無については検討されておらず、なぜそのような違いが生じるのか、どこからもたらされるのかが示されていない。逆に理論的な研究では格配列だけに頼った分類を基盤としているため、結果として構造と意味・機能との間にねじれが生じている。本論では記述的なアプローチと理論的な分析を組み合わせ、さらに歴史的変遷を辿ることで、より精密にテアル構文の特徴を捉えることができたと考える。

本論で検討した二類型のテアル構文の特徴を表 1 に示す。

表 1

型	意味	語用論的機能	項構造	主語	対象の格	アスペクト
A 型	位置変化、状態変化した後の結果状態の存続	場面描写	(NP ニ) [$_{VP}$ NP ガ V テ]アル	無	ガ	非完結相
B 型	意図的な動作の効果の持続	準備的意図	[$_{VP}$NP ガ ..... V テ]アル	有	ヲ/ガ	パーフェクト相

本論では、それぞれのテアル構文の主語について詳しく考察し、A 型テアル文は主語を完全に欠いた主語無し構文とし、音形の有る無しにかかわらず常に統語上の主語を持つ B 型テアル文と対比させ、両者の違いを構造の違いに帰結させた。先行研究でも指摘されてきた尊敬語や再帰代名詞による主語性のテストの結果も、B 型テアル文の特徴を明らかにすることにより、A 型と B 型の違いをより客観的に示すことができたと考える。「受動型」や "Intransitivizing Resultative" という用語からわかるように、従来 A 型テアル文では対象を表わすガ格名詞句が受動文の主語と同じく主語になっているものとして扱われてきた。この想定が誤りであったことを明らかにし、この種のテアル文におけるガ格名詞句が主語の性質を持っておらず、目的語のままであることをより明示的に示すことができた。

さらに、これまで言及されることの少なかった「受身＋テアル」の文に着目し、これを C 型テアル文と呼び、その特徴を分析した。この形式においては、通常の A 型テアル文とは異なり、ガ格名詞句が主語性を示すこと、テアル文には生じない「〜によって」句が表出することを示し、こうした振る舞いが、本論が提案した構造の中で説明しうることを指摘した。

また Marantz (2000)、青柳 (2006) の形態格の理論によって、ガ格とヲ格が交替可能な文について、理論的な説明を試みた。B 型テアル文において、対象の項がガ格でもヲ格でも現れるという事実がある。成立する文というのは、第一項として存在する名詞句が音形を持たない要素（ゼロ主語）である場合に、そのゼロ主語を参照するかしないかという格標示規則の適用の違いから、対象の格の具現の仕方が決まってくる。その場合ガ格かヲ格かという違いは表面的な形態格の違いであり、それによって意味が変わる、あるいは意味的に曖昧になるということではない。ゼロ主語を伴う B 型テアル文において対象の名詞句がガ格になるかヲ格になるかは文法的に自由な選択であるのに対し、統語上の動作主が存在する（B 型テアル文）か否か（A 型テアル文）はそれぞれのアルの語彙的な特性の違いにより決められたものであり、表層の格の違いよりも重要な違いであると考える。

このような現代語のテアル構文の特徴がどのようにして生じたかのヒントを得るため、存在文とテアル文の歴史的変遷を辿った。文献とコーパスを調査した結果、次のようなテアル文の文法化のプロセスが見て取れた。

(1) ①上代から中世（鎌倉時代）までは存在動詞は有生・無生の区別なくアリであった。上代からすでに現代のテイルの用法でテアリが使われていた。

②平安時代になるとテアリがタリとなり、主要なアスペクト形式になったため、テアリは衰退した。

③中世末期（室町時代）のあたりでタリがタに変化し、過去と完了を主に表すようになると、アスペクト形式が不足したためテアリが復活し、主にパーフェクトのアスペクトを表す。この頃存在動詞はアリからアルとイルへの交替期にあった。

④江戸時代に入るとアルとイルの区別がはっきりする。その頃テアル文とテイル文への文法化の再出発となる。

⑤1670 年（江戸時代前期の終わり頃）のあたりを境に、現代の A 型テアル文が書記動詞と配置動詞で出現し、次第にこの種のテアル文の用例が多くなる。これが無生物の存在を表すアルからの文法化の再スタートとなる。

⑥1770 年（江戸時代中期の終わり頃）のあたりを境に語幹動詞が多様になり、A 型での用例が増えるとともに、テアリから意味を引き継いだ B 型テアル文も増え、テアル文全体の用例が増える。

このような文法化のプロセスは、Hopper and Traugott (1993)や Traugott and König(1991)などで言われている一般的な文法化のプロセスと矛盾しない。文法化とは、自立的、語彙的な形式が、その内容語としての意味を薄め（semantic bleaching）、文法的機能を担うことである。そして一旦文法化が起こるとさらに新しい文法的機能を発達させるが、それは歴史的な一方向性（unidirectional）のプロセスである。テアルの文法化を見ると、まず完了の助動詞ツの連用形であるテと状態動詞アルからもたらされるパーフェクトのテアリ文から始まり、現代語のテアル文に関しては、有生・無生の区別がはっきりとした存在動詞アルからの再出発と見れば、本動詞の意味に近い、A 型のなかでもニ格場所句を伴う存在表現テアル文（A_1 型）から文法化が始まっているのはまさに当然のことである。そして、再文法化の後も中世以前のテアリからのパーフェクトの用法が細々と残っており、そちらもちょうど 1770 年のあたりから用例が増えている。これはテ自体の文法化がより進み、様々な補助動詞に接続できるようになったことに起因していると考える。つまりテ形に続く補助動詞自体が作りやすくなり一般的な用法になっていき、昔からあったテアリの意味をひきつぐ B 型テアル文も頻度を高めていった。Kondo(2014)で考察されたテシマウとテオクでも同様の文法化のプロセスが見られる。江戸時代に入ってから現れた表現であるテシマウは、初めは本動詞シマウの意味に近い完了を表すアスペクト的な表現であったのが、1770 年あたりから「遺憾」の意味でも使われるようになり、徐々に「遺憾」の用例が増えていき、「完了」の用例を上回るほどになった。テシマ

ウ全体の用例もその頃から増える。一方テオクは古い時代から存在し、意味の変化はあまり起こっていないが、この 1770 年を境にやはり用例が増えている。したがって、テ形に続く補助動詞の全般的な転機がこのあたりにあったと考えられる。

このように、現代語のテアル文の意味用法、統語構造、アスペクトを比較することによって、格配列だけでは説明できないテアル構文の各類型の特性の違いを示すことができた。また、歴史的変遷を見ることによって、このような違いが生じることになった一因を見ることができたと考える。そして日本語の存在文及び A 型テアル文はどちらも主語無し構文であるという主張をし、問題提起をしたいと思う。

7.2 今後の課題

テアル構文について様々な角度から考察することで、日本語の文法にまつわる様々な問題が見えてきた。テ形に接続する他の補助動詞の様相を精査し、補助動詞全般に研究を広げていき、テ形全体に一般化できるような理論の構築が望まれる。形態統語的にテがどのような働きをするのか、そもそもテ形とは何かについて、今回は積極的な仮説を提案するには至らなかったが、テ形の分析を更に深めていきたいところである。

最後に、５章で扱った B 型テアル文の格の交替について触れておこう。本論では、B 型テアル構文に見られる対象の名詞句のヲ格とガ格の交替を(1)格付与規則の特性と(2)B 型テアル文において主語位置に現れる場合がある音形のない代名詞、pro#、の例外的な特性の二つに帰結させて、説明した。もう一つの可能性として、B 型テアル文の対象のガ格名詞句が、A 型テアル文の対象のガ格名詞句とは異なったニュアンスを醸し出していることに注目し、それがちょうど久野(1973)の総記の解釈、あるいはより広い概念である「焦点解釈」を示していると考えることができる。

（下線部が焦点）

(2) 象は鼻が長い。

(3) <u>象が</u>鼻が長い。

(4) 太郎は学生だ。

(5) <u>太郎が</u>学生だ。

A 型

(6) 壁にピカソの絵がかけてある。

(7) 窓が開けてある。

B 型
(8) 報告書が読んである。
(9) 専門家が雇ってある。
(10)歯が磨いてある。
(11)論文が批評してある。
(12)相手の主張が理解してある。
(13)調整が指示してある。
(14)鑑定が頼んである。
(15)時間が言ってある。

もしこの観察が正しいのなら、B 型テアル文における格交替は単なる格助詞の配置の仕方の違いではなく、「焦点 Focus」によって誘発されたガ格の付与という可能性が出てくる。本論文ではこの問題を追及することができなかったが、将来的には検討すべき問題であると思われる。

参考文献

青柳宏(2006)『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房.

東弘子(1992)「感情形容詞述語文における感情主の人称制限」『日本語論研究 3』和泉書院、7-25.

池田廣司(1967)『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』風間書房.

池田廣司、北原保雄(1972)『大蔵虎明本狂言集の研究本文編上』表現社.

一戸克夫(2001)「結果表現テアルにおけるアルの存在動詞としての性質について」中右実還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェース　上巻』くろしお出版、41-52.

一色舞子(2011)「日本語の補助動詞『テシマウ』の文法化―主観化、間主観化を中心に―」、『日本研究』15、北海道大学、201-221.

一色舞子(2012)「補助動詞「-(て)おく」と「-어　두다」における意味拡張-中古・中世日本語及び中期朝鮮語資料を中心に-」第63回朝鮮学会大会.

井上和子(1976a)『変形文法と日本語（上）』大修館書店.

井上和子(1976b)『変形文法と日本語（下）』大修館書店.

内丸裕佳子(2006)「形態と統語構造との相関―テ形節の統語構造を中心に―」筑波大学博士論文.

宇田千春(1996)「結果構文「テアル」の統語構造について」『日文研叢書 10 制約に基づく日本語の構造の研究』13-29、国際日本文化研究センター.

影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版.

影山太郎(2009)『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店.

神永正史（2008)「平安中期のテアリ文における他動詞構文について」『日本語と日本文学』47 号、27-37.

神永正史（2009)「中世末期以降のテアル構文―狂言台本虎明本を主資料にして―」『日本語と日本文学』48、1-19.

川崎典子(1983)「-てある構文について」『言語研究』No.84、187-189.

鎌田精三郎（2002)「現代日本語の感情述語の人称制限について」『城西大学研究年報、人文・社会科学編』1-27.

金水敏(1997)「現在の存在を表わす「いた」について―国語史資料と方言から―」『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房.

金水敏(2006a)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房.

金水敏(2006b)「日本語アスペクトの歴史的研究」『日本語文法』6巻2号、 33-44.

金田一春彦（1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15、金田一春彦(編)『日本語動

詞のアスペクト』むぎ書房、に再録（1976)、7-24.
金田一春彦（1955)「日本語のテンスとアスペクト」『名古屋大学文学部研究論集』X（文学4)、金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、に再録(1976)、27-61.
岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版.
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房.
国東文磨(1985)『今昔物語集作者考』武蔵野書院.
久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店.
桑野孝子、上野誠司(2011)「長崎方言話者による自動詞化テアル構文の非標準的使用の予備的分析―非結果相の「売ってある」―」『長崎総合大学紀要』51、1-9.
近藤かをり(2012)「テシマウの統合的研究」、南山大学大学院人間文化研究科提出修士論文.
齋藤茂(2010)「テアル構文と受動表現（ラレテイル）との使い分け―結果を基に動作が行われたと推論することによる制約―」『麗澤大学紀要』90、131-154.
柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店.
杉村泰(1996)「テアル構文の意味分その―「意図性」の観点から―」『人文科学研究』25、73-95.
杉村泰(2002)「意志性のないテアル構文について」『名古屋大学言語文化論集』24-1、159-174.
杉村泰(2003)「テオク構文とテアル構文の非対称性について」『名古屋大学言語文化論集』24-2、95-110.
鈴木英夫(1998)「規範意識と使用の実態-「（人が）ある」と「（人が）いる」を中心として-」『日本語学』17-6、80-96.
鈴木泉子(2000)「「てある」構文に関する一考察」『津田塾大学紀要』32、83-92.
鈴木泉子(2002)テアル構文について―モノの存在と効果の存在―」『津田塾大学紀要』34、129-139.
鈴木泉子(2004)「“格交替”における意味の関与―テアル構文を足がかりにして―」『津田塾大学紀要』36、183-196.
高倉裕(2014)「「られてある」についての一考察」*Korean Journal of Japanese Language and Literature* 61、17-36.
高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」教育科学研究会文法講座テキスト、金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、に再録(1976)、117-153.
高橋太郎(1999)「「シテオク」と「シテアル」の対立について」『関西外国語大学 研究論集』70、81-95.
田川拓海(2002)「疑似自動詞の派生について―「イチゴが売っている」という表現」『筑

波応用言語学研究』9、15-28.
田窪行則(2006)「日本語条件文とモダリティ」京都大学博士論文.
田窪行則(2008)「日本語のテンス・アスペクト：参照点をあらわすトコロダを中心に」『日本文化研究』25、5-20.
竹沢幸一(2015)「「見える」認識構文の統語構造とテ形述語の統語と意味」由本陽子・小野尚之(編)『語彙意味論の新たな可能性を探って』開拓社、243-273.
坪井美樹(1976)「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論文集』表現社、537-560.
坪井美樹(2005)「テ形接続形式と文法化」『国語と国文学』82-11、13-25.
角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版.
寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
外崎淑子(2006)「日本語の主語の人称制限」*Scientific Approaches to Language*, 5、149-160.
中田祝夫、竹岡正夫(1960)『あゆひ抄新注』風間書房.
西山佑司(1994)「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26、115-148.
西山佑司(2009a)「コピュラ文、存在文、所有文-名詞句解釈の観点から（上）「デアル」（'be'）を甘く見るなかれ」『月刊言語』4月号、78-86.
西山佑司(2009b)「コピュラ文、存在文、所有文-名詞句解釈の観点から（中）存在文の多様な意味」『月刊言語』5月号、66-73.
西山佑司(2009c)「コピュラ文、存在文、所有文-名詞句解釈の観点から（下）所有文が有する二重構造」『月刊言語』6月号、8-16.
仁田義雄(1986)「現象描写文をめぐって」『日本語学』5巻2号、56-69.
仁田義雄(1989)「現代日本語のモダリティーの体系と構造」仁田義雄、益岡隆志(編)『日本語のモダリティー』、1-56.
日本語記述文法研究会（編）(2009)『現代日本語文法2』くろしお出版.
丹羽哲也(1988a)「有題文と無題文、現象（描写）文、助詞「が」の問題（上）」『国語国文』57巻6号、41-57.
丹羽哲也(1988b)「有題文と無題文、現象（描写）文、助詞「が」の問題（上）」『国語国文』57巻7号、29-49.
野田高広(2010)「「今昔物語集」のアスペクト形式Vテイル・テアルについて」『日本語の研究』6巻1号、1-15.
野田高広(2012)「アスペクト形式「ている」の成立について」『東京大学言語学論集』32、85-107.
野村剛史(1994)「上代語のリ・タリについて」『国語・国文』63巻1号、28-51.

野村剛史(2003) 「存在の様態：シテイルについて」『国語・国文』72巻8号、1-20.
野村雅昭(1983)「近代語における既然態の表現について」『論集日本語研究15　現代語』152-164, 有精堂.
長谷川信子(1999)『生成日本語学入門』大修館書店.
長谷川信子(1997)「日本語の受動文とlittle *v* の素性」*Scientific Approaches to Language*, 6, 13-38.
原沢伊都夫(1998)「テアル形の意味―テイル形との関係において―」『日本語教育』98、13-24.
原沢伊都夫(2002)「理論と実践の結びつき―テアルの表現形式から―」『静岡大学留学生センター紀要』1、23-37.
原沢伊都夫(2005)「テアルの意味分析―意図性の観点から―」『日本語文法』5巻1号、20-38.
原沢伊都夫(2007)「テアル2形式（能動態と受動態）における話者の認識」『静岡大学国際交流センター紀要』1、1-8.
福嶋健伸(2000)「中世末期日本語の～テイル・～テアルについて―動作継続を表わしている場合を中心に―」『筑波日本語研究』5、121-134.
福嶋健伸(2003)「中世末期日本語の～テアルの条件表現―～テアレバは状態表現として解釈できるか―」『筑波日本語研究』8、105-122.
藤井正（1966)「『動詞＋ている』の意味」『国語研究室』（東京大）5、金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、に再録(1976)、97-116.
藤村逸子、大曽美恵子、大島ディヴィッド義和(2011)「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房、43-72.
益岡隆志(1984)「「-てある」構文の文法」『言語研究』86、122-138.
益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版.
又平恵美子(2001)「「イチゴが売っている」という表現」『筑波日本語研究』6、93-102.
松下大三郎(1928)『改選標準日本語文法』紀元社.
三尾砂(1948)『国語法文章論』三省堂、『三尾砂著作集Ｉ』ひつじ書房、に再録(2003).
三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院（1972、くろしお出版より復刊）.
三上章(1959)『続・現代語法序説－主語廃止論』刀江書院（1972、くろしお出版より復刊）.
三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版.
三上章(1963)『文法教育の革新』くろしお出版.
三矢重松(1908)『高等日本文法』明治書院.
三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実(編)『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社出版、108-186.

森貞(2001)「「他動詞受動形」＋テアル」構文について」『福井工業高等専門学校研究紀要』35、21-26.
森田良行(1977)『基礎日本語』角川書店.
森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
山崎恵(1992)「「結果相」の表現に関する一考察-「～ている」「～てある」「～られている」「～られてある」-」『富山国際大学紀要』2、115-132.
山崎恵（1996)「「～ておく」と「～てある」の関連性について」『日本語教育』88、13-24.
山田孝雄、山田忠雄、山田英雄、山田俊雄（校註）(1959)『今昔物語一』岩波書店.
山森良枝(2010)「「てある」・「ておく」構文について」『神戸言語学論叢』7、107-120.
柳田征司(1987)「近代語「テアル」」『愛媛国文と教育』19、1-15.
吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房、に再録（1976)、155-327.
Abe, Yasuaki (1993) Dethematized subjects and property ascription in Japanese, *Proceedings of the 1992 Asian Conference on Language Information Computation*, Seoul, Korea 1993. 132-144.
Aoyagi, Hiroshi (2015) On the notion of subjects and double complement unaccusatives in Japanese, A talk given at SICOGG17, Kyunghee University.
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
Cinque, Guglielmo (2006) *Restructuring and functional heads: The Cartography of syntactic structures*. Oxford University Press.
Comrie, Bernald (1976) *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
Fukuda, Shin (2006) Japanese passives, external arguments, and structural case, *San Diego Linguistic Papers*, Isuue 2. 86-133.
Fukuda, Shin (2012) Aspectual verbs as functional heads: evidence from Japanese aspectual verbs, *Natural Language and Linguistics Theory* 30.4. 965-1026.
Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press.
Harada, Shinichi (1976) Honorifics, *Syntax and Semantics 5*. ed. By Masayoshi Shibatani, Academic Press, 499-571.
Hasegawa, Yoko (1996) A Study of Japanese Clause Linkage The Connective TE in Japanese, Stanford, CSLI.
Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (1993) *Grammaticalization.* Cambridge University Press.
Kishimoto, Hideki (2012) Subject honorification and the position of subjects in Japanese,

Journal of East Asian Linguistics 21.1. 1-41.

Kondo, Kaori (2014) An inquiry into the grammaticalization process of Japanese auxiliary verbs: with special reference to *-te shimau* and *-te oku*, *Studies in Language Sciences: Journal of the Japanese Society for Languige Sciences*. Kaitakusha, 96-123.

Kuroda, Shigeyuki (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT.

Kuroda, Shigeyuki (1973) Where epistemology, style and grammar meet, *Festshrift for Morris Halle, Halt, Rinehart and Winston*. eds. by S. Anderson and P. Kipasky, 377-391.

Kuroda, Shigeyuki (1992) Case marking, canonical sentence patterns, and counter equi in Japanese (a preliminary survey), *Japanese Syntax and Semantics*. 222-239.

Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge University Press.

Marantz, Alec (2000) Case and licensing, *Arguments and Case: Explaining Burzio's Generalization*. ed. by Eric Reuland, John Benjamins Publishing, 11-30.

McCawley, Noriko Akatsuka (1976) Reflexivization: a transformational approach, *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*. ed. by M.Shibatani Academic Press, 51-116.

Martin, Samuel (1975) *A Reference Grammar of Japanese*. New Haven, Yale University Press.

Matsumoto, Yo (1990a) Constraints on the 'intransitivizing' resultative -te aru construction in Japanese, *Proceedings of the Japanese/Korean conference.* 269-283.

Matsumoto, Yo (1990b) On the syntax of Japanese "intransitivizing" *–te aru* construction, *Papers from the 26th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. 277-292.

Miyagawa, Shigeru (1988) Predication and numeral quantifier, *Japanese Syntax*. ed. by B.Poser CSLI, 157-192.

Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and Semantics 22; Structure and Case Marking in Japanese.* Academic Press.

Miyagawa, Shigeru and Maria Babyonishev (2004) The EPP, unaccusativity, and the resultative constructions in Japanese, *Scientific Approaches to Language*, Vol.3. Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies, 159-185.

Muraki, Masatake (1986) Some problems of TEARU sentences, *Educational Studies : International Christian University Publications* 1-A, 28. 221-236.

Muromatsu, Keiko (1997) Two types of existentials: evidence from Japanese, *Lingua* 101. 245-269.

Nakantani, Kentaro (2013) *Predicate Concatenation: A Study of the Predicate in Japanese*. Kuroshio.

Oshima, David Y.（2014）On the morphological status of -te, -ta, and related forms in Japanese: evidence from accent placement. *JELS* 23, 233-265.

Oyakawa, Takatsugu (1973) Japanese reflexivization, 1, *Papers in Japanese Linguistics* 2. 49-135.

Roeper, Thomas (1987) Implicit arguments and the head-complement relation, *Linguistic Inquiry* 18.2. 267-310.

Saito, Mamoru (2006) Subject of complex predicates: A preliminary study, *Stony Brook Occasional Papers in Linguistics* 2006. 172-188.

Shibatani, Masayoshi (1999) Dative subject constructions twenty-two years later, *Studies in the Linguistic Science* 29. 45-76.

Sugioka, Yoko (1984) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. Doctoral dissertation, University of Chicago.

Sugita, Mamori (2009) *Japanese -Te Iru and -Te Aru: The Aspectual Implication of the Stage Level and Individual Level Distinction*. Doctoral dissertation, CUNY.

Sweetser, Eve E. (1988) Grammaticalization and semantic bleaching, *Berkeley Linguistic Society*14. 389-405.

Takano, Yuji (2011) Double complement unaccusatives in Japanese: puzzles and implications, *Journal of East Asian Linguistics* 20. 229-254.

Takubo, Yukinori (2011) Japanese expression of temporal identity: temporal and counterfactual interpretation of tokoro-da, *Japanese Korean Linguistics* 2011. 392-409.

Toratani, Kyoko (2007) A semantic and pragmatic account of the -te-ar construction in Japanese, *Journal of Japanese Linguistics* 23. 47-75.

Traugott, Elizabeth C. and Ekkehard König (1991) The semantics-pragmatics of grammatical-ization, *Approaches to Grammaticalization.* eds. by E. C. Traugott and B. Heine Amsterdam: John Benjamins, 189-218.

Van Valin, Robert D Jr. and LaPolla, Randy J. (1997) *Syntax: Structure, Meaning and Function*. Cambridge: Cambridre University Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy.* Cornell University press.